
あの橋のむこうがわ

冴草みつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの橋のむこうがわ

【Nコード】

N9886C

【作者名】

冴草みつな

【あらすじ】

「どうして私は橋を渡ってきたのかな？」 デイナーが覚えて
いることといえば、自分の名前と橋を渡ってきたということだけ
。 “今一度橋を渡ってみれば、何か思い出せるかもしれないよ
？” そう、黒い獣のダグレスにそそのかされて、デイナーは再び橋
を降り始めてしまいました。・・・渡り切ったその先には、人さら
い（？）が待ち構えているというのに。そんなデイナーをめぐり、
手に入れたいと目論む・人も獣も入り乱れております。

第一章

* とんだ言いがかり（前書き）

第一章 * とんだ言いばかり

夜が明けたとはいえ、今日のような霧に包まれた朝ともなれば、室内はまだ薄暗い。

暖炉に起こされた炎だけでは、部屋の隅々を照らすには至っていない。

それでも部屋に配置されている家具はすべて、一般庶民の持つものではなさそうだというのが、ひしひしと伝わってくる。

．．．．．ように感じる。

細やかな彫り物が施された足のテーブルや椅子。

窓を縁取って飾る木枠にすら統一された、彫り物があつた。

暖炉の火かき棒ですら、持ち手の部分が尾羽を広げた鳥をかたどつてある。

主の何らかのこだわりたる美意識が、嫌でも伝わってくる造りの部屋の足元は．．．。

不安定に感じてしまう程に沈むやわらかさときては、余計に居心地の悪さが増すというものだ。

敷き詰められた織物の感触がそうさせているのだが。

こういったものは、ベッドの上にこそふさわしいのじゃありませんか？

少なくとも、自分はそう考えてしまう。

こういった実用目的以外の何かが付け加えられている物たちが、

持ち主の余裕を暗に知らしめている。

場違いなのもいいところだろう。

早くこの場から立ち去りたくてたまらない。

そう思わせるいたたまれなさの極めつけは、自分の出で立ちだ。霧で湿った衣服や髪からは、水滴が容赦なくせっかくの敷き織物に滴っていく。

おまけに転んだためにあちこち泥だらけだ。

それまた伝わっていく水滴を濁らせるから気が気じゃあない。

こつも品格ただよ部屋にあつては、惨めだけがどんどん募って行く。

「そう。ディーナっていうのね？」

「はい」

ルゼ・ジャスリート。

先に名乗ったこの婦人は、この館の主人だという。

「では、ディーナ。ここがどこかは、ご存知？」

「いいえ。……知りません」

首を横ふったディーナに笑顔のまま、老婦人は少しだけ困ったような瞳を向けた。

「ここはね。サンザスの国、ウルフィード地区、ジャスリート家の管轄地帯」

まだ夜間着とおぼしき腰周りのゆつたりと余裕を持たせた白い衣装で、手にした扇をもてあそびながら婦人は言う。

それも持ち手の部分は鳥らしきものがかたどっており、扇を広げると鳥が尾羽を広げているかのように見せる仕掛けだ。

(……く、じ……?く、じゃく……?……?)

だっただろうか。

おそろしく華美に羽根を広げる鳥の名前は。

ディーナは、扇の動きに目をうばわれていた。

婦人は、すい、と、手にした扇をディーナの目線の高さに合わせる。

自然、婦人の視線とぶつかった。

につこりと、ほほえみかけられて目をみはる。

何となく、意外だった。

目線の高さそのままに、扇の鳥の羽根がたたまれる。

ばちん、と、軽くはぜるかのような小気味よい音に、どこかぼやけていた視界から連れ戻された。

まるで一差しの舞を見せられたかのような、優雅なしぐさ。

「……………」

見とれて言葉を失っていたが、ようやく焦点の合ったディーナに、婦人は告げる。

「ご理解、ただけて？」

歌うような調子に、ただうなづく。

「そう、よかった。じゃあ、あなた。かわいそうだけど……………」

。うちの領土に不法に侵入してしまったという罪で、身柄を拘束します」

（ふ、ふほー？・コウ、ソク……………？）

耳慣れない言葉に、理解が遅れる。

「ふほう？」

「そう」

「こうそく・？」

「ええ」

歌つような調子は変わらないままに、婦人は答える。

ただただ理解しがたい言葉を、声に出してみるといやでも一気に現実味を帯びる。

（要するに、わたし、罪人……！？）

罪人！

何でですかと問うよりも早くに、体がよろめいてしまった。思ったより衝撃だったらしい自分にも驚く。

確かにこの婦人は最初に名乗ってくれた。

この館の主人、ルゼ・ジャスリート、だと。
ジャスリート家。

その領地である、このウルフィード地区。

目の前に立つこの婦人は、その領主でもあるということだ。

予想外の展開に、よろめいたディーナだったが、その場にへたりこむ事はなかった。

そうなる一歩手前に、奇妙な浮遊感に振り返る。

「大丈夫ですか？」

背後から抱き止められていたのだ。

そのまま、ディーナを立ち上がらせると、支えとなるよう、腰周りを男の腕が抱える。

体重を預けながらも、ディーナはその鈍い銀色の瞳を思わずにらむ。

彼の髪もまた瞳の色と揃いだったが、ディーナと同じくずぶ濡れな分、いくらか重たげに

灰かぶって色味が増して見える。

細身の青年に見えるが、やはり男だと思った。

ディーナを抱える事くらい、難無くこなす。

その鼻筋の通った顔立ちは優しげで、やや頼りなさそうに見えてしまうからなおさら驚いてしまう。

青年は申し訳なさそうに眉をひそめながらも、唇は弱々しく笑みをつくって見せている。

どうやら、本気で心配してくれているようだ。

その気遣いらしきものに免じて、にらむのは止めにした。

代わりに、力いっぱいというな垂れる。

それでも抱える腕が揺らぐ事は無かった。

彼の誘いに乗った自分が、甘かったのだ。

旅人のディーナを、青年は館に招待したいと言った。

その申し出を、宿を提供してくれるものと受け取った自分。

一片も怪しまない訳では無かったが、何しろ空腹だったのだ。

おまけに霧が深く、不慣れな土地で心細かったせいもある。

当てなんてありやしない。

だから親切を疑うなんて失礼と、都合良く怪しさなんて捻じ曲げて。

（このこのこついて来ましたよ・・・。）

最初から、こういつつもりだったのか。

牢屋に案内するつもりだったのか。

入ったことはまだなかったが、知識としてはある。

四方、石造りだから冷たくて。多分、あんまり採光されていないだろうから暗くて。

鉄製の格子で、鍵をかけられるんだろうな。

自由に出入りできない、よね。

あまり居心地は良くなさそうだ。

（雨風、凌げるだけ良しとしておこう・・・。）

「・・・・・・・・。」

重苦しい考えに、ますます足の力が抜けて行く。

「あら！大丈夫！？フィルガ、運んであげて」

フィルガと呼ばれた青年は、無言でうなずくと、ディーナを抱えあげる。

「自分で歩く」

訴えたが、彼は唇の端を持ち上げて見せただけで、構わず歩き出した。

腹立たしいので、泥のまだ乾ききっていない手で、その口元を突っぱねる。

それでも構わず無視されて、青年に抱きかかえられたまま運ばれて行く。

第一章 * とんだ言いがかり（後書き）

橋を渡って来た者達と、それを迎える者達との物語です。どんな時でも「私は、私！」と主

張するディーナですが、時々は弱気になったり意固地になったりしながらも負けずに言い切ります。

多分どころか確実に長くなりそうな物語。よろしくどうぞ、お願いします。

* 待ちわびていた人達（前書き）

「身柄を拘束します」

いきなり、不法侵入者扱いされてしまったディーナさんですが、どうやら歓迎されている様子です。

本人は今のところ、知る由もありませんが。

* 待ちわびていた人達

フィルガの頬に泥が付いている。

「ほら、ほら。ここ、ここ。」

ルゼは自身の右頬を軽く打って、教えてやった。

ディーナに付けられたようだ。思わずルゼは微笑む。

それを笑われたと判断したらしいフィルガは、袖口でぬぐったが取りきれなかった。

「あとで鏡見ないとダメみたいよ？」

「そのようですね」

はにかんではいるものの、それでも別段気にする様子は無い。

むしろ、嬉しそうに見える。

ディーナと名乗ったあの娘に構ってもらえて、さぞ嬉しかろう。

図体は大きいが、フィルガは犬の仔みたいだと思った。

あの、紅い髪が印象強い少女。

真紅と言うほど、鮮烈では無いがアレは目立つ。

気持ち茶色がかってこそいるものの、磨きたての銅がねみたいだった。

濡れていてさえ、あの光沢。

加えて、背の中程まである豊かな長さだ。

乾かして、くしけずってやり、髪飾りを付けてやりたい。

そしてぜひとも、日の光の下で眺めたい。

ルゼは楽しさのあまり、顔がにやついてしまう。

孫の手前だというのと、一応は領主という立場から、顔の下半分

は扇で隠している。

平静なフリは、少しでも威厳を保つ為にだ。

「お見事。おばあ様」

「あんまり褒められた事じゃあ、ないわよねえ……。まあ、いいわ。

でかしたわよ！ファイルガ」

「恐れ入ります」

「でも、気の毒な事したわよね。……………ずいぶん、うなだれていたし」

あの、うなだれ様ときたら。

ルゼは自分で宣告しておきながら、取り消してやろうかと思ったほどだ。

…少女が今にも立ち去ろうとしているのが見て取れた。

だから、不法侵入者だから捕らえるとしたのだ。

いとまを告げるスキを、与えないために先手を打ったのだった。

「では次は、病人扱いという事にしてしましましょう。絶対安静で、どうですか」

「あんた、良いこと言うわねえ！」

さも名案だとばかりに、目を輝かせてルゼは同意した。

祖母と孫息子は、本人のいないところで勝手に話を進めている。

最近は滅多にやらなくなったが、あまりおおやけに出来ない取引をしている時のような、

奇妙な高揚感があった。

利を追求する為のくわだては、期待と背徳感があいまっているものだった。

それでもなぜか、いつも胸が躍るのだ。

「それでは早速、医師を呼びに行つて来ます」

「あら。わざわざ自分で行くの？」

「そうします」

からかったのだが。さらりと流された。

「・・・・・・・・」

（やだやだ。大人になちゃって。つまんないわねえ。）

扇の陰からやや非難を込めて、孫にいちべつをくれる。

（大人ぶってるだけのくせに、ねえ？）

そんなルゼの無言の非難にも、フィルガは何も言い返す事はしてこなかった。

少女の事で頭がいっぱいなのだろう。

いてもたってもいられない、そんなフィルガだが、しばらくはデイナーと話すのは待たねばならない。

少女はこれから湯浴みだの、着替えだの、食事だので忙しいのだ。

男のフィルガは、同席が許されるまでただ待つしかない。

話したいことは、たくさんあるだろうに。

だからだろう。フィルガは自分で馬を出す、と言っているのだ。

せいぜいデイナーのために出来る事といったら、それしかないとの判断だろう。

実に懸命な判断だ、と褒めるのはただの肉親の欲目というものでろうから、ルゼは黙っていた。

まだ乾ききっておらず、湿って重そうなマントを羽織ったまま、フィルガも黙ったまま

頭を下げた。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

きびすを返す孫の後ろ姿を見送る。

それから、自分は何をして待とうかと考えた。

そういえば。

「フィルガ、鏡を見てちゃんと泥を・・・！」

振り返ったが、もう孫の姿はなかった。

*** 待ちわびていた人達（後書き）**

いったい子供なのは、誰でしょうか？

（精神的に）

読んでくださった方、ありがとうございます！

感謝、感謝です！

*** 霧の中のそれぞれ（前書き）**

深い霧の中それぞれの望みを叶えるべく、みんな濡れそぼっています。一部、例外の方もおりますが、等しくそろって今朝の霧の中にいます。

* 霧の中のそれぞれ

霧の立ち込める中で長時間たちつくしていると、思っている以上に衣服は湿って

重くなってくる。

今朝のように、三歩先の視界すら阻まれていると特にだ。

肌の出ている部分はなおさらで、徐々に体温が奪われていくのを感じる。

すでに髪はたっぷり水気を含み、肌に張り付いてしまっていた。その束ねた後ろ髪をつたって、襟足からも冷え始めている。

それでもフィルガは橋の向こうを見据えたまま、立ち去ろうとはしなかった。

じきに日が昇る。

陽光が勢いを増すに連れて、この立ち込めた霧を振り払ってくれるだろう。

川岸の木につないだ馬の肌からは、湯気が上がっているのが見えた。

外気に対して、馬の体温が高いせいだ。

先ほどから愛馬は軽くないなあって身震いしては、足踏みを繰り返している。

「悪いな、クーガ！もう少し付き合ってくれ」

名を呼ばれた黒馬は、主人に応えて尾を軽く二、三打ち振って見せた。

馬の様子を見届けると、フィルガは再び視線を、橋の向こうへと据えた。

濡れて額に張り付いた前髪が、うつつうしいので手で跳ね上げる。

フィルガは待っている。

この橋を渡って来る者を、ずいぶん長いこと待ちわびていた。

「何、つなのよ、何なのよ、なん、なのつよっ!？」

駆け続けているため息苦しい。

それでも、怒りに満ちた疑問のつぶやきを吐く。

全力で走っている。……つもり。

実際はたいした速さではなかった。

それでも、懸命に足を動かし続けては、いる。

自分の後ろ、数歩しか離れていない距離を置いて、巨大な影がある。

霧で視界が不明瞭だが、その影は己の身の丈以上もある獣のものだと判る。

何度振り返り窺い見ても、影は付きまとい消えてくれることは無かった。

それでいて、獣は距離を縮めて来る訳でもない。

一定の間隔を保ちながら、追いつてくるのだ。

姿を霧で見せぬようにとでも計らっているのか、自分が足を止めると獣もまた立ち止まる。

自分の命を狙っているわけでは、ないらしい。
早くからそう、気が付いてはいた。

・・・だったらしばらく、様子を見てもいいだろう。

獣は何か意図する所があるようだったし、そうできる程の知恵ある獣ならば、任せてみるのも

また一興だろう。

のんきにそう思ったことを、すでに悔やみ始めている程追いかけてここは続いている。

胸を弾ませていた好奇心は、すでに消えていた。
あるのは獣に対する、薄気味の悪さだった。

振り切れるだろうか？

駆けながら、肩越しに獣を窺う。

「ッ！？あつ」

短く悲鳴を上げたが、もうどうしようも無かった。

足元に異変を感じた。

しまったと思ったのとほぼ同時に、地面に突っ伏していた。

「・・・・・・・・」

何も無い平地だったが、疲労のためか足がもつれた。
うまく地を蹴り上げられ無かったせいだろう。

湿った草地に転び、腹ばいになった衣服からは、冷たく水が浸み込んでくる。

しばらく動けず転がっていたが、このままでは余計に不快なだけだと、

両手で地面を踏ん張って身を起こす。

引きずるように、膝頭を立てるとどうにか立ち上がった。

服に泥が付いたが、べったりと染み付いて払いようも無かった。前髪から伝わる水滴が不快だった。

泥だらけの両手で拭う。

顔にも泥が付いたが、もうここまできたら構う事でも無い。

別にどこも痛まなかったが、疲労と空腹で追い詰められている上、転んだ事でより一層ガマンならなくなっていた。

身を翻して、獣と向き合う。

霧の中に身を潜めている獣を、鋭く睨むと叫んだ。

「ちよつと！！いい加減にしてよね！何用なのよっ」

転んだときはもちろん、これを機会として襲い掛かってくるそぶりも無い。

獣は自らも歩を休めて、距離を保ち続けている。

獣は何も答えない。

「何用かって、訊いてるの！答えてよ！」

意味も無く追い回されたとあっては、腹の虫が収まらない。呼吸を荒げながら、霧越しに睨むのを止めなかった。

（答えるまで問い続けてやる）

その意気込みを察したのか、獣の影が動いた。
ゆっくりと近づくと、姿を見せる。

（きれいな獣）

霧の中から姿を現した獣を、賞賛を込めた瞳で見上げた。
忌々しいが、魅力的なのだ。

大きく頑丈そうなくちばしをした鷲の頭をもたげて、真っ黒い眼
で自分を見下ろしてくる。

頭部は鳥だが、胴体は狩をする肉食獣特有のしなやかな筋肉で成
り立っていた。

それでいて四肢の爪先はまた鷲のように、細かな鱗が覆っている。
蹴爪もある。

その三つ又に分かれた猛禽類の鋭い爪で、大地を踏みしめている。
獣は全身闇色の羽毛と毛並みとが合わさっており、目の縁と頭部
を飾る三本の羽根だけが

気持ち灰色だった。

蹴爪の先ですら、闇をまとう。

霧の影響を受けているわけでも無さそうだったが、その体毛は艶
やかに輝いて

湿り気すら感じさせる。

見事な光沢。

『もう、我の名すら思い返せぬようだな。ディーナよ』

「名前すら？・・・貴方みたいにとびつきり綺麗なのを、忘れるな
んてありえるの」

獣は目を細めて、首をすくめた。
どこことなく哀しげな様子に、ディーナは困惑する。

明らかに目の前の彼とは、初対面だ。

『では、改めて名乗ろう。我の名はシアラータ』

シアラータは長い首を倒し、ディーナと視線を合わせて正面から見据える。

羽毛で覆われた頭に、ディーナは迷わず両手を伸ばす。
獣はディーナの小さな左手に、頭を優しくすり寄せた。
右手側も、同じようにすり寄せる。

同じ霧の中に居るはずなのに、湿りもしていない滑らかな手触り。
その上体温すら感じられない。

「シ、ア、ラータ・・・？」

獣がしたのと同じ強弱で、発音を真似る。
やはり心当たりはない。

呼んでみたが、なじみもないように思う。

ディーナの表情を見守っていたシアラータは、ゆっくりと首を再び高く持ち上げる。

そしてディーナが向かっていた方向を見据えると、告げた。

『もう行け。おまえは、橋を渡らねばならぬ』

「橋？どうして・・・」

シアラータの視線の先に、ディーナも目を凝らす。

霧がかすむ視界の中、確かに橋と思しき石組みが見えた。

『お前の望みだ。じきに霧も晴れる。その前に渡り切れ。振り返らずな』

「私の望み？」

『 - さらばだ、ディーナ。健闘を祈ろう』

何も思い返せ無かった。

シアラータの事も、望みとやらの事まで……………。

それでもディーナは橋へと真向かう。

「ありがとう、シアラータ。思い出せなくて、ごめんね」
振り返らないまま礼を述べ、詫びた。

なぜだか橋からは、もう目が離せなかった。

強く引かれる。何かがある。抗えない。

この霧の彼方、橋の向こうがわから。

ディーナは、一步を踏み込んだ。

*** 霧の中のそれぞれ（後書き）**

時間がやや交錯しております。

それぞれの個性がですな、といったところでしょうか。ディーナさんはいつでも大体、こんな調子です。

*** 遊ばれている二人（前書き）**

大方の予想を（いい意味で）裏切って、牢屋とは似ても似つかない部屋に寝かしつけられて、相変らず居たたまれなさ続行中のデイナーです。

* 遊ばれている二人

夢を見ていたような気がする。

ぼんやりと輪郭すらも思い返せそうもない、夢。

わからない……。

大体からにして、今自分の置かれている状況こそまだ夢の中のような。

気がするんですけど。

自分を訪ねて来た老婦人は、ベッドのそばに椅子を寄せてもらうと、侍女に礼を言つて腰をかけた。

「お加減はいかが？」

満面の笑みで氣遣われ、ディーナは困惑する。

今朝一番に私のこと、不法侵入者だから拘束しますって言いましたよね。確かにその口で。

「……大丈夫です、けど」

「けど？」

領主でありこの館の主人でもある婦人は、身を乗り出してディーナの言葉を期待しているようだ。

もはやなんと答えて良いのか、わからない。

ここの領主サマは、罪人の扱いも人道的な主義なだけだろうか。

（いいやあ、ちがうよねえ。コレは）

今ディーナはどういうわけか、温かな寢床にいる。

フィルガとかいったか。あの若者に抱きかかえられて、案内されたのがここだった。

（・・・正直、牢屋じゃなくて助かりましたけどね）

半身を起こして、薬草茶の入ったカップを両手で包み込んだままの格好で

ディーナは考え込んでしまう。

楽な姿勢が取れるようにと、背に当てられたクッションの縁をかがるのは金糸だ。

自分が横になっているベッドも、クッションと揃いに、黄みがかったやわらかな

白色で花を模した刺繍がされている。

それも金の糸が縁取りをそえる。

全体に布地の物はその白色で統一されており、部屋の雰囲気品良くまとめている。

優美な曲線を描くテーブルの脚部分にも、花の細工が施されていて花瓶なんかも置いてある。

色とりどりの活けられた花は、野の花には無い良く手入れされたもののようだ。

（これは牢屋なんかじゃあない）

誰だっかわかるだろう。

オンナノコ、のための部屋だ。オンナノコ。

ただの女性向けの客間かもしれないが、なんていうか。用意が良すぎやしないか？

相変わらずいたたまれない。華美な部屋は気後れしてしまって落ち着けない。

いろいろ訊きたいことはあるが、口に出せずに困惑している。
余計なことを口にして、やっぱり牢屋へ……的な展開は避けた
いところだ。

いくら心からくつろげないからといっても、誰だってこっちの部
屋を選ぶだろう。

素直にそれを表情に乗せて、老婦人を見た。

「……………」

わずかに金の名残を感じさせる白髪は、一つにまとめ上げられて
いる。

その頭周りを孔雀の羽根が二本、向き合う形で刺繍された深緑の
布で飾り押さえてあった。

婦人の身に付けている衣装は、それと同じ深みのある緑でまとめ
られており、ディーナを熱心に

見つめ返す瞳もまた、常緑の樹木を連想させる。

合わせた瞳から、目を逸らせない。

顔や手に刻まれた皺の深さから、また白髪から、目の前の女性は
老人だとされる年齢ではあるだろう。

それすらも打ち消してしまう程の力強さが、彼女の凜とした美し
さとして感じられる。

ディーナも知らず笑み浮かべてしまうほど、思わず惹きこまれた
のはそこだった。

なんとなく打ち解けた気持ちにさせられて、言葉も無いまましば
らく二人微笑みあう。

「あの、ですね……、私は……っ！」思い切って切り出す。

「うん、はい。なあに？」

「私は身柄拘束中の、不法、侵入者なんですよね!？」

「ええ!そうよ」思い切り良く切り返される。

ニツコリと満面の笑みを前にして、二の句が継げないってこう言う事か、と思った。

がつくりと、また再び傷つき直してうな垂れる。

ふふ、と婦人が楽しそうに笑い声を漏らしたのを、ディーナは聞き逃さなかった。

「ねえ、ディーナ」

ふと、恐ろしく慎重な声音で呼びかけられた。先程までの軽快さは無い、静かな声。

あまりの急な変わりように驚いて、ルゼを見た。

「何でしょうか・・・？」

どこか遠くに視線を投げかけるような、そんな瞳で問いかけられてやや警戒しつつ答える。

「シアラータって、知っているの・・・？」

「・・・え・・・？し、あ？」

どこか懐かしい響きだが、心当たりはない。

「ごめんなさいね。あなたさつき少しうなされながら、そう・・・。確かにそう、呼んだから」

想い人の名かと思つてねと、どこか寂しそうに付け足されたが思い当たる所は無かった。

「まあ、あまり深く考えないで今は休みなさいよ。あなた熱があるのだし。何も心配しないで

ゆっくり体を休めなさいな」

考え込むディーナにルゼはそう告げると退室していった。

ルゼがご機嫌で執務室に戻ると、フィルガは一人机に向かつていた。

鈍く光沢のある髪質は、灰色だ。光の力を借りれば銀に見えなく

も無い。

その髪を無造作に後ろで一つに束ねているせいで、所々ほつれ横髪は頬にかかっている。

申し訳程度に撫で付けただけといった様子だ。お世辞にも整っているとは言えない。

（けど、まあ……。顔立ちは整っているほうだね。私に似て）熱心に書類に目を通してしている孫の横顔を、ルゼは扇で口元を隠しながら観察した。

細面で、男の割りに繊細な顔立ちだが、優しげではある。鼻梁もやや高めだが、通っている。

目も涼しげに切れ長で凛々しさを与えてくれており、多少の欲目は否めないが

全体的に見てなかなか見目は麗しい方なんじゃないだろうか、と思う。

（あの子の好みだといいわね、フィルガ……。）

無言のまま自分の机へと向かう。

「どうでした？ 彼女の様子は」

ちょうど彼の机の前を横切った時、フィルガは書類から顔も上げずに声をかけてきた。

「ん　？　かわいらしかった」

さりげなく訊かれたので、さりげなく答えた。

何の意味もない様だが、実に重要な情報だと思える。

「……………」

やっと自分を見た孫に、ルゼは笑み浮かべる。

品の良い老婦人の微笑み。と、いうものではない。

自分だけが宝物のありかを知っていますと、自慢する子供の顔だった。

そんな祖母に、フィルガは呆れたような、やつかむような眼をむける。

孫ごときにすこまれても、もちろん動じるルゼではない。
にこやかな笑みで受け流す。

「お見舞いは、もう少し我慢なさいな。あのコまだ混乱してるし、熱もあるしね。

気持ちが逸るのもわかるけど、く・れ・ぐ・れ・も・！分かって
いるわよね？」

くれぐれもと、わざとらしく強い口調で言う。

言いながら、閉じた扇でフィルガの頭を打って遊ぶ。

「心配なら無用です。俺だってこれ以上、無礼を重ねたくはありませんからね」

「あら、そう。強がっちゃって、つまらないわ。もっと、羨ましが
つてくれなきゃ

自慢しがいが無いわあ」

残念ねえと言いながら、自分の執務席に着いた。

それきりこの話は打ち切られた。

領土の春の課題ともいえる、灌がい事業の予算の見積書と、具体的な対策法の報告書

に眼を通す。大詰めなのだ。

正直忙しい。

すぐさま頭を切り替えて、没頭する。

室内は、二人が書類をめくる音だけが交差しあつ。

「・・・・・・・・おばあさま」

ルゼが資料の四枚目に入った所で、再び声をかけられた。

「執務中は役職でお呼びなさいな」

書類から顔も上げずに答える。

「ご領主」

「なあに？」

「強がりを認めます。認めますから。どうか彼女の様子をもっと詳しく、教えてください」

やっと認めたフィルガに、ルゼはほくそ笑む。

* 遊ばれている二人（後書き）

女ながらも長く領主の座に着き、バリバリ仕事こなしつつ、後継者もビシバシ鍛えているようです。そんなルゼの楽しみといえば、可愛い子たちにイジワルしてその困り顔を眺めることなのでしょう・・。

心当たりありまくり、の冴草です。

*** 病み上がりの嫌がらせ（前書き）**

せっかく体力を養ったというのに、やや無駄遣いしているディーナさんです。

* 病み上がりの嫌がらせ

のんきにお茶なんかすすっている場合じゃない。

始めにそう思っ手付かずだったお茶が、すっかり冷たくなっている。

だからあ、とディーナは一呼吸置くためにカップに手を伸ばした。華奢な持ち手をもどかしく思いながら持ち上げると、一気に全部飲み干す。

勢い良くカップを受け皿に戻したから、ぶつかって不穏な音を奏でた。

「…………ちよっぴりだけ、ひびでも入れてないかと心配になる自分の貧乏性が哀しい。」

それでも気を取り直してもう一度、フィルガに真向かう。

「この状況をちゃんと説明してよ！私罪人なんじゃなかったの？」

「……………」

「？ねえつたら！」

「ああ、すみません。で、何でしょうか？」

「…………だから！！この状況は何つ、説明してよって言うてるの！」

「まあ、落ち着いてディーナさん、」

「落ち着いてるわよ！」

フィルガの言葉をさえぎって叫んだ。いい加減にしてほしい。

何がどうしたのかこの男。

先程からやたらそわそわと落ち着かない。

かと思えば、ディーナを見てはただぼんやりとしていて、人の話をまるで聞いちゃあいないのだ。

「だから、」

「そのドレス、よくお似合いですよ。ディーナさん」

今度はわざとなのか、フィルガが言葉をさえぎってきた。

「は、ああ!？」

「なにか不自由はありませんか？ディーナさん。何でもお申し付け下さいね」

「~~~~~お・お・あ・り・で・す・わ・よ!フィルガ殿!」
「!」

フィルガが突然テーブルに突っ伏したので、驚いた。

それこそ、椅子から飛びずさらんばかりに。

カップは横倒れてしまっている。飲み干していて、良かった。

「な、何よ、どうしたの？」

「ディーナさんが、俺の名をちゃんと呼んでくれたので感激して・・
」

「だ〜から〜!もう、何なのよう!？」

かれこれこのバカバカしいやり取りに、一体どれくらい費やしているのだろうか？

怒りを通り越して、この若者のおつむは大丈夫なのかどうか。

心配になって来る。

ディーナが床上げしたと聞き、フィルガは見舞いに訪れていた。

ジャスリート家の主の次は、若君ですか。

なんなんでしょう一体。

ルゼの持つ雰囲気になんとなく圧倒されてしまい、この間は上手く言いたい事を伝えられなかった。

その分を取り返すつもりでいたのだが。

ディーナは先程から一向に、手ごたえ所か足がかりさえつかめずにいる。

全くもって訳がわからない。

館に来てからもう、早いもので五日目を迎えている。

着いたばかりの頃は空腹やら疲労やらで、体力も底を突きかけていた。

そこを追い討ちをかけるかのように、罪人呼ばわりされたのだから、必要以上に動揺してしまったと思う。

不服を申し立てる気も消えうせて、へたり込みそうになった。

(情けない………)

暴れておけばよかったかもしれない。

ちらと、そう考えもしたが、落ち着いた今なら解る。

やらなくて良かった。

多分、不敬罪やら器物破壊罪やらを、言い渡されて余計に身動き取れなくなっていただろう。

そう、自分を慰めてなだめた。

不法侵入の罪人扱いの次は、病人扱いだった。

実際ディーナは発熱していたから、思うように体が動かさなかったし、

ダルさのあまり思考も鈍っていた。

……深く考えても仕方がない。

そう開き直ってまずはともあれ、この状況をアリガタク利用させて頂く事にした。

騒ぎ立てるための体力を養わねば。

自分にそう言い聞かせて、おとなしくしていたのだ。
熱でうつらうつらしながらも、言いたい事のリストをこしらえて
やり過ごした。

そして待ちに待った機会が、こんな調子なのだ。

（疲れてきた・・・）

病み上がりなのに、こんなに疲れるお見舞いなら要らない。
ただの嫌がらせなのかと、疑ってしまう。

「・・・・・・・・。」

目の前の挙動不審の若君の様子を、ディーナはうんざりと見守っ
て待つ。

「すみません、取り乱したりして・・・・・・・・。」

フィルガははにかみながら、顔を上げて詫びた。

自分を熱い視線で見つめる男を、冷たくいちべつしてから顔を背
ける。

途端に捨てられた子犬にも等しい眼差しがすがって来る。

（まだまだ長くかかりそう）

ディーナは無言のまま、自分のカップにお茶を注いだ。

*** 病み上がりの嫌がらせ（後書き）**

なかなか状況説明されず、イラつきMAXですよね。
もうしばらくお待ち下さい。

・・・・もっと、イラつくと思いますけど。

次回から第二章に入ります。

よろしく、どうぞ。お願いします。

第二章 * 孔雀、お目見え（前書き）

やっと状況説明されるようですが、まだまだ自由に身動き取れない様子のデイナーです。

第二章 * 孔雀、お目見え

事情を説明するからと、資料室なる部屋へと案内された。

気持ちばかり地下に造られているようで、ディーナは慎重に階段を下る。

ほんの五段ばかりなのだが、ドレスのすそが長く、ひらひらとまとわりつくのだ。

「気をつけて」

先に行くフィルガに手をとってもらい、最後の一段はぴょんと飛び降りた。

「フィルガ殿。この服、不自由」

右手を引かれたまま、左手でドレスのすそを摘み上げて文句を言う。

乳白色の色合いが、優しい淡い印象の衣装。

それがかえって、自分の赤毛を鮮烈なものに見せてしまう気がする。

やや腰周りを高くから取られているため、背筋は伸びるがキュウクツで堪らない。

肩に落ちる自分の髪を横目に見ながら、ため息混じりに付け足す。

「……………せつかく貸してくれたのに、悪いんだけどさ」

「まあまあ。良くお似合いですよ」

「……………」

（だから何よ）

フィルガの宥めるかのような笑顔をうさん臭く思いながら、黙って手を引かれて進んだ。

要はディーナの意見は却下されたのだ。

ディーナはさっきのやり取りで、言うだけ無駄だと学習済みだった。

た。

「暗くて申し訳ありませんね。資料が傷むのを防ぐために、あえて採光は最小限に設計されているものですから」

確かに室内は昼間だというのに薄暗い。だが、灯かりが必要な程でもなかった。

微かに首筋を風が掠めるから、風路があるのだろうなと、思った。

通された部屋は天井高く吹き抜けで、壁一面四方を書物が並べられてある。

ここまで本に取り囲まれて、見下ろされているというのは威圧的でさえあった。

ディーナはその様子を仰ぎ見ながら、先に迷いなく進むフィルガに歩みを任せている。

「ディーナさん……」

名を呼ばれ、手を少し引つ張られて、フィルガを見た。

次いで、彼の背後に微笑む少女に気がつく。

ディーナは一瞬身動きが出来なかった。

何かなにやら理解できなかったからだ。

やや見上げたまま、釘付けとなり視線が外せなくなる。

「このコ、誰……?」

「……母が。シーラが十六歳だった頃の肖像画です」

長い間を置いてから、フィルガは説明してくれた。

「彼女の見合い用にと、描かせたものだそうです」
言葉を忘れてただただ、頷く。

部屋の一番奥の壁に、その絵は飾られていた。絵画の両脇には、小さな円卓が置かれてある。その上をそれぞれ、花瓶が置かれ花が活けられてあった。花瓶の図柄もくじやくだ。

孔雀は左右に首をかしげて、少女を中心に互いに向き合うよう、ちよつど対になっている。

優雅に微笑みたたえて、たたずむ少女。

この円卓、花瓶も含めて一つの絵画として、完成されたもの。まるで厳かに崇めるべき対象とされているかのような、神秘的な空間が目の前にある。

ディーナは魅入ったまま、ゆつくりと歩み寄った。

そして慎重に感想を述べた。

「似てるわ。フィルガ殿に」

「母親ですからね」

あつさりと答えてから、間をおかずフィルガは言う。

「それよりも俺は、ディーナさんの方が似ていると思いますよ」

思いもよらない意外な意見に、フィルガを見た。

彼は真顔で強く、いやにゆつくりと頷いて見せる。

本気で言っているようだ。

ディーナは非難を込めて見つめ返すのだが、フィルガも怯む事のない視線で・・・見返してくる。

第二章 * 孔雀、お目見え（後書き）

やっと第二章です。

．．．．．実はすでに第十章までできているのに、
パソコン苦手で遅いです。

ちらとでも読んでくださった方、ありがとうございます。ネットつ
てすごいですよね。ホントにありがたいです！

*** 白孔雀（前書き）**

「俺の母親にそっくりですよ」

そう断言されてしまったデイナー。カいっぱい拒否していますが・・・。

* 白孔雀

「私に!??どこがよ?」

改めて視線をシーラに向ける。

シーラ・ジャスリート嬢。十六歳。

そう絵画の中央底辺に、金文字で銘打たれてある。

髪は色素の薄い金色。

光の加減によつては、白銀に見えたかも知れぬ程に。

瞳の色も、髪と同じ色合いだった。

豊かなまつげがふちどるお陰か、その眼差しをより一層やわらかく優しげなものにみせている。

唇は紅でも刷いていたのだろうか。

鮮やかに紅く、シーラの白い肌の中一点を彩っている。

だがそれでいて、鮮烈すぎる程の印象は無かった。

笑み浮かべてたえず少女の雰囲気は、どこか儚げで柔和なものだ。

それでも彼女には、畏怖なるものを感じさせられてしまう。

少女の醸し出す雰囲気、犯しがたい気品に気おされてではない。それすらも含めて違和感を抱かせる原因は、絵画の構図に因る所が大きいと思える。

在りし日の少女の左右の足元には、獣が二頭寄り添って描かれているのだ。

白い大型の猫のような獣と。頭に枝分かれした一角を頂く、黒い獣と……。

どちらも『まぼろし』とされている存在だ。

「幻獣、よね？」

ディーナは誰に確認取るでもなくだが、質問を投げかけるかのように呟いた。

幻獣が権力の象徴として、こうやって用いられるという事は知識としてはあった。

だがこうして實際目の当たりにしたのは初めてだから、感じる違和感なのか？

（ちがうわ）

ディーナは自分の感覚を殺すことなく、感じたままの答えに至った。

見るものの心に異様だと思わせるのは、少女が微笑んでいるせいだと。

（違和感があるのは獣じゃない、彼等じゃなくて。あるのは……）
、、、、

『シーラ』

彼女自身に他ならない。

シーラの笑顔は、獣の鋭い牙も爪も目には入っていないと物語っている。

絵画の中だけの見せかけの姿だとしても、獣は生々しい存在感を放っているのに。

なんのためらいもなく、少女の両手は双方二頭の頭へと預けられていた。

たくましい獣を御する事ができる、か弱げな乙女。
それがシーラだと、この絵は物語っているのだ。

「似ている……かしら？」

「髪と瞳の色の差があっても、そっくりです」

「そうかしら。私、こんなに儚げじゃないわよ。言い切れるわ」

「身内の俺から見ても、似ていますよ。顔立ちはもちろん、雰囲気から。何もかも」

「何が言いたいのか？」

フィルガは答えずに、話を進める。

いつのまにかディーナに歩み寄っており、彼もまた少女を見つめていた。

彼にとっては母親のはずだが、言いようのない複雑な表情で眺めるものだと感じる。

「もうとつくにご存知でしょうが、ジャスリート家の紋章はく孔雀<です」

紋章。

それを持つ事を許される程、この家は格式高いということだ。

実際に今日までの短い間で幾度、この館の孔雀達に出会ってきたことか。

調度品や日用品、侍女たちの前掛けの縁取り……。

いたるところに、図案化された孔雀たちを眼にしてきた。

何より正門の構えを、二羽の孔雀の彫刻が受け持っていたではないか。

ディーナ自身、その二羽に出迎えられたのを思い出す。

「おかしいと思いませんか？」

「……何が？」

慎重にディーナは答える。

「紋章から鑑かんがみれば、絵画に描かれるのは孔雀のはずだ。

それなのに幻獣が二頭。少女には不釣り合いな組み合わせだ」

「確かにね。違和感を覚えるわ。孔雀の方が絵画的には、調和が取れるわよね」

デイナーは素直に頷いて見せた。

「・・・でも、その必要はなかった」

「？」

「シーラは、我が家の紋章にひっかけて“白孔雀”と呼ばれていましたから。

彼女自身が孔雀だ」

それは、的を得ていると思う。

シーラを前にすれば誰もが納得するだろう。

ただの絵画であっていてさえ、彼女の雰囲気はタダモノではないと感じさせる。

彼女自身、生きた紋章だったのだろう。

「ねえ、シーラは　？どこに・・・いるの？」

「わかりません」

デイナーが恐るおそる尋ねたのに対して、フィルガはいやにきっぱりと答えた。

「消息どころか安否も不明です。もう、十七年も前に居なくなってしまうました」

「・・・」

起きた事実の重さと、それに反するフィルガのどこか淡々とした口調とに押され、

デイナーは言葉を飲み込んだままだ。

嫌でも読めてくる。

ここの家の者が自分に何を期待して、望んでいるのか。

「絵の中の少女を今一度、ようくご覧下さいディーナさん。この絵は在りし日の母の、

“そのままの姿”なのです。お解りになりませんか………
？」

先程から自分の母親を少女と呼ばわるところの方に、ひっかかりを覚えてしまう。

たとえ、説明付けるためのものだったとしてもだ。

ディーナは怪訝な表情浮かべながら、フィルガと少女とを代わる代わるに見比べる。

「何のこと？私とシーラが似ているから、何だっというのよ」
本当はわざわざ尋ねたくなかった。

それでもここは、はつきりさせなくてはならない。
わかっている。

だから、あえて訊いたのだ。

「それはもちろん。ディーナさんには、ずっとこのジャスリート家に居てほしい、と言っているのですよ。

さしずめ、新しい“紅孔雀”^{ベニクジャク}としてね」

フィルガは予想通りの答えを、まっすぐにディーナを見下ろしながら告げた。

薄く唇は笑み浮かべてはいるが、その目は冷たい。

ディーナを映していながら、ディーナを通して違う誰かを見ているのは明らかだった。

* 白孔雀（後書き）

そんなこと言われたって、ねえ！？なディーナです。

ばれはれですが、誰かさんはマ コンですね。

一応、ヒーローなんですが……。

（ガンバレ、二人とも。）かなりイタタ な、ヒーローですね。

* 紅孔雀（前書き）

フィルガの母親の少女時代の絵画を見せられ、そっくりだと言われ
ても、ディーナにはそうは思えません。

だから、何なの？（言われなくても察しはつくけど）
思い切り、嫌な予感的中・・・・・・・・。。

* 紅孔雀

「紅い孔雀など……。」

ディーナはフィルガから目線を外さずに、一步あらずさった。

「そんなものこの世に存在しない。見たこともない。聞いたこともね」

「おや？」

フィルガは薄く笑み浮かべながら、半歩踏み込む。

「ここに。御出ではないですか」

そうついいながら、手を差し伸べてディーナの髪の一房をからめ取る。

ぞつとした。

「……ッ!!ふざけないでっ!」

怒りと、言い知れぬ本能的な恐れが同時にわく。

自分の髪を弄ぶ、その手を勢い良く払いのけた。

だが間髪入れずに、手首をわしづかまれて絵画の真正面に引き戻されてしまう。

両肩を大きな掌が固定し、身動きが取れなくなった。

嫌でも思い知らされてしまう、自分の非力さが悔しい。

「ようく、見て下さいディーナさん。孔雀はちゃんとここにいますしょう?」

「何を…….?さつきからっ」

理解できないままに、促されるがままシーラへと真向かう。

日の光の下、あわくやさしく、微笑む少女。

白孔雀の異名そのままの、白い羽根をまとっているかのような出

で立ち。

「！？」

薄い布地を幾重にも合わせ、裾の広がりがるで、孔雀が今まさに羽根を広げんとしているかのように思わせるドレス。

腰のやや高い所に押さえがあつて、なおさらすそが歩きたびひるがえ翻る。なんとも歩きにくい、この衣装の着心地をディーナは知っている。絵画の中の純白は光のせいなのか、まとう少女の肌の白さが見せるせいなのか。

たった今ディーナが身に着けているドレスは、純粹な白というより幾らかクリーム色だ。

違いといえばただ、その一点のみだった。

「これ……」

やっと気がついた。

今、ディーナが身に着けた衣装は紛れもなく、彼女のものだ。

「ですから、よくお似合いだと」

「……正気なの？」

腹立ちのあまり語尾が震え、言葉を思つようには紡ぎ出せなかった。

「本気ですよ」

「違う！！“正気で言っているのか”と、訊いている！！」

「正気ですとも。気は確かですよ」

「だったら、なお性質タチが悪いわ」

我慢の限界だった。無礼にも程がある。

ディーナは肩に置かれた両手を振りほどくと、フィルガへと向き直った。

そのまま勢いに乗せて両の拳で、フィルガの胸を打ち据えようと

振りかぶる。

「ふざけないでっ!」

難無くかわされ、拳を両方とも奪われたまま、ディーナはフィルガをねめつける。

正直そうすることくらいしか、出来ないでいた。

両腕を引き抜こうと、身をよじらせてみたがビクともしないのだ。歴然とした力の差に、内心焦りと恐怖ばかりがつのって行く。

だが、それすらも振りほどこうと、ディーナは抗うのを止めようとはしなかった。

「・・・・・・・・。」

無言のまま薄く笑み浮かべ、フィルガはディーナを見下ろしている。

自分のうかつさと無力さに、改めて悔しくて涙ぐんでしまった。なんでまた、こうものこのこ付いて来てしまうのか。

いい加減、学習能力のなさに愛想も尽きた・・・・・・・・。

ところだが、いかんせん自分自身なので見捨てることも出来やしない。

背後で気配を探ってみる。

(誰か、誰か、誰か！)

だが、まるで人の気配など感じられなかった。

(誰でもいい、誰か!)

ダレデモ、イイ？

（そうよ！この際、この男を振り切れるのならば・・・・・・・・。）

・・・ナニモノデモ、イイ・・・・・・・・？

（何者であつても構わない！！）

何者であつても構わない・・・・・・・・？

ほんとうに？

勢い、何者でも構うものかと本気で願ったのは本当。

でも、そんな心の叫びにまで、問いかけて来るのはそれこそ一体・
・・・・・・・・？

誰なんだろう。

容姿だけではなく、能力まで。

「そこまで一緒だというの？」

「出来すぎだと思いでしょうけどね。彼女の周りをうろつきたい
モノ達が、気がついて

しまいました。・・・先程彼女は多分、強く呼んでしまったよう
ですから。アイツ等。

結界との境目で騒ぎ立てるものだから、気が散って仕方がない」
フィルガは右耳に手を押し当てて、瞳を伏せた。

少し集中しただけで、圧力を全身に感じる。

（数が増えている……）

離れていても、結界の主であるフィルガには、接触を試みるモノ達の存在が

ひしひしと伝わってくるのだ。

（さすがにあいつ等、目ざといな。どうせ入れやしないのに、鬱陶しい）

「あのコ、言いたがらないでしょうに。ここにいる限り、力は使わないように努力してるんじゃないの？」

忌々しそうにフィルガが手を下ろし、集中を解いたのを見計らってルゼが語りかけてきた。

ひとつ、強く瞬いて頭を打ち振ってから、氣遣わしげな祖母へと向き合う。

「直接尋ねなくても、近々彼女は動きますよ。そうになったら結界は、完璧に機能するかどうか。」

……俺にもちよつと、わかりませんね」

「ふうん？」

「………何ですか？」

「そうなるように仕向けたんでしょう」

「当然でしょう」

見透かされているのだ。流石です、おばあ様。

フィルガがこの館に生まれてから、二十二年間ずっと見守ってきた人に敵う筈もない。

やや心配そうな眼差しを向けられているのに、それに気づかないふりをするくらいしか出来ない、若造なのだ。 自分は。

祖母の眼差しに込められた、わずかな批判。 たしなめる様な。

「少し、強引過ぎない？」

「承知の上です」

「あら、そう」

きつぱりと答えたフィルガに、ルゼは小さく呟いたきり、それ以上何も言わなかった。

* 紅孔雀（後書き）

フィルガ、暴走始まっています。彼はかなりイタタなキャラだな、と哀れに思えます。ディーナもがんばって対抗して行きます。二人の対決はまだまだ序の口です 男と女の（運命の？ 大げさ。）対決が好きです。

甘い関係には二人、まだまだ遠い。ガンバレ。若造！みたいな

*** 輝く星（前書き）**

どうあっても逃げ出したいディーナ。

策はないのですが、勢いだけはあります。が、それだけではどうしようもありません。

そんなディーナを促すものは、どこからの声でしょうか？

* 輝く星

あてがわれた部屋に戻り、ディーナは一人うろつろと歩き回りながら考えていた。

（さて、どうしよう、これから）
体力も回復しましたので、お暇いとまします。

そんなディーナの希望など、どうやら通りそうもない。
いくら自分が学習能力に乏しいからと言っても、それくらいなら察しはつく。

ジャスリート家の“紅孔雀”とやらとして、お迎えしたいと『お願い』されたが、

出来ればというよりも、是が非でも勘弁して頂きたい。

（なんて勝手な………。）

結局は“白孔雀”の身代わりが欲しいだけだなんて、無礼にも程がある。

「嫌だつて言ったら？」

ディーナは相変らず両手の自由を奪われたままで、引き抜こうと体をよじらせながら訊いた。

フィルガはにつこり笑って、そうですねと手の力を緩めようとせぜずに答えた。

「俺の妻となつて、この家の財産と権利と地位を持ちたいと思いませんか？」

思いません。

さも名案だとしても得意気に言い出しそうなフィルガに、腹が立たが黙って耐えた。

「すこし、かんがえさせて……」

そう、たどたどしく答えるのが精一杯だった。

そう答えることで、その場を凌ぎやつとこうして一人きりになったのだ。

多分どころか確実に、自分に拒否権はない。

執念とか、執着とか、そういった類のもので縄をかけられているみたいだ。

何て厄介な。面倒くさくて、また泣けてくる。

それにしても、フィルガのあの思わせぶりな態度は、一体……

……？

、、、、、、、、

そのままの姿。

絵画の中のシーラに、偽りはないと言っているのだ。

（何なんだろう……？）

「まあ、考えても仕方がないね。どうせわからないし」

ディーナはひとり、自分を納得させるために呟く。

このままだと、深みにハマッてしまう。

長居する気は始めからない。

ならば、迷うまでもなく、取る行動はひとつだ。

逃げてしまえばいい！

何だかわくわくした。体中に力がみなぎってきて、拳を振り上げた。

でも。

「・・・・・・・・どうやって・・・・・・・・？」

館から庭に出られたとしても、高い石壁が館を取り囲んでいるのだ。

おまけに唯一の出入り口である門も、常に施錠されているのも確認済だ。

ディーナは振り上げた拳ごと、ガックリと肩を落としてうなだれた。

呼べばいい。

どこからともなく湧き上がる声が、ディーナを促す。

嫌にきつぱりとしたその声は、自分の内側からのもののようにも
あり、誰か何者かが囁き掛けてくれたもののようにもあつた。

呼ぶ？

誰をどうやって、という疑問も頭をよぎったがそれも一瞬だった。
すぐさまそうだと、納得する声が全ての疑問を打ち消してくれた
から。

そうだ。呼べばいい。

ディーナは窓辺へと近づくと、窓を開け放った。両手で窓を押し開いた格好のまま、胸いっぱい息を吸い込む。いい夜だ。星の出具合も、申し分ない。

ひんやりと冷たい風が、ディーナの頬を心地よく撫でる。

深く吸い込むと胸がすくようで、気分がよくなった。

今度は吸い込んだ息を吐きながら、ディーナはゆっくりと瞳を閉じる。

一番輝く星。

それは天高くあつて、ディーナを照らす。

実際は高くにありすぎて、夜空を見上げても肉眼では見えない。

瞳を閉じて、意識をその天の彼方一点に集中する事で、届く輝き。

光は、一本の道筋となる。

それを道として、彼等はやって来てくれるのだ。

その光の道の果てにいる、ディーナという輝く星を目指して・・・

そう、彼等に聞いたではないか。

こんなにも誇らしく嬉しい事なのに、どうして忘れていたのだろう。

（良かった。大事なこと、思い出すことができて）

自然と持ち上がった頬に風を感じて、瞳を開ける。来てくれたよ
うだ。

振り返ると、白い毛並みの美しい獣がうやうやしく控えていた。

獣はディーナと目が合うと、逸らさず瞳を見つめたままで、四

肢を起こす。

、 、 、 、 、 、

“ 呼んだか？ シーラよ ”

獣の問いかけに、ディーナは顔を強張らせた。

*** 輝く星（後書き）**

絶対に逃しはしないと息巻くと、何が何でも逃げたくなるものでしょう。ディーナは自由でいるのが、自分の当たり前の権利と主張して譲りませんが・・・。

通用しない相手に、どこまで対抗できるでしょうか。

*** 呼ぶものと応えるもの（前書き）**

ディーナが呼ぶことによって、様々な方面に影響がでてしまったようです。ディーナはといえば、存在をお披露目してしまった事になったのですが、気がついていません。折角、きてくれた獣にすらシィーラ呼ばわりかよ！と、ガツクリきています。

* 呼ぶものと応えるもの

今宵はまだ新月から数えてまだ二日目。

星明かりのほうが冴えている、静かな夜だ。

春の真夜中らしく、いまだ風が少し冷たい。

それが、昼に陽射しで暖められた大地と大気を鎮めて行く。

風にさらわれた日なたのほこりっぱさが、春の独特の気配の残り香を感じさせる。

そぞろ歩くにはうってつけ・・・・・・・・。

そんな、静かな夜。

その静寂が突如、豹変したのに気がついたのは、能力ちからのある者達だった。

それは普通であれば、感じられることは無い。

だが、少しでも能力のある者ならば、無視することは出来ない。多かれ少なかれ、影響を受けるからだ。

「どうなっているんだ！？ダグレス！」

動揺は隠せないままに、獣を呼びつけて叫んだ。

「あいつ等みんな、行っちゃったぞ！何がどうなっている……………」
「？」

胸が騒いで仕方がないが、それでも何故かしら心が躍るのを感じる。

それが声にも現われて、最後の方は笑ってしまった。

“我等を呼ぶものが、我等を求めた。”

ダグレス。名を呼ばれ、漆黒の獣は姿を現す。傍に控えていたわけではない。

この夜の暗闇より現われた。そうとしか言い表せない。呼ばれた時のみ、ダグレスは闇より出でる。いつもだ。闇を好んで、属する獣。彼自身が闇の一部分だと思う。

獣との長い付き合いですっかり慣らされたギルムードは、そんなダグレスの登場の仕方にいちいち驚かなくなっていた。

“それに応えたいと望むのは、本能だから皆それを目指し行く”
己の額のとっぺんの一角が、視界を邪魔するからとわずらわしうに、小首を傾げて獣はギルムードを見据えた。

「聖句を、振り切ってか!？」

“そうだ”

ダグレスは、ありのままを答える。

「おまえも……。望むのか？」

“確かに抗いがたい。たいそう魅力的で在らされるからな”

目を細めて、ダグレスはうつとりと耳を澄ませているようだった。

「おまえも、行っちまうのか？」

“……否。もう呼び声は止んでしまわれた。しばらくは、大丈夫だろう”

(しばらく?じゃあ、時間の問題なのか?)

ギルムードは、己の中で何かが弾けた気がした。こんな事が出来る唯一人の、たたずまいを嫌でも思い出す。

「間者の報告と一致している。そう考えるのは、早合点ではないな?」

“おそらくは。あの御方とまるで同じ気配がした”

「そうか!レド達が帰って来たら確かめてみよう」

“無理だ”

「何!？」

“レドたちはもう、戻ってこない”

この黒い獣は、ありのままでしか語らない。
ギルムードは、それをよく知っている。

期待で目をららんと輝かせた獣を、デイナーは力なく見た。
もついい加減、うんざりきているからだ。

「呼んだわ。確かに呼んだのは、この私“デイナー”よ。・・・シ
イーラではないわ」

“そうなのか？気配ですら、シイーラなのに？”

(気配ですら・・・!!)

何てことだろうか。冗談じゃあない。デイナーは強く打ち消しに
かかった。

「シイーラはもう、どこにもいないんじゃない？あなかったの？髪の色を
見てよ。あと、瞳の色も。違うでしょう？よく見て、よく思い出し
て！」

獣は身を低く構えて、上目遣いで窺っている。納得いかないよう
だ。

鼻にしわを寄せて、唸るから鋭い牙が覗いている。

デイナーは譲る気など、全くない。毅然として構える。

よくよく見ればこの獣、どこかで見たと思ったら、シイーラの肖
像画と一緒に描かれていたコだった。

巨体の猫型の獣。後ろ足で立ち上がれば、ディーナとたいして変わらぬ身の丈だろう。

白い毛並みに浮き出た、淡い金色の斑点模様が美しい。

三角にとんがった耳の先を、飾り毛が長くふちどって可愛らしかった。

前足の爪は立派過ぎて、しまいきれずに指からはみ出して見える程だった。

その鋭い鍵爪に、一撃でもくらったら、ディーナなどひとたまりもないだろう。

それは知識として意識に上るが、恐れは感じなかった。

この鋭い爪も牙も使われるとしたら、「私」を守るためだ。

すなわち「私」が、使おうと思わなければ獣は力を振るったりしない……。

（なぜ「私」そんな事を「知っている」の？）

その疑問もすぐ現われたが、同時に消えてしまい、後は全く気にも止まらなかった。

だって当たり前じゃないか。そんな事は。いちいち不思議に思う方がどうかしている。

ぼんやりとした意識を取り戻すと、獣と視線を合わすべくディーナはしゃがみこんだ。

獣の顔を両手ではさみ込んで、その不服そうな瞳を捕らえる。

「あんだ、シィーラのお利口さんだったコ？」

“そうだ。レドはシィーラの「カワイイ」だったのに。ずっとシィーラは呼んでくれなかった。……久しぶりにレドを呼ぶ声は、シィーラに違いないと思ったから来た。赤毛のシィーラは、

「シーラじゃないのか？」

「そう。あんた、レドって言うのね？お利口さん。私はディーナよ。シーラじゃないの」

“レドを呼べて話も出来る。それはシーラだ。シーラだけだった”

「・・・・・・そうなの？」

“レドはシーラが好き。ずっと待っていた。シーラはどこ？”

「私にもわからないわ」

“どうして赤毛は！！シーラじゃない、などと言うのだ？”

「私がディーナ以外の何者でもないからよ」

なるべく強く言い渡したが、少しばかり胸が痛んだ。

レドの無垢な瞳と向き合っているのが辛くなり、ディーナは立ち上がって背を向けた。

どうして誰も彼も、シーラを押し付けたがるのだろう。答え様もないことばかりを、尋ねてくるのだろう。

どうして？ どうして？

シーラになつてはあげられない。なる気もない。

その事で、なぜに罪悪感を覚えねばならないのか？

“ぐう・・・・るうう・・・・う・・・・”

レドは低く喉を鳴らして、部屋の中をウロウロしている。

「レド。あんた、もう好きなところに行つていいよ」

そう声を掛けたディーナに、レドは後脚で立ち上がって飛びついてきた。

「わっ！わあ、何、なにっ？」

思わずよろめいたが、壁の助けを借りて何とか受け止める。

“わかったぞ！赤毛のシーラは、ディーナだという事だな！では、何をして遊ぶ？ディーナよ”

レドなりに妥協したらしい答えなのだろうが、ディーナは再びよ

ろめく。

今度はレドの巨体のせいではない。

*** 呼ぶものと応えるもの（後書き）**

これからこんな訪問者がどんどん、やって来ます。
ディーナは強情にもがんばって、言い切って行きます。シーラに
なる気なんてないよ！他人の身代わりなんて、冗談きついよ。そこ
がディーナの、原動力といえそうです。

第三章 * 橋のたもとで（前書き）

浮かれ気分も台無しのディーナ。

フィルガは何だって、こうもしつこいのか。

でもすこし、心強い仲間もいるので救われています。

第三章 * 橋のたもとで

いつまでも、獣に頼りっぱなしなのもどうかと思う。

ディーナは館から遠ざかると、レドの背から降りて自分の足で歩き始めた。

「ありがとうね、レド。重かったでしょう」

“ シイ……。ディーナ軽すぎて、重みを感じなかった。何で出来ているのだ？”

さあねえ、とディーナは小首を傾げながら、苦笑する。

「あんたが力持ちなだけだと思うよ」

ディーナはレドの頭を撫でてねぎらいながら、少しでも早く館から離れようと歩を進める。

レドの助けを借りて、無事にこうして館を抜け出したのだ。

そうでなければ、無理だったと言い切れる。

二階から飛び降りて、高い壁を越えた上、堀を飛び越して渡るなどとは

流石のディーナもレドの協力無しでは、実行は難しい。

何をして遊ぶのかと、レドは訊いてきた。

だからディーナは、ここから逃げたいのだと答えた。

“ 逃げる？何からだ？ここはシイ……。ディーナの館なのに”

「フィルガ殿。」

ため息混じりにきっぱりとディーナが告げると、レドはあっさり承諾した。

“ シーラの息子、フィルガ。オレもあいつ嫌い”

「・・・・・・なんで？」

“ いじわるするから。あいつ、シーラに近づくモノに容赦しない”

「容赦・・・・・・しないって？」

“ 怖くて言えない”

なんですと？！

ディーナは改めて、ここから立ち去る決意が固まった。

フィルガはディーナをシーラとして、迎えたがっている。

相当の執着をもってして、臨むその姿勢には嫌悪以外の感想が浮かばない。

レドの話からすると獣達に対する態度も、ディーナの受け入れられる範ちゆうを超えていそうだ。

「ね、レド。さっさと逃げちゃおっか」

“ それがいい”

そうしてレドの背に身を預けたのだ。

脱出はうまくいった。

もっと早くこうすれば良かった。こんなに解放された気分になれるのならば。

何はともあれ、自由だ！自由！

浮かれているので、足取りも軽い。

出で立ちも、もとからしていた旅装束なので、足さばきも良い。

なんとも身軽で嬉しいったらない。

小走りに駆け出したディーナの速さに、レドも合わせてくれる。

“楽しいな！シ……ディーナ”

「楽しいねえ！」

本当に楽しい。

自由に走れる事が、こんなにも楽しいという事を思い出せた気分だった。

さして月明かりもない夜だったが、時おり雲間から射し込む細かい月光が、少女と獣を照らす。

一人と一匹は互いの影とも連れ添って、心強い気持ちで駆け続けた。

まだ温み切っていない追い風に、背を押してもらいながら。

ディーナは橋を渡ろうとして、たじろいだ。

いくらか夜闇に目が慣れてきたとはいえ、今宵は月明かりもままならない。

見通しは制限される。

あの霧深かった日とは別の条件で、その先に何が待っているのか、わからない（と、思いたい）が、気配はしている。

そのなじみのある気配に、浮かれた気分は一気に沈んだ。

「！？……なんでっ、ここにいるのよ！！」

思わず声が引きつつて、裏返った。恐怖のあまり悲鳴に近い。人影が歩み寄りながら、答える。

「それは、俺の領域内ですから」

彼の言葉が、単に管轄する領土の中だからと言っているわけではなさそうだ。

なにせ彼はシーラの息子なのだから。

おそらく、フィルガにも何かしらの『能力』があるのだろう。

それをどうして見落としていたのだろう。

見抜けずにいたのは、自分の手ばかりとしか言い様がない。

この男はディーナを、この橋のたもとでこうやって、待ち構えて居たではないか。

あの全てが始まった霧深い、あの朝とまるで同じ………。

「やあ、ディーナさん。夜のお散歩ですか」

「そんなところ、よ」

フィルガの口調は意識してのものが軽く、語尾は柔らかい。

それでいて、表情はけしてそれに見合ったものではなかった。

その冷め切った瞳と合っていない声音は、不気味に感じられる。

わかるのは多分彼が相当、腹を立てているという事だ。

ディーナは自分よりも頭二つ分程、高くから睨み下ろす視線を睨み返しながら、決めた。

その取り澄ました態度を崩す。嫌われるに限る。

館を黙って後にしたことで、なぜか後ろめたさを感じてしまうが、それをフィルガに悟られたくは無かった。

第一、ディーナは責められるいわれなどないのだ。

そこを気取られれば、付け込まれるだろうから、見抜かれてはならない。

強い姿勢を崩すまいと、ディーナはより一層力を込めて、フィルガを見据えた。

レドがそつと自分に身を寄せたのを感じて、安心させるために背に庇う。

「そこ、どいてよ。通してちょうだい」

「・・・ 何がお気に召さないのですか？」

「何もかもよ！」

噛み付きかねない勢いで叫ぶ。

「何もかも？」

フィルガが理解できないといった調子で繰り返すので、苛立ちが増す。

おとなしくしていた分、不満は大きたまっていた。

「お綺麗でキュウクツなドレスから、豪勢な部屋から、贅沢な食事から、何から何まで全部よ！！一番嫌なのは、フィルガ殿！あんたのそういう態度が、一等ガマンならないわ」

「では、一体どうしろと言うのですか？」

「解放して」

強引な客人としての扱いは、彼らなりの好意の表れだ。

それくらい、頭ではわかつている。

しかし、自分が必要としていないから、素直に受け取れないのだ。ディーナの望むものは、かれの差し出すものなんかじゃない。

それに、彼は暗に要求している。

見返りとして、ディーナにシーラであるかのように振舞う事を・

・・・。

冗談じゃあない。自分はディーナだ。

「解放？それでディーナさんは、どこへ行かれるというのですか？
当てはあるのですか」

「関係ないでしょう」

「そんなにシーラに、似ているのに？」

「それこそ！関係ないでしょう。私はただの通りすがりで、他人の
空似よ」

「能力だつて……」

レドを一瞥すると、フィルガは続ける。

「……同じじゃないですか」

「ただの偶然でしょう」

訴えかけるようなフィルガを、うつとうしそつにはね付けて、強
気な態度を保ち続ける。

だが、内心は少々焦り始めていた。

いざとなったら、レドをけしか喉けて道を空けさせようか、また背を借
りこの場を突破しようか。いろいろ考えてみたが、通用しなさそう
だ。

白い獣を前にしても、彼は動揺していない。

流石にシーラの子供なだけあって、どうやら彼も『知っている』
のだろう。

獣達の爪や牙は、無害な事を。

しかも彼は自分の領域内だと、言っていたではないか。
はったりだと思いたいが、下手に動いて彼の手中で転がされる恐
れもないと言えない。

さて、どうするか？

一番いいのは、彼に根気強く訴えディーナに全くその気が無いと、理解してもらい納得の上で解放させることだ。

「やれやれ。つれないですよ、ディーナさん。折角の出会いを運命だとして、一緒に盛り上がってくれてもいいじゃないですか」

「一人でやってなよ」

ディーナの切り返しに、わざとらしいくらい盛大に、フィルガはうな垂れる。

軽口だったが、どうやら本気の申し出だったらしい。

ディーナには理解できない、迷惑な話だ。

「貴方にはこのフィルガの差し出すもの等は、なんの魅力もないですよですね」

ジャスリート家の、地位だの、財産だの。

その跡継ぎの妻。行く行くは領主の奥方。

「そうよ。最初から、言ってるじゃない」

だいぶ、弱気になってきているようだ。この勘違いの若君は。もう、一押しか？

ディーナはフィルガを冷たく見続けながら、しゃがみこんでレドの首に両腕を回した。

レド、大丈夫？隙を見て、走りぬけよう？

その耳元で音には出さず、くちびるの形だけで告げた。

“……ディーナ”

レドは体をディーナに摺り寄せる。

可愛く、愛しいのでディーナも精いっぱい抱きしめ返した。

「じゃあ、あなたは何になら心動かされて下さるのですか？」
様子を不機嫌そうに見守っていたフィルガが、尋ねてきた。

「気分」

すつぱりと、言い切ってディーナは顔を上げた。

「気が乗らないの、フィルガ殿のこと。だから、そこ。どいて」

内容こそは容赦ないが、聞き分けの悪い子供に語りかけるように、せめて優しい口調を心がけてみた。

第三章 * 橋のたもとで（後書き）

やっと、第三章入りました。よろしくお願いします。

ここからディーナ、いろいろと対決を強いられていきます。ばつちり、彼女が不利ですが・・・。

（いやいや、そうでもないか）何気に彼女は戦い好きで、仕掛けていくタイプなので応援してやって下さいませ。

* 聖なる句（前書き）

「フィルガ殿ともシーラとも関係ないんだから、そこをどいてよ！」

ディーナとレドは、フィルガに訴えていますか……。説得するどころか、逆に逆鱗に触れてしまったようです。

* 聖なる句

ただの通りすがり。ただの、他人の空似。

どんなにフィルガの母“シーラ”と驚くほど似た容姿をしていようと、同じ能力を持ち合わせていようと、ディーナは偶然だと主張して譲らない。

しかも。関わってくれるなとばかりに、この縁を断ち切ろうとまでする。

「……どいたら、ディーナさんはどこへ行かれるというのですか？」

「関係ないでしょ」

組んでいた腕をほどき、両手を腰に当てて、心底面倒そうにディーナは答える。

「関係ない……?」

自分でも驚くほど、心とは裏腹な静かな口調だった。

何の感情もこもっていない、無機質な響き。

「ねえ、レド。私とシーラは違うよね？何の関係もないでしょう？」

“ディーナは、シーラとちがう。だから、そこをよけるシーラの息子”

「うるさいぞ、レド。お前のほうこそ関係ないくせに。黙っているべつたりと己の巨体をディーナに摺り寄せながら、得意げにものをいう獣に腹が立った。

忌々しくはき捨てると、ディーナに上目遣いで睨まれた。

「私がレドに言わせたんだから！レドにそんな言い方しないでよ！」

“ そうだ。レドは関係なくなんか無い。そこをよける、シーラの息子”

「…………断る」

不機嫌もあらわなフィルガを、レドは優越感に浸りきった顔で見ている。

（コイツは、相変わらず、まったく！）

フィルガがまだ幼かった頃から、この獣とは張り合ってきた。

久々に見たと思ったら、どうやらこの関係は変わりないらしい。

お互い成長していないようだが、とがめる者もどうせいないのだから構うまい。

「関係ないですか？ディーナさん」

レドと話していても、進まないのディーナに改めて向き合った。ディーナは首を大きく、縦に振りながら言い分を述べる。

「そうよ。何ひとつ、拝借してなんていないんだから！

食事や薬……。そこは世話になったわ、ありがとう。その辺の代価は、

大人しくお人形さんごっこに付き合ったんだから、それで帳消しにして頂くわ」

お人形さんごっこ。

多分それは彼女の我慢ならぬ、窮屈なドレスや靴を言われるままに身に着けていた事を、言っているのだろう。

ディーナにしてみれば、世話になった代価として引き合いに出せるほど、割り切れる行いだっただけ。

「だから、関係ないですか」

「そうよ。後腐れないでしょ？」

関係ない。そう繰り返されるたび、フィルガの芯は冷たいもので満たされてゆく。

「……………」

どうすれば、ディーナにその考えを改めさせ、足止めさせる事ができるのか。

関係ないなどと言わせない術を、フィルガは心得ている。

（それを使えばいい）

いやに冷静な自分が、ささやく。

フィルガは、少女が先程から寄り添っている獣を一瞥^{いちべつ}する。

『……………我、フィルガ・ジャスリートが、眼前^{がんぜん}の地に伏す四つ足の獣よりも高見に立つ』

宣告を兼ねた宣言で、それは始まる。

（な、に！？）

フィルガが何かの一小節らしき部分を、言い終えたのと同時だった。

大気が強張ったかのような緊張感が、場を占める。

異変に気がつき、ディーナは反射的にレドをかばう様に、より一層強く抱きしめた。

「レ、レド？」

レドは何の反応も示さなかった。

ただ四肢を突っ張らせて、まっすぐ前を見つめている。

しかしその瞳に何にも映っていない。様子がおかしいのは明らかだ。

ディーナは大声で名を呼んで揺さぶり掛けて、レドの正気を取り戻そうとした。

「ムー・ムー・ミッ!?」と、のたうちまわった。

レドに、ディーナの声は届かないようだ。レドは固まったまま、動こうとしない。

「我は雷神を称え、その雷の力を借りて貫く。」
いかすち

貫くは身体しんたいではなく、そのものの魂の在り処。

その輝かしい雷光をまといで、我のもとへと集い。

下れ、雷の刃。

かの獣^{モノ}の心を、我が物とせんがために。

闇の中でただ朗々と、フィルガの声だけが響き渡る。

闇に飲まれる事もなく、風にさらわれる事もない。静かであいて、力強い声だ。

かの獣の名は、レド。

その名を与えた者の名は、**シーラ**。

我はその血縁、よつて
・
・
・
・
・
□

何が起こっているのか。

なす術も無く、ディーナはただ必死にレドの体を抱きしめ続けた。耳も押さえつけてみた。

それでも異変は治まらない。

それどころか、レドの持つ意識が、気配が薄れて行くばかりなのを感じた。

『……』

我、フィルガ・ジャスリートが。この獣の魂を預かる』

レドの魂はフィルガの声にだけ、耳を傾けているのだ。

「ちよつとっ！ー止めなさいよ！このコは関係ないでしょう、巻き込まないで！」

「レド」

“・・・・・・”

ディーナが訴えた頃にはもう、フィルガの声は止んでいた。
フィルガはレドを呼ぶと、右手を前に差し伸べる。

「こちらへ、レド」

“・・・・・・”

「！？」

レドは命ぜられるままに、ディーナの腕をすり抜けてフィルガの傍らに控えた。

「レ、ド・・・・・・？」

不安になって、掛ける声が震えた。それでもレドの反応はない。
代わりに応えたのは、フィルガだった。

「無駄ですよ、ディーナさん。レドは俺の聖句の徒になりましたから」

「・・・・・・」

聖句？

初めて耳にする言葉に、ディーナは黙ったまま応えずにいる。

代わりに、そう遠くはないと思わせる。橋のむこう側から、
獣の遠吠えが返った。

*** 聖なる句（後書き）**

フィルガはレドに対して、態度が全然違います。

彼が紳士的な態度を心がけるのは、人に対してだけという、これまたデイナーにはっちり嫌われそうな男です。たんにヤキモチ。わゝゝゝ。かつこ悪いですが、デイナーは多分見捨てない（ようになって行く、）予定です。お付き合い、ありがとうございます！

* 闇のむこうの遠吠え（前書き）

何が聖句かとディーナはフィルガに訴えますが、彼は悪びれもせず
に問い返します。

「アナタのやっている事も結局は同じじゃないですか」と。返す言
葉も無いままに、ディーナは泣き崩れておりますが。レドは還して
もらえそうもありません。

* 闇のむこうの遠吠え

* * *

ディーナは泣く泣くまた、ジャスリート家に連れ戻されていた。

実際、悔しさのあまり涙が止まらなかった。

あの橋のたもとで、ディーナは泣いてごねて抵抗し続けていたはずなのだが。

気がついてみればこうしてまた、もとの客室に寝かしつけられていたという訳だ。

(・・・フィルガ、あいつ。何をしてくれたんだ、忌々しい・・・！)

ベッドから飛び起き、すぐさまドアノブに手をかけてみたが、ドアはびくともしなかった。その上、いつの間にか着替えさせられており、ディーナはごく薄い布地の夜間着姿ねまぎなのにも腹が立った。

ジャスリート家でのドレスは、どんな用途のモノであろうと、もうゴメン蒙かぶる。

でも、どう対処の仕様もない。

自分の考えの甘さが、フィルガに付け入るスキを与えたのだ。そう思うと自分で自分が情けなくなってくる。

(あいつには敵わないってこと？でも、だからって！言うなりになるなんて、絶対イヤ)

デイナーは無力だ。

獣達の力を頼らなければ、何ひとつ成し得ない。

彼はそこまでちゃんと、見越していたのだ。

(そのせいでレドが……………)

レドはフィルガの“聖句”に囚われてしまった。

己の意思を持たず、術者の言いなりの、言わば操り人形となる。

(……………レド)

どうしているだろうか。

開かないドアの前で、デイナーは膝からくずおれた。

ドアに両拳を預けた格好のまま、その場にうずくまる。

* * *

……聖句。

デイナーは初めてその存在と、それを操る術者を見た。

「聖なる言葉の配列は、かつての能力者たちの研究の成果です」
フィルガはそう、説明した。

「そこに用いる者の力が込められて、句は発動します」

レドの頭に己の右手を預けて、フィルガは滑らかに言葉を紡いで言った。

そこに、獣達に対する罪悪感を感じられなかった。少なくとも、デイナーはそうとは思えなかった。

獣達の意味をねじ伏せて、使役する？

ディーナにはそんな存在すらそうだが、それをやってのける者の気が知れないと思った。

“聖句”なるものが存在するあたりでもう、獣達を自分達より格下と決め付けている輩やからがいる事の証だった。

しかも、目の前に。

ディーナには信じ難い、暴挙でしかない。

それなのに、この男は当たり前のようにやってのけた。

「どこが！！聖なる句だっていうのよ！？こんなの、人間の都合で制限を与えてるだけじゃないのっ……………！！
なんでよ、レドを返してよ」

悲鳴に近いディーナの訴えにも、フィルガは変わらない調子で答える。

「ディーナさんだって……形は違いますが、やっていることは結局は同じでは？」

自分ではなし得ない事は、獣の能力を頼る。そのために獣に呼びかけたのでしょうか？」

「！！！！」

フィルガの言うとおりだ。返す言葉も無い。

ディーナは獣レドに『お願い』をして、都合良く助けてもらって館を出た。

意思を確認し奪う事は無いが、利用しているのには間違いはない。

「……だからこそ！レドは関係ないでしょう！私が巻き込んだ……」

・・・のだから、解放してあげて。そう続けるのを待たずに、フィルガの言葉が遮る。

「そう。巻き込んだのは、アナタが最初だ。呼びつけて、館から黙って立ち去ろうとなどするから・・・。レドは、こうなった」

「私のせいだと言っててるのね？ そんな権利、フィルガ殿にあるの？
・・・ジャスリート家の管轄地帯だからなの？ どうして？」

「アナタが獣達を呼びつけ、俺・・・館から逃れようとする限り、俺は聖句を使役します」

（答えになってない）

デイナーは納得が行かなかった。だから、頭を左右に打ち振りながら、今一度問う。

「だから！ どうして、フィルガ殿にそんな権利があるの？」

フィルガはデイナーが行動を改めない限り、片っ端から獣を聖句の徒に言うと言っているのだ。

脅し以外の何ものでもないだろう。

それくらいなら、デイナーにも理解できる。

わからないのは、そこまで自分に執着するあまり、手段を選ばないフィルガのものの見方だった。

「・・・・・・・・」 「・・・・・・・・」

デイナーはフィルガの返答を待つが、彼は何も答えようとはしなかった。

しゃがみ込んだまま、フィルガを見つめ上げても視界がぼやけて行くばかりだ。

強く瞬いて、涙をまぶたで払う。

デイナーは罪悪感で、胸が痛んで仕方が無かった。

呼吸をする度ごと、自分自身を罰するかのようになんだ痛みが走る。

「……っレド……？」

涙でくぐもり擦れた声で呼びかけて、レドの何も映してはいない瞳にすぎる。

その瞳はただ静かで、覗けば覗くほど深い虚無にはまって、飲み込まれて行くようだった。

デイナーはしゃがみ込んだまま、思わず瞳を外してうな垂れた。
(見て、いられない)

デイナーと無邪気に駆けてくれた、レドはどこにいるのだろう？

完全に失われてしまったのだろうか……。それが一番恐ろしい。

思い詰めているデイナーの視界に、フィルガの靴先が入った。
気がつき、見上げると、いつの間にか目の前にたっている。

デイナーの視線と合うと、フィルガは片膝を折った。

「デイナーさんは、この領域から出てはなりません。さあ、立って下さい」

「ここから出たら、何だっというの？」

デイナーは差し出された手を無視して、立ち上がろうともせず、問いかけた。

「……。ご覧なさい。あの、向こう岸を」

フィルガはデイナーへと差し伸べた手で、橋の向こう側へと視線を導く。

いくつもの獣達の瞳が、闇の中で光っているのが確認できた。

獣達の光る瞳が、時折り瞬くせいで、灯かりが点されたり消されたりしているようにも見える。

皆、川岸に沿って列をなして、視線をこちらに向けているのだ。ディーナの呼びかけに応えてくれたであろう、獣達の群れだ。

見える瞳の数以上に、闇の中で気配がひしめいている。

ディーナはその事には、とくに気がついていない。

だが同時に、何故レド以外自分の元へ来れないのかとも、怪しんでもいた。

フィルガの力に因る影響しか、思い当たることが無い・・・だから、無視していたのだ。

「みんな・・・」

「アナタを目当てに駆け付けた、騎士達ナイトですが入ってはこれませんよ。」

俺の結界内ですからね。レドはまあ、特別だ。能力も強い方ですし、かつてシーラから受けた加護がある」

「レドをどうする気？」

フィルガは、唇の片端を持ち上げて見せただけだった。

「俺の領域内だからこそ、アナタの呼び声は制限されていた。と、申し上げておきましょうか」

「それが、なに？」

「それでも駆け付けてくる獣達がいる。アナタという光を目指して」

「アナタはたいそう魅力的ですよ、ディーナさん？ 獣達だけではなく、人間にとっても。」

特に能力者や、権力者にいたっては、無視できないくらいに」

ディーナはもはや、何もいう気になれなかった。

受けたショックのせいもあるが、その上こうやって突き付けられた現実が、重くのしかかってくる。

フィルガの言わんとしていることに、先回りしてもう理解している。頭でだけ、だが。

だからもう黙っていてくれと願ったが、フィルガは続ける。

「アナタを目指すもの達は、もはや獣たちだけでは済まされなくなりました」

「なんでよ？」

「アナタの存在をあいっ等^{……}に、お披露目したも同じだからですよ。……この場にいる獣たちの何頭かは、聖句を振り払って来たものもいるでしょうから。レドがいい例だ。そうなれば、術者たちはアナタの存在を黙って見過ごすわけには行かなくなりましたからね」

「だから。なんで？」

利用価値を見出されるのですよ、とフィルガは言いにくそうに、短く答えた。

「俺にすら出し抜かれているくらいなんですから、大丈夫などとは言わせませんよ」

「ねえ、レドはどうなるの？どう、するの？」

言って聞かせるかのように告げるフィルガに、自分でも情けないくらい細い声で訴えた。

壊れたように、先程から同じ事を繰り返している。それしか今は、考えられなかった。

もう、泣くまいとは思ったが、堪え切れなかった。

泣き顔を晒すのは癪に障るが、視線を逸らすことの方がイヤだったから、涙でにじむまま睨むのは止めなかった。

「それは、ディーナさん。アナタ次第だ」

先に視線を外したのは、フィルガの方だった。

上手く事が運んで、勝ち顔を誇るかと思っただが……。意外なほど謙虚な口調は、苦しげにすら聞こえる。

「……………」

ディーナはうつむいたフィルガを、しばらく無言で見守る。
(フィルガ殿?)

フィルガは詫びるかのように、頭をたれて跪いたままだ。

(……………もう、なんなのよ)

調子が狂う。

「わかったわよ、フィルガ殿。私、次第なのね?」

ディーナは涙を拭くと、立ち上がった。

勢い良くだったから頭に血が上るのが追いつかず、正直少しくらくらした。

そこをぐつと堪え、橋の向こう岸へと真向かう。そして精一杯、声を張り上げた。

「みんな、お願い!呼ばれても、来ないで!」

……ウヴオオーンン……………

張り上げた声に異議を申し立てるかのように、いつせいに遠吠えが返ってきた。

「ッ、散ってっ!!」

有無を言わせぬ命令口調だった。
闇に響き渡る獣たちの叫びが静まる前に、ディーナは踵きんすを返す。
なおも返る遠吠えを背にして、フィルガへと向き合った。

「これでいいのね？ フィルガ殿」

そうフィルガにはき捨てると、ディーナは自ら橋を背にして歩きだした。

ジャスリート家を目指して。

* * *

確かに自分で歩き始めたのは、間違いないはずだ。
そこまでの記憶は確かだ。

(・・・・・・フィルガ。アイツめ)

意地でも自分の足だけで戻ると、フィルガの馬もレドの背も拒んでから後の記憶が無い。

ディーナは悔しさのあまり、また泣けてきた。

* * * * *

*** 闇のむこうの遠吠え（後書き）**

ディーナ完敗です。今の所。

そしてせめてもの意地っ張りでさえも、難無くどうにかされてしまったらしく、戻ってきてしまいました。

この悔しさすらも喰らって、ディーナは面を上げていきますが・・・
。今の所は身動きとれません。

悔しいよね。自分が無力だっと思って思い知るのはサ。みたいな。

明けてましておめでとうございます。

今年もよろしくお願いします。

皆様にとっても素晴らしい一年でありますように！

読んでくださった方、

ありがとうございます。

*** あえて買った不興（前書き）**

強気な態度はただの強がり・・・。
不器用な孫息子をからかいつつも、仲介役を買って出たルゼです。

* あえて買った不興

フィルガの落ち込みようときたら、もう。

「そんなに落ち込むのなら、やらなければ良かったじゃない」
そう思わず、言っても仕方のない言葉を掛けてしまうほど、フィルガはうな垂れていた。

孫息子は左手で目元を覆い、長いすに寝そべっている。

その傍らには白い獣が、お行儀よく前脚を揃えて控えており、フィルガの右手は獣の頭に置かれていた。

時々思い出したように、撫で付けたりもしている。

「………久しぶりねえ。レドじゃない？」

白い獣は何の反応も示さない。

見ている先はまっすぐだが、何も映してはいないようだ。

うつろであるというよりも、ただのガラス玉と化して見える。

（従えちゃった訳ね………。このコ。そりゃあ）

落ち込むハズだ。

いつまでも起き上がろうとしないフィルガを、ルゼは見守りつつ
一昨日晩の二人のやり取りを推測してみる。

「フィルガ、ディーナちゃんは………」

「獣を従えなければ、彼女は行ってしまった事でしょうからね。その方が、痛手だ」

「じゃあ、仕方ないわね。覚悟の上なら」

「覚悟の上でしたとも」

「嫌われるの」

「そうですね。泣かれましたし、嫌われましたよ……」
フィルガはのろのろと身を起こし、呟く。

「ただでさえ嫌がられてたのにね。とどめを刺しちゃったか」

「……」

落ち込む孫に容赦なく、ルゼは告げる。

やっと身を起こしたフィルガだったが、またがつくりと頭を垂れて床を見つめている。

「そりゃあね……え」

言いかけてルゼは言葉を飲み込む。

「何です」

「やめておくわ。アンタにこれ以上追い討ち掛けても、鬱陶^{うつとう}しいだけだし」

カビが生えられても困るしね、と付け加えながらルゼはフィルガの頭を扇で小突く。

「お気遣い、どうも」

フィルガはやっと顔を上げて答えた。

孫の心中は痛いほど、良くわかる。

彼女にまた立ち去られたら、どれ程までに打撃を受けるかなんて、考えたくも無いのだろう。

「まあ、ここは」

ルゼは扇を腰帯に終いつつ、フィルガに背を向けた。

「私の出番でしょうね」

「おばあ様……」

心配そうなフィルガの声に振り向かないまま、右手を上げて見せた。

泣く子をあやすなんて、ずいぶん久しぶりだ。

フィルガ曰くディーナがごねるので、術を使ったそうで……ルゼがおとつい見た彼女は、孫に抱えられた格好で帰還した。

泣きはらしたのであるう目元からは、自分から意識を手放したとは思えなかった。

フィルガの苦い顔から、その後の状況がこうなるのは予測ずみだった。

で、案の定と……。

ノックを試みたが、返事はない。

だが気配は感じられた。息を殺して、緊迫しているような。

小さな子猫を部屋の隅に追いやった気分だった。

もう一度ノックをしたが、変わらず返答が無いのでそっとドアを押し開く。

それとほぼ同時に、何かがドアに当たって落ちた。

慌てて身を引いて、一呼吸置く。

「ディーナちゃん……ん？入るわよ？」

隙間から窺うと、ディーナは次のクッションを振りかぶっていた。

「……！」

それでもその顔には、しまったと描いてあるようだ。

殺気立つディーナの不興を買うのは、フィルガ一人で充分。

この見てくれであつては、なおさら誰もが不興を買うのを恐れる。誰も『シーラ』の機嫌を損ねたくはなからう。

毛艶が違つとはいえ、彼女の容姿は『白孔雀』そのままなのだから。

そこまで考え侍女たちは寄こさないように計らっておいたから、大方フィルガだとも思っただろう。

「入るわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

慌てたように、ディーナはクッションを胸に抱え直した。

どうやらルゼに攻撃する気はなさそうだ。

そろそろドアを開けて行くと、半分も開かないうちに、何かが引つかかってしまった。

足元に目をやると、クッションの端っこが挟まってつかえている。

見ると同じように不自然な所に、五つばかり転がっていた。

やれやれ、とルゼは腰折る。

* * *

ルゼはクッションを拾い両脇に抱えると、すたすたと歩み寄って来た。

裾の長いドレスもものもしない。

その軽やかな裾さばきに、思わず見惚れてしまう。

「はい、ディーナちゃん。ご機嫌いかが？」

訊かずとも知れた事だろうが、ルゼは動じていない。

ディーナの機嫌を取ろうという、猫なで声でもない。

誰かさんとはまるで違っている。

ルゼはディーナの顔を見て、笑顔を見せた。

勢い良くディーナの隣にクッションを放り置くと、同じように腰

下ろしてあぐらをかく。

毛織物が敷かれていたとはいえ、床に？

この品のよさそうな婦人からは、とても想像できない振る舞いだろっ。

ディーナは他所など向いていらなかった。

ルゼはますます笑顔になって、ディーナを覗き込む。

その笑い方は、どこか得意げだった。

「意外って顔してるわね。本当、ディーナちゃんは素直ね。もろに感情が表情に出て」

ディーナは否定出来なかった。自分は腹芸に向いていない。

「……………」

「さて。どうしましたか？大体のことは、フィルガから聴いていますが」

（どうしたも、なにも。）

【どうしますか。この獣を見捨てて、新しい獣を呼びますか？】

彼の名を出された途端に、あの橋のたもとでのやり取りが蘇える。

（捨てるだの、新しいだの。）

明らかにフィルガはあのコ達を、物として見下していた。

それはディーナも同じではないかと、彼に指摘されて言葉に詰まった。

違うと、何故か否定出来なかった。

ディーナも友の名のもとに、獣たちの力を都合良く利用しているだけだと…………。

『お願いする』などという表現は、都合良く解釈した上での言い回しに過ぎない。

悔しいし、情けない。

なぜ、言われなければ解らなかったのだろう。
そのせいでレドが、捕らわれた。

【俺は術者の中でも上級者だ。^{ハイ・クラス} アナタに負けるとは思えません。】
きつぱりと宣告されなくても、ディーナは薄々感じ取っていた。
今、この場を支配しているのはどちらかくらい、イヤでも分かる。
【ですが、試すだけ試してみますか？俺が。結果を解いたらどうなるか】

脅しだった。

戻らねば、次々と獣を従えると言っているのだ。
レドのように生きた屍にすると。

(レド。どうしているのだろうか？)

俯いて抱えたクッションに涙を落とし始めたディーナに、ルゼは
声音を落とす。

「怒っているわよね。当然か。私に対してもそうだろうけど。
フィルガはね、バカだから。そういう方法しか考えられな
ったのよ」

ルゼも、クッションを胸に抱える。

「アナタに立ち去られたくないばかりに、おバカな行動に出ちゃ
ったのよ。ごめんね」

ディーナはただ、ルゼの言葉に耳を傾けていた。
顔を上げず涙を流したままで、何の反応も示さなかったけれど。
聴いていた。

「でも、まあ、何はともあれ。せめて食事くらいは摂ってよ？」

ディーナはあれから、ほとんど何も口にしていなかった。

* あえて買った不興（後書き）

結局はオイシイ所を持っていかれているフィルガです。ディーナの中で彼はものすごく、人でなしみたいなことになってますね。ディーナにとって、かなりな禁忌なわけです、聖句は。フィルガはがんばって、挽回して行く予定です。（しばらくヘタレですけどね）

*** 身のほど知らずの宣言（前書き）**

やっと話せたというのに、ディーナからは宣戦布告としかとれない態度で臨まれています。

* 身のほど知らずの宣言

「さあ、」

ルゼに促されたディーナが一步、進み出て真向かう。

フィルガはといえば、内心何を言われるやらと、緊張していた。

こうやって彼女と話をするのは、三日ぶりなのだ。

三日。ルゼの仲介が無ければ、確実にもっと長引いていたと思われる。

それを考えると、三日もけっして長い時間ではないのかもしれないが……。

待ちくたびれて消耗するのには、充分すぎる長さだった。

「……私」

ディーナの空色の瞳が、ひととフィルガを見据える。

「フィルガ殿を凌ぐ能力者になるから。なつて、みせるから！」

さんざん涙を流したらしい目元は、やや腫れぼったいようだが、その瞳の輝きは強い。

「……聖句の、ですか？」

「ううん。聖句の力をものともせず^{かいじゅつ}に覆す、解術の能力とやらを心得るわ。フィルガ殿のやり方とは別口だけど、聖句を完全に否定してしまえるのならば。打ち負かした事になるでしょうよ」

「宣戦布告ですか」

「そうよ」

それ以外なんだっていいのかとでも言いた気に、ディーナは答えた。

フィルガに人差し指を突き付けて、忌々しそくに宣言は続く。

「フィルガ殿が獣を聖句で従えるというならば、私は片っ端から解

術を施す」

（一体、ディーナに何を吹き込んだのだ？）

付き添い立ち会っていたルゼは、いつの間にやら扉の前に移動していた。

すでに取っ手に手を掛けている。

フィルガの視線に気がつく、手を軽く振りながら退出して行った。

がんばってね

声は出さずに、唇だけで形作って伝えられた。

何を努力しろというのか。あの人は。

ルゼの態度から察するに、自分で直接訊けということだろうが・・。

「それで？どうやって、修得するおつもりなのですか？」

「そんなの！内緒に決まってるじゃない！」

ディーナは指を下ろし、両拳を腰に当てて胸を張って答える。

はったりかと思っただが、どうやら策はあるらしい。

「それは楽しみだ。もしそれを成し遂げたのならば、貴女はシーラをも超えたことになる」

「何でここでシーラが出てくるワケ？」

ディーナは不愉快極まりないといった調子で、己の左肩にかかる赤毛をかき上げた。

軽蔑のこもった目で流し見ると、フィルガに背を向ける。

かき上げた髪から乱暴に手を引き抜いたせい、指先には赤い髪がからまっていた。

「この俺に敵う最強の術者は、今の所あの人……だけですから」

ルゼに続こうとしたその細い後姿に声を掛けると、聞き捨てならなかったらしいディーナが叫んだ。勢い良く、向き直るとまた指差す。

「呆れた！？フィルガ殿、一体いくつの時の話よ！？シーラとは子供の時分から、会ってなかったのでしょう？」

「まあ、そうですね。確か……初めてあの人に挑んだのが、五つでしたね」

フィルガは五つ、と答えたのと同時に、右手をディーナに開いて見せた。

「五つ！？まさか、そんな幼い頃から術に親しんでいたの？」

ディーナもつられてか、左手を確かめるかのように開いて、フィルガに見せた。

「そのまさかですよ」

「それから何年たっているのよ」

「十七年ですね」

「~~~~~五歳の子供の頃と今は、能力値は一緒にならないでしょう。」

第一いない人間と、どうやって手合わせできたって言う訳？」

「直接はもちろん、ありません。ですが、間接的に。彼女の施した術と対決して、勝った試しが未だにありませんから」

「なに、それ……」

ディーナは言葉を探すが見つからないらしく、瞬きを繰り返している。

「……フィルガ殿。何か、話がずれた気がする。私も変なところに驚いて、食い付くのが悪いんだけど」

「ん、まあ、確かに。アナタ、俺の事に関しても何も知らなさ

過ぎるんですよ。

俺の実力の程を、測れずにいるとしか思えない発言ですしね」
アレだけ目の当たりにしておいて、とも付け加える。

今まで割りと下出に出ていたフィルガだったが、遠慮なく言葉を投げる。

別にフィルガは怒ってなどいない。

一術者として、意見を述べて注意を促しているのだ。

軽々しく術者として渡り合うなどは、ディーナには口にしてほしくは無かった。

（俺にだけじゃ済まされない。この人は、ところかまわず受けて立つタイプだから）

そんな性分を見越して、彼女の先々を思うと諫めて欲しいと危ぶんでしまうのだ。

ディーナは流石に軽はずみだったのかと、内省しているらしく唇を引き結んでいる。

ディーナの途惑う表情がおかしくて、つい、吹き出してしまいそうになった。

が、堪えて出来るだけ厳かに尋ねた。

「どうです？それでも貴女は術者の一人として、名乗りを上げるおつもりですか」

「積んでる経験が違うから、敵うもんかって言いたいよね？」

「ええ。身の程知らずもいいところですね」

フィルガは腕を組んで、ディーナを見下ろす。

彼女のこういう無鉄砲さは嫌いじゃない。むしろ、自分にとっては好ましい。

だが、これは厳しく咎めずにはいられない領域の話だった。

「それでも、私は名乗りを上げる。引き下がるわけ、ないじゃない！」

きっぱりと言い放つ、ディーナの迷いの無さの現われか。

彼女のいで立つ存在そのものが、鮮やかに感じられて目を細めた。何か眩しいものに触れたのは否めない。だが、それはため息尽きたいものでもあるのだ。

そのまま、フィルガの眉根は寄っていく。

「……どうぞ、好きに。受けて立って差し上げますよ」
やっぱり彼女はそう来るだろうな、という予想通りの答えをはじき出した。

「アナタはわが身など、かわいいとも思わない性質タチのようだから、最初に言っておきます。俺は自分を打ち負かそうとする者に、手加減できません。まあ、それも今のアナタのレベルでは、随分先の話でしょうけどね」

フィルガは小ばかにしたように、ディーナに告げた。

「わかったわ。フィルガ殿。肝に銘じておく」

それでもディーナは真剣に受け取ったらしく、厳かに頷いて見せた。

空色の双眸の輝きは増して見えるのには、内心ため息をつく。

これから先が、思いやられると言っものだろう。

一応脅しのつもりだったのだが、ディーナは余計に闘争心が煽られただけのようだ。

やはり彼女は、自分を大事にしよう等とは考えられないタイプのようだ。

レドを盾に取ったとき、どれ程までに有効か。そして嫌われるか。

フィルガは察していたから、実行に移した。

思った通り彼女の取り乱しようは、見ていられないほど、痛々しかった。

自分よりも他者を庇う、その性質。

気取られないようになどと、配慮されることもなく、むき出しだ。

「デイナーさん……」

頼むから、大人しくしていて下さい。そう願わずにはいられない。

「なに？」

「俺は何もアナタを打ち負かしたり、屈服させたいわけじゃない」

「そうね。知ってる。でも、結果として私を自分のいい様にしたいんじゃない。

保護の名の下に、隔離されたままなのも納得行かないから。フィルガ殿に挑むって言ってるのよ」

「アナタの身の安全のためなのです。祖母から話を聞きましたか？」

「うん。だからね、私フィルガ殿の庇護がなくても大丈夫なようになるわ」

「護られているばかりは、我慢なりませんか？何故です？」

「何故って言われても。どうしても、としか言葉が見つからないよ」

デイナーのその儚げな体つきからは、とても想像出来ないほど、彼女は闘志を宿している。

フィルガの設ける枠組みなどで、はめられてなるものか。

そう全身で訴えて止まないのだ。

お互いのことをそういえば、まだよく知らない。

そのまままで今日まで来たから、最初の印象やら思い込みやらで決め付けてしまった部分も否めない。

フィルガは改めて、目の前の少女を賞賛を込めて見つめた。
だから、提案する。

「どうでしょう、ディーナさん。敵の本質をもっと良く、知りたいとは思いませんか？」

そう言いながら、フィルガは椅子を勧めた。

ディーナは一瞬、体を強張らせる。

「……………」

上目遣いで警戒され、フィルガはやりわりと促した。

「別に何も訊きたくなければ、それで構いませんから。ただ、お茶でもいかがです？」

甘いものと一緒に「

「……………レドは？」

「どうぞ、ディーナさん」

ディーナに警戒を解いてほしくて、この上なく穏やかな口調を心がけた。

努力の甲斐あつてか、ディーナはおずおずとフィルガに歩み寄ってくれた。

ほっと胸を撫で下ろす反面、獣ばかりを気に掛ける少女に内心は焦れていたが。

フィルガは従え、意識奪ったはずのレドに、また勝ち誇られている気がしてならない。

*** 身のほど知らずの宣言（後書き）**

フィルガの思うような、護られるべきか弱い女性ではあるうとしな
いデイナー。まあ、実際身のほど知らずです。なんでわかんないの
か、というフィルガの無意識のいら立ちすら感じ取って、ますます
意固地になってます。フィルガはとことん、デイナーには甘いので
軽い説教ですんですが。お互い主張しあって、譲らないタイプで
すね。しょうもない。気の済むまで、ケンカさせていきます

第四章 * 置き去った記憶 (前書き)

フィルガに対するとき嫌に威勢の良かったディーナですが、一人になるとまた勝手が違うようです。

眠れないのか、眠りたくないのか……。

第四章 * 置き去った記憶

ディーナはこの所、寝つきが悪い。おまけに、眠りも浅い。無理に眠ろうとして、床に入っても次から次へと問題が浮かび上がってくるのだ。

考えても仕方が無い、対処のしようのない問題に煩うのは精神を^{しづ}疲労させる。

わかつてはいるが、振り払えないのだ。

最近ではあきらめて、本格的に睡魔に抗えなくなるまで、横にならない事になっている。

今夜もこうして膝を抱え込み、床に直に腰下ろしていた。

背はベッドのへりに預けて、窓から射し込む月明かりを眺め見ている。

（月がキレイだな・・・。）

視線は月へと預けたまま、ディーナはそのままの体勢で、横に倒れこんだ。

床といっても織物が敷かれているので、冷たさは感じない。

むしろベッドのようにやわらか過ぎないので、心地良く思える。

背に当てていたクッションを胸に抱えて、顔を押し当てると、両足を交互にバタつかせてみた。

今のディーナの心境はまさにこの、体勢そのままだった。

じたばたもがいて、抗って。必死に水底から、顔を出そうとしている。

フィルガに宣言するに至る前、ディーナは丸二日間荒み切っていた。

近寄ろうとするフィルガに殺気みなぎらせて威嚇し続け、いい加

減くたびれ始めた三日目にルゼが来た。

ディーナはルゼに対しては、威嚇する気にはなれなかった。犯しがたい雰囲気をもとうルゼには、とてもじゃないが敵わない。そんな気がして、無礼を働く気も失せるというものだ。

不思議なほどすんなりと。

他人を受け入れるし、また受け入れられる。

そういう器の大きさに、ディーナは密かに敬意を払っている。

そんなルゼとの会話は、けっして不快ではなかった。

むしろ、心地よい安心感に癒されて、フィルガと向き合ってみようかと思わせてくれたのに……。

こうして一人きりになると、まるで様子が違うのだ。

ディーナは繰り返す、繰り返す、ルゼの言葉をなぞり続けては、こうして考え込んでしまう。

話の内容は確かに重たいものだった。

それをルゼはさらりと語ってのけ、何の湿り気も感じさせなかった。

そのせいか。その場では今ひとつ、浸透しきっていなかったらしい。

最近になってようやく到達したものが、安眠を奪うほど厄介なものだったとは。

ディーナはクッションを抱えなおして、体を丸めた。

そうするとヒラついた寝間着の裾に、つま先がちょうど隠れて暖かい。

少し冷えてきた。

でも、ベッドに移動したくない。せつかく、やっと眠たくなって

きたのだ。

動くなんて面倒な事をして、眠気を逃したくは無い。

ようやくまどろみ始めると、無意識にあの日のやり取りが蘇ってきた。

（いい加減、自分もしつこいな……。）

眠気が優勢な今、頭を振って追い払う気力もないので、浮かぶままに任せる。

* * *

『私としても、ディーナ。貴女を手放す気なんてないの。私情が入りすぎているのも認めるわ。それでも立場上、貴女はその能力故に争いの原因になると判断します。』

だからフィルガに、ディーナから目を離すなと命じたのは私。貴女の身柄はこのジャスリート家が預かる。

『……軟禁します』

ルゼはディーナの涙に時折り、母親の部分が顔を覗かせてしまうらしく、今ひとつ領主に徹しきれない様子だった。

口調にもそれが表れていて、ぎこちなかった。

『貴女を手に入れば、獣たちをも手に入れたも同じ事。かつて、シーラも晒された』

危険です。私としては、それを危惧しているわ。……フィルガもそう考えているの』

『……』

そうやって一生、自分から自由を奪う気にいるのか。

危険だから、外に出さない？

ディーナはルゼの言葉を消化しようと、瞬きを忙しく繰り返した。

瞬くたび涙が滴って、払われる。

ディーナの不満を予測していたのだろう。

ルゼは低く、静かに付け加えた。

『ディーナちゃん、術者をものとし^{すべ}ない術を心得るのならば。

話は別よ。私達も対処の仕方を変えるけどね。

誰も貴女に指図することが出来ず、その能力を無理に利用されることも無ければ、貴女から自由を奪う理由などないわ』

『……………』

ルゼもフィルガも口調は違っても、言わんとしている事は一緒のようだ。

【…………俺に付け入られるスキが……………。】

（隙があるとか。言ってくれたわよね）

フィルガの言葉が蘇り、また小さく腹が立つてきた。

認めるのも癪に障るが、図星をさされたから余計にだ。

ディーナ自身には見えていなくても、他者からは違って見えてい^るらしい。

改めて自分の甘さと、獣たちに対する配慮の欠如を思い知らされたのだ。

指摘されなければ、わが身を省みようとするしなかっただろうから、情けない。

ルゼの言葉に、ディーナは選択を迫られたものと受け取った。

保護という名の隔離を振り払うためにも、これからの在り方を選び行動するしかない。

（他の術者をものとし^{ない}、その方法は？）

ディーナが色々と思いをめぐらせている横で、ルゼはクッションを真上に放つては、受け止めていた。

何回か繰り返し、放り上げながら呟く。

『ごめんね』

『……っ、いいえ……』

突然だったので、反応が遅れた。考え中だったので、なおさらだ。

『別にそのことを抜きにしても、私もディーナに居て欲しいの。ただ、単純に』

受け止めたクッションを胸に抱き、ルゼはディーナを覗き込むように、首を傾げた。

常緑の瞳は真っ直ぐにディーナを見つめている。

ルゼは視線を外さないで、会話をしようと心がけているようだ。

それは初めて会った時から、ずっとだった。

『怪しいと思わないのですか？』

『何が？』

『私からです』

『思わないわね』

ルゼもそうだが、フィルガもだ。

あっさりとディーナを受け入れる、そんな二人に疑問を感じていたので尋ねたのだが。

『どうしてですか？』

『どうして、と言われてもねえ。それこそ、どうしてそんな事訊くの？』

『私自身が自分で、怪しいと思ってますから。この能力だって、いつのまに私……どうして呼べる……ように……？』

（あ、れ？ そうだ。私、どうして……？）

言いながらだんだん独り言のようになってしまい、自分自身に問う形になってしまった。

――呼べばいい。そう、確か声が聞こえたのだった。

(誰、の声……?)

『私、どうして獣たちと、いつから？私、どうして、橋を渡ってきた……？』

次々説明のつかない事柄に思い当たって、ディーナは不安になってルゼを見た。

ルゼはそんなディーナに、暖かな笑顔を向け続けてくれた。だいじょうぶ、だいじょうぶ、だからね。

そういつて、ディーナの手を握り幼子するように、頭を撫でつけてくれた。

『ああーあ、ディーナちゃん……。ついに自分の存在に疑問を持ち始めちゃったかあ！……。もう少しそのままで、居させてあげたかったのだけれど。もう、限界かもね』

一体、何を言っているのか。混乱したディーナには、何の事かさっぱり見当もつかない。

『能力がどうの、どこから来たのだの、ディーナ。気に病む必要なんて、ないのよ？』

少なくとも私もフィルガも、気になんてしちゃいないの。

貴女が来てくれただけで嬉しいのだから』

* * *

試しに訊いてみるわね、とルゼは優しく気遣わしげに微笑んだ。答える必要は無いから、とも、付け加えられた。

『ディーナ。貴女は、橋を渡る前は何処にいたの？』

わからない。

白紙だった。全くの空白。

訊かれて初めて、答えを持たない自分に気がついた有様だった。はつきり言い切れるのは、名前だけ。

年齢だって、最初見た感じこれくらいと言われたままを、そう
だとしてしまった。

自分で自分に対して、何の疑問を持たないでいた自体がどうかしている。

『あの子もそうだった。もっともあの子は、自分の名前すら知らなかったわよ』

覚えていたのはただ、ひとつ。

『シアラータ。私の大切な方。それだけよ』

それ以外は全て、あの橋の向こう、霧の彼方に置き去って来たのだ。

名前以外の記憶がない。

それでも自分はディーナだと事あるごとに、言い張ってみてもあまりに弱すぎる叫びでしかなかったのも、頷ける。

ディーナの主張が尊重されない訳だ。

（それでも。私は、ディーナだ。それ以外の何者でもない
・・・）

ディーナはまどろみながら、必死ですがった。

目覚めて、それすら忘れてしまうのが怖いと思った。

忘れたことすら、無かったことにしてしまうかもしれない。

そんな自分が怖いから眠りに抗うのだと、今更ながら自覚した。

第四章 * 置き去った記憶 (後書き)

自分に疑問を持たないっていうのは、なかなかスゴイことだと思いませんか。なんにつけても。

ディーナちよつと、珍しく弱気です。

彼女の唯一のアイデンティティーは、名前だけなのにやっとながつかうたのですから、当然かと。

第四章までできました。

やっとな、契約について入りますので、よろしくおねがいします。

*** 契約の血筋（前書き）**

二人とも同じ月を愛でながら、考えているのはお互いの事のようにです。

* 契約の血筋

窓を開け放ち、夜風を部屋に招く。

浅く掛けた椅子に、思い切り背を持たせかけて月を見上げていた。足を投げ出して交差させ、踵でバランスを保っている。

傍らに付き添うように命じた獣は、月光に照らされて、毛並みの先にほの青く月影を蓄えているかのようだ。

意志奪われているはずの白い獣だが、眼差しは月の方に向けている。

なんの感情も表していない瞳。

だからこそ良く澄み渡り、静けさを湛えた湖面のように、月の姿を受け止めていた。

どんな嵐にも、さざ波立つことの無い湖。

神秘的だが、ひどく不自然に歪められた作為の現われだろう。

「レド。もう、休め」

頭を軽くたたいてやる。

獣は言われるままに身を横たえると、瞼を閉じた。

フィルガは月を眺めながら、醸造酒の注がれた杯を手にとった。

そこにも月影が映りこんでいる。

飲み干し、代わりを注ぐ。

すぐに口は付けずに、そのままにして月の光に晒す。

ほんのささやかだが、月の持つ力を酒に転写し、自分自身に取り込もうというわけだ。

己の能力を伸ばし、かつ常に最高の状態を保つためには、こうした普段からの努力が何よりも物を言う。

フィルガにとってそうした事の積み重ねは、努力というよりも既に習慣になっている。

誰かさんに宣戦布告をされて、特別に用心して備えているからではない。

フィルガも能力者の一人だ。誰に言われずとも、上級だと自負している。

おごりではなく、事実としての自覚だ。

だからこそ、相手の能力の優劣には予測がつく。

（ディーナ………）

アレは、恵まれているのは能力だけではない。

言葉にするにはあやふやだが、しいていうなら“魅力”だ。

フィルガとはまた、異なる種類の力の宿り主だ。

そしてそれは、フィルガには無い力だ。

ただの石ところなのか。宝石の原石なのか。……ただのまがい物でしかないのか。

目利きである自分でも、見極めは難しい。

頭で理解して、能力を使うタイプでは無いのはわかる。

自然と体が動くタイプだろう。

フィルガの経験上、もっとも厄介な“天才”型だと思う。

天から与えられた才能を持つもの。

その能力は計り知れないほど、大きなものである事が多い。

（あの人にその手綱が操れるだろうか？）

心配はそこだ。多分今のレベルでは、引きずりまわされるのがオチだろう。

フィルガは足を組みなおし、二杯目に手を伸ばす。

もっじきまた、月が満ちる。

満ち行く月は力を漲らせてくれ、欠け行く月は荒ぶる力を宥めてくれる。

どちらかに偏っても、上手くないものだ。

次の満月は、年が明けてから数えて四度目となる。

そろそろ領地内のあちこちで、本格的に水路に水を引き始める頃だ。

だからだろう。耳を澄ませば、遠くからカエルたちの合唱が届いて来る。

冬を越し、温む水と風で目を覚まし、それを喜ぶ歌声だ。

（もうそんなに、日が経っているのか）

改めて振り返ってみる。

ディーナに初めて出会ったあの日から、また再び月が満ちようとしている。

新年を迎えてから数えて三度目の満月が、昇る日の“早朝”。

その日はいつも昔から、必ず霧が深く立ち込めるのだ。

* * *

ディーナは床に横になりながら、しつこく睡魔に抵抗を試みている。

（こんなに月がキレイなのに、もっと眺めていなきやもつたいたい・
・・・・・・・・）

それにまん丸に近い月を見つめっていると、なんだか体の深い部分から力がわいて来る。

（ああ、ほんとに）

きれい。ディーナは瞼の裏に月を閉じ込めるかのように、ゆっくりと瞳を閉じて行く。

* * * *

『橋のたもとで待つ。条件が満たされていれば、望む者を得られる』

ただし。

叶うのは一生に一度。一人きり、だ。

（望む者？）

ディーナはほづけた様に、その言葉の意味するところを想って視線をさ迷わせた。

『だからね。子宝に恵まれなかった私達夫婦は、契約が本当かどうか。』

試してみようと思い立ったの』

ただの古い言い伝え。そう、長いこと忘れ去られていた事柄だった。

それでも、子供が欲しくても叶わないでいた二人には、縋り付ける物になら何だった

縋り付きたかったのだ。

ルゼはジャスリート家の一人娘で、亡き夫は婿養子に入った形だったという。

『夫婦仲は悪くは無かった。むしろ、良かったと思う』

ルゼの口にする言葉はすべて過去に対するもので、一つ一つ思い出を揺さぶり起こしながら、話しているのだと思わせる調子だった。『私も子供の頃に、母に聞かされてはいたけれど。ただのおとぎ話だと忘れていたわ。』

「…………お前のおじいさんはね、橋の向こうからやって来たそれは美しい貴婦人を花嫁としてお迎えになったのよ、なんて…………ねえ？」

（橋の向こう）

ディーナは一瞬、心臓が跳ね上がった。痛みを覚えたほどだ。ルゼは続けた。

『色々調べて、古い資料を漁ってみたら……。どうやら私の祖母に当たる女性は、』

本当に祖父が契約に従って迎えた花嫁だったらしいって、わかったの。』

二人ともルゼが生まれるよりも前に亡くなっていたから、一面識も無い。

話が真実かどうか尋ねたいが、確かめようも無い。話を語り伝えてくれた両親も、既に他界していた。

それこそ。二人ともこそが、おとぎ話の主人公のようではないか。

契約とやらは何なのだろう？

条件が満たされれば、望んだ者を得られるなんて。後でとんでもない見返りを、予想も出来ない何者かに要求されやしないだろうか？

ルゼは条件を満たしているが、ためらったそうだ。

『ジャスリート家の血筋であること』

それは絶対条件だと、祖父の記録にあった。

契約は明らかに、未知なる世界と縁続きになるよう図られたもの。ジャスリート家の血筋を護り、強めるために古から交わされたのであろう“約束”。

ルゼ自身にもその血が流れている。

そう考えたら、大丈夫だと思えてきた。

無礼を働くわけでもないのなら、縁ある者に仇なすとは思えない。ジャスリート家の者は、義理堅い気質なのだ。少なくとも自分はずだ。だったらあちら側とやらも、同じであっていいはずだ。

そう確信して、ルゼは夫と連れ立ってあの橋へと向かった。

ディーナも渡って来た、あの橋だ。

新年から数えて、三度目の満月が昇る日の明け方には、たもとに着いて待っていたと言う。

深い霧のせいで、向こう岸に何があるのか全く見えなかった。

その中で二人は手を繋いで、一言も言葉交わすことなく、ただ念じ続けた。

橋の向こうがわ一点をただ、見つめながら……。

（二人の愛しい、可愛らしい小さな女の子）

下さい、下さい、下さい、どうか、やって来て下さい。

ただそう、祈り続けた。

『結果はご存知の通り』

ルゼは懐かしそうに目を細めて、ディーナに微笑んだ。
本当に幼い女の子が、一人で橋を渡って来てくれたのだ。
『嬉しかった。本当に嬉しかった……』
それがシーラだった。

二人は女の子を正式に引き取り、養女として迎えた。

実は夫の隠し子で、娘の母親が他界したのでそうしたと、吹聴ま
でした。

もちろん作り話だったが、その方が周りも納得しやすいだろうと
考えての事だ。

確かに。

誰も真実を告げられても、そうそう信じられないだろう。

橋の向こう側からやって来た子供？……だがそれは、デ
イーナも同じなのだ。

【ねえ、教えて。あなたは橋を渡る前は、どこにいたの？】

ルゼはかつて同じ質問を、シーラにもしたそうだ。

だからディーナが答えられないのも、とっくに予測済みだったら
しい。

『そんな事はいした問題じゃないわ。だって、望む通りの子が来
てくれたんだもの』

そういつてルゼは屈託無く、笑った。

* * * *

ディーナを橋のもとで出迎えてくれたのは、フィルガだ。

じゃあ、自分はフィルガの“生涯ただ一人の・望む者”なのだろうか。

（フィルガ殿。アンタの望みは）

私・・・じゃないでしょう？

ディーナのその質問はまだ、飲み込んだまま・・・・・・・・己の胸の内にある。

*** 契約の血筋（後書き）**

ディーナ、色々と情報を与えられて混乱中です。

状況説明されても余計に混乱するから、ルゼもフィルガもなんとなく、あやふやにしてくれていたのです。しかし、ディーナ引つかかってます。フィルガが望むのは、シーラじゃないの？と。

*** 朝のひととき（前書き）**

ディーナ、塔のてっぺんで囚われてる気分満喫中（？）です。

* 朝のひととき

ディーナはほぼ毎日のように、館中をくまなく歩き回ることになっている。

少しでも体を鈍らせたくない。館に居る分なら自由にして構わないそうだから、せいぜい色々見て回ろうとも思う。

それより何より。
間取りを頭の中に入れておき、いざという時に備えるのに越したことは無い。

ディーナは早くから目覚めてしまったので、こうして塔に上って眼下に広がる風景を眺めていた。

(いざという時かぁ……………)

ディーナは、朝日を受けて瞳をすがめる。寝不足続きの瞳には、痛いほど眩しい。

(……………来るかな)

自分はこの期に及んでまだ、隙あらば逃出す気まんまんらしい。もちろんレドも一緒にだ。
そう希望を持つ事で、いくらか心が安らぐ。

館自体が小高い丘の上に立っているおかげで、とても見晴らしが良いのだ。

ディーナは館の向こう、彼方から吹き付けてくる向かい風を受けて、目を細めた。

館の周辺には建物らしきものはこれといって見当たらず、ひたす

らに草原が続く。

時折り木がまばらに生えているくらいだ。
その草地を下り行くと、川にぶつかる。

．．．．．そこにはあの橋を渡るしか、向こう側には行けない。
他に道はない。

こうして遠くから眺めて見ると、あんなに呆気ないほど小さな橋
だったろうかと思えた。

すぐさま渡り切れてしまえるような代物で無かった気がするのは、
自分が霧に巻かれていたせいだろうか？

(．．．．．)

ディーナは自分の胸元より少しばかり高い石組みから、身を乗り
出す。

川を越えてからは、畑が見えた。

所々小屋らしき物が点在していて、たまに農夫が出入りしている
のも見える。

それを通り越して行くと、赤い屋根が密集した街並みとぶつかる。
朝日の昇る方角。

自分の髪とお揃いの街は、ぜひ訪れてみたいものだ。

その街並みの最果てらしき所に、突出したまる天井の建物がある。
そのてっぺんには球状の何かが見えた。

完全な球形ではない様だが、遠すぎてよくわからない。

ただそれは、朝日を背に受けて眩しい輝きを放っている。

こんなにも遠く離れたディーナの瞳すら射るような、艶やかさで
迫ってくるのだ。

（あそこに住む人たちは知っているのかな？）

その輝きが、ジャスリート家の塔にまで届いていると・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・ねえ。あの、円い光っているのが見える建物は、なあに？」

ディーナは振り返らずに、質問した。
背後にある、いつ声を掛けようかとタイミングを窺っている気配に向かってだ。

「・・・・・・・・神殿ですよ。おはようございます、ディーナさん」
気がついていましたか、すみません、驚かせたくはなかったので・・・・・・・・。

気配の主は色々と付け加えながら近づき、ディーナの真横に立つ。

ふう、とディーナは小さく息をつき、踵を下ろした。

爪先立ちで乗り出していたので、少しばかりくたびれたのだ。

「おはよう、ゴザイマス・・・・フィルガどの」

体勢を楽に整えてから、ディーナはたどたどしく挨拶を返した。
腕の付け根がしびれた。

そのまま石壁に両手だけ預けて、しゃがみこんで背中を伸ばす。
すぐに立ち上がると、フィルガを見上げる。

「しん、でん？カミサマをお祭しているところ？」

「まあ、そうですね」

「ふうん。行った事あるの？」

「何度か」

「・・・・・・・・・・」

いつもはディーナが何か尋ねれば、饒舌になる彼が齒切れが悪い。

「なにか、あるんだね」

「・・・・・・・・女の勘とかいうヤツですか。」

「フィルガ殿。そんな何で解るんですか、みたいな顔しなくても」
ディーナは呆れてしまう。

「嫌そうに答えるんだもん。そりゃ、わかるよ？」

「・・・・・・・・下りませんか、ディーナさん。風が強い。冷えますから」
「言いたくない？」

「詳しくは朝食の席でどうですか」

「欲しくないから要らないって、散々言ってるのに」

ディーナは朝と昼、食事は一時にまとめてで充分だと訴えているのだが、既に何度も却下されている。

「アナタもうちよつと、目方増やした方がいいですよ」

「どうして？」

「女性は少々ふくよかな方が。いいでしょう？」

「そうなの？どうして？」

ディーナは風にさらわれてなびく髪を押さえながら、小首をかしげた。

「・・・・・・・・それを俺に言わせますか」

「????」

「いや、まあ。もうちよつと、成長させてください」

「・・・・・・・・よく、わからないけど。まあ、わかった。フィルガ殿って・
・・」

思わず吹き出してしまう。

「俺が？」

「お父さんみたいね」

釣られてか笑顔を見せていたフィルガの表情が、いつぽんで曇った。

何か機嫌を損ねる一言だったらしい。

あわてて言い直す。

「ゴメン。お父さんはないよね。言い直す。お兄さんみたいね？」

「・・・・・・もう、下りますよディーナさん」

フィルガの眉根は寄ったままだ。ディーナの肩に手を回すと、強引に歩き出す。

「・・・・・・ええ・・・・・・」

もう少しここに居たかったのに。小さく抗議の声を上げたが、構わずフィルガは進む。

お父さんもお兄さんも、やましい気持ちを含めて、成長させるとかいいませんよ。

とか、なんとか。ぶつくさぶつくさ言っているようだったが、自分よりも頭二つ分近く高い所から言われているのと、声が幾らか小さいのでよく聴き取れない。

（追求するとまた色々いわれそうだなあ・・・・・・。）

ぼんやりと、そう判断して黙っていた。

ディーナはまだ外に気を取られているから余計に、上の空であまり身を入れて聞いてもいなかった。

* * *

自分が背を向けた世界に想いをめぐらせる。

まだ目にしたことのない街並み、まだ出会っていないこれから出会う人たち。

なんだかわくわくする。

そのためにも、早く何とかしなくてはと思う。

何とか。

術者たちの力に干渉されない。あるいは覆してしまう。

そういった能力を身につけねば、レドのような獣を増やしかねない。

フィルガに言われた事は、自分を引き止めて置くための脅しでは済まない。

悔しいが一理ある意見だ。

自分はフィルガの結界に守護されている。

加えてジャスリート家の庇護の下にあるお蔭で、フィルガ以外の術者とはまだ渡り合った事がない。

皆が皆、ディーナの力を利用しようとするだろうか？

そうとも限らないとするのは甘いだろうか。多分フィルガはそう言うだろう。

だからといって言われるがままに、外は危険だから出てはなるまいと、自分に制約をくれてやる気などないのだ。

周りがどうでるか。

それは自分で体験してから、答えを出そう。

そのためにも早いところ、能力を物にしてやる。

そうだ。自分はあるの街を目指して、駆け抜けて行こう。

その時はレドも一緒だ。

ここで風に吹かれたおかげで、つまらない迷いまで吹き飛ばしてもらえた気がした。

* * *

「・・・っね、フィルガ殿！」
「何ですか？」

あまり気乗りしない食事を取りながら、何か考え込んでいたらしいディーナが突然声を上げた。

「本当に私のお兄さん、っていう可能性は？」

「っ・・・なっ！」

「なるほどねえ。それもありかしらね」

フィルガはむせ、ルゼは冷静に答えた。

* 朝のひととき（後書き）

・・・相変らず、今ひとつかみ合わないのはディーナがまだちよつとそつち方面（どつちだ。）が、幼いせいです。フィルガのセクハラ発言に気がついていません。良かったね、フィルガ。良くないか。

しまいには兄呼ばわりですよ。

どれだけ（彼にとって）長い道のりになるか、容易にに想像できません。

*** 契約者の心得（前書き）**

フィルガ、ディーナが可愛いのですが……。
あんまり愛情押し付けられないよう（独りよがりなので）努力中。

* 契約者の心得

ジャースリート家の先祖は誰と、一体どんな契約を取り交わしたのだろう。

何の目的あつての事なのか。

* * *

フィルガはディーナのために、資料室の鍵を開けた。ルゼの言いつけたつた。

契約の話を知ったディーナはそういったものの記録書があると、ルゼから聞かされたらしく目を通しておきたいと頼んできたのだ。それはもちろんルゼにであつて、自分はただこうして案内役を任されただけだ。

ディーナにとって資料室はあまり近づきたくない場所らしく、目当てのものはここに降りねばないと告げられると、顔を強張らせた。しかも自分が一緒とあつて、ますます身構えているらしくほとんど無言のままだ。

まあ、原因は自分に覚えがあるから、彼女が身構えるのも無理はないと思う。

「ディーナさん、手を」

先に段差を二歩降りて振り返り、どうぞと手を差し伸べる。

ディーナは唇を真横に引き結び、ややあつてから小さく頭^{かぶり}を振つた。

やれやれと内心ため息をつきながら、フィルガは無言のままもう一度手を伸ばし促した。

「・・・・・・・・・・」

なにやら緊張した空気である。お互い、相手の出方を見守っている。

ここで手を取ればまた、自分が手を離さなくなる可能性を読み取っての事だろう。

隙あらば触れたがるフィルガに、デイナーは困惑し始めているのだ。

恐ろしく無防備なくせに、本能では感じとっているらしい。

それが目の前の男の手てを取らせるのを、ためらわせるのだろう。

「デイナーさん？」

あくまでもにこやかに、なおもうながす。親切面の仮面を被ってやさしく。

デイナーからは先程“兄”のようだと言われてしまった。いや、最初は“父”だった。

ようは彼女にとつての、安全な存在を演じてやればいいのだ。

デイナーにはもうしばらくは、「妻に」などと口にしない方がいいのは明らかだ。

彼女は確かに、フィルガの望んだ契約に従って橋を渡って来てくれた少女のハズなのだが。それなのに、デイナーからは全面拒否されている。

怯えさせてしまい、また逃出そうとされては敵わない。

フィルガの望んだ生涯ただの一人は、「妹」などという存在ではない。

だが、まあしばらくは兄責ぶるしか仕方がない。………しばらくは。

そう自分に忍耐強く言って聞かせる。

「………大丈夫。この服ならそんなに歩きにくくない、」

言いながらそろそろと一步を踏み出したデイナーだったが、早速踏み外してしまいバランスを崩してよろめいた。

「……」

フィルガは素早く彼女を抱きとめる。

体勢から遠慮している暇などなく、倒れこんできたディーナの身体をまるごと受け止める。

強くディーナの背と腰に腕を絡ませたのは一瞬で、すぐさま彼女の両腕の脇を固定して華奢な身体を持ち上げた。そのままフィルガはくるりと身を捻じらせて、ディーナを段差のない平地へと着地させてやる。

自分に起こった一連の出来事に、処理の追いつかないディーナはただただ目を見張ったまま固まっていた。

そうしていると瞳の大きさが強調されて、また違った印象で可愛らしい。いつもは縁取るまつげが豊か過ぎるせいで、いくらか目じりが下がり気味に、かつ気だるげに見えてしまうのだ。

ディーナの瞳が焦点を捉え始めたと同時に、フィルガは大げさなため息とともに素早く手を離れた。

「大丈夫、ですか？」

ディーナは大丈夫だと言ったが、どこがそうなのかという皮肉を込めての物言いだった。

「・・・・・・・・・・ありがとう」

「あまり、手間掛けさせないで下さいね」

「・・・・・・・・・・」

言葉なく申し訳無さそうに小さく頷くディーナに、フィルガはすぐさま手を離してやったことを軽く後悔していた。せつかく彼女がしおらしいのに、もったいない事をしたものだ。

紳士面で助けたフリをして、ディーナに身構えさせず触れられる機会チャンスだったのに。

内心の落胆がつついっという響きを持って、ディーナを責めていたことに気がつく。

「失言でした。違います。 “あまり心配させないで下さいね”です」

「心配？」

「アナタ、無茶をしますからね。何につけても」

「無茶なんてしてない」

悔しそうにドレスの裾を軽く両手でたくし上げながら、ディーナは上目遣いでフィルガを睨みつけてきた。しおらしさはとつくに何処かに吹っ飛んでいたらしい。

「まあ確かに。宣戦布告した相手に、借りなんか作りたくもないでしょうけれどね」

言いながらフィルガは、棚へと先に向かう。

この膨大な資料そして書籍の中から、目当てのものにたどり着くまでにディーナだけなら軽く一日費やす事になるだろう。

フィルガ自身、自分も目当ての物を探す　フリをしながら、背後でディーナの様子を窺う。

ディーナは新古を問わず、関連するものを片っ端からあたる気であるらしい。

棚から抜き取られ机にと置かれた書物は、どんどん積み重ねられていく。

当然だが、的がまだ絞りきれていないのだろう。

どこから手をつけてもいいのかすらわからない。見当もつかないならば、地道に全部一つずつ当たっていく気なのが伝わってくる。その根性は評価に値すると思う。

フィルガはディーナが爪先立ちになり、手を伸ばしているのですかさず代わりにとってやった。

「これですか？」

「うん。ありがとう」

女性には高すぎる棚だが、フィルガには何の問題もない。

ルゼは必要があったら、フィルガに言い付けて済みます。だからここには、踏み台は置かれていない。

祖母の狙いはそのあたりだろうか。

全くもってお気遣いどうも。

「デイナーさん。この辺も参考になると思いますよ。我が家の年表なのですが」

慣れた手つきで、フィルガは迷いなく資料を選び出す。

机に山と積まれた資料の横に、別にして置く。なだれが起きてしまいそうだったから。

「何で協力してくれるのよ」

デイナーは理解できないとでも言いたげな様子で、棚に手を掛けたまま振り返った。

「いけませんか」

「何か、素直に喜べません。フィルガ殿」

「俺は楽しみにしていると云ったでしょう」

「言っただね」

「アナタのやり方じゃ、あまりに効率が悪すぎて何年かかることやら……」

契約、獣、聖句、能力。何から手をつけていいのかすら、解らないのでは？」

デイナーの選んだ資料を見て、軽口を叩く。

「何さ。その通りですけどね。しかも私……。解らない事だらけだしね」

返された軽口に含まれた意味は、何も術者の基本知識について無知だと言っている訳ではないのを察する。

デイナーは橋を渡る前の記憶が無い。自分の事もだ。知っていることといえば、自分の名前だけ。そのことを最近自覚したとは、祖母から聞かされていた。

だがその事については、フィルガは一切触れないでおいだ。

橋を渡って来た者の記憶は皆偏っているから、何の疑問も持たないように。というのは、迎えるものの心得だとフィルガは教わっていたからだ。

そしてこちら側に馴染むまで、その存在が確実なものとなるまでは、あまり疑問を持たせないようにとも。

「やはりもう、気がついてしまいましたか」

「フィルガ殿も最初から、気がついていた？」

「ええ、まあ。 はい」

「そう」

ディーナは小さく微笑みかけながら、フィルガへと向き直る。

その儚い風情にフィルガは思わず、息を呑んだ。

何もかも諦めて受け入れたかのような、そういう笑み向けられたのはこれが初めてではない。

いやでも、幼かったあの頃の記憶が蘇る。

今こうして目の前にいる娘は、あの絵の中から抜け出てきたかのような。 そんな錯覚に目眩がした。

フィルガ殿？どうかした？

そんな呼びかけすら何処か遠くに感じながら、フィルガはディーナを見下ろしていた。

向かい合う彼女のちょうど肩先、少し離れた所に飾られた絵画の中の少女シーラ。

彼女もまた、同じ風情で微笑み掛けてくれている。

* * * *

腹は立っていたが、一応礼は言った。

教わった通りにドレスを摘み上げて、片足を後ろへ下げ膝を折る。

「あーりがとつ！」

妙な節を付けたので、ちっとも感謝の気持ちが感じられやしなかった。

対してフィルガも恭しく左手を胸に押し当てて、頭を下げる。

彼がやると様になっていて、白のシャツに上着を羽織っただけという軽装でも優雅に感じられた。

「どういたしまして。解らない事があつたらいつでもどうぞ。協力は惜しみませんよ」

からかい口調で嫌味を浴びせる。言いながら、仕事があるからと戻って行った。

（上級者の俺とじゃあ差がありすぎますから。記憶すら持たないアナタでは、あまりに不利では？）

どうして協力的なのかさつき問うて、あっさりと言われた。思い返してまたムカついた。

言い返せなかったこともあつて、さらに。

背を向けたフィルガを恨めしく見送る。すぐ、回廊を曲がって行ったので見えなくなった。足が長いせいか、歩くのも早いようだ。

背の高い人だと、改めて思った。

彼に抱きかかえられたことも、そういえばあつた。目線がいつもよりもずっと、ずっと高くて結構怖かった。

（だからか。フィルガ殿がいつも上から目線で物を言うのは）

フィルガは敬語でディーナと話すくせに、内容は全然敬ってなどいない。

しかも自分の名を敬称付けて呼ぶところがない。何でだろう。

資料室は暗いし冷えるからいけない。

親切にもそう言っ、て、フィルガは部屋まで資料を全部運んでくれたのだ。

その心配りは、一体何なのか。

（わかんないなあ、もう）

椅子に腰掛けて、テーブルに積まれた資料と向き合う。

そのほとんどが、フィルガの推薦の物だ。

ディーナに見せたくない資料があつて、それを選ばせないためのお勧めかもしれない。

そう邪推してもみたが、渡された資料をめくってみると、ディーナの欲する事についてちゃんと触れているようだ。

確かに立場も能力も、彼が優位に違いない。

ディーナごとき素人に手を貸したところで、己を越すとも思ひもしていない者の余裕の現われだ。

（……………がんばろう。今にみてるよ、フィルガ）

ディーナは意気込んで、資料をめくる。

*** 契約者の心得（後書き）**

可愛いのでかわいがっているつもり。そして、鈍いディーナにイラついてイジワル。

大人なんだか、子供なんだか。

彼は割りと教育者タイプ。やる気のある子はじこぎます。

*** 霧の日の思い出（前書き）**

フィルガはディーナとシーラが似ていても、まったく違うのを楽しんでいます。

ディーナはお勉強中です。

* 霧の日の思い出

思い描いていた展開からは、ずいぶんかけ離れた運びになっている。

しかしそれも、そう悪くはないとも思えた。

何よりも自分の願いがやっと、現実のものとなったのだと実感できる。

ディーナとあやつて、軽口を叩き合えるのはフィルガの心を浮き立たせてくれる。

応えてくれる相手のいる喜びに勝るものは無い。

フィルガは執務室に向かいながら、思い出しては顔がゆるんでしまつ。

祖母に^{ルゼ}からかわれる前に、何とか引き締めねば。

歩きながら、両手で頬を打つてみる。

今年で十七回目の挑戦となった。

そのうち十六回は、肩透かしを食わされて終わっていた。やっと願いが叶えられたのだ。

それを思うと、なかなか顔は元には戻らない。

初めて儀式を執り行ったのは、六歳のとき。

我ながら粘り強いと褒めていいのか。諦めが悪いというか。

（何にせよ、かなり痛いものがあるのは確かか……）

フィルガは苦笑する。ディーナが知ったら、執着の深さにまた身構えることだろう。

多分もう、気がついていそうだが。

自分が五歳だった春の早朝に、母は消息を絶った。

フィルガの目の前で、母は一人で橋を渡って行ってしまった。
あの日も濃い霧が立ち込めていた。

今も霧の中に立つと、あの人の後姿が蘇ってしまふ。けして振り返らなかったシーラ。

五歳だった子供は、成人してから二年目を迎えている。

* * * *

ディーナはベッドのへりを背もたれに、足を投げ出した格好で資料をめくる。

ずっと同じ姿勢でいる事にくたびれたのだ。椅子から下り、靴も脱いだ。

腹にクッションを抱え置き、腕を預けると楽だった。

資料を読み進めるうちに、ディーナの眉根はどんどん寄っていく。

あまりにも難しすぎて、理解できない。

（知れば知るほど、益々解らなくなるとはコレは如何に……）

コレを読み解くほどの知識が、自分には足りないと痛いほど知れた。いきなりの挫折感。

肝心の解術の心得とやらはまず、聖句を学び理解せねばならず、聖句を知るためには獣たちの特徴 属性やら習性やらを 理解せねばならない。……らしいのは解った。

ディーナは獣たちに対して、そんな専門的な知識で見解した試しすら無い。

しかしそれは必要とされており、獣の属性に合わせて聖句の分類

も合わせて用いることが重要である　　云々。^{うんぬん}

聖句は全部で十章から成る。

それは記録は禁忌とされ、書物はない。

だったら、どう学べというのだろう。師について、指導を仰げという事か？

師。

『解らない事があつたら、いつでもどうぞ』

そう言つて、笑つた男の顔が浮かぶ。^{フィルガ}

嫌だった。フィルガが余裕だったわけだ。

頼らなければ進めそうも無いなんて、認めるのすら嫌だ。

ディーナは頭を振つて気を取り直し、もう一度資料と向き合つ。

* * * * *

記憶の中の母はたおやかで、いつも穏やかに微笑んでいる人だったように思う。

白を基調とした薄布を重ねたドレスを好み、清楚な身なりをしていた。

白孔雀とはよく言つたものだ。確かに母の面影はそれだ。

最初はディーナも、そういった格好ばかりさせられていた。

似合わないわけではなかったが、違和感を覚えた。

彼女がシーラとはハッキリと違う、赤い髪を持ち主だというのも大きかった。

白のドレスを身にまとうと、彼女の印象が際だって鮮烈すぎたのだ。

近頃は祖母も同じことを感じたらしく、色鮮やかな染物を選んでいる。

ディーナにはもつと相応しい物があるのだ。あの赤い髪と、空色の瞳を栄えさせる物。

今日彼女が着ていたものは、翠の染めが美しい軽やかなドレスだった。

ディーナの希望を考慮して、装飾といえば胸下の切り替えの刺繍が細やかなことくらいだが、ディーナの持つ雰囲気上手い具合に落ち着かせてまとめていた。

ディーナの髪は自然とゆるやかに波打っているのも手伝って、彼女を華やかに見せるものだから、少し大人っぽくするように演出すると良いらしい。

というのが、ルゼ及び侍女たちの見立てだ。

それにはフィルガも同感だった。もともと、彼女等に口出しする気は始めから無いが。

痛む節々を伸ばす。フィルガは執務室で休憩を取っていた。

ルゼは領地の視察のために、先刻出かけたばかりだ。

いつもなら供をするが、ディーナを館に一人にしたくない。

祖母も同じらしく、留守番を言いつけられた。

この間のような事が起きないとも言いつけられないし、実際何かあったときに対処できるのはフィルガだけだ。

(ディーナ………)

多分今頃、頭を抱えているだろう。

賢くていくら能力に恵まれているとはいえ、いかんせん 素人なのだ。

限界に気がついて、投げ出すだろうか？

否。しないか。あの性格では、とうてい諦めるとは思えない。
思い出して、吹き出してしまふ。今に見ていると切った啖呵は、
本気の宣言だった。

たおやかさとは対極にあるその在り方が、どうしても母を思い出
させる。比べてしまふ。

フィルガはその差異に、ひどく惹かれる。

シーラ。自分の母親。いつも身の回りには、獣たちが憩^ひつてい
た。

母と呼ぶにはあまりに儚い風情の、少女のような女性^{ひと}だった。

* * * *

あの日のことはよく覚えている。フィルガは灰色の瞳をすがめて
から、ゆっくりとまぶたを閉じた。

シーラが消息を絶ったあの日。

春のまだ浅い早朝で、霧が深く立ち込めていた。

フィルガは母の歌声が聞こえた気がして、目を覚ました。

ベッドを抜け出し、寝間着のまま庭へ出た。シーラは毎朝、庭
園を散歩するのを日課としていたからだ。

霧の中、耳を掠める歌声を頼りに母の姿を探した。その時は何も
疑問に感じなかった。

なぜ小さく口ずさまれるだけの微かな歌声が、ああも強く耳に届
くものだったのか。

今になってもわからない……………。

霧で阻まれた視界の中を行き来する母は、まるで雲間を渡るかの

ようにも見えた。

やっと見つけたその姿に不安を覚えて、必死に駆け寄って勢い良く抱きついた。

シーラは楽しそうに笑った。しがみつく子供をしばらく抱きしめてから、手を握ってくれた。それでやっと安心できた。

雲と雲の間を渡ることが出来るのは、妖精や天の使いといった、生身の無い存在だ。

そう、祖母や母が聞かせてくれたおとぎ話の中だけのもの。

母の手のぬくもりは本物だ。ちゃんと、ここにいる　そう、安堵した。

母は自分の手を引くと、ゆっくりと歩き出した。庭園を抜けて、正門まで抜けて。

遠ざかる館と母の顔とを、代わる代わる見ながら尋ねた。

『どこに行くの？』

母は答えなかった。ただ手をやんわりと、握り返してくれるだけだった。

唇はずっと、小さく小さく歌を口ずさみ続けていた。

やがて橋にたどり着き、フィルガの手を離してから、ずっと。

母は一人で橋を渡って行った。

その後ろ姿が霧に飲み込まれて行くのを、フィルガは追いかけることも出来ず、黙って見送るしかなかった。

身体は動かせなかった。声も出せなかった。

瞬くことすら封じられて、立ち尽くしているしかなかった。

切れ切れに届いていた歌声が、完全に止むまで……ずっとそうしていた。

やがて自分の背を押す風を感じた。

風は霧を振り払って、見通しを良くしてくれた。
だが、母の姿までも振り払ってしまったのか。

もはやシーラはどこにも、見当たらなかった。

*** 霧の日の思い出（後書き）**

ディーナ、フィルガってかなり優秀なんじゃ・・・？
と、やっと気がつき掛けてます。

フィルガはフィルガでがんばったのですよ。

まあ、それはおいおい出てきます。

お付き合い感謝 感謝です！ありがとうございます。

第五章 * 姉と弟（前書き）

第二章 * 呼ぶものとして、ちらと出ました、ギルムード・サイ
トです。

第五章 * 姉と弟

* * * *

左手を胸に押し当てて、ギルムードはうやうやしく一礼する。

しかしそれも、形ばかりのものだった。

勧められるよりも早く椅子に掛けると、腕を組んで思いきり背もたれに身体を預ける。

「やれやれ。大騒ぎですな、姉上」

「ギルムード。他人事じゃないでしょう」

「確かに」

たしなめられても、ギルムードの口調はどこか間延びした響きだ。焦るそぶりも無い。

「私の守護に就いていた獣たちまで、行ってしまったままなの？
・・忌々しい！」

人前では温厚で通している姉だが、人払いしてあるのも手伝って弟の前では素顔を見せている。声までが険しい。

ギルムードは滅多にお目にかかることの無い姉の一面に、笑いを潜めながらも愉快そうに、おお、怖い怖いなどと口にするものだから余計に睨まれた。

だがそれでも反省する様子は無く、ギルムードは両手を頭の後ろに組むと足も組んだ。

くつろぎ切った格好で、天井を見上げながら1、2、・・・と数えてから呟く。

「残っているのは俺の処のダグレスと。あと数頭はお偉方の処にいる奴らだけ、か」

「貴方ね。もう少し慌てなさいよ。長く従えていた獣たち・・・レドまでが行ってしまったのでしょうか？」

「ここまでだと、いつそ清々しい。そう思いませんか？姉上」

相手の能力の高さに驚愕するよりも、正直なところ賞賛の方が勝っている。

だからギルムードは機嫌よく笑う。自分の敵わないかも知れぬ相手。

ぜひ、手合わせ願いたいものだ。

「バカな事を言わないでちょうだい。皆、心配しているのよ。白孔雀の仕業なのか、とね」

鳶色の瞳を真っ直ぐにギルムードに向けると、声を潜めてたしなめる。

姉の自室とはいえ、油断なら無い場所なのだ。『ここ』は。ギルムードも揃いの色の瞳をさがめて、姉を見返す。

「姉上あんまり心配しすぎると、また髪に白いものが増えますぞ？」

「ギルムード！」

ははは、と悪びれもせず笑って受け流す弟を、姉は心配そうに眼差しだけで責めた。

いつまでも真面目に取り合わない弟に、いい加減にしろと言っているのだ。

「……どうやら似ているが、違うようです。赤い髪の少女で、能力はあるようだが、使いこなすまでには至っていないらしい。まあ、若造の結界が阻止しているせいもあるでしょうがね。よって、獣たちはジャスリート家には侵入不可能」

やれやれ、といった調子でギルムードはわざとらしく、両手のひらを軽く上げて見せた。

バンザイ。お手あげですな、といったているのだ。

「シーラの息子に、シーラに似た少女。不吉な組み合わせだこと！何者よ、その娘？」

「一応、血筋なのは間違いなさそうですがね。詳しくは報告されませんでしたから、何ともいえません」

ギルムードは、間者を絶やさずジャスリート家に送り続けているのだ。

シーラと出会ってから、実に二十年以上　ずっと。

「そう。何にしろ、このままその娘を放っておくわけにもいかないわね」

姉は巫女王としての立場と、術者のはしぐれとしての誇りに泥を塗られたも同然と、息巻いている。

それはギルムードも一緒だった。

「若造の方もですよ。あれは神殿の許可無く聖句を修得している。レドは今、

アレの聖句の徒だ……。まことに素晴らしい血筋ですな！あの家は」

聖句を用いずに、次々と獣の心を魅了してしまう少女。

一度呼び声を上げれば、獣たちは聖句すら振り切って、目指し行く。

ある意味、解術の心得があると言えなくもない。

今だ誰一人として成し遂げたことの無い領域に、少女は踏み込んでいる。

術者の存在を脅かす、たいそう迷惑な存在なのだ。

命懸けで屈服させた獣を、いともたやすく横取りしてくれるものだから、恨みたくもなる気持ちもわかる。

加えて高度な術者のフィルガ・ジャスリートの存在。

二人に手を組まれては、厄介なのだ。

「では。手始めにその公にされていない少女を、引きずり出さねばなりませんな」

ギルムードは己のあごひげを撫でさすりながら、天井を見上げたまま相変らずの調子で言葉を紡ぐ。焦りも執着も、みじんと感じさせない抑揚の効いた口調は意識したものでこそ無かったが、長年の努力が自然と身についた結果だった。

のらりくらりと相手の出方を、受けつかわしつ交渉ことに臨む。
感情をあらわにしない。

なかなか忍耐のいる心構えをギルムードは身につけているおかげで、外交ごと等の任務も自然まわってくる立場にいる。

「策はあるの？」

「お任せを」

にっとう唇を引き結び見せた笑顔を、姉はどうも疑わしいといった眼差しを向けた。

「確かでしょうがやましい方法で得た情報を武器に、ジャスリート家と渡り合うのはあまりにも不利ではなくて？」

くつろぎ切った弟とは対照的に姿勢良く椅子に腰掛けた姉は、すらと伸びた首を傾げて声を潜め続ける。

純白の巫女装束をまとい、長い髪をきつちりとまとめ上げたその様は、幼い頃から何にも変わっていないようにギルムードは思った。優等生で心配性の姉。

これから先彼女の髪にいくら白いものが混ざろうと、この人はずっとこのまま美しく気高いままだろうと思わせる。……そうで在れる様に願っているから、こうして彼女と一緒に神殿に上がったのだ。もつとも彼女の髪に白いものを混ざらせてしまう種といったら、自分が原因かもしれないが。

それ以外は排除するのが、ギルムードの役目だ。

「心配召されるな姉上。このギルムードにお任せあれ」

いたずらっぽく片目を一瞬だけ閉じて見せると、勢い良く椅子から立ち上り、またも恭しく左手を胸に押し当てて一礼した。

その手袋の甲を、英知の証とされる白蛇とツタが絡み合う文様が刺繍されている。

それは神殿の紋章だ。それがいやでも自分が神殿という組織に属し、仕えているのだと思わせしてくれる。たとえ自分のかしく相手か誰であっても、形だけの敬礼だとしても。

立場上、強引に動いて世の信用を失うわけにはいかない。

相手も相手なだけに、立ち回りに配慮が必要なのは重々承知の上で、ギルムードはためらい無く笑う。

いつまでも心配そうな姉の瞳を振り切るかのように、左手を高く差し伸べて声を張り上げた。

「ダグレス！！」

最後の切り札となる、獣の名だった。

* * * * *

第五章 * 姉と弟（後書き）

第五章までできました。やっと・・・。おまたせギルムード殿！出番ですヨ。彼はかなりいい奴です。
一応、立場は悪役なんスけどね。

よろしく、どうぞ。お気に入りの彼です。
（おっさんだけど。）

*** 歴代の記録（前書き）**

ディーナ、だんだんと自分の存在に疑問を持ち始めています。

＊ 歴代の記録

シーラは亡くなってなどいない。ただ、いないだけだ。不在なだけ。

だからずっと、置いてきぼりにされた子供は、母の帰りを待ち侘びているのだ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

必要ないと散々訴えても無駄らしい。

ディーナにあれこれ食べさせようとしている人たちが、この館に
いる限り。

決まって昼過ぎ、夕食との合間にはこうしてお茶とお菓子の時間
まで設けられてしまっていては、ますます夕食が入らなくなる。

しかし好意を無下にもできない。ここの所は受け入れて、ディー
ナは大人しく従っている。

「どうぞ、ディーナ様」

「………ありがとうございます」

ディーナはぎこちなくカップに手を伸ばす。様などと付けられて、
丁重なもてなしを受けるたび身をよじってしまいたくなる気持ちは、
ここに来てからずっと変わっていない。

様は要りません、と何回も訴えているディーナだったが、いつも
侍女の皆さんは困ったように微笑むだけだった。

そのうちディーナも立場つてものがあるのだと理解して、訴える
のは止めにした。

だが、慣れることができない。

緊張したまま、カップに恐る恐る口をつけた。少しでもお嬢様ら

しく振舞って様付けされていることに報いろうという、ディーナ
りの気遣いからだ。

目の前でこうやってお茶を淹れてくれている、侍女の皆さんの方
がよっぽど堂々としていて優雅だと思う。手馴れた仕草でお菓子を
取り分けてくれる様を、こっそりと窺いながらお茶を頂いている。

「さ、ディーナ様。木苺の焼き菓子ですよ。お茶もおかわりいかが
ですか？」

「ありがとうございます。え、と・・・？」

「リゼライです」

「リゼライさん、お茶おいしいです」

につこり笑みながらリゼライと名乗った侍女は、とても小柄だが
くるくるとよく働く。その様子をいつもディーナは感心して見てい
た。身の回りのことは彼女が主になって、世話してくれるのだ。

侍女の仕事着である動きやすそうなスカートならば着ても良い。
そう言ったがもちろん、却下された。密かにディーナの憧れの服装
なのだ。それをきつちりと着こなすリゼライは見た目にも清潔感に
溢れ、仕事に対して意欲的なのがうかがえた。きちんと彼女の腰の
辺りで結ばれた、前掛けのリボンまでが様になっている。

密度の濃い蜂蜜みたいなキレイな金髪をひとつに後ろで束ね、白
地に孔雀の羽根が刺繍された三角巾が頭髪を押さえている。さらさ
らと真つ直ぐの髪なのが、ディーナはちょっぴり羨ましい。自分の
髪はふわふわと落ち着きが無く、まとまりが無いので毎朝苦勞する。
実際、苦勞しているのはリゼライだ。彼女が髪を梳り、まとめてく
れるので申し訳ない。しかし自分では梳かすだけが精々なので、甘
えさせてもらっている。

優しげで頬の線はまるやかなのだが、目元は涼やかで切り込みの
深い二重のまぶたがとも彼女を理知的に見せていた。それすらも
自分にはない恵まれ方をしているな、とぼんやり比べてしまう。デ

イーナは……まっげが重たそうに縁取るおかげで、いつ見ても眠たそうな表情だなと鏡の中の自分に言ってしまうのだ。

リゼライの凛々しさのある美貌が、鏡の中に一緒に並ぶものだから余計に。

それでも見当つけて自分とさして変わらぬ年頃か、少し年下かと思わせる。もっともディーナは自分の年すら知らないのだが。そう思い当たって、思い切って質問してみる事にした。

「あの、ですね。リゼライ、さんはいくつなのですか？」

「はい。じき、十七になりますわ」

「そうですか。……私もです」

（多分）とこっそり心の中で付け足しておいたのはヒミツだ。

「リゼライさんはすごいですね。私……何にも、あまりうまくできません」

心からの賞賛だった。そうだ。しまいには、段差を下りることさえ手を借りなければ危うい。

「は、い？」

リゼライは片す手を止めて、これまた髪に負けないくらい琥珀色の眼差しをむけた。

驚きのためか声が裏返っている。

「わたくしが、ですか？」

「はい。すごいです。いろいろ、できるんですもの」

「ありがとうございます。……こう、申し上げてはなんですが。ディーナ様のほうが私めなどよりずっと『すごい』と思いますよ？」

「いいえ。ディーナはリゼライさんよりも優れたところはありますん」

きっぱりと告げるディーナに苦笑気味に、リゼライはご謙遜をとり顔だ。

「ご謙遜を、ディーナ様。わたくしどもには成し得ない御力の持ち主だと、うかがっております。若君のお母上、白孔雀様さなが

らの『御力』だと……」

そう言ったりゼライから、敬虔な瞳を向けられる。

ディーナはう、と言葉に詰まった。なるほど。自分は今こういう目で一部からは見られているのか。目の当たりにして改めて身をよじりたくなった。

「そ、そんなことは」

ありません、リゼライさんの方がと、もごもご口ごもりながら答えるのが精一杯だった。

* * * * *

後はご自由にどうぞ、とリゼライはお茶といくつかの焼き菓子を残して退出して行った。

ディーナは午前中からずっと、フィルガ推薦の書物とにらめっこしていて流石に煮詰まってきた頃に、お茶が運ばれてきた。

正直、いい気分転換になった。また改めて、資料の山に向かう。

まずはディーナでも理解できる（かもしれない）範囲の物から。それがジャスリート家の年表だった。

一番聖句や術から遠くにあると思われたから、後回しにしていたのだ。

自分がなし得たいのは『聖句を覆す解術を心得た、他の干渉を物ともしない』術者だ。

手っ取り早く分かりやすい明確な目標として、要はフィルガを超えればいいかと思ったがどうも……少し違うような気がしてきた。単にやられっぱなしなのが、癪に障るだけというのもある。

契約も、シーラも、自分自身の記憶ですらも、ディーナにはこ

だわる所ではないのだ。

記憶というものは、過去のことだ。

それが無ければ、自分が成り立たないなどとあつてたまるか。無いということとは、必要ないからじゃないのだろうか。

大事なことは、自分は自分だという事だけだ。

そのせいか下手にシィーラの情報を与えられると、振り回されやしないかと警戒してしまうから、避けていたい気持ちもある。

私と彼女は違う。周りがどう思っ、重ね見ようと知った事ではない。

そう強くディーナ自身声を大にして言っておきながら、揺らぐ自分にも気がついてる。

この世の中の誰よりも、シィーラに近い自分。その気になれば、たやすく。

（ばかばかしい）

ディーナはその可能性を無視すると、銀で型押しされた題目と真向かう。

四隅も同じく銀で型押され、装飾ともなるように補強されているようだ。

『ジャスリート家 歴代の記録』

そのずっしりと重みを感じる背表紙をめくる。ディーナが感じるのは単に手の感覚としてだけではなく、優に三百年と続いているこの家の悠久の時を想ってだ。

書物というよりも書き込み式の記録書であり、後半のほうは白紙だった。

ただ、罫線だけが引かれている。それはこれから記録されていく歴史をひっそりと待っているかのようなようだ。どんな出来事も静かにありのままを、受け止めんとして。

（シーラ・ジャスリート）

彼女の年表が、一番新しい記録のようだ。シーラの後からは白紙が続く。

どうやら年表というものは、その者がこの世を去ってから綴られて行くものらしい。

【シーラ・ジャスリート】 * ジャスリート家歴代の中でも特に優れた^{けものみみ}獣耳の娘 世間からはジャスリート家の“白孔雀”と謳われた

まずは彼女についてそう述べられてあった。けものみみ・・・獣たちの言葉を理解するものはそう、呼ばれるらしい。

ディーナは初めて知った。獣耳。ならば、自分も獣耳だ。

その呼び方は何だかとてもステキだ。気に入った。ディーナの耳も獣みみ。

何となく気落ちするような事しか、書かれていないような気がしていただけに意外な発見に得した気分だった。

前向きな気持ちで、シーラの年表を追い始める。

シーラは四つの歳で養女に入ったと、始まっている。

ルゼは見当つけて、四つとしたのだ。正しい年齢は不明なのだから、仕方が無い。

次いで十七歳で、神殿に一時巫女として召集。翌年には巫女を引退。

その翌年には、十九歳で男児を出産。

いきなり、そう記録されているのには目を見張る。前後に婚姻を結んだとの記録は無いのだから。

（男児・・・フィルガ殿の父親って・・・）

巫女を引退。神殿に巫女として上がりながら、彼女はフィルガを

身ごもったのか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当時、大変な騒ぎとなったものではなかったろうか。そう想像するのは容易い事だ。

良家の娘が婚礼も挙げずに、出産　？

その五年後にシーラは消息不明と記されて、後は空白だった。それは、今から十七年前の事になる。

こうして見ると、複雑な気持ちになってくる。

人の一生がこのたった一枚の紙に、数行の文字で収まっているのだ。

淡々と在りし日の事柄のみが綴られたそれからは、主役であるはずの人物がどう思い感じて生きたかまでは判らないのだ。そこは年表をなぞる者が、想像力を働かせるしかない。

シーラは夫婦の娘になって、成長して。そしてきっと恋をして、フィルガを産んで母親になった。

何も特別ではない、ごく普通の女性の人生・・・年表だけを見ていれば、そうなのだ。

（・・・・・・・・シーラ。どこから来て、どこへ行ってしまったの？ 誰にもさよならする理由も告げないで、子供を置いて行ってしまふなんて。アンタ何があったの？）

ディーナは心の中で、初めてシーラに問い掛けていた。

（橋を渡ってから、ちょうど二十年という月日が許されていた時間だったの？ わかんないよ、何がしたかったの？）

シーラにぶつけてみたい疑問の数々は全て、ディーナ自身が己に問いかけたいこともある。

これは全部怖くて向き合えなかった事だと、初めて自覚した。

ディーナは両手でまぶたを覆う。シーラを知ることが恐れであ

ったのに、知らないフリをしていた。

（シーラに逢って、話が聴きたい）

そうできなければ、自分の心に立ち込めた霽もやのような想いを晴らせない気がする。

ディーナは視界を覆い突っ伏したまま、フィルガもこんな想いのまままで今日まで来たのかもしれないと、少しだけ同情した。

* 歴代の記録（後書き）

疑問すら感じなかったのに、自覚し始めた事によってディーナは焦り始めますが。良い兆候です。

もう、なんかディーナの存在がハッキリしました。（私の中で）
やっとかよ。

そんな感じで、周りも動き始めてます。

君の敵はフィルガじゃないんだよ、ディーナさん！
気がつくまでもうちよつと、かかりそうです。
長々お付き合い、ありがとうございます。

*** シャゲランス家の娘（前書き）**

小さいながらもパワフルな娘さんの登場です。

* シャグランス家の娘

力が欲しい。

何よりも、誰よりも……。他の術者の干渉なんてものも
しない。

全てをかしずかせる事ができるほどの、能力が。ちから

* * * *

案内が無くとも、巫女装束の少女は迷い無く目当ての部屋を目指
す。

白く長く引きずるほどの衣を物ともせず、左手に絡め持ち上げて、
慣れた足さばきで少女は進む。

足首で結ばれたサンダルの紐が、少女が足を運ぶたびに見え隠れ
した。

そのか細い足首と、両手以外の肌は衣装に包まれている。薄く透
けているとはいえ、頭のとっぺんからベールを被っているので、素
顔はおるか目元すら見せていない。

それでも見る者に少女と解らせてしまうのは、衣にくるまれてい
ながらも、少女特有のまろやかな輪郭が浮かび上がってしまうから
だ。

彼女のまとう衣の純白は巫女全員に共通したものだだったが、彼女
のベールを落ち着かせる額飾りは認めれた者のみが許されたものだ。
巫女にもその実力の程で階級がある。

片方は白蛇　英知の証。もう片方は黒蛇　魔術の証。その二

匹を互い違いに絡む台座は緑玉製のツタだ。

そして二匹が向かい合い、一緒に舌で抱えるのは雫形の紅珊瑚・それはちょうど少女の眉間で光を反射しながら、艶やかに輝いている。

誇りを頭に戴き、日の光を一身に受けて進む少女は眩い。

天気が良いので回廊ではなく、庭園の小道を選んで進む。

晴れやかな空気を楽しみたいためではない。その方が庭園の生垣に隠してもらえるからだ。

少女はあまり背丈が無いことを、こういった場合では感謝している。

少女はいくらでも言い訳が出来るタチだったが、面倒は避けるに越したことは無いと思っている。

いくら巫女装束とはいえ、こうまで神殿の中枢部　それよりも奥にまで足を踏み入れているのは気が抜けない。一介の巫女風情である自分がここにただで、不審を抱かせるに充分な要素満点だろう。

毎度の事なので慣れてこそいるが、全身で周囲に気を配りつつ進んだ。

そうやって辿り着いた目当ての一室の前で、少女は合図ソックも無く身を滑り込ませた。

* * * * *

少女が部屋に入ると同時に、闇色の獣がゆったりと立ち上がった。それを合図と受け取ったのか、少女の来訪に気がついたらしい人物に声を掛けられた。

「……来たか、シャグランズの。待ち侘びたぞ！どうだ、

首尾よく進んでいるか？」

頭に一角を頂いた闇色の獣を控えさせた男に、少女は一礼してから答える。

「残念ですが、取り戻す方法がございません」

「だろうな。」

椅子から身を乗り出して聞き入ろうとする割りにはあつさりど、あまり意に沿わないであろう報告に男は頷いた。

「何てこった……。これも尽く^{いっしょ}解決しちまうんだからな。これはもう、こちらに上がって頂くしか方法は無いだろうな」

「……………」

少女はベールを被ったまま、気持ち顔を伏せて見せた。否定はない。が、かといって肯定しているワケでもない。主人に合わせての、相づちだった。

口調ではさも問題に悩まされているかのようなそぶりの主だが、満足気な笑み浮かべた表情を見れば分かる。主はこの状況を楽しんでいるのだ。

うかつに己の意見など、述べるべきではない。

少女は雇い主に事の次第だけを報告する事に徹していれば良い。

戸口の脇に姿勢を正し、シャグランスと呼ばれた少女はそんな主人を真っ直ぐに見守っていた。

ベール越しなのでそうぶしつけにもなるまいから、許されるだろう。

「……………」

雇い主である中年の男は、いつ会っても表情があげすけで実に判りやすい。

少なくとも、少女はそう受け止めている。

明るい茶色の瞳と、それよりも気持ち煮詰まって濃くなったような鳶色の髪が、彼の気質をより陽気なものに見せているようだ。四十路をいくつか越えていてなお、艶やかな髪質である。

そして何よりも、その瞳が彼を実年齢よりも若々しく見せているのだ。

同じく鳶色の太めの眉の下にある眦まなじりは下がり気味で、見る者に彼の気質が温和なものだと予想させる。それに加えて少しだけ細かく刻まれた目じりのシワでさえ、彼の印象を柔らかなものにするのに一役買っている。(けして真実がそうではないと少女は知っているが。)

そういったものの影響も確かだが、決定的なのはその瞳に滲にじみ出ている好奇心という名の、強い光だろう。まるでいたずら盛りの犬猫の仔みたいだと思わず瞥たえてしまいたくなる。

そんな主の傍らに控えた闇色の獣が、伏せていた眼まなこを開いた。視線に気がついたのだろう。行儀良く構えたままで、その赤い目玉だけをギョロリと向けられた。

『ダグレス』だ。獣でありながらその冷静さと賢さは遥かに人間よりも勝ると、主が常日頃から誉めそやしている。おそらく主にとって一番頼りになる部下だろう。

(……おそろいね?)

シャグランスの少女は睨まれても怯まず、小さく小首をかしげた。少女の額を飾る珊瑚玉が、一緒に小さく揺れる。

“……”

こっそりと心の中で呼びかけた。

それが伝わったのかどうかはわからないが、ダグレスは一瞬こちらを向いた。まっすぐに。

獣の視線は確かに揺れて存在を主張した珊瑚をとらえた様だったが、それも一瞬だった。

すぐさま視線を外すと、ダグレスは前脚を揃えなおして胸を反らせた。

それがどうした。

獣の言葉を代弁するなら、そんなところだろう。相変らずつれな

い奴だ。

いつ会っても主以外の前で膝折る事はしない。お前のほうこそ跪ひざまずけ……………そう言われている気がする。多分そうだろう。

「……………ギルムード様」

「…ん？」

少女は困ったと言いながら全く、困った表情をしていない主に呼びかけた。

楽しそうに企んでいる真つ最中のギルムードが、あごひげを撫でさすっていた右手を止める。

「あの娘は、やはり聖句を用いませぬ。フィルガ様に初めて見せられて、最近やっとその存在に気がついたような有様です」

「そうか……………。あの娘も、か」

「どうでしょう。私めに聖句の全てを修得する機会を下さいませんか？必ずや、ギルムード様の愛し子達を取り返してみせますわ」

「そうきたか、シャグランス家の！！力比べか。いいだろう！全ては正直難しい。

だがそれに準ずるまでなら、俺の力でどうにかなるだろう。やってみるか？」

「はい」

少女はためらい無く答える。

「……………おまえなあ」

ギルムードは堪えもせず、愉快な奴だと笑い出した。

「それが何を意味するかわかって言ってるのか？まあ、わかっているのか。お、まえっ、

この俺よりも、術者として格が上だと言っているのも同じだぞ？」
「……………」

弁解はしなかった。その通りとしか答えようがないからだ。

慇懃無礼いんぎんぶれいとは、まさに自分の事を言うのだろう。

豪快に笑い飛ばしながらも、ギルムードの視線は鋭い。多少居心

地の悪さは感じたが、たじろぎもせず、投げられた視線に挑むような眼差しを返した。

「いや、いつになく積極的に結構なことだ。どうした？いやに協力的じゃないか」

「私、いつも積極的かつ協力的ですわ？」

「まあ、そうだな。うん。こう言えいいか。乗り気だな、と思うたからさ」

「こும்もことごとく術に対抗したら、ぶつかってみたくするのが術者のさがではございませんか？」

「だな。ましてやシャグランス家ともなれば、なおさら血が騒ぐか」
ギルムードはいや、愉快で結構結構となおも笑っている。

狙った通りに主人はあっさり許可を下ろした。

いささか浅薄だとも思うが、今そこに付け込んだのだから文句をつける筋合いなど無い。

それでも虫のいい話だが、ギルムードのあり方には雇われ者としては、不安を感じないわけではない。

いくら優秀な部下の方が使い物になるとはいえ、明らかに考えが甘く無防備な気がする。

行く行くは己の脅威になるとは、夢にも思わないのだろうか？

けっして少女が、寝返らない保障があるのか。

その辺にある種の育ちの良さがあるというのか、甘さが窺えるものだと、少女は密かにそう思ってしまう。

* * * *

少女がベールを翻し退出して行ったのを見届け、自分の耳に彼女の足音が届かなくなるのを確認してから、ダグレスはギルムードに向き合った。

目が合うと、ギルムードはニツと笑った。それはいたずらを思いついた悪子供ガキのもの・・・というよりは、反抗期の大人ぶる子供に付き合ってやってっている大人の余裕のもの。

その表情をやや呆れたように眺めながら、ダグレスはゆったりと前後の膝を折つてくつろいだ。後ろ足は投げ出す。

“あの娘。シャグランズの血筋とあつて、流石に聖句への順応が早いぞ。大丈夫なのか？”

「何が？」

口元に薄く笑み貼り付けながら、ギルムードは獣を見下ろす。ため息交じりでダグレスは答えた。

“あの娘にあまり力をつけさせては、後々やっかいの元凶とならぬかと言っているのだ。

我ですら、奪いに来るやもしれぬぞ”

「そうかもな。何、その時はその時だ・・・。」

幽閉でも、家族を人質に取るでも、何でも。

続けられなかった言葉の先、言うまでも無い、裏切り者に対する処遇はいくらでもある。

ギルムードの目の奥に、暗く鋭い光がゆらめく。

「あの娘はなるほど。術者としての能力は俺よりも格段に上だが、甘いのだ。」

俺への評価も、己への評価もな。そうそう一度関わった奴を切り捨てて、生きていけるほど薄情にはなりきれぬでいるのに、自覚も無いとききている。そこら辺はこの腹黒オヤジのほうが、一枚上手だというハナシだ」

ギルムードはあの少女を見込んでいる。物をハッキリいえる奴は大好きだ。

思い返しては愉快だったと、笑いが止まらない。

“ギルムード。それはお前にも言えることだと、我は思うぞ”

「む？そうか？まあ、確かに女子供には多少は甘いかもな。心配し

てくれているのか？」

“ 忠告だ ”

「 同じことじゃないのか 」

そう言っ てギルムードはまた笑った。 今度は少しはにかんで、嬉しそうに。

そんな様子をダグレスは呆れたように、 また、ため息をついて目を伏せた。

* シャグラン家sの娘（後書き）

さて、誰でしょう？（もうばれれですか？）
ギルムードの、お氣に入りななお嬢さんです。

彼女も獣好き。ダグレスは触らせてくれませんが。
まあ、そのうちチャンスもあるかと思ひます。

*** 聖句の間（前書き）**

引き続き、企みのギルムード&シャグランズの娘さんです。

* 聖句の間

術者はその場で初めて目にした聖句を解読する。

理解して、念を込めるのだ。失敗は許されない。

失敗したらどうなるのか・・・生き抜いていこうとする自分には、いらぬ知識だ。

* * * * *

「さあで、と。シャグランズも動き出した事だし、おまえはどうするつもりなんだ？ダグレスよ」

“・・・。”

話は分かったと獣は頷いて見せたが、動こうとはしない。顎を引き、上目遣いでギルムードを見返すばかりだ。

「何をためらうのだ？」

“我ならばジャスリート家への侵入は可能だろう。だがな。

シーラの加護を受けた我だからこそ、『紅孔雀』が同じ御方だとしたら抗えなくなるかもしれぬよ・・・。そうなれば我も、他のものと同じ道を辿る”

「そうか。そうなればお前さんも、俺を見捨て行くのだろうな。だが、お前はとうしたいのだ？」

“・・・決まっている”

苦しそくに呟いたダグレスだが、決定的な意志は口にしようとしなかった。

ギルムードは椅子から立ち上がる。そんなダグレスを目線で促し、薄く笑み浮かべながら壁に歩み寄ると房飾りのついた紐を左右に引いた。小窓ほどの面積を覆っていた朱色のビロードの向こうは窓で

はない。

まばゆい陽射しの中　優雅に微笑む在りしの彼女を閉じ込めたものだ。

彼女はこうやって、ずっと・・・だ。二十年という歳月を経てなおも変わらぬ微笑を湛えて、ギルムードを見返してくる。

だからいつも彼女と真向かうときは、自分も微笑むことにしている。言葉を交わすことができない代わりに。

“いつまでお美しいな、シーラ嬢は”

彼女の笑みに引き込まれていたギルムードは、隣に並んで腰を落ち着けていたダグレスの言葉に我に返った。

微笑む少女の側に一緒になって描かれている獣の、一方はレド。もう、一方はダグレスだ。彼もまた、この在りし日の至福の時を思い返しているのだろう。眇められた穏やかな眼差しが、それを物語る。

「そうだな。全くだ。俺はもう一度シーラに会いたいと切望している。お前はどうか？」

“・・・・・・それは我も同じだ”

「だろう？　だったら好きに動けよ、ダグレス！　本来のお前ならば何にも縛られない存在だろう？　あえて、聖句に囚われた理由を忘れたワケじゃなかるうよ」

我を捕らえてくれぬか。でなければ、あの御方を追い求め続けてしまふのだ。

そう自ら頭を垂れて、獣は首輪を所望したのだ。

どこにもこの世界には感じられない気配を追い求め続けていては、近いうちに壊れてしまっただろうから、と・・・・・・。

獣はあの時と同じくらい苦悩して見えた。シーラ失踪から実に十七年という歳月を共にしてきた、長い絆だ。

それすら断ち切っても、少しでもシーラに近しい者を手に入

りたい。だからギルムードは獣に行けと囁^{けしか}けているのだ。

“もう一度言うぞ、ギルムード？我は帰ってこれぬかもしれぬ・
・賭けだぞ”

「俺だつてなあ、おまえとこうやって軽口叩きあえなくなるなんて嫌さ。だがおまえに、これ以上制限加えるほうが嫌だね。せつかく、手を伸ばせば届く宝が目の前にあるというのに。だからおまえに賭けているんだよ。この長きに渡る聖句の關係に執着し、断ち切れぬ絆だと必ずや証明してくれる筈だと」

一種の術比べと、呼べるもしれない。ギルムードの、ダグレスに対する聖句への力量が試されるのだから。かの少女が獣を魅了してしまえば、自分は負けとなる。それはすなわち一頭残らず、獣を失うことを意味している。

“ギルムード。お前は薄情だ”

ダグレスは諦めたかのように小さく告げると、身を翻した。そのまま開け放たれていた窓から飛び出すと、木の影から影へと渡って行った。

「はは・・・・・つ。違いない」

ギルムードが呟き返した時には、獣の姿はもうどこにもなくただ風が頬を撫でて行った。

* * * * *

・・・聖句。聖なる力宿る言葉から成るとされるものは、全部で十章まである。

言葉の持つ力そのものに、術者の能力が合わさって初めて効果を発揮する。

言葉の響きと配列が、人の子の発する声音で目覚める。その原理に気がついた者達の研究の成果だ。

目的は自分たちよりも力の強い獣たちの心を縛り、己の支配下へと置くこと。

それを意のままに操るよう仕向ける、制限を与える句だ。

ずいぶん一方的な、どこに神聖さがあるのかと疑ってしまうが『聖なる句』なのだと教わった。しかも術の現われ具合は、唱える者の心のあり方ひとつで全く違ったものになる。

ひどく不安定だとしか言いようが無い、取り扱う者の力量が常に試されるものなのだ。

おまけに聖句の伝承法は、書物に記されているわけではない。それは禁忌とされて久しい。許されて機会を与えられた者だけが、それを取得することができるのだ。

おそらくあまりこの秘術を広めては、他国に利用されかねないと踏んでの判断だろうと思われる。獣の利用価値は高く、また上手く御する事ができれば恩恵も期待できる。政の勢力争い^{まつりごと}に、その力を欲する輩もまた多いのだ。

そうした事を踏まえた上で臨んだとしても、伴う危険もまた半端ではない。

術者としての条件には能力の有無はもちろんの事、命を投げ打つ覚悟のある者でなければその資格はない。

それほどまでの決意なくして、獣たちに挑もうなどとは考えないことだ。

誰が喜んで、下僕になどなりたがるだろうか。当然獣たちは必死で抗ってくる。

それだけではない。聖句を修得しているという事は、獣たちに対して宣戦布告しているのも同然なのだから、常に油断できなくなってくる。

知れば知るほど必然的に、さらなる上級の獣を従えて己の守護に当てなければ、いつ寝首をかかれるかもしれないという

訳だ。

聖句を修得する。

それは一歩踏み込んだら最後、二度とは戻れない領域に踏み込むという事だ。

先に進むより他を選択の余地は無い。そうやって、魂に聖句を刻んで行く。

ただの言葉としての羅列に、獣を御する力などありはしない。人の声を通して初めて句は目覚めるのだから、要は術者の精神力がものを言う。

神殿の中でも限られた者だけが足を運ぶことの許される、『聖句の間』 別名『封じの間』の扉の前で少女は呼吸を整えていた。

(・・・一介の・・・巫女風情・・・ギル・・・ドは・・・
・・・正気・・・か・・・いくら・・・グランスの・・・
・・・血筋・・・からと・・・))

切れ切れにだが確実に、自分を値踏みしているのであるうから届く中傷ごとが耳障りだ。

だがそれも毎度のことなので、軽く受け流す。そんなものはたいして自分を脅かしもしない、ただのやつかみだ。石柱の影に身を潜め高見の見物を決め込んでいる連中なんぞは、最初から自分の敵ではない。相手をする価値も無い輩に、かかずらっている暇は無いのだ。

呼吸に意識を集中する。

(・・・いいか。おまえこそが、正統な聖句の伝承者なのだ。

自信と誇りを持って主張しなさい)

いつも聖句に向かう前に、脳裏に蘇ってくる声が響く。

(我がシャグランス家は、下々の自称『獣使い』などとは格が違う。我が祖先が心血を注いで研究し、作り上げた聖句こそが真実のもの)

．．．．．そうね、お父様．．．．．。

少女はいつもそう答えていた。

だったらどうして？こうやって神殿に頭を垂れなければ、聖句を修得できないのかしら？

そう少女が直に疑問を投げかける前に、父は他界してしまった。

だから父がなんと答えるのかは、永久にわからずじまいだ。

それでも多分子供の自分に言われるまでも無く、父とて知っていたと思う。

あの人は正当性を主張して、聖句の権限を再び取り戻そうと躍起になっていただけだ。

落ちぶれたシャグランス家を、盛り返そうとして『獣耳』の娘に賭けた。ただ、それだけのことだ。

神殿に取り上げられた聖句を手中に収めれば、失ったものが取り返せると本気で思っているのかと、ちゃんと尋ねておけば良かったのかもしれない。

まあ、いまさらどうだっていいが。誰かや何かのせいにしてしまえば、楽なのだ．．．．．。

自分は目を背けてはならないものがあると知っている。だからこそ見据える先がある。

ジャスリート家を見る。あそここの家は、聖句を放棄したが別に不利になど働いていない。

獣耳の血筋でありながらも聖句を公に用いずに、当主ルゼとその跡取りのフィルガの手腕で繁栄している。

（うちの子たち、食べさせていけない事には………ねえ？）

詰まるところはそれだ。そして自分にあるのは術者としての、優れた才覚だ。

生かすべきなのは、その点だろう。この呪われた祝福は、正直ただの貧乏くじを引いたものだとも思う。しかし選択の余地は無い。

生活能力なんぞ最初から持ち合わせちゃいない、お嬢様育ちの母それにまだ幼い、妹と弟。飢えや苦勞など、知らなくていい。無邪気に振舞えるようにしてやりたい。

そのための手段など、選んでいる場合ではないのは明らかだ。

だから具体的に、こうやって行動している。

傍目からは、亡き父の意志を受け継いでいるかのように映るかもしれない。

実際はそんなつもりは更々無い。

こうして命を張っているなどとは、誰に打ち明けられようか。ましてや家族にはなおさらだ。聖句研究のため神殿に、巫女として上がっていると伝えてあるだけだ。

呼吸を意識して繰り返している。心を静めようとしているのだが、次から次へと雑念が浮かんで消えていく。

……切りが無い。

そう諦めにも似た気持ちになった頃が、実は皮肉にも頃合だったりもする。

ひとつ大きく息を吐くと、一步を踏み出す。

それを合図と受け取った、扉の両脇に控えていた巫女二人も構える。

二人とも扉に施した封印を解除し、また再び施すのがその役目だ。

「・・・・・・・・」

お互いに無言で、深々と頭を下げあう。

ゆっくりと頭を上げる頃には、扉がわずかに開かれていた。

* * * * *

背後で扉が閉められたのを感じた。音一つたてずに扉は閉ざされたが、背後で感じていた外の世界の気配が完全に絶たれたから、嫌でもわかる。

再びこの封じの間に満ちた獣の気配だけが、場を占める。薄暗い空間はひどく静かだ。

『正統なシャグランス家の血筋の我に、かの契約によりて従え』

問われるよりも早く、名乗りを上げた。先手を打って仕掛けるためだ。

闇の中まどろんでいたらしい獣が、暗がりの中でうごめく気配がした。

間髪要れずに迷い無く。ボールを後ろへと跳ね上げて、額飾りを両手に構える。

薄闇の中、自分の蜂蜜色の毛先が浮かび上がって見えた。

窓も無い空間でありながら、髪がなびくのは獣の吐き出す瘴気に当てられるからだ。

間を置けば置くほど不利になる。深い部分がそう告げてくる。警告だ。自己を守ろうとすべく働く何かからに、言われるまでもない。

強くひとつ瞬^{まばた}いて息を吸い込み、詠唱を開始する。

『我、リゼライ・シャグランズが眼前に伏す御身よりも高見に立つ』

“・・・シャグ・・・ランス・・・・・・・・・・？”

その名に聞き覚えでもあったのか、獣は不快感もあらわに牙を剥いた。

*** 聖句の間（後書き）**

それぞれの準備を万端にすべく、動き始めています。

リゼライは、ディーナを別に恨んじやいませんが、対決は避けられそうにありません。

次、やっとディーナに戻れます・・・・・・・・。

* なつかしの風（前書き）

いよいよ念願になって、ダグレスが一足早くディーナに接触です。
・・・ギルムードはもうちょっと、かかりそうです。

* なつかしの風

待っていた、ずっと。

信じて待ち侘びていた。

またきつと再び、孔雀が舞い降りてきてくれると。

* * * * *

陽射しが遮られたのが、瞳を閉じていても感じられた。

考えをまとめようとデイナーは瞳を固くつぶったのだが、そのままベッドのへりに身をもたせ掛けて眠り込んでしまったらしい。首が痛む……。だがまだ眠い。

厚い雲が太陽を覆い隠したのか、室温までが下がったように感じた。冷氣すら覚える。もう夕刻なのだろうか。

ちがう。

天候の変化のせいじゃない。

自分の内の深い所から、何かが告げた。眠気を無理やり押しやって、瞳をこじ開ける。

家具の影とは全く異なる強く己を主張する濃い闇の塊が、デイナーの足元に浮かんでいた。息使いの感じられる闇。

徐々にこごみ始めたその中心から、デイナーは目が離せなくなつた。深くて底が見えない闇に、惹きつけられる。

大きさを増し形を取り始めたそれに、赤黒い目玉が現われた。しかとデイナーを見つめる眼が、^{まなこ}ゆっくりとひとつ瞬く。

現われたのではなく、元からあった瞼が開かれたのだとそれで気づいた。

（獣・・・・・・・・だ）

眠気も吹っ飛び、息を吞んで見守る。

獣は闇の中から一步を踏み出す。しかし、闇から抜け出てくることは無かった。

獣自身が闇と一体なのだ。闇そのものといった毛並みは、風に煽られているかのように逆巻いていた。

獣の歩調に合わせて、たなびく霧状の闇が付き従う。

紅すぎて黒に近い色味の眼は、空気に晒された血の塊のようにも見えた。

それはディーナを見据えながら、近づいて来る。

うやうやしくも勿体ぶって歩くつま先から、闇は輪郭をはつきりと保ち確かなものに形をとり始めた。

くすぶる様であった名残も、徐々に納まってきている。

空を渡るかのように見えていた蹄も、今はちゃんと床に着いて敷物に沈む。

獣は首を左右に打ち振りながら、片方ずつの瞳で代わる代わるディーナを捉える。

それは頭にいたたく枝分かれした一角が、視界を阻むからなのだろうか・・・・・・・・。

見せられた肖像画の中でも、獣はこうして小首を傾げていたと思いが当たる。この獣には見覚えがあった。

在りし日のシーラの側に寄り添って、憩う獣のうちの一头だ。

ディーナは思わず手を伸ばし、彼の角に触れた。冷たくて乾いた感触に、自分の手の温かさが奪われて行く気がした。

獣がこれ以上近づかないよう諫めている様でもあり、受け止めている様でもある体勢のまま、互いに見つめ合う。

“我を呼んでくれたな？シィーラよ”

獣は小さく、赤毛の、と付け足す。今度は両の眼で^{まなこ}見据えられた。
「シィーラじゃないわ。デイナーよ」

デイナーは、視線を逸らすことなく宣言した。

“そうか、赤毛の。．．．．．我が名はダグレス。ダグレスだ、デイナー”

獣はそう、二回名乗った。

* * * * *

獣がそうであるようにデイナーもまた、獣たちの魅力には抗えない。

闇色の獣が角を預けたまま前脚を折ると、その身を膝の上へと招き耳の後ろを搔いてやる。獣は気持ちよさそうに目を細めて、頭を傾けて身を預けてきた。遠慮なくもたれ掛かつてくる獣の身体は大きくすぎて、デイナーの膝にはとてもじゃないが乗り切れない。獣との触れ合いに飢えていたデイナーは、その首筋を思う存分撫でていた。

が、すっかり忘れていた重要な事を思い出す。

「ダグレス。せっかく来てくれた所悪いんだけど、帰って」

獣を手放し難く思いながらも必死で押しやる。そんなデイナーの心を見透かしたかのように、突っぱねられてもダグレスは動じなかった。己の毛並みの見事さを、自覚しているのだらう。そうそう簡単に跳ね除けられるワケはなかるう？そう言われている気がした。

「ダグレス、危ないかもしれないのよ．．．．．」

“あの若造の聖句に、我が囚われるかもしれぬと？”

「そう。やりかねないよ、フィルガ殿なら余裕で」

“無用の心配だ、赤毛の。我は今、レドの気配の下に潜んでいるからな。アレも気づけぬよ”

デイナーは思わずダグレスを撫でていた手を止めた。ダグレスの首を抱きかかえると、その耳元にささやき掛ける。

「……なあに？アンタのその用意の良さわ？」

“何。レドの奴めが足りぬのさ。シーラの息子がかつて次々と我等を従えた。それを考慮して、手を打つのが道理だろう”

鼻先でせせら笑うと、ダグレスはますます身をもたせ掛けてきた。もつと撫でろ、と言っているのだらう。デイナーは無意識に要求を読み取り、応えてやる。

デイナーの中で獣というのは、何と言うか……。無邪気な子供と等しいという感覚があっただけに、ダグレスの小賢しさは一体何なのかと怪しまずにはられない。

その割りにべつたりと甘えたがってくる。ただの大きな赤ちゃんでしかない所もある。

かわいい、かわいい、かわいらしい獣。いくら身体も力も大きからうと、デイナーの中の評価はそれに尽きる。

そんなかわいいこを、みすみす危険に晒したくはなかった。

だから少し口調を強めて言い聞かせる。

「……それが本当なら、やっぱり危険だよ。何で来たの？
帰りなよ」

“呼ばれたから”

ダグレスは、紅黒い瞳を輝かせて見つめてくる。

「呼んだわけじゃないわ。ただ少し、考えていただけだよ？」

資料室に飾られているシーラの肖像画には、獣が二頭寄り添っていた。

その一頭の白い獣レドは、呼びかけに応えてくれた。ならばもう

一頭の黒い獣も、どこかに存在しているのかもしれない。そうぼんやりと、考えていただけだ。

それだけで呼んだことになってしまうのか。ディーナはそう、恐る恐る尋ねてみた。

“ 充分だ。我々は、呼ばれる限り応え続ける ”

「 私や・・・・・・シーラに？ 」

“ そうだ ”

フィルガの言ったとおりかもしれない。確かに結界よりも先に行けば、自分は騒ぎの元となる可能性は充分ある。

「 他には？ 他にはいないの？ 」

“ 我の知る限りではおらぬな ”

「 どうして。応えてくれるの？ どうして？ 」

ディーナは苦しくなつて、声を搾り出すように尋ね続ける。

“ 性質だからな。そういう風にできている ”

「 獣の本質として、と言う事？ なぜ・・・なの？ 」

“ そうさ。獣ならば『懐かしの風』を孕み持つ御方には、そうそう抗えぬものだよ ”

「 なつかしのかぜ？ 」

“ ご存知ないのか？ その風の源である処から、いらっしやつたのだらう？ ”

何のことかと尋ね返したが、ダグレスも同じく訊き返して来た。

ディーナは慎重に一言一言を発し、なかば責めるかのように詰め寄る。

「 それは、あの橋のむこうがわのこと？ 」

“ そうだ ”

「 っ！ 」

何てことだ。ディーナはまだ自分がただの、記憶喪失の家出娘かもしれないという可能性を捨てていなかったのだ。というよりも、すがり付いていたかった。

シーラも能力も契約も、何もかも関わりの無い自由な『ディーナ』に。

「私、やっぱりあの橋の向こうがわから来たの？」

“違うとお考えなのか？”

「わからないの。橋を渡ったことは覚えているけれど、その前のことは………。記憶にないの………」

記憶なんて、あっても無くても構わない。

本気でそう考えていたディーナだったが、改めて向き合うとあの日の霧にまかれていた心細さが蘇る。

自分のつま先さえもが捉えるのさえ、やっとだった。前も後ろも・・・それどころか自分がどこに立って、何を目指して進めばいいのかすらわからない。

今のディーナには、そんな危うさしか感じられない。

「私はどうして橋を渡ってきたのかな………?」

ダグレスも、今度ばかりは答えてくれなかった。

* * * * *

これといって特に何の変哲も無い、石を組み合わせて造られた橋だ。

緩く弧を描いた橋は、せいぜい馬車が一台渡れる分くらいの幅しかない。小規模なものだ。

「これくらい……俺様の長い脚でなら、三十歩もあれば渡り切れちゃうな」

ギルムードはそう見当つけてみたが、実際のところはもっと必要

かもしれないとも思った。

まあ、大体だから。

橋自体が弧を描く造りなせいもあって、渡りきった向こう岸はここからはよく見えない。そんな終着地点が気になって仕方無いギルムードだったが、渡ることはしなかった。

橋を渡りきった所から、ジャスリート家の私有地となるのだ。こちらはジャスリート公爵家の預かる管轄地帯だが、持ち主は国なのでここにこうして立っている分は何の問題もない。

周辺には建物ひとつない。見張り塔はおろか、警護に当たる者の姿すら見当たらないが・・・ジャスリート家にこのこ入っていった者は皆、不法侵入とみなされしまう。

もちろん取調べをきちんと受けてから、その者の処遇が決められる。

ギルムードは何度か間者を放つてみて学んだ。術の心得の無い者では、あの家に侵入は無理だと。

見張りなど立てずとも、あの家の者は気付くのだ。おそらく結果が張つてあるのだろう。

どういう仕組みかまでは見抜けないが、やましき満点の自分ではないに限る。

情報はあの家に古くから出入りしている者を買収したり、正当な紹介状を持たせた侍女を侵入させて得ている。

それをギルムードはシーラと出会ってからずっと、続けてきたのだ。

その努力のかがあったと、今しみじみ感じている。ふたたび、シーラに関わりのある少女を見逃さずに済んだのだ。

諦めなくて良かったと、心から思う。

ギルムードはさんさんと降り注ぐ陽の光が眩しくて、右手を額に当ててひさしを作つて瞳を眇めた。それでも橋の向こう側一点から

は、目を逸らそうとはしないまま見つめ続けた。

やや小高い丘になっていてそのまた向こうには、ジャスリート家の館が目端に入る。

今の所そうやって、そちらとこちらを注意深く見守り続けるしかない。

ギルムードは微動だにせず、橋のこちら側で待機しているのだ。

“ けして橋を渡らないと誓えるのならば、策はある”
そう言ったダグレスの“ いいつけ” を守って。

一応資料は調べてみたのだが、橋自体がどちらの所有物なのかは記載されていなかった。

どちらも橋が無ければ行き来できないから、どちらの物でもありどちらの物でもないといった所だろうか。あちら側とこちら側をつなぐ橋は、境界までもがあやふやのようだ。

どこからがこちら側で、どこからがあちら側なのか。誰にも断言できないだろう。

色々と取り留めの無いことばかりが、浮かんでは消えていく・・・

名はディーナ。ゆるく波打った赤い髪。空色の瞳。すんなりと伸びた、華奢な手足。獣たちがこぞって平伏したがる『獣耳』の能力。
・・・それがギルムードの知る少女の全てだった。

本当に考えているのは件の少女の事なのだが、未だ目にした事のない存在とあってはその輪郭くらいしか浮かんではこなかった。

与えられた情報の少なさもあるが、ギルムードの瞼の裏に強く焼き付けられているのは、シーラなのだからなおさらだろう。

何としてもその少女を自分の元へと招きたい。

そうしたいのはやまやまだが、方法が見当たらなかった……。

なにしろ、少女の存在は公表されていないのだから。

このまま公の場に彼女が現われるとは考えられない。公表されるとしたら、正式にジャスリート家と縁続きになってからだろう。そうなるからでは、遅いのだ。

ギルムードは苦虫でも噛み潰したかのように、唇を歪ませた。

『縁続き』 それはすなわち、ジャスリート家の跡取りの花嫁として迎えられ、結ばれる縁だ。

（冗談じゃない。頼むぜ、ダグレス……！！）

首尾よく事が運べば、少女と接触できる。そのためにはこうしてやきもきしながら待ち侘びるしかない。

ダグレスの言う、シーラの加護から外れる境目ぎりぎりやらずで、大人しく。

ギルムードは期待を込めた瞳で、向こう岸を見つめ続ける。

* なつかしの風（後書き）

どいつもこいつも、と言った所でしょうか。

ダグレスは早くも彼女の『お利口さん』と、化しつつあります。
態度違うな。リゼライのときとはまるで

ギルムード、もうちょっとの辛抱だ！（多分）

第六章 * 橋を渡る風（前書き）

またまたディーナ、こりもせず抜け出してしまいました。
ダグレスにそそのかされて、では無い様子……。

第六章 * 橋を渡る風

ついに、望む者が現われた。

そうだ。此度こそ逃したりなんてしない。
こたひ

此度こそは、必ず。

* * * * *

橋のたもとには獣の像が置かれていた。風雨に晒されたせいだろう。全体に、丸みを帯びてしまっている。

それでも威厳を感じさせる獣像だった。

雄雄しく胸を反らせて、くちばしを大きく開いて高見から見下ろしてくる。

その頭は驚のものなのに、四肢はしなやかな肉食獣を思わせる。デイナーの知る中では獅子に近い。

それでいて、猛禽類特有の猛々しい立派な翼まである。獣は今すぐにも、飛び出して行きそうな勢いがあった。

飛び立とうとしたその一瞬を、こうしてここに固められてしまったかのようだ。

（なんて、この獣もステキなのかしら……）

奇妙な生き物といえばそうだろう。だが、その造りに一切の疑問も違和感も感じず、デイナーはうつとりと見上げる。

・・・あの時も、あの時も。霧の中と夜闇と。

条件は違うが視界が悪かったせいで、デイナーは像に初めて気がついたのだ。

その台座に刻まれた文字までもが、丸みを帯びていた。所々が掠れて読み取りにくい。

左手の指先をそつと這わせて、文字をなぞる。

（シ、ア、ラー・・・タ。はしと、はしを、わたるものの・・・しゅご・じゅう）

シアラータ？

どこかで聞いた覚えがある。自分の唇がなぞる発音の迷いのなさ
が、そう遠くではないと思わせた。

しかし、何も思い出せない。

「シアラータ？」

実際声に出して、呼んでみた。やっぱり何もひつかからない。それでいてこの胸に広がる懐かしさは、一体何なのか。

（まあ、そのうち・・・思い出すでしょう）

必要とあれば。ディーナは思い出せない事に対して、相変らず執着しようとはしない。

そんな自分に対しても、何の不便も感じない。自覚すら無い。

あっさりと像から手を離すと、橋の方へと真向かった。

今ならまだ、大丈夫だ。橋を渡ってきたと自信を持って、言い切る。あの深い霧の中を掛け続けて、一人で橋を渡った。

ディーナは橋を前に、こうして立っている。記憶ではもつと長い長い橋を渡ってきた気がした。それは霧で視界が悪かったからだろうか。不安からそう感じたのかもしれない。

今一度、橋を渡ってみれば何か思い出せるかもしれない・・・

そうディーナが思い立ったのが先だったか、ダグレスが提案してくれたのが先だったろうか。それはいい案だとばかりに、ディーナとダグレスはこうして館を抜け出てきたのだ。ためらったが、用

意のいい我を見くびらないでいただきたいと、ダグレスは半ば強引にディーナをさらってきてくれたのだ。

橋を渡ったから今のディーナがある。渡らなければ、どうしていたのだろう。

どうして渡ることになったのか、とも考えた。

手掛かりがあるとしたら、すべて橋の向こう。霧の中にあるのだろうか。

* * * * *

「し、あ、らーた………？」

確かにディーナの唇は彼の獣の名を呼んだ。いや、ただ台座に記された文字を『読んだ』だけだ。

何の感情も見せないまま、ディーナはすぐさま獣の像から離れた。

……ダグレスがそつと見守りながら、彼女のその様子に違和感を感じた。

“ディーナ嬢はもう、本当に何も覚えておらぬのだな……”

”
独り言のように呟く。

「そうよ？だからこうして、アンタに連れて来てもらったんじゃないの」

どこかかみ合わない返事から察するに、自分に何の疑問も感じていないのは明らかだった。

“ご自分の記憶に対する執着も、置き去ってこられたようだな。やはり……”

『契約の現われのようだ。』

ダグレスはその言葉は飲み込んだまま、押し黙った。久々の外の空気が嬉しいのだろう。ただただ、無邪気に微笑み返すディーナを

見つめる。

何の疑問も感じない。疑いすら持たない。幼子のような無垢なほほえみ。

それがどうか、ずっと、ずっと、曇る事はありませんように。

（そう願った者のせめてもの配慮がこれか、シアラータ！）

その祈りは確かに自分も賛成だ。だがなぜ、自分の胸が苦しいのかわからない。

めったなことで、誰かに同情を寄せる事のない獣の自分が、何か不憫な者と向き合っているかのような気持ちにさせられてしまう。ダグレスはディーナに向けていた瞳を思わず逸らすと、獣の像をにらみ付けた。

それを促された合図と受け取ったのか、ディーナも一緒に橋へ改めて向き合う。

隣に並びあうと、ダグレスが一步、二歩、三歩・・・先に渡りだした。そこで振り返る。

“さ、ディーナ嬢。渡ってみませぬか？”

「・・・・・・・・・・そうね　・・・」

ダグレスの歩みを呆けたように見守っていたディーナが、ゆっくりと頷いてみせた。

* * * * *

紅孔雀。そう、呼んでもいいか。赤毛の少女だそうだからな。さあ、ダグレス。

行つてうまく、その娘を連れ出してはくれまいか　。

ギルムードの頼みだ。

術者のくせに、命令口調じゃないところが彼らしい。ダグレスは

そんな彼の聖句の徒だ。

命を受ければ拒まずこなす。術者の意に沿うこと。それがすなわち、徒の喜び。

……だがそれすらも、実の所どうでも良くなりつつあった。

この少女を前にしていると、徐々にだが確実に意識が変化してくる。

ダグレスは自覚しているが、自制などできないでいた。

聖句という呪縛は、こんなにも細い手綱でしかなかったのかと思える。

連れ出してくれ。

それは誰の望みだっただろうか？思考がぼやけ、記憶が交差する。考える事よりも自然と湧き上がってくる思いのほうに、強く主張してくる。

（わたし、どうして橋を渡ってきたのかな……）

あれはダグレスに質問するというよりも、独り言だったように思う。

それでも、答えて差し上げられない自分に苛立ちを覚えた。

だからせめてもの償いに、提案してみたのだ。

『もう一度、彼の橋を渡ってみませぬか？ディーナ嬢。何か思い出す事もあるやもしれませぬよ？』

ディーナは頷いて見せた。輝いた瞳と満面の笑みを向けられて、ダグレスの心も一緒に浮き立った。

（アンタ頭がいいわね。なるほど。あの橋に行けば、何か思い出せるかも）

ありがとう、いい子、いい子、かわいいこ……。

そう耳元で囁いてくれながら、ダグレスの首の後ろを優しく撫でさすって褒めてくれた。

かつてシーラが、褒めてくれたのと全く変わらぬやり方に、ダグレスは夢見心地で瞼を閉じた。

そうだ。ディーナ嬢が望まれたから、こうしてお連れしたのだ。

ギルムードの命だからではない。

ダグレスは橋に降り立つ頃には、そう確信するまでに至っていた。

* * * * *

風が、橋を渡ってくる。

見据え続けた橋の向こうに、見覚えのある闇色の獣が降り立ったのが見えた。

そしてその背には、少女とおぼしき人影があった。髪は 赤い。顔は遠すぎてよく見えない。

ギルムードは、胸が高鳴りすぎて痛みを覚えた。

情けないが震える左手で、自分の胸を押さえつける。

ギルムードは知らず知らずのうちに、橋の方へと一歩踏み出していた。 望む者のいる、

向こう側へと手を差し伸べながら。

風が、一段と強くなる。

第六章 * 橋を渡る風（後書き）

第六章へまで、きました。ディーナは新しい出会いが待っています。
フィルガはますます、気が休まらなくなります。
新顔入り乱れますが、よろしくどうぞお付き合いください

*** 響かない足音（前書き）**

ディーナ、橋を渡り始めてしまいました。
ダグレスがエスコートしています。

* 響かない足音

* * * * *

橋といつものはあちら側とこちら側との、往来を円滑にしてくれるものだ。

行き来する者は橋の向こうがわ、目指す地に用があるから渡るのだ。

ならば自分の、目指したものは何だったのだろうか？

* * * * *

ディーナは向かい風に目を細めた。

橋を渡ったその先で、あの日待っていたのは？

一歩先行くダグレスが、振り返って促してきた。ひとつ、頷いて見せると一歩を踏み出した。

石造りの橋を渡る。・・・こつ、・・・こつ、と一足ごとに、自分のつま先が乾いた音を立てた。

あの日の霧は、こうした足音ですら飲み込んでいたらしい。

こうしてみると、あの日の条件とはあまりに違いがありすぎる。

記憶のまき戻しはできるのだろうか。

少し心配になってしまう。

晴れて澄んだ空の陽射しは緩やか過ぎて、なぜか物足りないように思えた。

小鳥達の軽やかなさえずりが、耳に届いてくる。この午後の陽射しを謳い上げているかのようだ。橋の下に流れる川も陽光を受けて、輝きを見せながらせせらいでいるのに……………。

ディーナは橋の欄干らんかんに左手を預け、滑らせながら進んだ。石の持つひんやりとした感触が、ディーナの熱を奪って行く。しかし背に受ける太陽のおかげで、たいして気にならない。むしろ左手に集中できて、意識が飛び過ぎずにいられた。あの日を思い返している。

そのせいで自分の意識がぼんやりと薄れており、どこか危なっかしい自覚は少しだがあるのだ。熱奪われた指先だけが、自分をここへと留めてくれている。かろうじて。

……………あの日は確か、全身冷え切っていた。霧の中にずっといたから。それに比べたら何とも無い。

（霧が必要なかもしれない）

己のつま先ですら、見失わないように精一杯だったあの日。

（あの日の霧に包まれて、渡りたい。もう、一度……………。）

何も思い出せないまま、橋の中ほどまで渡った所で立ち止まった。橋の向こう側に立つ人影に、ディーナは今気がついた。弧を描く橋は、中心までが緩やかな上りだ。真ん中が一番高く、後はまたゆっくりと下る。

そのため、向こう岸の方までは見渡しにくかったのだ。

（誰・？男の人、だけど）

ディーナは見開いた瞳を眇めて、様子を窺う。橋を渡った事で咎められるだろうか。

それにしても、風が強い。思っていたよりも風が吹きすさぶのは、周辺に建物も木もないせいだろうか。

しかも自分が橋に踏み込んだのと同時に、強まった気がする。

ディーナが観察するその男も、同じ風に吹かれているはずだが。彼のまとうマントは翻ってはいなかった。全身黒ずくめという格好も手伝ってか、何とも重たそうに見える。

剣を佩いているのか、左手を柄らしき物に預け置いているようだ。剣を持っている。ならば、この橋の見張りか護衛かもしれない。そう見当つけて、小さく舌打つ。

（……ジャスリート家の？）

だとしたら面倒だ。自分はこっそり、抜け出てきたのだから。フィルガの顔がどうしても浮かぶ。

しかし向こう岸に立つ人物は、体つきはがっしりとしていて肩幅が広い。背も高い。

ここからでも鍛え上げられた身体だとわかるほど、逞しそうな男性だ。

明るい栗色の髪は、肩の上に付くか付かないかの長さで波打っている。

よくよく見れば、彼の表情は満面の笑みのようだ。無条件でそれは親しみやすいと思わせるほど、目じりが下がっている。

口元も引き上げられて、笑み作られているようだ。髭を蓄えているせいかよくわからない。

若者なのかそれ以上なのかも、ここからでは見当もつかなかった。

フィルガも背が高いが、この人物よりも幾らか線が細い。髪の色も違うし、髭もフィルガにはない。確実にフィルガでは無さそうだと、ディーナは胸を撫で下ろしてしまう。

フィルガに対して、ちょっと後ろめたい自分が情けない。

（何？なんで？あんなに笑っているの……）

にこやかでいて、泣き出しそうにも見える。その満面の笑みの理由は何なのか、訝しく思った。

ディーナは、歩みを止め様子を窺う。

すると男は慌てた様子で、その場に跪いた。左手を開いて胸に押し当てながら、だった。

そして一瞬だが強く、ディーナをすがるように見つめて来た。

視線がぶつかった気がした。目が合う、なんて生易しいものではなかった。

（……な、に……？……あの、人）

ディーナが思わず怯んだのを見逃さなかったらしく、男はまた慌てたように頭を垂れた。

一連の動作を見守り、ディーナはますますその場に固まるしかなかった。

（あの時も、こうやって迎えられた。……フィルガ殿に）

ひとつ、思い出した。

ただあの時は霧の深さで、橋を渡りきるまでその存在に気がつかなかったが。

フィルガも泣き出しそうな笑み浮かべながら、左手を胸に押し当てて跪いた。

「あの人、だあれ……?」

幼子のように、ディーナは呟く。呆然となったのが、口調にも表れていた。

一歩先に行くダグレスが振り返る。

“あの者は、ギルムード・ランス・ロウニア。 神殿に仕える者でございます。”

そして、我が聖句の主でもあります。ディーナ嬢”

そう肩越しに答えながら、ダグレスはディーナへと向き合った。

「聖句!? アンタ、囚われているの!？」

“はい。かつては、レドの奴めと一緒に”

さらりとダグレスは答えた。ディーナは驚きのあまり声が、かん高く裏返る。

「そうなの!? どうして? 私と意思通わせる事ができているから、てつきり自由なんだろうつて思っていたわ」

どうして、自由に術者の許可無くとも動けるのか。それと同時に恐れにも似た疑問が沸いた。

今までの振る舞いはすべて、術者に命じられてのものだったのか。そうだとしたら、かなり『取り返しの付かない』事態になるだろう。いつでも逃出す気まんまんだっただけだから、未練はないつもりだった。それなのに。

レドと、ルゼ公と侍女のリゼライ、フィルガの顔が浮かぶ。下手したら、さよならも告げずにサヨナラかもしれない。

そんな可能性を予測して青ざめたディーナを、ダグレスは気遣ったのだろう。

すぐさま、勢いよく一蹴りで傍らに寄り添った。支えるように身を摺り寄せながら、優しくささやく。

“ 我の意思でディーナ嬢をご案内致しましたので、どうぞご安心を。”

確かにギルムードには、貴女様をお連れしてくれと頼まれました

が………。こうしてお連れしたのは、ディーナ嬢が知りたいとお望みになる情報を、あやつめは持つておりますが故。いくらかは助けになるやもしれません。僭越せんえつながら、そう判断しました”

ディーナの足りない言葉からでも、ダグレスは的確な答えをくれる。並外れて人の機微を察する事のできる、複雑で繊細な精神こころを持つている獣。そう窺えたから、ディーナは感心していた。その様子を少し落ち着きを取り返す事ができたので、尋ねる。

「神殿の人、なのに？　神殿の人、だから？」

神殿に仕える彼を信用していいのか？　かつて、シーラは神殿に巫女仕えしていたからか？

相変らず言葉が足りないが、ダグレスは淀みなく答えてくれる。

“あやつはシーラに面識あつた者の一人です。………確かに聖句を用いているが、『完全に』従える事はありません。

我の好きに動けと言つてもくれる”

フィルガとは違う。ディーナはそう思つたら、胸が締め付けられた。

ダグレスは、彼との差を強調しているようにも聞こえなくもない。

“あの者は協力を惜しみませんでしょう”

どう反応していいのかわからない。動き出せずにいるディーナの脇を、ダグレスはゆっくりとすり抜けながら進んでみせた。

痺れたように、その場から身体が動かせなかった。ただ視線だけで、黒い獣の動きの名残を追う。

微かな闇の粒子がダグレスに付き従つて行く、その様を。

全身で日の光を浴びていてさえも、その滑らかな毛並みは輝き返すどころか、より一層深く深く　　闇の濃さが際立つ。

闇よりも闇の色。闇そのもの。

瞳をこらせばこらす程、その視界ごと闇に魅せられて飲まれて行

く気がした。

そんな己の美しさの虜^{こいつ}となったディーナを見計らったかのように、ダグレスが畳み掛ける様に促す。

“ あやつの手を取るのも、一案かと？ ”

紅い眼がしかとディーナを捕らえる。逸らせなかった。そもそも逸らす気さえ起こらなかった。むしろその視線にすがりついたのは、ディーナ自身かもしれない。

* * * * *

ディーナは知らず知らずのうちに頷くと、ダグレスに続いていた。

再びこつり、こつりと、つま先が乾いた音を立て始める。

その様子にダグレスは満足そうに胸を反らせると、強く一步を踏み出す。

しかし橋は彼のひづめを受け止めても、何の響きも返さなかった。

* * * * *

* 響かない足音（後書き）

ディーナ、ややダグレスにやられ気味。しっかりして！

獣は本来こんな感じで、虜にしてくれようかと魅せつけてくるあざとい部分を持っています。

まあ、そこも魅力かと。

ディーナは獣に弱いのは、獣フェチだから
・・・・・・・・だけでは、ありません。

（詳しくは、また のちほど）

*** 守護像からの目線 (前書き)**

ヅウオラン チュエウエイ
ヨウラン チュエウエイ

孔雀の尾の形をつくって防ぐ、左・右です。

* 守護像からの目線

いつの頃からか、我々はこうして石像に宿っている。

それは、遙か昔からだっただような。そうでもなかったような。

我々はジャスリート家の守護獣。二羽で、ひとつ。

* : * : * : * : * : *

フィルガは執務を切り上げて、ディーナの部屋を訪れていた。

彼女には色々食べさせねばならない。ルゼ及びフィルガを始めとして、侍女たちとも一致する意見だ。

そのために食事以外にも、お茶の時間を設けている。

特別小食なタチでもない様なのだが、ディーナは気分^{気分}に食事の量が左右されるのは明らかだった。丸二日、何も口にしなかったのはついこの間の事だ。

しかもその後しばらくは、ほとんど食事を残し続けて周りを心配させた。

それは全部フィルガのやり方に対する、反抗の現われだったようにも思う。実際ディーナは自分を前にすると、何も口にする気が起こらないらしく、ただ黙って俯くばかりで、食事の時間を終えていた。

その様子にルゼから、言い渡されてしまった。

『フィルガはしばらく、食事の席を別に設けた方がいいわね?』

身に覚えがあるので何も言い返せずに、フィルガは祖母の言いつけに従った。しばらくは。

まあ、実際はほんの、四・五日。

落ち着いたあたりに祖母の判断で、再び同席が許された。何でも、デイナーからの申し出だったらしい。

フィルガは一人で食事を取らせるから、デイナーは気兼ねせずもつと食事に専念して欲しい。ルゼがそう告げたのを、気に病んだらしい。盛り返す事もないままに、またしても食事の量が落ちたそう
だ。

『私はデイナーちゃんに、一人で食事をとらせるなんて嫌よ? フィルガなんて、放っておいてもちゃんと食べるでしょうから、

一人でとらせるけどね。………フィルガを同席させてアタが食が進まないのを、見るのが嫌なだけよ』

デイナーはそれで納得したというか、丸め込まれたというか。どんな時でもちゃんと食事を取る、と約束させられたらしい。

………以上が、アンタも今日からまた一緒に食べていいわよと、得意げに告げた祖母から聞いた経緯だ。いきさつ

(さすが。お見事です、おばあさま)

そんなデイナーに、祖母は事あることに甘い菓子を与えようとした。
だした。

それでは益々食事の量が落ちるし、栄養が偏る。菓子片手に始終デイナーを訪れるのを、フィルガはそう諫めた。

ルゼに口やかましいと言われ様と、譲らなかったのだが……。

しかし、近頃では方針を変えていた。

菓子でも、何でも。口にしてくれるなら、良しとしよう。

ディーナの目方の減りを食い止める方が優先だ。明らかに、痩せてきているのだ。

祖母はディーナを、もっと女性らしい体つきに持って行きたいらしい。

あまりのか細さに、危うさすら感じてしまう……。抱きとめるたびに、自分もそう思った。だからそれは賛成だ。

別に自分の好みから、遠いせいではない。

ディーナはまた、お茶と菓子を与えられているはずだった。だが、今日はあの様子から察するに資料に夢中になって、手付かずになったままかもしれない。それは容易に想像できる。

だからこうして、フィルガは様子を伺いにきたのだ。自分も一緒に一休み入れるつもりで。

が、いくらノックをしてみても返答がない。不審に思っそろそろとドアを開け、中を覗き見た。

「ディーナさん？……入りますよ？」

声を掛けながら部屋に入って見渡したが、彼女の姿はない。

窓は開け放たれており、窓際に置かれたテーブルに開かれたままの年表があった。

近づき見るとやはり、『シーラ・ジャスリート』のページだ。一瞥したがフィルガは何の感情も見出せないままに、無表情でテーブルの上を見た。

注がれてそのままのカップはすっかり冷え切っており、菓子も申し訳程度に一口かじっただけのようだ。

コレくらい、二口・三口で片付けられるだろうに。

案の定たいして食べたとは思えない様子だ。フィルガは残りの菓子を摘むと、口に放り込んだ。

酸味のきいた紅いベリーが、甘い生地を引き立てる。フィルガも子供の頃から馴染んできた、焼き菓子だったが。

久しぶりに口にしたが、思っていたよりもずっと甘い。冷め切っているが構わず、カップ残りのお茶も立ったままで飲み干した。

彼女の残り物を片付けながら、フィルガはディーナの気配を追っていた。

「・・・・・・・・」

おかしい。確かに彼女の気配は館に残されている。だが、その居場所までは掴めない。

フィルガにとって、『誰かの気配を追い・居場所を確定する』のは朝飯前だ。

こんなものは、術者の基本中の基本・・・・のはずなのだが。その『誰か』に行き当たらない。

両手を差し伸べてみても、ただ虚しく空を切るような掴みどころのなさ・・・・・・・・。

そうだ。この嫌な感覚には覚えがある。何者かに煙にまかれていくかのような、気持ち悪さはかつて出し抜かれた時に味わって覚えたもの。

* : * : * : * : * : *

嫌にレドの気配がわざとらしい程、主張されて感じられるのも引かかる。

フィルガは熱さと冷たさに、同時に貫かれた気がした。瞬時に対処の判断を下す。

「ゾウオラン！」 左手の甲を前にかざしながら。

「ヨウラン！」 次いで、右手の甲も同じく。

フィルガは己の甲を飾る、孔雀の刺繍に呼びかけた。

* : * : * : * : * : *

軽やかな鈴をふるわせたかのような振動が、フィルガの鼓膜を打つ。それは遠く、微かに 。呼び出した者のみが受け取る合図だ。

目の端でふわりとカーテンのドレープが、風にさらわれて持ち上がったようにも見えた。

だが、それも一瞬の出来事だった。カーテンがゆったりと戻りきるよりも早く、鮮やかな藍色が視界に入り込む。

フィルガが両手を下ろすと、足元にひれ伏していた二羽の孔雀が面を上げた。

藍と翠とで囲み飾られた黒い眼が、キロリ、キロリと左右に振れてからフィルガを見つめる。

己の左羽根で手前を払い、尾羽を広げ見せながら身を起こす。美しく渦巻く羽根模様が、幾つもの緑の瞳を向けられたかのようにも見える。もう一羽も、左右対称に全く同じ構えでかشيづいているせいで余計に。

“呼んだか。フィルガ”

と答えたのは、ツウオラン。長い首をかしげて、左目でフィルガをとらえる。

“ か。フィルガ”

とは、ヨウラン。こちらでも首をかしげてフィルガを見ている。ただし、ツウオとは反対の右目でだ。

フィルガから見て右手にツウオ。左手にヨウ。二羽は左右対称に、フィルガを挟んで尾羽を半開きに、身を低く構えたままだ。

孔雀たちが呼び出される時は少なからず、館に異常が起こった時と心得ているからだろう。

いつでも次の行動が起こせるようにと、身を張り詰めて緊張させているのだ。

自分たちが守護するジャスリート家に、二羽の眼をかいぐつた不屈きな輩がいるとしたら。それは由々しき事態に他ならない。

「呼んだ。ディーナを知らないか？館の中に気配はあるが、姿はあるか？」

“ 気配はあるな” と、ツウオ。

“ な” とは、ヨウ。

二羽は瞳を閉じて、答える。

“ だが、姿はないな”

“ な”

「だな」

二羽の断言から確実なものとなった。ディーナはこの館にはいない。

フィルガは冷静に答えながらもその表情は険しく、拳を強く握り締めている。

ディーナは館のどこにもいない。だが、気配は薄れていない。ということ、まだフィルガの領域から外れてはいない事を意味する。

ディーナの気配にすがり付きながら、必死でその居場所を追う。多分、彼女はあそこを目指すはずだ。

瞳を硬く閉じて集中するフィルガを、二羽は心配そうに見守りつつ指示を待っている。

(・・・シアラータ！)

声に出さないまでも、強く強く呼ぶ。返事が返るよりも早くに、要求を告げる。

(お前の目を貸せ！)

否とは答えられなかった。その証拠にフィルガの脳裏に、ここよりも遥かに離れたあの橋の光景が浮かぶ。

石を組んで掛けられた、緩やかに弧を描く橋。その下を流れる川にきらめく陽光が眩しくて、思わず瞳を閉じたまま眉根を寄せる。

自分は今、橋を守護するように据え置かれた石像の目線を借りて、橋を見下ろしているのだ。

フィルガも急ぎ、目線だけで橋を渡る。風が強く渡っているようだ。石像とあつては風を感じないにしろ、視界がぶれた気がした。

(ディーナー！)

橋の中ほどにはディーナが、そして見覚えある黒い獣の姿があった。

やはり向かい風の中にいるようで、赤い髪もドレスもひどく後ろになびいていた。

しかも。橋の向こう岸には、見えないまでも明らかに何者かの気配が待ち構えている。

その何者かは、渡っていないところが憎らしい。渡らなければ結界に触れた事にはならない。

そうと知つての行いだらうと、察しが着く。慌ててフィルガは『自分』に引き戻った。

「見つけた。橋にいる。しかも、ダグレスと一緒にだ」

頭を左右に打ち振り、かきむしりながらフィルガは視線を戻した。心なしか呼吸が荒い。そんなフィルガの様子に、ツウオランが気を使った。

“我々が先に一つ飛びして、見に行つてやろうか、フィルガよ？”

“よ？”

「いや、いいさ。お前らが人目に触れたら、ジャスリート家の面倒になるかもしれないからな。」

それより、館の守護を引き続き頼みたい」

わかった、と二羽はほぼ同時に頷いた。

“承知した” た”

ここから馬を飛ばしても間に合うか。……間に合わないだろう。

そんなフィルガの心中を察したらしい、勘のいい二羽が騒ぎ立てた。

“走ればいい、フィルガ！走れば”

“走れば”

「言われずとも」

そうするしか他にない。最後まで答える暇もなく、フィルガは駆け出していた。

* : * : * : * : * : *

“……ツウオ？”

二羽はジャスリート家の正門に据え置かれた、孔雀の石像の上に降り立っていた。

向かって左側はツウオランの、右側はヨウランの飯の宿ともいえる。

ヨウはなかなか石像に戻ろうとしないツウオランに、声を掛けた。

“ヨウ、留守を頼む。やはり、ツウオも行く。フィルガ、いくら早くても心配。相手はしかも　ダグレス”

“……心配？”

“フィルガ、ディーナにまで立ち去られたら………。もう、お終いな気がする”

思いつめたように呟きながら、ツウオは橋の方向を見据えながら羽ばたいた。

“でも、フィルガ、待てと言ったよ？”

ヨウランが石像に宿ったまま答えた頃には、すでにツウオランは飛び立った後だった。

（ツウオ……）

ヨウランは館を留守にするわけにもいかず、ただ相棒の後姿を見送るしかなかった。

*** 守護像からの目線 （後書き）**

お久しぶりです、フィルガ殿。

ダグレスに出し抜かれて、こんなことになってますよ。

しかも。孔雀たちにまで気を使われるほど、彼の心は結構崖っぷちみたいです。

* 答えない獣（前書き）

ディーナを引戻そうと、声がかかります。

* 答えない獣

ディーナ。

ディーナ。ディーナ。

行くな。

* : * : * : * : * : *

ダグレスからは、きつく言い渡されていたハズだった。
彼の赤毛が『自らの意志で』橋を渡りきるまでは、橋に踏み込んではならない。

声を掛ける事すら、禁じるようにと言われた。

そうでなければ、結界に振れた事になり必ず邪魔が入る。面倒な事になるのは、まず間違いない。

なんだ。簡単じゃないか。

そう笑って受ける自分に、ダグレスは付け加えた。

（我は許せなくなっているかも知れぬ………）

紅孔雀さまのお心に沿わぬ者全てに、牙を剥くやも知れぬのだ。

ギルムード）

例えそれが『聖句の主』であっても、容赦は出来ぬかもしれないと獣は言っていた。

それはそれで、面白い。 そう、受け流した。

自分は十七年以上も待てたのだから、待つくらい何てことはない。そう、高を括っていたのだが……。

目の前に、目当ての少女がいる。

それをただ眺めて待つというのは、ここまでもどかしいとは予想できなかった。

笑い事じゃなかったと思い知る。

ギルムードはただ必死に、見つめ続けるしかない。視線が絡み合う距離まで来たが、少女の歩みはためらいがちで遅い。

期待と熱意。そう言えば聞こえはいいが、下心全開の眼差しに警戒されるのも無理はない。

俺様の長い足なら。……彼女まで、十歩もあれば。

（あの身をさらって）

行けるのに。

ギルムードは言いつけを忘れ、思わず橋へと踏み込んでしまっていた。

* : * : * : * : * : *

戻るのか？

惚けたようにダグレスに続いていたディーナを、呼び覚ますかのように声が響いた。

どこからかと言えば耳ではなく、頭の中で閃いてはじけるよう

な。

(……もどる?どこに?)

ディーナが自分を取り戻したのと、ほぼ同時だった。間を空けず、別からも呼びかけられた。

ディーナ!ディーナ!!ディーナ!!

行くな。

大気を震わせて伝わってきた想いが届く。それは、懇願に近い叫び声だった。

思わず振り返ったディーナは、そのまま瞳を奪われてしまった。一目で心すらも奪われた。他の事は一切忘れて見惚れる。

(なんて……)

驚きから賞賛に変わるにつれて、自然と笑みが浮かぶ。

(なんて、きれいな獣!)

獣もまたディーナを見つめている。四肢を突っ張らせて、必死なようにも見える。

獣は皆それぞれに美しい存在だ。ディーナはいつでも、そう思ってきた。

しかし……。今、目の前にいる獣は『特別』だった。艶やかな銀色の毛並みが、あまりに見事でどうしても触れてみたくなる。どうしても。

ディーナは橋を引き返し始めた。

早く獣に触れてみたい気持ちが現われて、両の腕を^{かいな}広げて、前へ差し伸べながら。

ダグレスは不満そうに唸り声を上げて、慌てて後から追い付き従った。せっかくディーナの心を自分に魅せつける事に成功していたのに、すっかり忘れ去られてしまったのだ。

もう一度側^{かたわ}らで、低く唸ってみたが顧^{かえり}みられることはなかった。忌々しさから、黒い獣の牙が覗く。毛並みが黒い分、白い牙は余計に鋭く見る者に訴えかける。

ダグレスも同じく四肢を突っ張らせて、いきなり現われた銀の獣を威嚇した。

* : * : * : * : * : *

近づいてみて、改めて銀灰色の毛並みにため息が漏れる。陽光を受けて煌いてさえいるからか、所々白銀にも近い。

獣自身から放たれているかのような眩さ。それに加えてディーナ自身から湧き上がってくる嬉しさに、思わず眼を細める。

「はじめまして。私の名前を間違わないで呼んでくれたのは、アナタなの？」

恭しく右手でドレスをつまみ上げて、一瞬だけ膝折った。自分が知る限りの、優雅な挨拶で敬意を払う。

「お名前は？」

“.....”

獣は何も応えない。

ディーナの瞳を見上げるだけだ。ディーナも、彼の瞳を逸らさず見下ろす。

視線を絡み合わせたまま、その場にしゃがみ込んだ。見下ろしては失礼だ。

彼の瞳を間近で覗き込むとまた、感嘆のあまりため息がこぼれた。獣の瞳も、灰味の強い銀色だ。

ディーナはこれと同じ、美しいものに覚えがあった。

雲が太陽を隠さんとして覆った時。日光を浴びた灰色の雲が、こつやつて輝いていた。

それに通じる力強さと、気高さがある。こうしてみると、彼自身が曇天の一部のようではないか。

今にも雪が舞い降りてきそうな、あの鈍く輝く天の一部だ。

(まるでそこから、舞い降りてきたかのよう……………)

応えない獣に、そ……つ……と手を伸ばす。

その長い鼻先までを覆うのは、鷲のクチバシの一部分のようだ。

それは、上あご部分を堅く保護する甲冑かっちゅうのようにも見える。

三角形の形良い耳先は、やや外側に反り飾り毛が縁取っている。

(撫でさせて……………くれないかなあ?)

ディーナはそろそろと遠慮がちに手を伸ばす。わずかに縮まる、

獣との距離。だが、まだ触れるのは微かな獣の息使いのみ。

四肢の造りは狼を思わせるが、足先の方は毛皮に隠れていても鱗うろこが覗く。

規則正しく配された鱗が、水底の魚の腹のように光を弾いているのだ。

「足。きれいな。きらきらしてる」

ディーナが褒めるのを、獣はただ黙ったまま聞いている。気にも留めず、心からの賞賛を続ける。

「しつぽも、すてきね。 孔雀の羽根が混ざったみたいに、模様が浮かぶなんてふしぎね」

微妙な色の濃さのコントラストが、そう見せるのだろう。尾の先など、孔雀の尾羽そのままの渦巻く目玉模様だ。

ただし、白銀と灰銀とだけで絶妙に配されているから、こうして陽の光に照らされなければ分りにくい。

「あのね。．．．．．私にとってね、」

言いかけてそのまま、言葉を紡げなくなってしまった。うまく表現しようにも、ディーナの持つ言葉だけではとてもじゃないが追いつけない。

神妙な顔つきで考え込んでみたが、やはり言葉が見つからなかった。

まあ・いいかと、ディーナはお得意の切り替えの速さで、再び笑顔を見せる。

触れようと伸ばされた手をかわすために、獣は後ずさった。拒絶の意思が伝わって来る。

「．．．．．ごめんなさいね？」

残念だが、無理強いは禁物だ。それでも、諦めきれない。

ディーナは未練がましく、手を伸ばしたままにいる。

獣の毛並み豊かな胸元に顔をうずめて、足のウロコを撫でてみたかったのに。許されないなんて切ない。

手を伸ばせばすぐに、届きそうなのでなおさら。

（せめて耳先だけでも．．．．．）

しつこくもう一度、ディーナは両手を伸ばしてみた。抱っこさせて欲しい。全身で、そう訴える。

すると獣はさらに後退した。

身を低く構え、耳も伏せて唸り出す。

大小様々の、真珠色の牙がこぼれて見えたと思った。

それとほぼ同時だった。

獣はディーナを目がけて、飛び掛った。

* 答えない獣（後書き）

近づいて触れたいのは、皆同じ。

でも。男も女もシツコイのは、嫌われちゃうよ？

いやいや。どうでしょう。場合によりますかね？

ディーナ、獣が気になって仕方ありません。

* 薄衣の翅 (前書き)

獣が飛び掛ったのは、デイナーではなく・・・。

* 薄衣の翅

その薄衣のような翅をむしって。

二度と飛びたてなくすることなど、たやすい事だ。

ためらい無く速やかに、やってのける自信がある。

* : * : * : * : * : *

「……ッ!! ……ディーナ嬢っ!!」

悲痛な叫び声に身体が^{すく}竦む。それでも、すぐさま振り返った。

銀灰色の獣はディーナを軽く飛び越しており、いつの間にか橋を渡って来ていた男の前に立ちはだかつていた。

黒ずくめの男はあと数歩のところで、獣に阻まれて退く。

この男も、ディーナの名を呼んだ。

見覚えのない顔だが、何故呼べるのだろうか？

男もまたディーナがしていたのと同じように、こちらに両手を差し伸べている……。

今度はディーナが後退する番だった。

* : * : * : * : * : *

あとほんの少しで、少女に触れることが出来そうだった。それを、銀の毛並みの『狼』型の獣が邪魔に入ってくれた。

おかげで、あと一步のところでは捕まえ損ねてしまった。赤い……孔雀を。

忌々しく思い唇を歪めて、獣を、見下ろす。
獣とにらみ合いながらも、少女の方を盗み見て納得もした。

（成る程な。獣共も騒ぎ立てるワケだ）

今は怯えが表れてはいるものの、深く澄んだ空色の瞳には強い輝きが見て取れた。

赤　は真紅というよりも、気持ち茶色がかった髪はなんて見事な光沢かと思わせる。

そのせいで一層、見る者に赤を印象づけるのだろう。
それでも、少しだけ柔らかく波打っているおかげだろうか。強すぎる主張はしてこない。

髪と瞳の色。その二つの差異と、自分の記憶にあるよりも幼さの残る顔立ち。

それらを以^もってしても、少女はシーラに酷似している。

おまけに、聖句を用いないままに四つ足共とやり取りまでするだ
と！？

（能力までが同じとはな！　申し分ない！！）

ギルムードは愉快でたまらない。本当に、申し分のない娘だ。笑いが込みあがってきて、収まり様もないではないか。

見下ろした少女は胸元で切り替えの付いた、薄淡い翠の染めのド

レスをまとっている。

風が吹いて、少女の体にドレスがまとわり付く。だからより、彼女の肢体が浮き立って見えた。

折れてしまいそうなか細さは、儚げな蜻蛉かげろうが例えるのならば相応しかろう。

あの透き通った翅はね持つ、哀しさを湛えて魅せるあの虫……。
。その翅をむしる事など、わけはない。

（もう二度と飛び立てない様に、する事など……。）

ギルムードは自分の内側から、湧き上がってくる乱暴な想いを押さえつけるべく、頭を一振りした。

自分は、シーラを諦めていない者の一人だ。

だからずっと手掛かりを探すために、財も努力も惜しまなかった。ジャスリート家に間者を絶やさず送り、出入りする商人には金を握らせ続けたのだ。もちろん、私財から。

シーラに関わり深い獣から、情報を得るためには彼らと渡り合う必要性を感じた。だから。

命懸けとも言われる『聖句の間』にまで臨んで、聖句まで修得したのだから！

（我ながら感心するな。そのしつこさには！）

そうやって、今日まで来た。

ダグレスや間者から、その待ち焦がれた報告が届いた時どれほど狂喜したことか。

それを、今一步のところで……。

とんだ邪魔が入ったものだ、内心舌打つ。その怒りのままに、殺気だつて獣を睨んだ。

だが。もちろん、獣は怯まない。

「・・・・・・・・・獣め」

思わず吐き捨てるような、言葉が漏れた。

ギルムードは獣の属性は何かと、観察していた。未だかつて渡り合った事のない型の獣。^{タイプ}

見た目だけなら『犬・狼^{けんろう}』型なのだが・・・・・・・・。いやしかし、わずかだが『鳥獣』型もうかがえる。

その形体だけで属性を見極めるのは、少々無理がある。判るのは、この獣のレベルが高いという事だけだ。

闇雲に攻撃を仕掛けてはこないで、こうやって様子をうかがう余裕のあるあたりが。

（下手したら、ダグレスと同等。あるいは、それ以上・・・・）だからこそ。一番効果的な章の聖句を見極めて臨まねば、こちらの身が危うい。

（その前に獣に一太刀浴びせて、動きを鈍らせる必要があるか）

そう判断しギルムードは、剣の柄に手を掛けた。

「やめてっ！この獣^こを傷つけないで！！」

少女は叫ぶと駆け寄り、獣とギルムードとの間に割って入った。全身で銀の獣を庇うため、立ちは大かったのだ。その無謀とも取れる行動に、ギルムードは驚きが隠せない。

（シーラ。貴女は獣の味方だったものな・・・・・・・・いつでも）懐かしさと哀愁に、同時に胸を締め付けられる気がした。

必死に自分を見上げて、睨む少女のまなじりには雫が光っている。

ギルムードは慌てて、その場に跪いた。腰の剣も鞘ごと外して下

ろし、目の前に横置きにして見せた。

敵意の無さを主張するためだった。頭を深く垂れると、無礼を詫
びる。

「これは……貴女様の獣に無礼を致しました。お詫び致し
ますので、どうか ご容赦を」

「私の、じゃないわ。でも、いじめたりしないでちょうだい！」

ディーナ嬢は両手を大きく広げて、その背に獣を庇ったまま言っ
た。声までもが、か細い。だが、不思議とよく通る。

ギルムードは益々頭を深く垂れて、許しを請う。

少女の荒かった息遣いがゆっくりと、落ち着きを取り戻し始めた
頃。気配を窺って、やっと面を上げた。

「お初にお目にかかります。私は、ギルムード・ランス・ロウ
ニアと申す者です。」

以後、お見知りおきを。ディーナ嬢

「何で私のことを知っているのかしら？」

「それは。神殿にまでその誉れが、届いております故。ディーナ嬢
のお噂で持ちきりですよ」

「……誉れって何？」

少女は腕を下ろそうともせずに、警戒したままだ。

「おや。ご存知では、いらしゃらないのか？では。どのような
噂か、お知りになりたいとは？」

「……知らない。けれども、まあ。だいたい察しは付くか
ら、あえて知りたいとも思わないよ」

「ディーナ嬢。私はその噂を聞きつけて、こうして『お迎え』に参
ったですよ」

恭しく右手を差し出しながら、ギルムードは告げた。少女が疑問
から、口を開くよりも早く続ける。

「どうかその御力で。荒ぶる古神獣^{こしんじゅう}たちの心を鎮め、民に平穩

と恩恵をもたらす巫女姫として神殿にお上がり下さいますよう。・
・・・お願い申し上げます」

そう一息に願い、申し出た。

*** 薄衣の翅 (後書き)**

やっと、接触できました、のギルムード。

このまま、暴走できずにいられるでしょうか？

(たぶん、無理です)

第七章 * 橋での対決 〵一戦目〵 (前書き)

一戦目は・ギルムード・VS・ディーナ・

第七章 * 橋での対決 ―一戦目―

どうして、みんな同じことを言っただろう。

奪ったとか。野放しに出来ないとか。

……私も獣たちも、みんな。自由なのに。

* : * : * : * : * : *

ギルムードの差し出した右手と、男の浮かべた笑みとを見比べながら。少女の表情が全てを物語っていた。

せつかくの可愛い顔を険しくさせて、何とも煩わしそうだった。

そのうろんげに見下ろす様子から、答えは聞くまでもなさそうだった。そして実際その通りだった。

「……イヤだって、言ったら？」

「なぜです？ 悪くない話だとは思いませんか？」

「気が乗らないわね」

「そうですか。残念です。それなら、仕方ありません」

手を引っ込めると、己の目の前で拳を握り締めた。左手で剣を持ち上げ、腰帯に掛ける。

そして立ち上がり、頭を深く下げたまま告げる。

「ならば、無理にでもご招待するまで」

告げたと同時に伸ばした腕を、少女は油断無く見極めていたらし

い。飛び退いてかわしたのには、正直驚いた。

仮にも訓練を積んだ軍人の動きをかわすとは。思ったよりも身軽で、勘もいいようだ。

「そういうの！世間じゃ、誘拐っていうのよ！！」

ギルムードはディーナを捕まえ損ね、空を切った勢いのままに、剣の柄に手を掛けた。

少女に刃を向けるためでは、無論ない。

獣を往^いなすためだ。ディーナ嬢お気に入りのご様子の、銀の獣。コイツを聖句で縛れば、彼女もまた大人しく言う事を聞く気にもなるだろう。そう踏んだ。

「はは。あなたの立場じゃ断れないのに、断るからいけないんですよ」

「何よ、ソレ！？ワケが判らないわよ」

ギルムードの動きに、ディーナは体を強張らせて叫んだ。

（怯えても竦^{すく}まぬか、ディーナ嬢）

ディーナは上体をやや前に構えて、両脇を引き締めいつでもかわせるように、膝を曲げて立っている。

男から、柄にかけられた手から、視線を外さない。ギルムードは感心した。

素人ならば剣をちらつかせただけで、竦みあがってしまう。そうなれば、自分の思うツボだ。

いっそ、そうあってくれたら扱いやすいのだが。この少女には当てはまらないらしい。

空色の瞳に、鋭利なものと同じ輝きが宿る。面白い。その目を細めた。

ギルムードは斜めに体を構えると、左の親指でわずかに剣を浮かせた。

・・・カチン・・・ン・・・と、剣が鞘から顔を出すときの、乾いた音が響く。一気に場が張り詰めたものとなった。

鞘から覗き鈍く放たれる光に、流石のディーナ嬢も凍りついたようだ。

「次々と獣を術者から奪う貴女を、誰が野放しにしたまま 放置すると思いますか？」

「奪った！？とんでもない言いがかりは、何を根拠に言ってくれるのよ！？」

身に覚えなんてないね、と言い切るディーナにギルムードは改めて、少女の能力のタチの悪さを見た気がした。

自覚がないのだ。それは意識せずに、能力を振るっている証でもある。

それはすなわち、自然と身に備わっているという事。

(・・・『天才』型か。厄介だな)

我々を脅かす、最強の術者に成りうる少女が。今、目の前にいる。

(これはこれは。ますます、意地でも我々の手を取っていただきますよ。ディーナ嬢)

「では、レドは？ダグレスは？このギルムードの聖句の徒であった獣たちの、

今のこの状況は何と説明下さるおつもりですかな」

「獣たちは最初から、誰のものでもないでしょう。それを奪ったと言っのならば、あんた等の聖句とやらがそうでしょうよ」

「デイナー嬢は、勘違いされていらつしやるようだ。聖句は獣たちと【共存】して行くにあたって、欠かせないものですよ」

言葉を交わす毎に、ギルムードは慎重に剣を抜いていった。もう半分以上、刃はむき出しになっている。

「共存？そのために必要だったら、自由を奪ってもいいの？」

「知りたいですか？神殿に上がっていたただいた後で、納得行くまで詳しく。このギルムードがご説明致しますよう！！」

* : * : * : * : * : *

言い終えたのとほぼ同時に、一気に剣を抜いた。大きく足を踏み込む。

・ガキィ・・・ィ・・・ンン・・・！！

辺りいっばいに、金属とそれに負けない何かがぶつかった音が響き渡った。

第七章 * 橋での対決 ―一戦目―（後書き）

・・・みんな「『フィルガ殿』ですね。デイナーさんの中では。ル
ゼも含まれますが、怒りはフィルガ行きです

ギルムードもフィルガと同じ見解のようですね。術者として、デ
イナーを見ると。

かわいそうに（どっちが）ギルもフィルガも・・・ひとくくり、で
すか。

* 橋での対決 〓二戦目〓（前書き）

二戦目は、
・ギルムード・VS・銀の獣・

* 橋での対決 二戦目

この身の誇る跳躍力。何者にも屈する事のない牙。

湧き上がってくる、抑えようのない躍動感。は獣たるものの本性。

その醜態を晒してでも、彼女は渡さない。

* : * : * : * : * : *

ギルムードの刃と、銀の獣の牙とがぶつかり合う。

辺りに響き渡った不協和音が、余韻を引きずる……。デ
イーナは思わず閉じていた目を開けた。

「なっ……。！？やめてよっ！！」

てつきり刃は、己に向けられたものと思っていた。

（かわしきれない！！）

そう体が告げた。だから、両腕で守勢を取りその時を 覚悟し
たのだが。

一瞬後 。瞳を開けると獣に庇われている己に気がつき、絶叫
した。

「何やってるの！アナタ、避けなさいっ！！」

獣は退こうとはしない。

* : * : * : * : * : *

ギルムードは剣を引き抜いたと同時に、銀の獣の牙を受けていた。巨体の勢いある重みが、獣の牙一点に集中した一撃だった。

獣に押し倒される前に、振り払う。ギルムードは不覚にも、よろめいてしまった。

右手に響き伝わった衝撃に痺れ、剣も落としそうになった。だが、どうにか堪える。

対して銀の獣はギルムードから、顎に一撃を喰らっても体勢を崩さず、身を翻し少女の前に着地していた。

鼻に深くシワを刻み、牙をむき出したまま低く唸り声を上げている。獣の牙と牙の間から覗く舌が、嫌に赤くて気に障った。

獣の発する殺意むき出しの敵意に、容赦の入り込む隙など無いのは明確だった。

ディーナに触れるもの全てに、向けられるであろう感情にギルムードはあざ笑う。

「獣めが！四つ足風情が、ディーナ嬢をどうしようというのだ？身の程を知れケダモノ」

“.....”

吐き捨てながらも、睨^{にら}み合いは続く。

少女に庇われながら、この獣はずっとギルムードの動きを眼で追っていた。

いつ躍り出てくるやらと、互いに睨み合っていたのだ。

はじめにディーナの腕をつかみ損なった時点で、次に手を伸ばし

た途端に獣が割り込んでくるだろうと、
予想は付いていた。

「ちょっと、何てこと言うのよ！貴方・・・いいから！避けなさい！」

ディーナ嬢は抗議の声を張り上げた。なぜ、ここまで四つ足風情に肩入れするのか。

ギルムードには理解できない。その上、自分の存在の方が下に見られている気がする。

ますます余計に、この獣を配下に置きたくなつた。多分コレは、嫉妬というものだ。自覚はあるが、止められない。

「そうだ。退け獣。騎士^{ナイト}気取りじゃ、命を落とすぞ？ 身の程をわきまえるんだな」

ギルムードは右腕を目線の高さにまで上げ、引き構えて狙いを定めた。左手は剣刃に添え置く。

視線は剣の切っ先の延長上、銀のケダモノへと定めた。
あれだけの距離を、一蹴りで縮めてきた脚力だ。さっきよりも近い分、より一層の負荷がかかるだろう・・・。

手振れを起こしたら、敗者はギルムードに決まる。ここまで自分にさせる獣には、腹立ちは隠せないが事実だ。

それなりの対処で迎え撃つしかない。

「掛かって来い、ケダモノ・・・。」

ギルムードは挑発する。

* : * : * : * : * : *

「・・・・・・・・・・」

“・・・・・・・・・・”

獣は挑発には乗らず、ただギルムードの向けた刃に集中していた。そうだ。忘れてはならない。

（・・・・・・・・ディーナを渡さない。それが目的だ。男をしとめるのではない）

例え・・・二度とディーナにいらぬ手出しが出来ぬように、闇に葬りたい相手であつてもだ。

獣であつても、ケダモノに成り果ててはならない。なるつもりも無い。この身は、ディーナを守る為のみに使う。

ましてや、ディーナの目の前だ。殺戮じみた戦いを、繰り広げるつもりはない。

「掛かつてこぬのか？獣よ、オマエの牙はただの飾りか？」

挑発には乗らない。

「どちらがディーナ嬢に相応しいか。獣の身であつては、推し量る事もできぬお頭か？」

言葉には耳を貸さず、男の動きが発する音のみに耳を傾ける。

勝負は一瞬で決まる。男の刃を奪ってしまえば、こちらの勝ちだ。

獣は狙いを定め続ける。互いに睨み合ったままの、間合い取りは

続く。

『．．．．我、ギルムード・ランス・ロウニア
が眼前の地に伏す【銀のケダモノ】よりも高見に立つ』

男が先手を打って、詠唱を開始した。銀の獣は挑発には乗らない。
そう判断し、煮え切らなくなったのだろう。

獣は四肢をより一層、後方へと引いた。後ろ足に体重を掛ける。
ギルムードはそれを見逃してはおらず、自身も重心をやや後方へと構えた。体勢を整えながら、詠唱を慎重に紡ぎ始める。

（さあ、どうするか．．．．。俺の属性は読めたか、ギルムード？）

ギルムードの狙い。おそらくそれは、物体と精神の両方から自分を弱らせようという考えだろう。

聖句で心を縛りつつ、剣でこの身の勢いを削ぐ。あるいは刃で身をいなしつつ、聖句で心を屈させようといった所か。

面白い。そう思う。この俺を縛れるものがあるとしたら、それはディーナ。彼女だけだからだ。

（だからな、ギルムード！俺は縛れぬぞ。オマエのちゃんな聖句ごときではな！）

言ってやれないのが癪に障る。だが、獣は心の中で罵声を浴びせた。

『我は暗闇を称え　その全ての闇をもって包み込む。包むは身体では無く、その魂の在り処』

闇の章の聖句！

（そう来たか、ギルムード！）

獣は全身の毛が逆立つのを感じた。

* 橋での対決 〓二戦目〓（後書き）

お互い一歩たりとも譲りません。

ディーナがからんでいるのですから、当然です。

でもちよつと、ギルも銀（仮名）もわくわくしてやいませんか？
しますね。

戦うのが本質的に好きなのでしょう。二人（？）とも。バレ
バレですね。銀の彼の正体

* 橋での対決 〱二戦目・聖句VS牙〱(前書き)

〱二戦目・ギルムード・VS・銀の獣〱

戦いも後半戦です。

* 橋での対決 ー二戦目・聖句VS牙ー

イヤだ。絶対に。誰にも渡したくない。

そんなことに、なるくらいなら。

私だけの………獣に。

* : * : * : * : * : *

『我、ギルムード・ランス・ロウニアが称えるは、闇の属性』

(………これ、アレだ！フィルガ殿がレドに使った『聖句』・
………！？)

ディーナは、思い当たって血の気が引いた。さっきまで怒りのため火照っていた頬が、一気に冷えたのを感じる。

(イヤ！イヤだ！絶対にイヤ………。)

朗々とギルムードの声が紡ぎ上げているもの。それはフィルガが用いた文言とは異なるようだが、確実に目的は一緒だろうというのだけは判る。

(このキレイな獣^コが、あの得たいの知れない人の支配下に置かれるなんて！絶対にイヤ！！そんな事になるくらいなら)

私が。彼を完全に……。自分のものにする。

寒気がする。そんな事を思いつく自分自身に、嫌悪すらこみ上げてきた。それでも。

（私が彼を・自分のものに、する。他の誰かに、支配させてしまうくらいならば！）

ディーナはその思いに、全身を貫かれた気がした。

* : * : * : * : * : *

『 我の称える闇よ。彼のものは、そなたの属性。それはすなわち、その身のうちに闇を持つ事を意味する！ 』

ギルムードが聖句を唱え始めてからも、銀の獣は飛び掛っていく。

その度にギルムードは、巧みに剣を操って攻撃を防ぐ。獣は今のところ、聖句に囚われた様子は見られない。

退かず、かといって、ギルムードに引けを取っている様子でもない。

飛び掛っては、ギルムードの刃と牙がぶつかり合う。鈍く、時に鋭く、耳を衝撃音が貫く。

ディーナは身動きが取れないまま、立ち尽くしていた。自分が引くわけには行かない。

この銀の獣を置き去りにして・・・等という選択肢は、ディーナには最初から無い。

何が出来るわけでもない。だが自分のために、獣が危険を冒してくれているのだ。

ディーナもいざとなったら、この身を剣の前に晒す覚悟がある。
そのためには、こうして離れず見守り続けるのだ。

銀の獣はディーナの目の前に着地しては体勢を整えて、果敢にまた飛び掛って行く。

ギルムードの柄を握った、その手首だけを狙っているようだと思いがつく。やろうと思えば男の生身にその牙を掛けられるだろうに。
銀の獣の狙いが見えた気がした。彼は、血を流させる気はないのだ。

ただギルムードの手から、武器を奪うつもりで攻撃を仕掛けている。そうとしか思えない。

何度も何度も。防がれながらも、同じ事を繰り返しているのは、ギルムードの手首を痺れさせる。

その目的一点のためなのでは、ないのだろうか？

(……そんな、なんでよ)

何て言い表せばいいのか、わからない。わからないが、ディーナの胸に熱いものがこみ上げて来る。瞳にも、同じく。

「いい加減に……！しなさいよ、ギルムードのバカあ！
！この獣が加減してくれているのが、どうしてわからないの！」

瞳を潤ませながら、ディーナは叫んだ。ギルムードの聖句を、いい加減にしろと遮るために。

頭を左右に強く、強く打ち振る。いつの間にか溢れていた、涙が飛び散った。

『包め。月も星も灯らぬ夜闇よ。陽射しの中、造られる影という名の闇よ……』

「何が『高見に立つ』よ！！恥を知らないよつ、おこがましい！！」

魂からの叫びだった。渾身の訴え。それは、ギルムードだけではない。デイナー自身、自分に対する叱責だった。

（自分に危害を加えようとする人間にまで、手加減してくれる心の持ち主なのに！それを『聖句』や何かで、力づくで支配下に置こうとするなんて……。最低だよ）

それは己のものにしてしまいたい、などと考えた自分自身も含まれている。

（そんなこと、許されるもんか！）

デイナーは縛られて自由を奪われることの、真の体験をしたことが無い。せいぜいジャスリート家から、自由に行き来できないくらいだ。

それだけでも 息が詰まって、死にそうだとすら思うときがあるのに。

獣を何だと思っているんだろう、『聖句』を使う術者はみんな……？

『……人のこの胸の内に巢食つ、暗黒という名の闇よ……』

ばやけた視界で眼差しを向ければ、先ほどと全く変わらぬ光景の
ままだ。

ギルムードは聖句を唱え続ける。銀の彼も、怯まない。

ツ、キイイ・・・イイ・・・ン・・・！！

「なっ！？」

ひとときわ、甲高い衝撃音が響き渡った。ディーナは思わず息を呑
んで、ギルムードと獣を見た。

見ればギルムードの手にしていた剣の刃が折れ、柄だけを握り締
めている有様だった。

「・・・！！？」

ギルムードは、信じられないといった表情をして見せた。しかし
呆けたのも一瞬で、すぐさま刃のない剣を構える。

「貴様！！」

銀の獣も間を与えず、ギルムードに再び踊りかかっていた。
変わらず、手首だけを狙って・・・。

「なめるな！貴様ごときに、手加減される俺ではないわ！！」

ガ・キ・・・ツ・・・ツ！

今までに無い嫌な音が、ディーナを震え上がらせた。

* 橋での対決 〱二戦目・聖句VS牙〱（後書き）

ディーナも自分にこんな気持ちがあったのか、と戸惑いを隠せません。それは、アレだよ！ディーナさん。

フィルガも君にそれと同じ事考えてるんだよ！

・・・まだわかんないよねえ。と、誰か突っ込んでくれるか、自分で気が付くかは。

まだまだ、先の話です。

* 橋での対決　くギルムードの【姫君】く（前書き）

引きに引いております二戦目。

ギルがやや、危ないです。

* 橋での対決 くギルムードの【姫君】く

さあ・・・・・・・・。

目を覚ましてくれ。

俺の【姫君】。

* : * : * : * : * : *

ひつ、とディーナは息を飲み込んだまま、言葉がでなかった。いや、出せなかった。

瞬きすら封じられたように、ただ。ギルムードの柄が、銀の獣の顎に一撃を食らわせたのを眺めていただけだ。

ディーナは声が出せない。ギルムードの手にした柄が、鮮血で赤く彩られているのを目にしたからだ。

(赤い・・・・・・・・! ? 血、っ！)

その事に奪われ、瞳も意識も逸らす事ができない。何か抗議の声を上げようにも、唇はわななくばかりで用を成さない・・・・・・・・。

「ほうう。一撃喰らっても、見事に着地できたか。以外にやるな、ケダモノ？」

ギルムードは感心したように、言葉を掛けた。だが口調は、見下ろした者の視線だった。

語尾にはわずかに、笑いを含んでいる。その小ばかにした様子は、油断した者への嘲笑。

「……たかだか、刃の一つや二つ。そんなもの。俺から奪ったくらいで、王手を掛けたと思うなよ？」

勝ち誇ったかのように、両手のうちで構えた柄をくるくると回転させて見せる。

「まあ、だが褒めてやる。鍛えられた刃、その牙で削いだこと賞賛に値する。だが……。残念だったなあ」

ディーナは銀の獣が、変わらず自分を庇う体勢なのでその背しか見えない。

見えないが、だが……。獣の左脚もとに、血が飛び散っているのが見えた。

そして、それはどんどん滴って、血溜りを造って行く。

（な、っ・どこか、怪我を！？）

「何せ柄だけで、貴様に切りつけることが出来たものな。ま、二度目は通用しないだろうけどなあ。そこまでバカじゃなかるう？」

ギルムードは言いながら、柄を今一度構える。そして弄ぶ手を止め、大げさに一振りしてみせた。

・フ、ウオン……。ン。

そう、軽やかな空を切り払う音と共に、振り払われたはずの光がディーナの瞳を射る。

「!？」

そこには再び、刃の持つ鋭利な輝きが現われていた。

「油断したなア。コレはな、いざって時を待ち侘びている俺の
深窓の姫君さ。実際俺もこの顔、かんはせ久しぶりに拝ませてもらった・
・・。何せ姫は箱入りだからな。滅多な事じゃ、この顔は拝めん
ぞ。オマエ。癪に障るが、俺の姫が相手と認めおったようだぞ！」

大仰にギルムードは【姫君】を高々と掲げる。そして己の目線に
まで下げると、恭しくその華奢な剣身からたに口付ける。
獣の鮮血をまとった、彼女のその身にだ。

ディーナには、気が狂った者の行いにしか受け取れない。
本当に主は【姫君】なのだと・・・。ギルムードはそれに
付き従う騎士ナイトなのだと、納得するより他はない。
一連のギルムードの行動をこうやって、目の当たりにすればイヤ
でもそう思える。

気狂いの姫。それに仕える騎士も、それに準ずる。

「そして俺の【姫】は、眠りから呼び覚ましてくれた勇者の【血】
をご所望だとさ。身に余る光栄と思えよ、ケダモノ」

ギルムードは愉快そうに笑って見せたが、目は笑ってはいなかつ
た。

冷たく獣を見据えながら、仕込み刃を得意そうに見せびらかす。

“・・・・・”

「どうした、ケダモノ。今一度、掛かってこぬのか？それともいい加減、騎士^{ナイト}の座を退く気になったか？」

“ ”

からかいにも獣は応じず、動じない。狙いは一点のみを、見定めている。

その向けられた眼差しに、変わらぬ威力を感じ取ってギルムードは唸った。

「ならば 。こちらから行くぞ！」

* : * : * : * : * : *

デイナーの瞳は、獣の滴り続ける血溜りに釘付けだった。そして、ギルムードの言う【姫君】とやらの、鋭利な美しさにも。

ギルムードが切り込むための一步を踏み込み、銀の彼も【姫君】に牙を掛けようと大きく跳んだ 。

それはそれは、永遠に等しかろうと思われた一瞬の時だった。デイナーにとっては

デイナーは声にならない声で、叫び声を上げていた。

＊ 橋での対決 〵ギルムードの【姫君】〵（後書き）

だいぶギルムードが饒舌です。

久しぶりに、骨のあるヤツに出遭えてゴキゲンなのです。

*** 橋での対決の行方（前書き）**

お互い一歩も引かず、睨み合いは続いておりますが・・・。。

* 橋での対決の行方

『高見に立つ』

幾度その言葉に、身をゆだねて来ただろう。

しかし。それはもう、終わりにする時が来た。

* : * : * : * : * : *

「やめてったら　　！！」

ディーナが叫び声を上げたのと、同時だった。

「.....な、に.....！！？」

ギルムードの右肩に激痛が走る。思わず柄を持つ手が緩んだ。
それでも、ギルムードは【姫君】を落としたりはしなかった。
.....かろうじて。

背後からの予想も付かない攻撃に、大きく舌打った。

銀のケダモノではない。獣は変わらず、ディーナをその背に庇っている。

「　　放せ！！ダグレスっ」

今までただ大人しく様子を見守っていた黒い獣が、ギルムードの肩に牙を食い込ませていた。

* : * : * : * : * : *

油断していた。油断以前に・・・ギルムードはダグレスに対して、注意すら払っていなかった。

いまだに己の配下にあると信じて、疑いもしなかったからだ。

ギルムードは苦痛と憤りとで、顔を歪ませる。肩越しに、その紅い眼と目が合った。

「放さぬかつ、ダグ、レス・・・・・・・・!!」

命令に背きダグレスは、なおも牙を食い込ませ続ける。

・・・キ・イイ、ン・・・イイ、ン・・・・・・・・

ついに抗いきれずに、ギルムードは【姫君】^{けん}から手を放してしまった。

石橋に落下した金属の、乾いた音が響く。【姫君】の口惜しそうな、金きり声だ。

それを見届けて、やっとダグレスは牙を弛めた。牙が抜かれると、服の下で一気に血が溢れ出すのを感じた。

衣服が吸いきれず、腕を伝って血が流れ滴る。指先が痺れる。それでも。

痛みに顔をしかめながら、すぐさま【姫】に手を伸ばし、拾い上げようとした。

「!?!・・・・・・ダグレス、貴様」

ダグレスの俊敏さが、一枚上手だった。獣の蹄が、【姫君】を押さえつけていた。

屈んだギルムードに、真正面から顔を突きつけて。ダグレス

は、静かに告げる。

“ディーナ嬢は、止めるようにと仰った。聞こえなかったのか、ギルムード？”

ダグレスは微動だにしないまま、目だけで銀の獣を促した。目配せを受けて、銀の獣は自分に抱きついて庇う少女の身の下に、その背を滑り込ませる。

背に少女を担ぎ上げると、銀の獣は軽やかに跳躍した。ディーナがせっかく渡ってきた橋を、一蹴りで戻りきる。

「ッ、ディーナ・・・・・・・・・・！」

ギルムードは思わず追いかけようと、ダグレスに背を向けた。痛む右肩を左手で押さえつけながら、駆け出そうと・・・・・・・・・・。

しかし。それすらも、阻むモノが目の前に降り立っていた。

（いつのまに！？）

ギルムードは己の左手により一層、力を込めた。

“・・・・・・・・・・行かせぬよ”

目にも鮮やかな藍色と翠の尾羽を広げて、視界を遮る孔雀がギルムードに宣告する。

孔雀の尾羽の渦巻き模様が、いくつもの翠の目玉に見えた。ギルムードが思わず怯むほどの、眼力だった。

“・・・・・・・・・・行かせぬよ”

それは、孔雀の意思の強さの現われだろう。その羽根が告げているであろう事を、くり返し告げる。

ギルムードは獣と鳥に挟まれて、その場で身構えるしかなかった。

「血迷うたか、ダグレス！俺との絆は断ち切るか！」

“ディーナ嬢さまの御心を見舞った振る舞いは　許さぬよ・・・”

獣の据わり切った瞳が、何を映しているのか。それは、もはや訊くまでも無かった。

ほんの少し前まで、自分を気使う心のあった獣が・・・・・・。まさかこんなにも呆気なく、寝返るとは。

ギルムードは自分の甘さを呪った。だが齒軋はきしつても、今さらもう遅い。

『・・・・・・我、ギルムード・ランス・ロウニアが！黒き獣・ダグレスよりも、高見に立つ』

ならば、もう一度。その瞳を、こちらに向け直させるまでだった。正気に戻してやろうと思った。聖句を唱えだす。

『我は暗闇を称え、その全ての闇をもって包み込む。包むは身体では無く、そのものの魂の在り処』

ダグレスの好み、そして忌み嫌う闇の章の句だ。淀みなく、迷いなく。言葉を獣に見舞う。

それは　何度も唱え口に馴染んだ、ギルムードのもっとも得意

とする章のはずだった。

“効かぬ”

ダグレスに変化は無い。怯みもしない。

それでもギルムードは、紡ぎ続ける。絶対の自信をもって。

『包め、月も星も灯らぬ夜闇よ。陽射しの中で造られる影という名の闇よ。人の心の内に、』

“効かぬよ”

ダグレスは聖句を物ともせずに、途中で遮った。そのまま、丸腰のギルムードへと飛び掛る。

その巨体に正面から掛かれたとあつては、たまらず組み敷かれてしまった。

「・・・・・・・・ダグ・・・・・・・・」

獣は喉首に牙を突きつけた。獣の息使いが、喉を撫でる。

ギルムードは思わず、両目を瞑った。

“我は言つたはずだ、ギルムード？”

紅孔雀様の御心に沿わぬ者には、『牙』をと。

* 橋での対決の行方（後書き）

「ここでハッキリさせようじゃないか」

な、ギル＆銀（仮名）でしたが。

ディーナの一声で、両者は引かざるを得なくなりました。この二名は後々、勝負をつける・・・予定です。

第八章 * 守られている自覚（前書き）

ディーナ、自分の甘さに一人・反省会です。

第八章 * 守られている自覚

．．．．．自分は叩かれるかもしれない。

何故そう思ってしまうのか、理解できない。

こんなにも、全力で守りたいと思っているのに。

* : * : * : * : * : *

デイナーは泣きじゃくりながら、銀の獣にすがり付いていた。

「．．．．．だい、じょぶ、つじゃ．．．ないよね？ごめんね、私が．．．．．」

橋を渡ろうとしたせいで？それとも、『何者をも物ともしない』術者じゃないせいで？

ともかく、デイナーは己の無力さを責めていた。自分自身を、軽く呪ってしまうほど。

「血が．．．．．。どうしよう、痛いでしょう？」

デイナーは恐る恐る、銀の獣の傷口に手を這わせた。

銀の毛並みに、固まり始めた血がこびり付いている。そのせいで、ぱつくりと開いた傷口が見えた。

出血は収まってはいるようだが、獣は左足を地には着けず浮かせていた。体重を掛けると、痛むのだろう。

（それなのに）

ギルムードに柄で下顎に、一撃を食らわせられたのだ。その上。続けざまに仕込んであった隠し刃で、左肩口を刺されたのだ。

（・・・・・・・・それなのに・・・・・・・・）

銀の獣は背にディーナを担ぎ、恐るべき跳躍力であつという間に。

こうして、ジャスリート家の館に送り届けてくれたのだ。ギルムードも、ダグレスも、あの橋に置き去りにして。

* : * : * : * : *

ディーナは館の庭園の地べたに、しゃがみ込んで泣きながら途方に暮れていた。銀の獣の瞳を覗き込みながら、嗚咽が止まらない。

「・・・・・・・・どうしよう、ケガ。 フィルガ殿なら、どうにか出来るかもしれないけど・・・・・・・・。 もしかしたら、貴方の事も従えてしまつかも、しれないし」

“・・・・・・・・。”

なにせ口を付いて出るのは、情けない事この上ない泣き言ばかりなのだ。

申し訳なさと悔しさで、涙が止まらない。結局の所、自分が頼りにしてしまうのはフィルガなのだ。

こうやって何かあった時に、自分が頼りにするのは彼だという事。ルゼでもリゼライでもなく、真っ先に浮かんだのはあの灰色の瞳だった。それを思い知らされた。

あれだけ、自分でやって見せる気でいながらだ。あの宣戦布告。

『フィルガ殿を超える術者になってみせる、彼の保護を必要としな
いまでになる』は、身の程知らずも、いいところだろう。

ディーナは今更ながら、己のレベルの低さを恥ずかしいと思った。

「アナタが橋を超えれば、アナタという光を目指す連中が……」

フィルガの言うとおりだった。自分は彼の庇護を突っぱねておき
ながら、このさまだ。

自分は彼に守られていたのだ。

フィルガはディーナがこのまま外部に接触すれば、望まない結果
になるのを見越してくれていたのだろう。

レドを従えた時に、先に視線を外したのは彼の方だったではない
か。フィルガの様子が今になって蘇る。

（フィルガ殿、苦しそうだった……。私、泣いてて気が回
らなかった）

うつ、とディーナは固く瞳を閉じた。ひととき大きな嗚咽が込み
上げてきて、胸が詰まったからだ。

「フィルガ殿に、貴方のこと診てもらおう。私の事、きつと怒るか
もしれないけど。言う事ちゃんと聞く、って約束すれば貴方の
事『聖句』で縛ったりしないと思うの。私は……。あきれて
叩かれるかもしれないけど、何てことないわ」

“・・・！！？”

ディーナは、それくらい当然の仕置きと思っている。これだけ、周りを巻き込んで大事にしたのだから。大人しく殴られよう、と思っただ。

銀の獣は相変わらず一言も発しない。だが決意固めるディーナに、小さくかぶりを振って見せた。ディーナはそれを、治療の拒否と受け取った。

「大丈夫、きつと。・・・貴方は悪くないんだもの。叱られるのは、私よ？だから、手当てをしてもらおうよ」

安心させるために、ディーナは涙を拭う。無理やり、口調もしっかりとさせた。涙で声がやや、くぐもってこそはいたが。

「待っていて。フィルガ殿のところに行って、呼んでくるから」

言いながら膝立ちになったところで、また新しく涙が溢れ始めてしまった。慌てて拭う。

だが、止まらない。

(・・・やだな。どうしちゃったんだろう？)

見ず知らずの男に剣を向けられた。巫女として無理やりにでも、神殿に上がってもらったと浚みづわれかけた。

銀のこの獣コが駆けつけてくれた。だから、こうしてまたこの館に戻ってこれた。

そうでなければ、彼にはもう会うことも無かったのかもしれない。
その可能性を思っ、胸が締め付けられるのは何故だろう？

（フィルガ殿に、会うのが……。イヤ、なのかな？怒られるかもしれないから）

しかし、そうも言っていられない。獣のケガを何とかしてあげなければ。

ディーナは頭を振ると、ゴシゴシと目をこすった。

「……………ゴメンね。すぐ、行ってく、るから。ま……………って」

今度こそ立ち上がろうと、膝を立てた。だが、立ち上がる事は出来なかった。

獣がディーナのドレスの裾すそに、前脚を掛けていたからだ。勢いついていたディーナは、当然ながら体のバランスを失う。

「…っ……………きゃあ」

小さく悲鳴を上げて倒れこみ、ディーナは思わず獣に抱きついてしまった。それを銀の獣は優しく受け止めてくれた。

ディーナを再び座り込ませる。そのまま獣はディーナのドレスを踏みつけ、脚をどかさうとはしなかった。

「ゴメンね、怪我してるのに。痛くなかった？」

ディーナは慌てて、手を放した。灰銀色の瞳と、真正面からぶつかる。

その瞳がほんの一瞬だけ、和らいだように感じた。

だ い じ ょ う ぶ

え、と声にならない声を上げ損ねたディーナの頬を、獣は鼻先で押しやった。

やわらかく遠慮がちに触れると、そろそろと・・・乾ききつてない涙を舌先で拭ってくれた。

「・・・・・・・・・・ありがとう」

くすぐったさに思わず、笑みがこぼれた。ふ、と強張っていた気持ちまでが、ほぐれた気もした。

獣の優しさも、ディーナの心をくすぐってくれたからだ。

ディーナはやっぱりと、獣を抱き返した。

第八章 * 守られている自覚（後書き）

なぜ、フィルガがディーナを叩いたりするなどと、考えてしまうのかは理由があります。

ディーナはキレイ さっぱり 忘れていますが、無意識に覚えていくのです。

フィルガ。今のフィルガは、そんなことはしませんよ。

〳〳第八章までできました。すさんでいた少年時代のフィルガ殿の話にも、入っていきます。

* ジャスリート家の少年（前書き）

ディーナ、銀の獣に行かないで欲しいのです。

行ってしまうと、どこと無く気がついてるので。

* ジャスリート家の少年

シーラに似た容姿^{うつつ}に、シーラに引けをとる事のない能力。

君は本当に申し分ないよ、ディーナ。

僕の研究成果……。

* : * : * : * : * : *

*

「待つてっ！！待つてよ！ 手当て、しなきゃ……！！」

ディーナは銀の獣に向かって叫んだ。今はもう遠く、高い石壁の上にいるその背にだ。

獣は先ほどまで、ディーナの腕の中にいてくれた。涙を拭って慰めてくれた、優しい銀の彼。

ディーナが落ち着きを取り戻すまで、傍に寄り添っていてくれたのだ。

あれだけ……最初のほうは触れられるのを、嫌がっていたようなのに。

ディーナは思う存分、獣の胸元に顔をうずめてその香りに包まれていた。もっと、そうしていたかった。それなのに。

獣はやんわりとディーナの腕から、一蹴りですり抜けてしまったのだ。

何の前触れも無く、ぬくもりを失くしたせいなのか……
寒気がした。

彼に体温を奪われてしまった。

この感覚が寂しさなのだと、自覚する事ができなかった。動けないそのまま、背を目で追っただけだ。

「……………ねえ！待ってよ！まだ、行かないで傍にいてちょうだいよ！-」

どうしようもない寂しさに気がつき、必死でそのぬくもりを取り戻したいと叫んだ頃には、獣はもう手の届かないほど高い所にいた。

「ねえ、どこ行くの！？」

“……………”

「また会える！？来てくれる！？」

獣は答えない。振り向きもしない。しかし、動こうともしない。

「もう、来てくれないというのなら 私と一緒に連れっててよ！」

“……………！？”

獣は答えない。でも、振り返ってくれた。ほんの一瞬だけ。

疑いを浮かべたかのような途惑う瞳と、絡み合う。ディーナは必死でその瞳に、追いつがった。それでも。

「あつ！待って！」

銀の背はそのまま、見えなくなっていました。

[illegible]

その孔雀模様の浮かび上がるしつぽが、見えなくなる。途端に言い表しようのない心細さで、哀しくなった。

また、涙がにじみ始める。そのまま、ぼんやりと獣の去った方角を見上げていた。

【だめじゃないか、ディーナ！黙って館を抜け出したりしちゃあ！】

!?

声を掛けられたのが、あまりに突然だった。ディーナは、驚きのあまり飛び上がった。

(まずいところを……………)

見つかったものだ。ディーナは恐る恐る振り返る。

┐
?
└

ディーナに声を掛けたのは、はじめて見る少年だった。歳の頃は十一、二才といったところだろうか。

明るい金の髪に、薄あわい空色の瞳が映える。少年は、にこやかにディーナを見上げていた。

【だめじゃないか。ディーナ！知らない奴の誘いに乗っちゃあ、危ないだろう？】

少年は同じように繰り返して、ディーナを咎めた。それでも口調も笑いを含んでおり、怒りは全く感じられない。

くすくすと笑いながら、少年はディーナに歩み寄る。歩くたび、彼の身にまとう長い上着の裾が揺れた。

不思議な紋様だ。まるでそこに、波が打ち寄せては返すかのように見える。

「乗ってないじゃない。だから私、ここにいるのよ」

少年の背丈は、ディーナの胸の高さにも満たない。そのせいか、強気で言い返してしまう。

見下ろされて覚える、威圧感が無いからだ。

【ギルムードの奴もそうだけど。そのソイツもだよ】

少年はディーナの背後を指差した。視線で追う。振り向くと木陰で、お行儀良く前脚を揃えている黒い獣と目が合った。

「ダグレス！あんた、いつの間に戻ってきたの？無事？どこもケガはしていない？」

ディーナはダグレスに駆け寄ると、しゃがみ込む。獣の身体を撫でてやりながら、ケガをしている様子はないか確かめた。

【……あのねえ。ソイツはギルムードの使いだったの。わかる？】

「私が頼んだの！橋まで連れて行って、って。ダグレスのせいじゃないわ。それにさっき、逃がしてくれたのよ？そのギルムードから」

ディーナは、ダグレスの首筋に取りすがって庇う。強く抱きしめると言い聞かせてやるように、繰り返した。

「悪くないわ」

“ディーナ嬢・・・・・・・・”

ダグレスは嬉しそうだ。頬をすり寄せると、うつとりと呟く。

【あのねえ】

少年はその様子に、腰に手を当てて深々と息を吐いた。

。・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：
・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：
・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：。・*・。：

ダグレスに寄り添いながら、まじまじと少年の顔を見上げていた。なめらかな丸みのある、幼さの残る顔立ち。その割には大人びた眼差しと言葉使いに、違和感を覚えた。

「・・・・・・・・ね。君、誰？何者なの？」

【ボク？ トウーラ・ファーガ・ジャスリート】

「トウーラ・ファーガ・・・・・・・・」

初めて見る顔だが、ジャスリート家の子なのか。この家の子なら
。

この突然の登場にも、無理にでも説明が付けられる。
ディーナは、ダグレスに強くしがみついた。

【トウーラ、まででいいよ】

警戒し始めたディーナに、トウーラは再び微笑んで見せた。

「トウーラ、どうして？だから、何で・・・知っているの？」

あの橋での一部始終のやり取りを『知っている』のか、とディーナは問う。なぜ。あの場に居合わせたわけでもないのに。

【わかるさ。見ていたからね。まあ、あの橋であれだけ騒がれば、嫌でもわかるよ】

「見ていた？だから、どうして見ていられるのよ？」

【ジャスリート家の領域内だから】

「また、それ？ 術者なの？トウーラも」

【そうだよ】

「・・・フィルガ殿みたいなの？」

【うん、まあね】

「・・・・・・・・。」

短く受け流すような口調に、ディーナは軽くあしらわれている感じがしてきた。

これ以上何を訊いてもこの調子で、はぐらかされるだろう。ディーナはむっとして、黙り込んだ。

少年はそんな様子のディーナに悪びれる様子も無く、にこにこしたままだ。

そんな少年を、ディーナはうさんくさそうに眺めた。二人とも、しばらく無言で見詰め合った。

先に少年の方が、言葉を発する。

【　　ツォラン！　】

そうふいに、トゥーラは天に向かって呼びかけた。ディーナもつられて、少年の高く上げた右腕を見上げる。

* ジャスリート家の少年（後書き）

トウーラ、出ました。何モノでしょう？な、少年ですが、タダモノじゃないのだけは確かです。

ジャスリート家縁の子なのは、本当です。

ディーナ、警戒したまま続きます。

*** 孔雀による代弁（前書き）**

トゥーラ少年が、右手を掲げると・・・・・・・・。。

* 孔雀による代弁

私はディーナ。

シーラとは違う。

だからそんな、置いていかれた子供のような目で見ないで。

。。*:.:.:.:.:.:.:.:.*:.:.:.:.:.:.:.*:.:.:.:.:.:.*:.:.
。

少年が掲げた右腕に、孔雀が舞い降りてとまる。

孔雀は尾を閉じてはいた。だがそれは、少年の背丈とまるで変わらない長さを誇っている。

少年が、いちだんと小柄に見えてしまうほどだ。それでも、トゥーラはしっかりと孔雀を支えている。

【この子は“ツウオラン” ジャスリート家の守護だよ。この子の“目”を借りて、橋でのやり取りを見ていたのさ】

トゥーラは説明しながら、左目を閉じて見せた。孔雀 ツウオランをとまらせた腕を、ディーナに持ち上げても見せる。

ク、ルルルルル……と、孔雀は喉の中で鳴き声を上げたようだ。

ディーナはその翠と藍色の美しい羽根に、知らず目を奪われていた。

そしてその中でも、ひととき特徴的な尾の先から目が放せない。
翠と藍が織り成す幻想的なうずまき模様は、とてもキレイな瞳で
見つめ返されているかのような気持ちになる。

ディーナはツウオランを見ながら、心は別の彼の尾を見ていた。
自然と強張っていた頬が緩む。

だがそれも、すぐにまた固まってしまった。彼は、ケガをしたま
ま行ってしまったのだ。

(・・・・・・銀の彼・・・・行っちゃった・・・・・・。大丈夫
かな)

不安と罪悪感に囚われて、ディーナは視線を落とした。祈るよう
に、胸元で両手を組む。

“ディーナ！！悪いコ！！勝手に抜け出して、ダグレスについて
行ったりして”

クルルルルルウ、とツウオランは喉を鳴らした。

ぼんやりと尾羽に見惚れていたディーナが目を逸らすと同時に、
トウーラの腕から飛び立つ。

「!？」

突然の叱責にディーナは我に返った。面を上げると、視界を翠が
占めている。

今度は、ツウオランはディーナの肩にとまっていた。しっかりと
肩に孔雀の蹴爪が食い込むのを感じた。

痛みは無い。重みも感じない。それでも“ツウオラン”の存在だ
けは、ずっしりと肩に乗っかっているのは感じた。

“デイナー、黙って出て行くとフィルガもルゼも悲しむ！！どうしてそれを考えない！悪いコ、悪いコ！”

孔雀はデイナーを左目で覗き込むようにしながら、訴えてきた。

「……………ごめんなさい」

勢いに押されて、デイナーは素直に謝った。それでもまだ、ツウオランの気は治まらないらしい。

孔雀はデイナーの頭によじ登りながら、訴えを続ける。

“フィルガ、心配していた。とても。デイナーにまた二度と、会えなくなるかもしれない……………！”

「……また？」

デイナーは聞き捨てならないと、訊きかえした。それは私じゃない。デイナーじゃない。

「それは、シーラの事でしよう？私を黙って出て行っただきりの、彼女^{シーラ}なんかと一緒にしないで」

“……そう思うのなら、勝手に出て行くな！悪いコ！”

「なによ、それ！もう、降りなさいよ。わかったから、頭の上でわめき立てないでよ！」

降りなさいよと、デイナーは孔雀を抱えようと両手を伸ばした。ツウオランは身体を突っ張らせて、抵抗する。下りる気はない様だ。その様子をトゥーラは、はははと笑いながら眺めている。

目線だけで『何とかしなさいよ、アンタの孔雀』と、デイナーは訴えたのだが無視された。

促され、孔雀は再び少年へと飛び移っていった。右腕に孔雀を迎え、と、ディーナに向かって笑いかける。

【ディーナ。他に訊きたい事はある？】

「あるわ。でも、ちゃんと答えてくれるとも思えない。今のだって、何の答えにもなっていない!」

【そう？ボクが答えるまでもなかったじゃない。ツウオランの訴えが、そのまま答えじゃないか】

【質問はもう、ない？無いなら行くよ】

いぶかしんで無言になったディーナに、トウーラは一回りして背を向けた。少年のまとう衣の裾が、小波^{さなみ}立って見える。

やはり不思議な刺繍だ。悔しいが、どうしても目を引く。無視で
きないのだ。

どうせ答えてくれる気はないくせにと、腹も立つがそのまま見送るのも癪じゃくだった。

「ねえ！あの銀の獣は！？見ていたのなら、わかるでしょう？あのキレイな獣よ！ケガをしたまま、どこへ行ってしまったの？」

悔しさよりも、銀の彼を想う気持ちが一步勝った。ディーナは立ち去ろうとする、華奢な背に問いかけた。

大丈夫なのか、どうしているのか、それを確かめたかった。その術がないディーナはただ、尋ねるしかない。

[illegible]

トゥーラは立ち止まる。振り返ると、穏やかな笑みを浮かべていた。

それは自分^{ディーナ}に向けられたものとは、違う種類のよな気がした。さつきから向けられていた笑みは、心底愉快そななものだった。

例えて言うならば、幼子が玩具^{おもちゃ}を前に浮かべるよな。好奇心を持って眺める者の瞳。

それとはまったく異なる眼差しを浮かべながら、トゥーラは指差した。

【だいじょうぶ、だよ。ほら、うしろ……】

（うしろ？）

促されるままに、ディーナは振り返る。

* 孔雀による代弁（後書き）

よくよく考えたら、ツウオランもトウーラも初対面なのに・・・
・。・。デイナー、いきなり叱られています

やんわり。かつ、じんわり。

*** 当然の仕置き（前書き）**

トウーラに促されるままに、振り返ってみました。

その視界に飛び込んできたのは。

* 当然の仕置き

結局のところ、自分の無力さを思い知っただけだった。

何だっぺ私は橋を渡ってきたのだろうか？

．．．．
こんなにも周りに、迷惑を掛けるためなんかじゃないはず．．．

．．．．
＊：．．．＊：．．．＊：．．．＊：．．．＊：．．．＊：．．．

振り返ると、人影が目に入った。館からこの中庭を臨む、回廊を勢い良く駆けてくる フィルガだ。

これだけ離れているのに、目が合った気がした。ディーナは思い切り『しまった』という顔のまま固まる。

遠目からでも、彼の表情が険しいのには正直震え上がった。何と言うか。

．．．．．立ち上る怒りのようなものが、彼を取り囲んでいる。

しかし固まっている場合ではない。獣の首を軽く叩いて、急いで立たせた。

「ダグレス！ひとまず、行つてっ！」

名残惜しそうに黒い獣は、ディーナの身体に身をすり寄せる。その耳元に『また、あとで。ね？』と、囁き掛けてやる。

ダグレスはそれでやっと、しぶしぶ承知したようだ。ゆっくりとその身が霧散していく。

初めてディーナの元へ、訪れたときと同じよう徐々に　輪郭が風さらわれて行った。それを見送り、ディーナは胸を撫で下ろした。

フィルガの怒りを買うのは、自分ひとりで充分だ。とは言え、やはりかつて無いほどの怒りを買うのは……………。

（嫌だなあ。　ぶたれるの）

『術者で』なおかつ『ジャスリート家の領域内』だから、トゥーラは全て見ていたと言った。と、言う事はアレだ。

フィルガにも同じ事が言えるだろう。言い逃れは通用しそうに無い……………。ごまかしも、きかないだろう。

「っ、ねえ！トゥーラ。私、何て説明……………?!」

したら、フィルガ殿の気が治まると思う？そう尋ねようと、ディーナは振り返った。

（……………いない？）

周囲を見渡してみるが、すでに少年と思しい人影は無い。そして孔雀『ツウオラン』の尾羽も。

ずいぶん素早い、突然の退出だと思った。

これ以上質問攻めにされたくない。そう、思ったのだろうか？それは、ちょっとズルイと思うてしまう。何の術も持ち合わせていない自分の、ひがみでしかないとは分ってはいるが。

（みんな……………。いいわねえ。そうやって、素早く雲隠れできてさあ）

ディーナは風に吹かれて揺らめく木陰を、眺めるばかりだった。ただそうやって、呆然と立ちすくむ。

全てお見通しとあつては、もはや言い逃れようと足掻くのは無駄だ。

たつぷり、説教されるのはまず間違いないさそうだ。それくらいで済んでくれればいいのだが……。

「デー・ツナ、さん！」

いつも束ねられているフィルガの髪が、ところどころほつれ落ちて頬に張り付いていた。

全力で走ったためなのか、怒りのためなのか。フィルガの呼吸が荒々しい。

「デー、ナ、さん。一体、何だつて、外へ！」

「うん。もう一度、橋を渡れば何か……。思い出せるかと、

思ったの」

「~~~~ディーナ！！アナタって、人は！」
「うん。ごめんなさい。」

素直に謝った。だがそれくらいで、フィルガの気が収まるはずもあるまい。

ディーナは今、睨み付ける様な鋭い視線に晒されている。たまたらず一步、後ずさる。

するとフィルガも、一步踏み込む。

ディーナも、慎重にもう一步下がった。フィルガも、同じようにまた近付く。

「・・・・・・・・・・」

お互い視線を外さず無言のままで、同じことを五回繰り返した。後ろへ一步。前へ一步。これ以上、近付いて欲しくない。これよりも、近付きたい。

そろそろと、後ろへ一步。大またで、前へ一步。

近付いてくるから、後ろへ一步。遠ざかろうとするから、前へ一步。

これで、一定の距離を保っているはずなのだが。ディーナは気がついた。このままでは、マズイという事に。

（なんか、私が不利？足の長さが違うせい？さっきから繰り返せば繰り返すほど、距離が縮まっているような。このままだと）

捕まる。

それだけは、何とか避けたいところだ。これだけ殺気立ってるフィルガは、初めて見た。

捕まったら最後何をされるか・・・なんて考えたくも無い。

上目使いで、フィルガを注意深く窺う。窺いつつ、慎重に右足の

踵^{かかと}を上げた。

心の中で間合いを計るために、数えだす。

（いち、にい、の）

我ながら情けない作戦だが、人前に出ようという魂胆だった。可能ならばルゼの。

「ディーナ？」

フィルガが一步、近付いた。見逃さずに間延びさせていた間合いを、勢い良く数え切る。

（・・・さんっ！）

それを合図に、右足を軸に飛び退いた。そのまま素早く回れ右をし、駆け出すが。

（なっ、何？えええっ！？）

ろくに逃出せない内に、フィルガに右腕を捕まれていた。乱暴に引き戻されて、身体がバランスを崩してよろめいた。

そんなディーナの両腕をがっちりつかんで支え、フィルガは自分へと向き合わせる。

ディーナは青ざめた。フィルガの身のこなしの機敏さに、だ。

ギルムードをかわしたばかりで、ディーナには逃げ切れる自信があつたから、なおさらだった。

「・・・さんっ」

放して。そう言いたくても、声が出ない。

何一つ、この男より抜きん出る事は出来ないのか。何より、腕力の差がそれを見せつけてくれる。

込み上げてくる恐れと悔しさで、頭の中がどうにかなってしまっそうだった。

（これは。ぶたれるな）

フィルガの強く見下ろす双眸が、何よりもそれを物語っている気がした。ディーナは思わず首をすくめて、固く瞳を閉じる。

わからずやの自分には、当然のお仕置きだろう。いくら言っても、わからないのだから。

そのせいで、銀の獣は血を流すほどのケガをしてしまった。それに、比べたら何てことはない。

改めて申し訳なさに、胸がずきんと痛む。自分は仕置きを受けるべきだ。

ディーナは強く瞳を閉じて、覚悟を決めて待つ。

* 当然の仕置き（後書き）

軽く、やけっぱちです。あわわわわ、といったところでしょうか。

ディーナ、珍しく素直に謝っています。

・・・猫がぶたれるとき、こんな感じですよね。（ある意味、この子は猫と一緒にだと思っています。近付くと、逃げる。）

何気にディーナは、フィルガが怖いのです。

* かいま見た雪原（前書き）

覚悟を決めて待つディーナですが……。

なかなか『その時』が。

かいま見た雪原

初めて会ったときから、気になっていた。

彼女の呼吸の浅さと、歩き方のぎこちなさ。

それは普通なら誰も気にならない程の、微々たる異常。

[illegible]

いつまで待っても、フィルガの両手はディーナの肩を捉えたままだ。

そろそろと、薄目を開けてフィルガの表情を窺う。そのまま鋭い眼光に、射すくめられてしまった。

フィルガの灰かぶらせたかのような銀の眼と、もろにぶつかる。

ディーンは何故か、雪原を覆う冬の空を思い浮かべていた。

あの雪が今にも舞い降りてきそうな、鈍く輝くあの空を自分はどこで見たのだったろう？

今こうやってフィルガ越しに仰ぎ見る天は、自分の瞳と同じ澄み切った空色なのに。

「イル、ガ、」

何かまた大切なものを、取りこぼして来てしまった気がする。デイーナは、意識が飛んでしまいそうになるのを堪える。

フィルガ殿。私はどこから来たのか、思い出したくなかったの。

うまく言葉が紡ぎ出せなかった。気がつけば喉が渴ききっていて、からからだった。

そういえば、ずっと声を張り上げていた事を思い出す。

唇を動かそうとするのだが、かろうじてわななくばかりで伝えられない。

だからね、橋をもう一度渡ってみよう。

それでも、ディーナはフィルガに語り掛けていた。唇は思うように動いてはくれなかったが、それでも充分な気がした。不意に、強張っていたフィルガの顔が歪む。

「……ディーナ、良かった」

そう呟いたフィルガに、突然抱き締められた。

腰回りをフィルガの腕が、がっちり固定する。思わず逃れようともがくが、身動きが取れない。

そのまま、後ろ頭を撫で回された。

「!？」

「良かった。また、行ってしまうのかと……」

「なんで、フィルガ殿？私のこと、ぶたないの？」

「なぜ？」

「言うこと聞かないから、怒っているんでしょう？」

「……………」

「言つてたね。……ずるいよ」

「ずるくないです」

「そういえば、あの神殿の人。ギルムード？レドの事まで知つてたよ。私、

一言も触れていないのに！第一、初対面なのに名前まで呼ばれたわ」

「アレは、シーラに執着していますからね。間者を絶やさず送ってくるんです」

「え？」

ディーナの存在を、彼は知っていた。それはすなわち、館内に間者が入り込んでいるという事になる。

その狼狽を感じとつたらしいフィルガは、すかさずディーナの頭頂部に唇を押し当てる。

そして、さして気にも留めていない口調で言う。

「わざと隙を与えてやっているんですよ。あまり完全に締め出して
もね……。見えない分余計な妄想されて、

いらぬ底力を発揮されると面倒ですからね。まあ、うちも似たようなものですけど」

「そういうもののなの？」

「忌々しい事に」

間者。例えば仕事だとしても、ジャスリート家に縁ある誰かが……
そうだとしたら。

何だか哀しい。自分が騒ぎの元と自覚した身の上であつては、な
おさらそう感じる。

色々事情があるとしても、きっとお互いに哀しいと思う……。

「……………そう」

「アナタは気にしなくてもいいんですよ」

「もう放して!」

身体が密着していると体温どころか、感情までが伝わってしまう
ように気恥ずかしかった。

ディーナは、逃れようとがく。フィルガは、腕を弛めてくれる
気配は無い。

再び、後ろ頭に大きな手のひらを押し付けられた。

「……………嫌です」

「は〜な〜し〜てっ! もう、放せ!」

「嫌です。もう少し、このままでディーナさん?」

「なんでよ? 嫌がらせ?」

「お仕置きです」

「うつ……………だから、ごめんねってば!」

「ははは。許しません」

「や、やっぱり、めちゃくちゃ怒ってるじゃないですか!! フィル
ガ殿!」

ディーナはもがき疲れて、ぐったりと大人しく罰を受けるしかな
かった。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。

泣き喚きすぎて、体力も限界といったところであろう。
ぐったりと寄りかかってくる華奢な身体を、抱きしめ続ける。

フィルガは、前々から気になっていたことがあった。

それを確かめるために、ここぞとばかりにディーナの身体を撫で回している。

(・・・・・・・・やっぱり、か・・・・・・・・)

そつと、手のひらを背中と腰に這わせる。そうすると明らかに、伝わってくるのがあるのだ。

思っていた通りだった。彼女の体の腰の横がわ、右の大腿部で手が引つかかる感覚があった。

他にも右の腰側。そして、肩甲骨の辺りも同じく右に異常が感じ取れた。

(・・・・・・・・骨折の名残があるな。だから、ディーナは段差が苦手なのか)

フィルガは暗い怒りがこみ上げてくるのを、止められなかった。悲しみ、と言ってもいい。

自分の見立てが正しかったからだ。彼女が過去に大怪我をしたことがあるのは、これでまず間違い無いだろう。

ディーナは実際、よく転びそうになっていた。自分で思っているよりも、上手く足が上がらないのだろう。

歩き方からして、そのぎこちなさにフィルガは心配していたのだ。

(・・・・・・・・ディーナ)

憐れみだと悟られたくは無い。だが胸に込み上げてくるものは、抑えようがなかった。

嫌な予感があるせいだ。これは、はずれていて欲しい。

これは、転んだくらいで出来る怪我ではない。強く、殴りつけら

れて折れたような痕^{あと}だ。

（ディーナ。アナタは誰かに、暴力を振るわれて……？だから、俺も殴るものだと？）

そんな自分の推測は、間違いであつて欲しい。フィルガは、ディーナから手を放すことができなかった。

* かいま見た雪原（後書き）

セクハラし過ぎですよ！フィルガ殿。そして、ディーナさん。あなたのその反応の薄さは一体。

彼女はまだまだ、精神年齢が低いのです。

そのまま、いさせてあげたいような。もうちょっと、成長させてあげたいような。

第九章 * 聖句の見た幻影（前書き）

橋でダグレスに組み敷かれていた、ギルムードですが。

何とか、起き上がって戻ってこれたようです。

第九章 * 聖句の見た幻影

白い孔雀が何処かに飛び立ってから
 ・ ・ ・ 十七年。

シーラを待ち侘びていた者たちにとって、それはそれは永い年月。

ようやく、止まっていた時が動き出す。

[illegible]

覚悟していたはずだった。

（我はおまえを見捨てて行ってしまう。）
 何度もその危険性の高さに、ダグレスは躊躇（ちゅうちう）してみせた。その度
 に自分は、何と言って笑い飛ばしていた？

「ダグレスの好きにして構わない。」

そうやって、
けしか
 喉けたようなものだったろう。

自ら物分りの良い者として振舞っておいて、実際は『物』なんて何にも分っちゃいなかった。

本心は自分でも気がつかなかっただけで、違ったなどと今更……
誰に申し開けばいいのだろうか？

今になって、失い難いものだったと気がついて遅いのだ。

（ダグレス。あいつ、本気で俺に歯向かいやがった！）

目の当たりにしてやっとな、ダグレスの忠告は心からの物だったと理解できた。そんな有様じゃ、術者失格だろう。

本気で取り合おうともせず、受け流し続けた自分を獣はどう見ていたのだろう。どんな気持ちで進言を繰り返したのだろう。

それですら。術に囚われたものの見せる、『術者の心に沿った』行動の現われでしかなかったのだろうか。

ギルムードは右の手首から血を滴らせながら、神殿の回廊を急ぐ。肩の傷から伝わってきた血は、今も止まることなく流れ続けている。皮膚を伝うその生暖かさが、自分の生ぬるさを嫌でも痛感させる。ギルムードは痛みと苛立ちから、忌々しい獣たちを罵倒した。
「くっそ・・・っ！！四つ足共が！！」

人気のない回廊だったが、何やら背後から女達の悲鳴が聞こえてきた。自分が今通ってきたであろう、方向からだ。

アーチ上の天井のせいか、嫌に甲高く響き渡る悲鳴が耳障りだった。

（・・・・・・何事だ？うるせえな）

痛みに顔をしかめながら振り返ると、自分の来た道に血溜りが出ていた。

純白の磨かれた石が敷き詰められた廊下とあっては、なお一層血の赤が冴えて見える。

肩口に当てた布も血で染まり、既に止血の用を成さなくなっている。

だから、これだけの血溜りを作るのは当然だろう。そう、いやに納得した。

（俺か。騒ぎの原因は）

ギルムードは取り合うことも無く、さっさと悲鳴に背を向けた。女達の声がだんだん近付いてきている。

巫女達に捕まっては、報告が遅れる。手当てなんぞは、その後で

いいのだ。

ギルムードは左手で肩口を押さえつけて、姉の部屋へと歩き出した。

受けた被害の大きさと、少女の能力は本物であり『放置できるものではない』という報告。 加えてあの少女の容姿。

（これでやっと、堂々と動き出せる）

ディーナ嬢には断られたが、諦める気など更々ない。それどころか、余計に闘志が沸いている。

十七年もの間、手の打ちようがないまま時は過ぎた。

それを思えば、これくらいの代償は何てことの無い 取るに足らないモノだ。

手に入れたい相手がちゃんと、存在してくれている。

行動に移したくても、何の手掛かりもつかめないままだった。そんないたずらに流された日々は、もう終わったのだ。

ギルムードは痛みから険しい顔をしてはいるが、内心は浮き立っている。大声で笑いたい程だ。

友としていたダグレスを、いくら失い難かったか思い知ったばかりなのに。

そんな気持ちの後でいてさえも、勝る感情は少女への想いの方だ。

（ダグレス！おまえの言う通りだ。・・・俺は薄情者だよ。だから

。まあ、この傷で相子だ）

傷のおかげで苦勞せず、しかめっ面が出来るからな。事の重大さを訴えるのに、一役買ってくれるだろうよ・・・。

（しまりのない顔じゃ、いまいち訴えにならないだろうからな）

「おまえ！悪い事は言わん。獣の意志は『すべて』奪っておけ。
……シャグランズの！」

ギルムードは酒を注ぎながら、振り返らないまま戸口の方に向かって声を掛ける。

扉の隙間から入り込んだ風が、燭台の炎をゆらめかせた。

第九章 * 聖句の見せた幻影（後書き）

第九章に入りました。

ギルムード、流血しておいてなかなか元気です。

鍛えてる軍人の体力をなめるなよ、といった所でしょうか。

臥せる気は更々ないようです。

*** 強かな蜻蛉（前書き）**

シャグランズの娘さん、久々に登場。

生きて戻って来れたようですが、夜分にどうしたのでしょうか？

* 強かな蜻蛉

それだけ脆弱としか言い表しようの無い体つきでいて、俺に敵う
とも思っているのか？

いきなり怒って絡んできて、何だよ？

そのくせ、素直にすぐ謝るのは何なんだよ……。

。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：
。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：

『シャグランスの。』そう呼ばれた少女は慣れたもので、部屋
に足を踏み入れた途端に声を掛けられても、特別驚いた様子もな
かった。

そして当たり前のように、ギルムードの自室に滑り込むように入
ってきた。予告も挨拶も無く。

（コイツはあ、相変らず・・・ご挨拶な事だな・・・）

もう夜もだいぶ更けているというのに、一人で男の部屋に実に堂
々と現われるのだ。

いつでも報告があるのなら来ても良い。そう言い渡してあるか
ら、まあ・構わないのだが。

ギルムードは注いだばかりの杯を呷りながら、横目で少女を見た。

少女が扉を閉めたので、蠟燭ろうそくの炎が再び勢いを取り戻していた。
それでも、ギルムードの手元を照らすほどの威力でしかない。
そんな薄暗い部屋の中で、少女の存在が白く浮かび上がって見え

た。闇に映える白い衣。

それは、昼間出会った赤い髪の少女と共通する『虫』を、ギルムードに思い起こさせる。

……向こうが透けて見える薄い翅^{はね}で羽ばたく、あの蜻蛉^{かげろふ}だ。

蠟燭の炎に惹かれて迷い込んできた、か弱き者を迎えてしまったかのようなこの感覚はなんだろう？

少女のこれまでの手柄を思えば、そんなものはただの錯覚でしかない。それは頭ではわかつてはいるのだが。

なにせ、この娘は物怖じせず危険を顧みようもしない。

今回も『聖句の間』に挑ませてやったから、大方その報告に来たのだろうと察しはついている。

(……獣に丸腰で挑んで、モノにして来ちまう娘っ子のどこがだ？)

ギルムードは思わず唖^おつてしまう。一体どこが、それを思わせる？

そうなのだが。この殺伐とした部屋には、あまりに不釣り合いな可憐さがあるのもまた確かだった。

この娘もまた、時折り彼の娘を思い起こさせる時がある。

それはきつと、強^{したた}かさ^{はかな}と儚さといった矛盾を併せ持ち 同時に訴えてくるその風情のせいだと踏^ふんでいる。

ギルムードの脳裏には、彼女^{彼女}達が次々と浮かぶ。彼女達とは、アレだ。

十七年前消息を絶ったジャスト家の少女やら、いきなりその存在が表れたとしか思えない赤い髪の少女やら。

そして今日の前にいる、シャグランス家の長女やらもがその『アレ』に含まれる。

(恐ろしく非力で華奢な造りのくせに。獣らに挑んでみたり、俺と

渡り合おうとしたり。……するなよなあ、まったくよう！

危ないだろ。そんな想いを口にする権利など、ギルムードには無い。だから言葉を飲み込むためにと杯を呷る。

いつもの、扉を背にした格好で少女は黙ったまま頭を下げた。彼女はけしてそれ以上、踏み込んで来ることは無い。

いつでも退出できる、かつ誰にも背後を取られる事のない安全な立ち位置を守り続ける。

昼間見た時と同じ純白の巫女装束のはずだが、幾らか霞んだ印象のように思えた。かと言って、何も薄汚れている訳ではない。

全体が霞かかって見えるのは、光の乏しさのせいか。それとも、『聖句の間』での戦いで疲弊したせいか。

「……どうだ？お前の方は、首尾よく進んだか？シャグランスの」

なかなか報告するどころか、微動だにしない少女に自分から話しかけた。心なしか己の手に、視線を感じる。

注ごうにも肩が痛むのでなかなか、酒瓶が持ち上げられず苦戦している。それをいぶかしんでの事だろうか？

「……………」

「いいか。おまえは『全て』意志を奪っておけよ。…………俺のようになりたくなければな」

そんな風に重ねて言うギルムードを見つめたまま、少女は無言で歩み寄ってきた。つかつかと、勢い良く。

それにはギルムードの方が驚いてしまう。呆気に取りられて、思わず少女を見た。酒を注ぐ手も止める。

「ん？何だ。どうした？」

「・・・・・・・・」

尋ねたが、見上げた少女は黙って見下ろすばかりだ。
ベール越しのくせに、その突き刺すような眼差しは一体何を意味するのか。その視線の先にいるのは、自分だ。

見上げると言っても、少しばかり視線を上目使いにする程度なのだが。

ギルムードは椅子に深くもたれかかっけていてもその程度で済む。
それは、たいして少女の背が高くないせいだ。

だが、あまりそれを感じさせないのは少女の存在感の強さだろう。
普段は全くといっていいほど感じなかった。

それでも久しぶりに間近に見て、改めて彼女の小ささに驚いてしまった。

「どうした、どうした？ んん？」

ギルムードは語尾を上げて尋ねたが、少女は無言のままだ。その顔を心配になって、覗き込むようにして向き合った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は何か言いたいようだが、それを必死で堪えているようだった。肩が少し、上下している。

（何だよ。怒ってるのか？ ダグレスを横取りされた情けない主だ^{あるじ}と俺を？ だとしたら、生意気な）

ギルムードがそう問い詰めようと口を開きかけた時、少女は酒瓶を手を取っていた。

「お！？ 注いでくれるのか？」

しかし待っていても、少女は酒瓶を抱えたまま動こうとはしなかった。しっかりと瓶を、両手で握り締めている。

「お怪我に、障ります」

「何だよ。誰から聞いた？」

「色々。周りから」

「何だよ、もうそこまで広まっているのか？これだから、女共は……」

「大騒ぎでらしたのでしよう。当然、です」

少女は『当然』をわざとらしいくらい、強く言い放った。当たり前でしょう、そう言っただけでいいというた所だろう。

「おお！？珍しいな。怒っているのか？」

「……別に。怒ってなんておりません！」

「じゅうぶん、怒ってるじゃねえか」

「怒ってません」

「じゃあ、何だよ。いいから、酌をする気が無いなら酒を返せ」

「巫女王様に言いつけますよ」

「汚ねえ　！！」

「汚くありません。汚いのは、ギルムード様のお言葉使いです」

「何だよ……今日は絡んでくるな、オイ」

「絡んでなんていません」

「いいから。返せ！」

酒瓶を取り返そうと、ギルムードは手を伸ばす。だがそれも、素早くかわされてしまっていた。

空を切り掴み損ねたのは、本日これで二回めだ。

「お断りいたします！」

「そうかよ。じゃあ、オマエが注げ。酌をしろ」

「お断り！　ですわ」

怒っているくせに、怒っていないと言う。絡んでいるくせに、絡んでなどいないと言う。いいかげん、煩わしくなってきた。

・ Bannon！！

ギルムードは拳でテーブルを叩きつけると、そのまま勢い良く立

ち上がった。少女を頭三つ分程の高見から、見下ろすために。

「おまえは何しに来たんだ、シャグランズの？まさか俺の楽しみ奪うためだけに来たのか？だとしたら、さっさと帰れ！」

[illegible]

怒鳴りながらわざと左手を、少女の頭上を振り切るようにして扉の方へと促した。

それでも思つた通り、少女は身をすくめる事も怯えた様子も無かつた。

獸と命のやり取りをして来たばかりの娘には、こんな脅しは効かないだろう。やはり可愛げのカケラも無い。

下手したら殴られてもおかしくないのだぞ？　そういう、立場の違いを見せ付けてやろうとしての演出だった。

「い い え」

頑なだった少女は、怒鳴られるとそつと抱きかかえていた酒瓶を返した。そのまま深く、^{ニック}頭を垂れる。

小さく消え入りそうな声で、“申し訳ございません、出すぎた真似を致しました”と、まで言っただ詫びられた。

その途端にギルムードは、酔っ払いの自分が急に恥ずかしくなっ

こんなに小さな娘に癩癧を起こして、怒鳴り付けたのだ。おまけに雇い主だからと威張り散らした上に、謝らせてしまった。

何ともバツが悪い気持ちになり、せつかく取り返した酒を飲む気にもなれなかった。

それでも。ギルムードは不機嫌を貼り付けた表情のまま、酒を杯に注いだ。

* 強かな蜻蛉（後書き）

珍しくケンカ腰のシャグランズの娘です。

理由は続きます。夜分わざわざ、報告に訪れた理由も次回です。

『何だよ』は、ギルムードの口癖です。

ディーナも手に入らず、ダグレスは裏切るし、ケガは痛むしで不機嫌なギル。

おまけに部下は絡んでくるし。こちらも珍しく、怒鳴ったりしています。……。

今回は『THE 反省会』ですので（？）嫌わないうでやって下さいませ。

* 生命の水（前書き）

やたらとしおらしく、素直に謝って見せたシャグランズの娘でし
たが。

その行動と本心は・・・・・・・・。

確信に変わった。

蒸留酒。それは発酵液を、蒸留することによってアルコールの割合をぐんと高めたモノ。

(・・・・・・あの酒のラベルは。『アラクエア・ヴィータエ』)

見覚えある瓶の形にリゼライは、喉の奥で唸った。それを生み出したものの地方の言葉で『生命の水』という意味で呼ばれている酒^{モラ}。知らないうちに、要らぬ知識が身についていたものだ。ちっと、心の中で思わず鋭く舌打つ。

(何で男って言うのは、すぐ酒に逃げる・・・・・・。)

嫌でも、あのバカ親の後姿が浮かぶ。飲みすぎがたたって、身体を壊したあのやせこけた後姿が。

(何が『生命の』よ・・・・・・。)

シャ格蘭スのリゼライは冷ややかに酒瓶を見つめていた。それと同じくらい、否それ以上に凍った眼差しをギルムードにも注ぐ。

(そして。酔っ払いは酒を取り上げようとする者に、怒りをぶつけてくるのよね。それこそが！酒に乗っ取られてるとしか、思えない行動の現われだというのに。気がつけないようね？)

リゼライはそうしたやり取りに、慣れっこだった。だから。どうすればいいのか、効果的に酒を取り上げられることが出来るのか把握済みだ。

すぐ、大人しく引けばいいだけの話なのだ。素直に悪かった等と、微塵^{みじん}も感じていなくともしおらしく謝れば一発だ。

(・・・・・・扱いやすいったらいいわ。まったく！)

リゼライは腹が立っていた。ギルムードに対してもだが、そんな主^{あるじ}に誰かさんを重ね見て構ってしまっ自分にも。

放っておけばいいのに。我ながら、いらぬ行動に出てしまった。
(別に、この方が飲みすぎがたたるうがどうなるうが、私には関係ないんだから！)

そう憤慨しながら、自分に言い聞かせたところでなぜだか赤い髪の少女の顔が浮かんだ。

いつも満面の笑みで、鏡越しに笑いかける彼女の名は“ディーナ”。『白孔雀』ことシーラに似た容姿を持つ。

すでに一部では『紅孔雀』と謳われ始めている。それを知ってか知らずか、・・・知らないのだろうな、と思われる。

『リゼライさん、リゼライさん、リゼライさんはすごいですね！』

彼女は髪を結つてもやつても、お茶を入れてやつても、いちいち大げさなほど感心して見せるのだ。

(・・・いや。すごいのはディーナ嬢サマ。貴女でしょうよ？)

最初は嫌味かと思ったものだったが。しかし彼女は面白い位、不器用だと発見してからは見方が変わった。

髪は梳るのが精一杯。自分一人では、着替えに恐ろしく手間取る。お茶は注ぐとすれば、たいていカップをどこかしらに引っ掛けてこぼす。食事中も同じく。

あぐくの果てには始終、どこかに何かにつまづいては転ぶ。・・・見ていられない。

何をやらせてもあの調子なのだが、彼女はへこたれもせず手を出したがった。そしてそれは結果として、リゼライの仕事を増やす。彼女は何をやっても、嬉しそうにしている印象が強い。本気でただの『良いところの幼いご令嬢』としか思えない。

獣たちを呼び出して、魅了したりさえしなければ。

何か上手くいかなくても、いつも彼女は笑顔で締めくくる。あの無防備なあどけない笑顔で。

それはまだ幼い弟妹達が、姉であるリゼライに向けるものと『全く』と言っているほど『同じ』だった。

「……………」

勘弁してよね。ふっと、短くため息を吐き出してしまふ。あんまり、懐かないで頂戴ね。

（私はアナタと対決する事に。）

なるのだからねと、その笑顔を振り切るように目線を上げた。何ともバツの悪そうなギルムードを見据える。

その証拠に苦勞して注いだ酒に口を付けてはいない。ただ口元に杯を持ち上げて、弄んでいるだけだ。

（さあて。その前に、ギルムード様？）

自分が父から酒を取り上げようと奮闘していた日々はもう、終わりを告げたのだ。それを、あろう事か忘れていた。

リゼライがそうしていたのは、母と弟妹に父の酔っ払った醜態を見せなくなかったからだと言える。

（だからか。こんなに私らしくなく、ムキになってしまったのは）
そう己を分析したところで、幾らか落ち着いた。重ねてしまったのだ。父と主を。

そして幼い弟妹達と、赤い髪の娘を。

……………
……………

「……………ギルムード様。私こうして、無事に聖句の間から戻って参りました。首尾よく『焰の章』の聖句を修得いたしましたので、ご報告に上がりましたの」

「そのようだな」

「先ほどギルムード様が重ねて仰ってましたように『完全に意志を奪って』は、まだおりませぬが獣も捕らえて参りましたので お見せしようかと思っていますのに」

「そうか。見せてみる。お前の新しい聖句の徒を」

「はい。でも、ご準備していただかない事には・・・少々危ない気がします」

「・・・・・・・・・・」

準備 。それは聖句でその魂を縛り付けた獣を、自分の護衛まもりとして傍に置く事を意味している。

シャグランズの少女はボールを跳ね上げると、悠然と微笑んで見せた。

「ギルムード様の“ダグレス”は何処いすこですの？」

* 生命の水（後書き）

シャグランソのリゼライは、自分でも気がついていませんが。

ディーナは、魅了しちゃうのは獣だけじゃないんですよ！アナタも知らないうちに『この子は守らなければ』と、思い始めていますよな。

『これから先神殿に上がらせられても、酔っ払いの側におけるかと、いったところですね。』

ディーナ。おそろべし。ある意味『最強』です。

*** 不相応な取り引き（前書き）**

相変わらず、帰れ帰れ言われていますが。

まだまだ引き下がれませんね。な、リゼライ。

本当にこの子は、気が強くて怖いもの知らずです。

不相応な取り引き

『蜻蛉』なんぞに譬^{たと}えたのが、間違^{まちが}いだった。

いや、間違いと言うよりも騙されていた。

その夢げな見てくれは『まやかし』だという事に、気づけなかっただけだ。

[illegible]

ギルムードは不機嫌も露わに、自由の利く左手でしっ・しつと二回追い払った。

「やはりオマエ、さうさと帰れ！今日はご苦労だったな。帰って、とっとと休め休め！」

言い捨てると、再び杯に酒を注ぐ。

身体を深く椅子にあずけきって、ふんぞり返ったようにも脱力したようにも取れる。

そんなギルムードに怯むことなく、リゼライはにっこりと笑いかける。話をつけるまでは、帰る気はさらさらないようだ。

「ギルムード様」

「・・・ダグレス？アイツなら今頃『紅孔雀』様のお膝で、憩いこつて
いるだろうよ。羨ましいこったな」

わざとらしいくらいバカ丁寧に自分の名を呼ばれ、うんざりしな

がらギルムードは答える。

そうでなければ、いつまでも彼女は居座るだろうから仕方なく。
はつきり言って、この少女の気質は怖い。

思わずギルムードがたじろいでしまふ、この気迫は何なのだろうか。そうとは彼女に気取られたくはないから、乱暴に言葉を吐き捨てる。

「呼び声にも応答なし、ですか？……ギルム
ード・様？」

言葉に詰まり、黙り込もうとしたギルムードを咎めるように、再度同じ調子で名を呼ばれる。

「そうだよ！なし、だよ！ 何だよ？オマエ、怪我した理由知ってるんだろ？女達から聞いて……」

「直接は聞いておりませんわ。正直、小耳に挟んだだけの情報ですの。そもそも、その女達が私にわざわざ説明しに来るとでも？ただ物陰で、こそこそやり取りしているだけの連中が？」

「……りーぜー！オマエ、友達いないだろう」

やや呆れながら、ギルムードは尋ねる。と、いうよりも断定気味に訊いた。

そんな言葉にもリゼライは取り合わない。と言うよりも、逆に何を仰っているんだと言いかねない勢いだった。

そんな事。当たり前でございましょうよ と。

「私、友人は選んでおりますからご心配なく。そもそも私、ここには巫女としてお仕えるために上がっていますの。

“仲良しごっこ”をするためなどではありませんわ。そんな事より、噂は本当なんですね？」

「まあな」

「だから、先ほどから『完全に意志を奪え』と勧めてらっしやるん

ですね？そうしておけば、下手に感情移入した挙句に、裏切られた・・・なんて。そんな気分を味わわなくて済みますものね」

「そうだよ。その通りだよ……」

いちいち言葉にされると情けなさ倍増だから、もう察しているなら黙っていてくれまいか？ シャ格蘭スの娘よ。

容赦のない少女の追い討ちにも似た言葉に、ギルムードは残り全部の体力をこっそり持っていかけた気がした。

[illegible]

「ところでオマエの新しい『聖句の徒』の名前は何だ？準備なぞいらんから、見せてみる」

「名前は まだ、ありません」

「そうか。先の術者が亡くなって、名を失ってから久しい獣だと聞
いてはいるが。早いところ『名』を与えて縛らん事には、面倒だろ
う」

名は本質を表すものだ。それ自体が、『聖句』の文言そのものになると言ってもいい。

獣の本質を見極め属性を判断し、その名を聖句にのせる事によって、より強力な術を施した事になる。

それがなされないままだと、ほころびが生じて『解術』になりかねないのだ。

せつかく虜にした獣を手放してしまつたら……。

次は用心深くなっている上『聖句』にやや順応してしまうからか、ますます捕らえにくくなってしまふ。

「ですからね、ギルムード様。獣に名を与えてやって下さいませんか？」

「・っお、オマエな！？意味判って言っているのか………？」
ギルムードは息を呑み、思わず姿勢を正した。杯を持つ手も微かに震えるほど、力が入る。

正気か？そう絡み合う視線に問いかけるが、少女の瞳は静かに蠟燭の炎を受け止めている。

そこに迷いや、ためらいは映り込む隙すら無いらしい。

鏡のごとく静まり返った湖面が、陽光でも月光でも。まるごと受け止めるかのような静寂。

ギルムードは長い、長いため息をつく。それは、感嘆のためか嘆息のためか。どちらともつかないモノだった。

「……判って言っているんだな。小賢しい奴め。それでか？わざわざ俺に漬け込むために、弱ってる所を狙って来たのは」

「まあ、人聞きの悪い。それはただの被害妄想ですわ」

「じゃあ、何だよ？ 丸腰で獣やら敵やらに、晒される事になる俺を心配してくれた……とか？」

「どうとでも。お好きなように」

「可愛くない奴め！」

そうは言っても、心なしかギルムードの語尾は上がっている。リゼライは気がつかないフリをして、淡々と提案を続けた。

「取引をしに来ましたの。そう、取引です。それなら、ご満足いただけますか？」

名を与える。捕らえた術者の特権を、第三者にその権利を委ねる。

術で魂を捕らえた上に、名前という命そのものを縛るのだ。

獣は『聖句の徒』でもありながら、命を与えた者の『護り』にもなる。

それは二重拘束という、念の入った術となるから実に頑丈なのは間違いない。

（確かに。それならば、紅孔雀サマに対抗できるかもしれん）

本来ならばそれは術を心得ようも無い、王族や貴族などが術者を雇って、それを貰い受けるのが普通だ。

そうやって世にも美しく、力強いナイトを手に入れる。それが社会的にも、大きな身分の象徴を誇示すると言う訳だ。

だからまず、術者同士でやり取りはしない。お互いが権利を主張しあっては、術そのものが成り立たないからだ。

言葉や態度といった、そういった意味での主張ではない。『術者同士の力量の差』それが、ハッキリする。

（要するにこの俺に、自分の庇護する術の配下になれと言っているんだぞ？この『神殿の護衛団長』であり『巫女王の弟』である、この俺に！ただの小娘が）

もはや無礼を通り越して、ただの笑い話だと思えた。自分も落ちたものだ。こんな小娘に同情される日が来るなんて。

。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：
。。：*：。。

「オマエなあ！！何が望みだ？んん？・・・リゼライ・シャグラン
ス！」

ギルムードは、大声で笑いながら尋ねた。

「私の望みは、我がシャグランス家の復興。それと　神殿と口ウ

ニア家の繁栄です。どうぞ次の『聖句の間』への計らいを、ギルムード様？」

ギルムードはおもむろに立ち上がると、飲みかけの杯を一気に呷った。そしてまた酒を杯に注ぐ。

痛みに顔をしかめながら。

それを見かねたりゼライが手伝おうとしたが、やんわりと左手で制した。それでは意味が無いのだ。

「オマエも飲め」

有無を言わせぬ口調で、杯を押し付ける。同じ酒を、ひとつの杯で交わす。

リゼライはその意味を理解するまで、杯とギルムードとを見比べていたが、やがてうやうやしく両手で受け取った。

そのままギルムードに倣って、一息に飲み干す。少女の眉根が寄っていく。明らかに彼女にとっては、強すぎる酒だろう。

それでも何とか飲み切って、杯を空にするとリゼライは告げた。「これで取引は成立ですわね」

その様子を見届けると、満足そうにギルムードも宣言した。

「契約は成立した。我が命……リゼライ・シャグランズに預けるぞ！」

『アラクエア・ヴィータエ』

生命の水の意を持つ蒸留酒。それは少女に注いでやった分で、ちよつと瓶は空になった。

* 不相応な取り引き（後書き）

「私ここには働きに來てるんですね。友達？ここにはいませんし、必要ないでしょう？」

そんな事より、とさらりと言い切ったりゼライ。

クール。まあ、情熱とか術に対する心構えとかは『熱い』タイプですが、どこかしらは常に冷やしてがんばっているのです。

危ない橋を渡ろうとする時ほど、冷静にが彼女のモットーです。

*** お叱りを受ける子供達（前書き）**

怒られもしなかったし、殴られもしなかった。

しかし、その方がむしろ楽かもしれません。

* お叱りを受ける子供達

この期に及んで大事な事を、忘れていた。

どうして この胸がこんなにも苦しいのか。

責められて罵られるよりも、そんな目で見られることの方が辛いという事を。

* * * * *

「ディーナさん。覚悟なさって下さいね」

「な、な、っ、何をですか、フィルガ殿？」

「・・・・・・怒られるのを」

「フィ、フィルガ殿。そんな事、言われましてもですね・・・・・・」

「

ため息交じりでフィルガは呟くと、一旦腕を弛めディーナを覗き込んだ。両肩を上から力強く、押さえ込まれる。

「同情しますよ」

「!？」

多分、押さえられていなければ、身体は跳ね上がった事だろうと思われる。怯え竦む身を、フィルガに笑いながらも一度抱き寄せられた。

「大丈夫です。俺も一緒に怒られますから。と、言うより俺の方が咎められるでしょう。責任重大ですからね」

よしよし、大丈夫、大丈夫ですからね。そう言っているみたいに、背に回された腕をぼんぼんと軽く叩かれた。

「．．．．．誰に。ですか？フィルガ殿」

「決まっています」

「．．．ええ、ええと、ですね．．．．．」

「祖母に。ルゼ・ジャスリートに」

「それは．．．かなり、まずい事になりそうだね．．．．．」

フィルガは無言だった。だが、ディーナを抱きしめたまま大きく頷いたのだけは、わかった。

．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．
．．．＊．．．．．

覚悟を決めて二人、こうしてルゼを前にしての反省会が始まっていた。

領地の視察から帰るなり、沈痛な面持ちでルゼは着替えもせず二人を呼び出した。

「おや、耳が早い」

「ツウオランとヨウランが報告に来ましたからね」

しれっとフィルガが言うのに対して、ルゼは答える。そう、ルゼの傍らには左右一羽ずつ孔雀が控えている。

“あ。ディーナ。また、怒られるんだな”

“だ　　な”

「．．．．．」

（ええ。そうみたいですねえ．．．おのれ！ツウオラン！後で覚えてなさいよ）

孔雀がいい気味だという含みを込めて言うから、言い返したいところだったそこは堪えた。何せ怒れるルゼの御前だ。

真向かいに足を組み、腕組んで座るルゼの顔がまともに見れなかった。デイナーは小さく縮こまって、俯く。

（……さすが、フィルガ殿の血縁だよ。怒り方が一緒だよ）
何と言うか。静かに怒りを全身から燦^{くゆ}らせて、室内の温度を冷やしているかのような。

隣と一緒にソファに腰掛けている、フィルガを盗み見た。だが、フィルガも同じように腕組んでふんぞり返っていた。

いたっていつも通り。恐らく　フィルガは何回も、この修羅場をくぐり抜けてきたとみた。

出来ればこの場はお任せしたい。デイナーは思わず、そんな虫のいいことを思ってしまう。

デイナーは身を固くして、構えているしかなかった。

怒られる・デイナー・悪いコ・デイナー……。

そう騒ぎ立てる孔雀たちを、ルゼは腕を解いてその頭に手を置いて諫^{いさ}めた。

「さて。やってくれたわね、デイナーちゃん？　これからどんな厄介^{えきがい}ごとが待ち受けているか。予想が付いていて？」

「……いいえ」

「でしょうね。私には付いている……それがただの取り越し苦勞であればいいのにと、切に願うほどにね」

ルゼの厳しく寄せられた眉根が、ふっと緩む。そのまま、今度はルゼが額に己の右手を当てて、俯^{うつむ}いた。

デイナーが戸惑い、気遣いの声を掛けるよりも先に、ルゼが声を絞り出した。

「　フィルガ。貴方が付いていながら、何て失態ですか。もつとしっかりして頂戴！　ツウオランにヨウラン！　貴方達にも同じ事が言えますよ！」

「はい。仰る通りです。申し訳ありませんでした」

フィルガが静かに詫びたのには驚いた。なぜ彼が、咎められなけ

ればならないのか。ディーナは納得行かないと思った。

“ 怒られた・・・勝手に出て行ったディーナが全部悪いのに
と不満そうに、ツウオラン。

“悪いのに”
と同じく、ヨウラン。

孔雀たちは、恨みがましい視線をディーナに寄こす。

“ルゼよ。なぜ、ディーナではなく我々を咎めるのだ？”

“だ？”

ディーナもそう思う。だから孔雀たちが、ふて腐れる気持ちもわかる。だが。

「そんな事は当たり前でしょう！」

ルゼは全く反省の色を見せない、二羽の頭を同時に叩き付ける。

ピシ・ペシ！と、乾いた小気味良い音が響いた。

ディーナもそれには驚いたが、それよりも当の二羽たちがもっと驚いたようだった。

“叩いた。ルゼが叩いた。叩かれた”

叩かれた”

「当たり前でしょう！不覺を取ってダグレスの侵入を許したばかりか、ディーナが館から抜け出したのに気がつけなかったのは、お前達の落ち度です。そして、ツウオラン！館の守護に就く貴方が、橋に駆けつけたのは浅はかですよ。しかも、ギルムードに接触したですって？それが後々神殿からのジャスリート家に対する、要らぬ画策の元となるとは考えませんでしたか！？」

“

-
-
-
-
-
-

”

“

-
-
-
-
-
-

”

孔雀たちは押し黙った。見ていて不憫になるほど、しょんぼりとルゼの足元にうずくまっている。

[illegible]

その重い沈黙を破つて、ルゼが問いかけてきた。

「ディーナ。私が貴女の身柄を拘束するとしておく理由は、前に伝えたわよね？」

「はい。騒ぎの元と成りかねないからと……」

「そう。確かに、私は領主の立場も交えてそう言いました。加えて自分の個人的な気持ちとして、貴女には出て行って欲しくないと伝えたいはずですよ」

「……はい」

ディーナの胸が詰まる。ルゼがすぐる様な瞳を向けるからだ。

その眼差しとは裏腹に、口調からは領主たる者の、凜とした響きと威厳が感じられるから余計に。

ルゼの差し迫ったかのような心情が、イヤでも読み取れる。それは先ほど、フィルガからも向けられたものと同じもの。

それは何故かディーナを怯ませるに、充分な威力のあるもの。

「そうとしながら、私が貴女を牢屋に閉じ込めない訳を理解してくれていて？」

『いいえ。』　そう、言葉では答えずにディーナは首を横に振った。

「貴女には意味がないからよ。むしろ、是が非でもそこから逃れたくなるような環境に貴女を置いたら。持てる力を必要以上に振るい起こしてでも、行ってしまう事でしようからね。だからよ」

『確かにその通りです。私なら、やりかねません。』

ディーナはそう同意しかけたが、言葉を飲み込んだ。言ったらまずまずルゼが、取り乱してしまう気がしたから。

そうだ。口調が落ち着いているから、見逃してしまいそうになるが、彼女は明らかに気が動転している。

その証拠に胸元で組まれた手が、肩が。　微かにだが、小刻みに揺れているではないか。

「わかりますか、ディーナ。このルゼ・ジャスリートが恐れている
 事が何なのか」

「ジャスリート公爵家に及ぶかもしれない、損害ですか？」

「いいえ。いいえ、違います。確かに損害には違いないかもしれませんが、ディーナ。私の恐れは貴女を神殿にさらわれてしまうかも知れない、という事よ。しかも、あの時のように公に堂々と図々しくね」

「あの時？」

「忌々しい事に、私は神殿の言う通りにしなければならなかった。わが子が獲られるのを、私は黙って見送るしかなかった……」

そこまで告げると、ルゼは堪えきれなくなったようだ。両手で顔を覆い、突っ伏してしまった。

ディーナは助けを求めるかのように、隣のフィルガを見上げた。

彼の表情もまた険しい。

「かつてシーラは神殿に呼び出されたのはもう、年表を見てご存知ですね？ 獣を魅了するというその稀有な能力故に、審議会が執り行う【異端審問】にかけられる為にね。俺が生まれる前の話になります。シーラはそのまま、巫女として招集されることになった……あの事件です」

「
・
・
・
・
・
・
私毛？
」

「可能性が無いとはもはや、言い切れません」

[illegible]

「ディーナ。私が貴女を咎められないのは、その権利が無いからよ。貴女はまだ……」橋を渡つて来てくれた。ただ、それだけだから。

貴女は自由だわ。だからディーナ。私は、貴女を責められない」

一呼吸置くと、ルゼは姿勢を正した。

「ディーナ。貴女はどうしたいの？まだ、出て………行きたい？」

苦しそくに紡がれる言葉は、恐らくルゼにとって勇気を振り絞つてのものかもしれない。

それでも。言わねばならない言葉がある。

「………シーラの身代わりはごめんです」

告げながら、ディーナの胸は痛めつけられたかのように、大きく軋^{きし}んだ。

* お叱りを受ける子供達（後書き）

どこに子供達が！？とつっこまれる前に。

ルゼにとって、館にいる子は皆『ジャスリート家の子』です。

もう大きくなった孫はもちろんのこと、守護に当たっている獣たちまでまんべんなく。

ちなみに館に勤めてくれている、侍女のお嬢さんたちも含みます。

かわいそうな孔雀たち。針のむしろのディーナさん。明らかに、一番場慣れしているフィルガ殿。

叱られ方にも、個性が出ますね。

第十章 * 対立する瞳（前書き）

これだけは、ここだけは譲れません。お互いに。

第十章 * 対立する瞳

そう。ディーナ、アナタは橋を渡って来てくれた。

あの約束の霧の日。契約の結ばれた あの橋を。

それを迎えたのはこの俺なのだから、誰よりも主張する権利がある。

。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：
。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：。。：*：

ディーナの答えにルゼは無言だった。否定も肯定も出来ない、といった所なのだろう。

『それでもアナタは引き続き 拘束します。言葉は悪いかもしれませんが、そうとしか言えません。フィルガ』

ディーナとよく話し合ってちょうだい。

そう言い残すとルゼは、孔雀たちを連れて退出してしまった。

だからこうして、フィルガと向き合わざるをえないでいる。

フィルガはルゼを見送るとディーナの隣に腰下ろすことなく、暖炉の横に背を預けて立ったままだ。・・・視線が痛い。

「まだ、俺・・・ジャスリート家から立ち去ろうというのですか？」
「・・・何とも言えません」

フィルガの問い詰めるかのような瞳から逃れるように、ディーナは視線を外しながら答えた。

「では。これからは、このフィルガと寝起きを共にしていただ

きましようか？もちろん。そのためには、部屋も一緒に」

「・・・・・・！？」

デイナーは無言であったが、力強く首を横に振った。それこそ、千切れんばかりの勢いだっただ。

その引きつり血の気の引いた表情を、フィルガの鋭い眼差しが見据える。

目で殺されそうだと、デイナーは喉の奥で唸った。度重なる脱走に、フィルガはどうやら本気で言っている様だ。

それでもデイナーは言葉を撤回し、取り繕う事はしなかった。

フィルガの異様な迫力に思わず押され、しばし動きを止めたデイナーだったが、また首を必死に横に振る。

両手がドレスをぎゅっと握り締めていた。知らず知らずのうちに足首が露わになるほどに、たくし上げてしまうほど強く。

頑ななまでに、断固拒否。言葉で訴えるよりも、かなり効果的だとデイナーは思う。

下手に言葉を誤まれば・・・またしてもフィルガの機嫌を損ね、実行されかねなくなりそうだから。

デイナーはいい加減、学び始めていた。フィルガは自分なんかよりも、格段に賢くその上冷静なのだという事を。

少なくとも行き当たりばったりで、感情に動かされるままに行動を起こしてしまうデイナーとは違う。

まるで聞き分けのない子供の自分に、呆れながら手を焼くオトナを見ているかのよう。

そんな彼に対して申し訳なさ半分と、聞き入れるものかという反抗心が半分で成り立つのが、デイナーの自尊心だ。

「それくらいならば、私を牢屋に案内して下さい。二度と抜け出せないよう、気が済むのなら足に枷でもはめて下さって結構です

から。どうせなら、最初っからそうしておいてくれれば良かったのよ、フィルガ殿」

「それほどまでに、この俺が厭^{いと}わしいのですか？ 牢につながれた方がマシだ不是吗？」

「そうよ、フィルガ殿！だから言っているじゃない！さっきから・・・
・いいえ。最初っから！私はシーラの身代わりなんてゴメンだっ
てっ！！」

「
・
・
・
・
・
・
ディーナ」

「確かに私は橋を渡つて来たわ。それだけは覚えてる。それ以外の事なんて、名前以外覚えちゃいけないわよ。でもだからってどうして、シーラに重ね見られなくちゃいけないのよ？顔と能力がいくら似ているからって、バカにしないで！私はディーナよ」

もう何度目になるのかわからない訴えを、ディーナは涙を堪えて絞り出す。

[illegible]

ディーナは泣き顔を晒すまいと、俯いていた。だから気がつかなかった。

フィルガの唇の端が、微かだが持ち上がったのを知る由もないまま見逃した。

•
○
●
○
:
:
大
:
:
●
○
●
○

●
○

:
:
大
:
:
●
○

●
○

:
:
大
:
:
●
○

●
○

:
:
大
:
:
●
○

●
○

:
:
大
:
:

「そうです。アナタは橋を渡つて来た。そのことは認めているですね？」

「そうよ……。」

迷い無く答えておいて、ディーナはなぜか取り返しの付かない返答をした事にすぐさま気がついた。

どこからかこみ上げてくるものが、身を包む危機感だったからだ。逃げ出したい衝動に駆られる、この感覚の正体は一体何なのか。

言い表しようのないこのものに、名称を与えと言うのならば『恐怖』だという事だけは解るのだが……。

なぜこのようなものが這い上がってくるのか、解らない。だからこそ余計に不安が込み上げてくる。

それはいつも深い部分で、ディーナに行動するよう突き動かす。
『逃げなさい』と。

（たすけて。誰か）

無意識層にいつも上ってしまうのが、この台詞なのだから我ながら情けない。

ディーナはすぐに、いけない！と思う。そう、自分を打ち消した。この感覚は危険だ。

またしても獣たちを呼びつけかねない感情だという事に、思い当たるようになっていた。

（いやだ。本当にいや。こんな能力、本当にいらない……。なんて。
『聖句』なんかよりもずっと、ずっとタチが悪い）

それを意識しないまま、発動させてしまう……。なんて。そんな自分自身に、嫌悪感を覚えてしまう。

それを振り払うために、ディーナは今一度勢い良く頭を振った。
恐怖の源泉が何なのかは、今だ見当も付かない。

それに打ち勝つためにも面を上げ、フィルガと真つ向からぶつかる以外は他に無い。

何かしら葛藤しているのだけは伝わってくる。瞬間、自分自身の奥深いところから込み上げてくるものは衝動に近い。

それはフィルガに次取るべき行動を命ずる。

（・・・まずい。今日はあの姿で長くいたせいか
引きずられかねない）

今すぐに彼女の望むモノとして、その傍らに何者よりも早く駆けつけ跪きたい。

ディーナのあの微笑とともに、もう一度彼女の唇から紡ぎ出される称賛を浴びたい。

この身であつては叶わない事も、あの姿ならば叶うのだから皮肉なことだ。それでは、フィルガの真に望むことから遠い。だから堪らなく魅力的な彼女の『呼びかけ』に、必死で抗うしかない。

（本当に　この娘は俺を試すかのように、挑んでくれる・・・）

正直忌々しくもある。それでいて、身に余る光栄だとも思う甘い呪縛。いつそのこと囚われてしまえば、どんなに楽か。だが、ひれ伏したら負けだとも思う。

軽い眩暈を押さえつけ、抱えるかのように腕組んで堪える。

惹かれて止まないその理由が本性のなせるワザなどとは、けっして認めたくは無い。

焦がれて止まない理由など、とつくに理性のあるべき所からは遠く離れた所にあるのは、薄々感づき始めているだけに。

（引きずられたら、負けだ。ディーナは二度と俺をフィルガとしては見なさなくなる！）

フィルガの望む者として、彼女は橋を渡つて来た。契約に従つて、迎えたのは他の誰でもなく自分なのだという誇りがある。

そうだ。逃してはならない。彼女がこれからどんな理由を並べ立て拒絶しようとも、もう知った事か！

やがて呼び声がささやかながら、鳴りを潜めていく。

二人が面を上げ、互いに挑むような眼差しをぶつけ合ったのは、
ほぼ同時だった。

[illegible]

晴天の澄み切った青空と、雪舞い落ちる直前の曇天。

お互いが
なんて対照的な空を模したかのような瞳だと、思っ
た。

それこそが互いに自分に持っていないもので、成り立っている証。

「フィルガ殿。私は恐らくこのままだと今日みたいな事、何度でも繰り返してしまう。意識する、しないに関わらず。このジャスリート家に確実なまでに『損害』を喰らわせてしまう、予感がする。それが拭い去れないでいる。この家にそんな事になって欲しくはないの」

解放してください。ディーナはきつぱりと、フィルガに告げた。

私がこの家に身を寄せていてはろくな事にならないから、と。

「出来るわけがないでしょう。アナタとしては、表に放り出しでもしてもらえたらそれで済むとも思っているのでしょうかね。そう

は行きません。ディーナ、アナタは橋を渡って来てくれたのですから」

フィルガはゆっくりと組んでいた腕を解くと、ディーナへと差し出した。

歩み寄られて、フィルガの影がディーナへと落ちる。それはまるで覆い被さるかのように、ディーナを圧迫する。

「さあ。ディーナ、立って」

「どこに、行くの？ フィルガ殿」

ソファに身を沈めたままのディーナの左手は、差し出す前よりも早く掴まれていた。

「牢、ですよディーナ。……アナタのお望み通りにね」

言いながらフィルガは、ディーナの甲に唇を落とした。

第十章 * 対立する瞳（後書き）

第十章に入りました。

お互いが、屈するものかとなっております。

どっちも色んな意味で意地っ張りなもので。

*** 孔雀のための牢（前書き）**

ディーナ、自分を罰して欲しい様子。

孔雀のための牢

この身をずっと包む寒さは何？

表皮だけでは済ませせずに、身体の芯から湧き上がってくるかの
ような。

私の体温を奪ったまま行ってしまった、あの獣はどこ？

[illegible]

「着きましたよ。さあ、どうぞ」

言いながら、フィルガは燭台を掲げる。促がされたその先にあるのは、四隅に細やかな彫り物の施された扉であつた。

（孔雀。ここもまた……孔雀。ツウオランとヨウランかしら？）

孔雀が左右に後ろを振り返る格好で、尾羽を引きずるように誇る様を彫りこまれてある。その繊細に施された彫刻の印象からか、重厚さのない扉に感じるが　えもいわれぬ威圧感がディーナの胸を詰まらせた。

フィルガに左手を引かれながら、デイナーは回廊を渡ってきていた。もう夜もだいぶ更けている。フィルガの手にした燭台の蠟燭だけでは、正直足元は頼りない。だから大人しく手を預けたのだ。

放して欲しいと訴えるのも、何だか気が引けたというせいもある多分、受け入れられないだろうしと・・・諦めているのと、放されるのも何だか。何だかひどく寒気が襲ってくる気がして。

（どうしてかな。あの『銀の彼』がすり抜けて行った時と同じ事になるような、気がするの……？）

ディーナは彼に体温の一部分を奪われたまま、込み上げてくる寒さに途方に暮れているしかなかった。

ディーナは自分の体にかかる現象に説明する術を持たない。なぜ
何を自身に繰り返すばかりでしかない。

つまるところ対処のしようがないまま、こうして寒さを堪えるしかない。フィルガのあまり高いとはいえない、その掌の温もりにするしか……。

促がされたままディーナは扉を前に、固まってしまう。いつの間にかディーナの手の方が強く彼の手を握り締めていた。

そうしている自覚の無いままに、ただ先ほどまでは預け置いていただけの指先に力を込めていた。

「ディーナ。着きましたから、開けて下さい。俺は手が塞がっていますから」

強く手を包み込むように握り返される。名を呼ばれ、我に返った。ディーナは小さく静かに頷いた。

自分で言い出したのだ。牢に案内しろと。だから、受け入れる。ただ静かに。

[illegible]

一歩足を踏み入れた途端、奇妙な浮遊感に体の軸を失う。

足元から突き抜けていくかのような、この場を支配するこの力の正体は何なのだろう？

身体を何かに貫かれる。それでいてそれは体から芯を奪う。今だからつて味わった事の無い感覚に、ディーナは痺れて身動きが出来なかった。

「な、に……？　ここが、牢なの？」

「ある意味そうと言えましょう。アナタのような能力の持ち主には完璧な『牢屋』です」

「な……にが……？だつて」

視線を定まらせないままに、ディーナは呟きを漏らす。そうだ。ここはまたしても牢屋なんかではない。

蔵かに設えられた書卓がまず目に入った。その両脇には整然と並べられた書棚が備え付けられている。

フィルガが部屋の中央に置かれたテーブルに、燭台を置くと室内の様子が照らされる。

ディーナは今一度、影の濃いフィルガの顔を見た。その眼差しに答えるよりも早く、彼は手を引いて一步を促がした。

彼のもう一方の手が指し示す方へと、身体を向ける。そこは天蓋から薄布が幕のように張り出されている。

恐らくこの闇の中であつてさえも浮かび上がって見えるから、その布地は光沢のある純白なのだろうと窺えた。

問題はその幕がしめやかに覆うその場所が、明らかに寝台だという事だ。

「……」

ディーナは言葉無いままに、動こうにも動けなかった。先ほどから身体を支配しだした、この室内に張り巡らされたとも言つべきか。

この身を怯えすくませるものの原因は何なのか。思い当たらなさか、より一層不安を煽る。

縛られるかのような、感覚という感覚を麻痺させるこの『場』の大気が呼吸をも狭めてくるせいで、思考さえ制限されるかのようだった。

それでもなお、フィルガに手を引かれて促がされる。しかしディーナの足が運ばれる事は無かった。

（・・・・・・え・・・・・・？あつ、あ・れ・・・・・・？）

ディーナの視界が大きく傾^{かし}ぐ。足が動かないのに引つ張られて、よろけたのだ。

そう理解できた頃はフィルガに抱きとめられた後であり、目の焦点が合う頃には寝台に腰掛けさせられていた。

「大丈夫ですか？初めてこの空間に晒されたとあつてはそうそう立っている事すらままならないでしょうから、座っていて下さい」「フィルガ殿。ここが『牢』なの？普通の部屋なのに？鉄格子も無いのに」

薄暗い室内から伝わってくるものは、溢れる高級感だ。それは威圧的でさえあるほどの。

それがディーナをすくませた訳ではないだろう。いくらなんでも部屋に入った途端に立ちくらんだのは初めてだった。

そんなディーナに気使うように、どこか声を潜めてフィルガは説明しだした。それでも彼の声は響いてよく通る。

「アナタや俺には充分『牢屋』となりうる部屋ですよ。その証拠に立ってられないほどに、力を削がれているではないですか。

慣れれば治まりますから、どうぞしばらくは大人しくしていて下さい」

「・・・・・・力を、そぐ？この力を無くしてしまえるの？」

「いいえ。いいえ、残念ながら『制限を加えるだけ』です。ディーナが持つ魅了する光をあまり外にまで出せないように、封じてはくれるでしょうが。ですからディーナ。無意識で有ろうと無かうと、そうそうもう獣は呼べませんよ？」

いいですね？そう、念押すかのようにフィルガは告げた。跪いて彼は真摯な眼差しで、ディーナを見つめ上げている。

「他に何か言いたい事はありますか。ディーナ？」

こく、と頷いてからディーナはかねてから言いたかった事を告げた。

「フィルガ殿。もう、私に敬語なんか使わないで。そもそもどうして、そんなに丁寧な敬語を使う必要があるの？ 立場や年齢からいったら、フィルガ殿の方がずっと……上なんだし」

[illegible]

長い沈黙の後、フィルガの口調はもう敬語ではなかった。だが、どこかぎこちなさが拭えない。

冷たく上からの目線でものを言うフィルガは、ディーナの知る彼では無いようにすら思える。

*
:
.
○

.
:
:
*
:
:
.
○

.
:
:
*
:
:
.
○

.
:
:
*
:
:
.
○

.
:
:
*
:
:
.
○

:
*
:
:
.
○

:
:
*
:
:
.
○

:
:
:

そのまま首を横に振りさえすれば、フィルガは出て行ってくれるだろう。この氣詰まりな空間も少しは和らぐというものだ。早く一人にして欲しかった。

「フイ、フィルガ殿、あ、あのね。あのですね……。訊いてもいいですか？」

「何を？」

「私が橋にいた様子を知っているのでしょうか？ でしたら『銀の彼』のこともご存知ですか？」

「……あのケダモノの事か？ デイナー？」

「ケダモノだなんて！ やめてください」

「ケダモノには変わりないだろう」

「そんな！ 彼は私を庇ったせいで怪我をして……そのまま……行つて。行つてしまつたんです。怪我を。していたのに……」

「

自分の軽はずみな行動が、彼をギルムードの剣と聖句に晒してしまった。それを思うとデイナーは罪悪感のあまり、立つて入れそうもなくなるほどだ。それよりも 行つてしまつた。その事の方が哀しいなんて。自分はなんて身勝手なんだろう。

いつその事彼が立ち去れなくなるくらい、手傷を負ってくれていたなら……。そう暗く望んだ自分が許せなかった。

こみ上げてくるのはただただ自身に対する嫌悪感であり、なだめ様も無かつた。そんな事を考えてしまつた自分を幾度も打ち消したいと振り払うべく、叫んだし頭を振つた。あの橋でギルムードを非難するカタチで、泣いて叫んだ。でもその訴えはデイナーが自身に言い聞かせようとしていたに過ぎない。

その気持ちを認めたがらない自分は、何て偽善者なのだろう。

聖句を用いる彼らを責める権利など、自分にはありはしない。それよりも、非難されるべきは自分の方だろう。

それなのに、自分が一番心配しているのは 。

「もう、会えないのかな？」

奪われた体温ぬくもりを取り返したい。ただ、それだけだなんて。

*** 孔雀のための牢（後書き）**

自分をそんなに卑下しなくてもいいじゃないですか。な、ディーナさん。

ちよつと落ち込んでますね。

*** 孔雀に呼び出された獣（前書き）**

フィルガ、暴走。（本当は短気な彼です。）

ディーナの意地っ張りを崩さず続行の姿勢に・・・切れます。

孔雀に呼び出された獣

もう会えないかもしれない等と、何故それほどまでに『獣』に執心するのかが解らない。

ただ一度見えたばかりの獣だろうか？

短いとは言え、いくら同じ時間を共に過ごした者には？

・・・その執着は無しなのか？

[illegible]

フィルガはディーナのうな垂れた様子を憐れに思つ反面
苛立ちを隠せない。

おまけに敬語も取り止めとなった今、その口調は使う本人にですら酷く冷たく耳に届く。

「獣の様子を知ってどうするつもりなんだ？ 言ったらう、そうそうもう獣は呼べなくなると。それともまた、抜け出すのか？」

「いいえ。私はもう『呼ばない』。私に関わつたばかりに、怪我な
どして欲しくない。二度と。だから、会えない方がいいの。彼にし
てみたらきつと迷惑だったわね。忌々しく思つたと思うわ。たとえ
無意識だったとしても、私なんかに呼びつけられて」

本当にごめんなさい・・・いくら謝っても足りないけれども、
せめてちゃんとお詫びしたいの。

ディーナはそう言うと、苦しげに胸の前に両手を重ね置いた。そのままフィルガの方へと大きく前に身体を倒す。

フィルガは思わず膝立ちになって、その身体を受け止めるように

手を伸ばした。そうして支えた両肩が、小刻みに震えているのが伝わってきて、どうにもやり切れない。

『獣の』彼を氣遣う彼女に対して込み上げてくる、甘さを伴った苦い思い。

それはディーナに対する罪悪感と、『彼に』対する嫉妬だろうか。先ほどから彼女の心を占めているのは、間違いなく『彼の』安否だ。

今さっきはもう会えないのかと、彼女の唇は不安を紡ぎだしたばかりだった。

フィルガが問い詰めると今度は、会わない方がいいから呼ばない等と言う。それでいて、ちゃんと詫びたいと言い出す。

『会いたい』でも『呼んではいけない』……『でも、やっぱり会いたい』。

そうディーナは二つの想いがせめぎあつて、自分の言葉が前後でかみ合っていない事すら解らないのだろう。

それはフィルガの胸を苦しいほど締め付ける。こちらがどれだけ心配したのかなどと、ディーナには推し量れていないようだ。こんなにも大切に失い難く感じていても、相手は『獣の』こと意外頭に無い様子なのだから。

自分がすでにこのジャスリート家の一員であるという事など、露ほども考えていないようだ。

（これだけ！祖母を取り乱させ、俺にあの醜態を曝さらさせておいて

！いい加減に解れ！）

こんなにも必要とされている。それなのに まったく！まったく伝わっていないとは！

その自覚があまりにも無さすぎて、フィルガがじれったく感じていた矢先にこの態度なのだから……先が思いやられる。

彼女が自分の存在価値を低く見積もっているのは、もはや疑いようが無い。

『牢に案内しろ』だの。『敬語を使うな』だの。フィルガの方が立場も年齢も上だと言ったか、この娘は？

（この俺を　これだけ振り回しておいて、ふざけているのか？いや、自覚が無いのか。どちらが立場が『上』だと？決まっている！）

この状況で一体どこがそうなのかと、怒鳴りつけてしまいそうになる。このまま乱暴に揺さぶり、そんな考えを振り落としてやりたいくらいだ。

実際フィルガの両手に力がこもり、ディーナのか細い二の腕に食い込む。

フィルガはこの獣^{びいき}貞の娘に自分を解らせてやれるなら、どんな方法でもいいから思い知らせてやりたいと思った。
たとえそれが、彼女をめちゃくちやにしてしまう方法だったとしてもだ。そうしてやりたいとすら思う。

そんな苛立ちがフィルガに大声を出させた。

「ディーナ！！いい加減に・・・っ・・・！！？」

驚いて顔を上げたディーナの頬を、涙が伝っているのを見止める。さつきから声押し殺して、俯いたままひっそりと涙だけを溢れさせていたのだろう。

暗い考えに取り付かれていたフィルガだったが、自分を取り戻す。何だかんだ言っても、ディーナに泣かれると弱い。

「ディーナ・・・どうしたんですか？どこか苦しいのですか？」

思わずさつき廃止したはずの敬語が復活していたが、意識に上らないままフィルガは尋ねていた。

「・・・さむい・・・」

「寒い？」

唇をわななかせているディーナの肩は、押さえつけられていても小刻みに震えたままだった。

どうやら本当に、泣くのを堪えているからだけではなさそうだ。

（寒いか……まずいな、これは。やはりこの空間は彼女には厳しいか）

「ディーナ。やはりアナタにはこの『牢屋』は不向きです。身体が持たなくなる前に出ましょう」

ぶんぶんぶんと力いっぱい、いっぱいに首を横に振り続ける彼女の答えは　いいえ。改めて尋ねるまでも無かった。

そう、声に出さずとも伝わってくるのは彼女の頑ななまでの拒否。その強情を愛しいとも……煩わしいとも思えたから、無理やり立ち上がらせようと引つ張る。

「ディーナ！　いいからもう、行きますよ。アンタが『牢』に案内しろ」などと言つて俺を挑発するようなマネをするから、俺も意地になっただけです。ほら、立って」

引き続きぶんぶんと頭を振つて、身体を強張らせているディーナにフィルガはついに短気を起こす。

「っ……ディーナ！　意地っ張りも大概にして下さい！！でなきやもう、殴つてでも言う事聞かせるから……」

……な、と言つてから、フィルガはしまったと思つたがもう遅すぎた。

ディーナの表情が明らかに強張った。その瞳に映る男を恐怖の対象と認めたのだろう。

彼女の引きつった顔を見ればイヤでも分る。

『殴られるかもしれない。』それは彼女の中の、フィルガという存在に対する誤まつた捉え方だ。

それをすぐに解きほぐして行かねばと、心に誓ったばかりなのに、もちろん誤りのままで終わらせて、真実にする気などない。それなのに、このザマなのだから情けない。

フィルガは慌てて弁解を口にしようとしたが、予想に反してディーナの方が先に噛み付いてきた。

あまりのやわらかさに眩暈がした。何もかもを遠くに置き去りにして、ただひたすらに。

そのやわらかさを、もっと。もっと。と。

「んう！」

それこそもう、ディーナが呻き声を漏らす事さえ出来なくなるほど深くまで。

[illegible]

「好きなだけ殴っていいと、言い出したのはアナタでしょう？ だからこうして。好きなだけ殴らせてもらってるんじゃないですか」

胸板を打ち据える拳を難なく片手で封じる。身を擦らねばならなかつた僅かばかりの合間に、勝手な事を言い放つ。

「……も、もう……やつ！ん！」

口答えを許さない。呼吸の荒いディーナをなおも容赦なく責め立てるべく、フィルガは唇を塞ぐ。

誰か誰か誰か！誰か『銀の彼』助けて！！

そう、彼女はまた無意識のまま泣き叫んでいる。

フィルガが力を込めれば込めるほど、その『呼びかけ』は、より一層強くなる。

（かわいそうに。アナタの騎士団は駆けつけては来れませんよ）

今日の前にいる自分が間違はなく【獣】なのは、まず間違い無さそうだが。何て皮肉だろうと、フィルガは自虐的に笑う。

ディーナは助けを求めている相手に、こんな目に遭わされているなんて思いもよらないだろう。

（ディーナ。なぜいつも頼りにする存在が『獣』なのか。この『俺』では無く・・・忌々しい）

フィルガは怒りに我を忘れて、ディーナを放そうとは思いません
貪り続ける。

*** 孔雀に呼び出された獣（後書き）**

やっちまいましたよ。我に返ったフィルガがどう、事を収めるかは・・・まあ・次回で。

ちなみに、どちらが立場が上でしょう？

*** 孔雀にはめる足かせ（前書き）**

ディーナ。彼女はほぼ、負けん気で成り立っているようです。

孔雀にはめる足かせ

•
•
•
•
•
•
○

大っ嫌い。

もう、あっちに行つてよ。

[illegible]

気丈にも身を任せきることなく、ディーナは抵抗を試み続けていた。

たとえそれが、ただなす術も無く易々と封じられていようとも、
だ。

彼から見れば、ディーナはもうとくに屈していたかに思えたかもしれない。

絶対に負けてなるものかという気持ちを持ち続けていただけで、
実際は身動きひとつ取れていなかったのだから。

そのせいでフィルガは少々油断したようだった。ディーナの両手を封じていた手が緩んだ。

ディーナときたら、そのわずかばかりの隙を油断無く見極めていた。素早く己の手を引き抜くと、勢い良くフィルガの左頬を突っぱねる。離れ間に、ついでにガブリと噛み付いてやった。

どこをどう狙つてやろうかなんて、無我夢中で考えていたワケではないが。ディーナの犬歯は、フィルガの上唇を確かに捕らえていた。

「ツ」

フィルガが思わず出した短い声には、痛みを訴える響きがあった。してやった！という暗い喜びが湧き上がる。

それでいて痛がらせてすまなかった、と言う気持ちが沸いたのも同時だった。それが噛み付いたまま、彼を突き放すという行動を取らせた。

「っちツー！」

「――！」

フィルガが顔をしかめながら、己の口元を押さえていた。その唇の端に滲むのは、鮮血の赤。

噛み切ってやったのだ。ディーナは自分の口の中に広がっているのが、血の味だとそれを見て理解した。

「・・・やってくれますね」

いい気味だ！そう言ってやりたい所なのだが、言葉にならなかった。

それでいて、思わずごめんなさいとも言いそうになった。それも発される事は無かったが。

恐らくその二つはディーナの中でぶつかり合って、相殺されたらしい。

「・・・。。。」

フィルガの目の色は明らかに不穏だった。据わり切った灰色の眼に見据えられ、ディーナは喉の奥で悲鳴を飲み込む。

しかしここでまた目を瞑ってしまうのは躊躇われた。そんな事をしてはまた対応が遅れる。

もう、好きに『殴られる』のはゴメンだった。

そう自分を奮い立たせるように、身を起こす。その途端に背を受け止めていてくれた柔らかな感触が、寝台によるものと改めて認識出来た。

「・・・っ・・・つく・・・！！」

悔しい。恥ずかしい。屈辱だった。もう先ほどまで身を包んでい

たはずの寒さなど、身体のだこにも名残が無い。

フィルガに無理やりとはいえ、熱を呼び覚まされたのだ。それがより一層ディーナの羞恥心を煽る。

こみ上げる怒りにかみ締めた唇が、ひりひりと痛んだ。それもフイルガに殴られたせいかと思うと、新しく涙が溢れ出す。

ディーナは勢いに任せて、クッションを引っつかんで振りかぶった。ぼすん、と鈍い音を立ててフィルガにぶつかる。

かなりの至近距離からなので、外れずに上手いこと命中した。それでもディーナの気は治まらない。

間を置かず、もうひとつ振りかぶる。今度は投げつけてしまわずに、両手で力一杯フィルガに振り下ろした。

ぼす！ぼす！ぼす！と、何度も何度も肩で息をしながら、デイーナはぶち続けた。

正直足元がふら付いて仕方が無かったが、氣力を振り絞り勢いに乗ってフィルガに怒りをぶつける。

そんなディーナの攻撃をかわす事も無く、フィルガは黙って受けている。

[illegible]

「もう、気は済みましたか？」

ぜい・はあと、呼吸を整えているディーナにフィルガは声を掛けた。

ディーナはきつと睨みつけると、またひとつ大きく振りかぶった。済むわけが無かるう！気持ちには治まりようも無い。そんな凶暴な怒りに反して、体力が尽きかけている。

明らかに威勢が良かったのは、最初の二・三回の振りまでだった。それですらこの男にしてみたら、痛くも痒くも無いだろう。恐ら

った。

目の端でカーテンが、寝台を覆う布が、ふうわりと持ち上がったのをとらえる。それが落ち着きを取り戻すよりも一瞬早く。

足元に白い獣が伏せていた。獣は巨体を持ち上げるように、すぐ身を起こしながら尋ねる。

” ” 呼んだかフィルガ？”

「レドっ!？」

ディーナは意思奪われて久しいはずの・・・獣の名を叫んだ。

” ” ディーナ!! ディーナ、どうした!? フィルガにいじめられたのか? 泣かないで、ディーナ”

「・・・レド!! ごめんっ、大丈夫だったの? 私のせいで・・・『聖句』につ・・・」

ごめんね、ごめんね、私が巻き込んだから・・・。。。。そう、詫びながらディーナはレドに抱きついた。

「レド。ディーナを守れ。片時も目を離すなよ。そして何か異常があつたら俺をすぐに『呼べ』。いいな？」

その様子を見下ろしながら、フィルガはレドに命じる。

命令口調から庇うように、ディーナは強くレドにしがみついた。落ちてくる言葉に身を固くしたのは、ほとんど反射的なものだった。

” ” 今!! 異常っ、ディーナが泣いている。不審者・フィルガ!! ” ”

「レド。貴様」

” ” オマエに言われるまでもない。いいから早くあつちに行け。いじめっこ・フィルガ!” ”

どうやらレドの中でディーナを泣かせる悪いヤツ!! フィルガという図式が出来上がったようだ。

獣はディーナの泣きすがりっぷりに異常さを感じ取ったらしく、慌てたようにフィルガを追い払おうと牙を見せた。

切ったのは口の中の方だったので、あまり外から見ても解らないだろうが腫れて来ていた。

気づかれたらどう説明しようか、少し思いあぐねていた所でもあったから正直・・・助かった。

何か尋ねられてもコレで言い訳が付く。ディーナには悪いが利用させてもらおう。

その傷のせいもあつて思わず体を離してしまったのは、悔やまれるような。これで良かったと胸を撫で下ろすような。

複雑な気持ちだ。

彼女が先ほどこらずとずっと気に掛けている『彼』ならば、その笑顔を取り戻す事が出来るのであろう。

だが問題は『彼』の求めるものが、ディーナの与えうる限界をやすやすと超えてしまっている点だ。

彼女は『彼』を前にすれば無条件で受け入れてしまう事だろう。恐らく 人畜無害と信じきっていてやまないだろうから。

そうして無防備極まりないディーナを目の前にして、はたして『彼』は『人畜無害』でいられるだろうか・・・。

答えは『否』だ。

そんな獣が本性の赴くまま振舞ったら、どうなるか。

確実に彼女の身体も精神も、どちらも壊してしまうだろう。

彼女に深い傷など負わせたくは無かった。

自分はそれを良しとはしない。当たり前だ。

だからレドを呼び出した自分を、褒めてやつてもいいと思う。彼女の魅力を前にしながら、必死で抗って屈しなかったのだから。

（ディーナ・・・アンタは本当にやってくれますね。今日は負けそうだった・・・）

フィルガは唇を押さえたまま、ずるずるとその場に崩れ落ちた。背後を預けた扉の向こうにいる彼女の気配を探りながら。

立てた右膝に体重をかけると、ぐったりとうな垂れる。ついには
つきりと宣告されてしまったのだ。

（大嫌い、か……。やっぱりな）

相変わらずフィルガに勝ち目は無いようだった。

*** 孔雀にはめる足かせ（後書き）**

どちらが立場が上かって？

ディーナ＞フィルガⅡフィルガ目線。

ディーナ＜フィルガⅡディーナ目線。

と、いった所でしょうか。

*** 獣の血筋（前書き）**

やり場の無い想いは、勢いある跳躍へと変換されて発散されます。

＊
獣の血筋

なめらかな毛並みも

しなやかな筋肉をまとった体躯も

全てはあの御方のためのもの

[illegible]

吹き抜ける風と共に、疾駆する影がひとつ。平原を駆け抜けるのは一頭の狼。

その艶めく銀の毛並みは月明かりでさえもはじき返し、輝き放つてそれはそれは見事な光沢だった。

残念ながら賞賛を送るものは、今はただ満月のみである。

強くしなやかな筋肉は駆け抜けるための造りであり、ほんの一蹴りでかなりの距離を縮める。

丘陵から次の丘陵へと、まさに飛翔するかのようには跳ぶ。一躍した直後に彼は空に留まる。

やたらに長く感じるその一瞬。身の浮く短い時間だけが、彼を思い煩わせる全てから解き放ってくれるのだ。

滞空する心地よさは瞬きにも満たない時間だった。だから……
だろうか。

彼の前脚が着地する頃には、また足の裏に鉛でも貼り付けられたかのように現実に引き戻されてしまうのだった。

左の肩口の引き攣ったような痛みも、思い出したかのようにソレを手伝う。

彼女が半狂乱になって心配してくれていた傷だが、今はもう体重をかけても気にはならない。

我ながらこの身の回復力の速さには、有り難いと思う反面・・・
軽い嫌悪感が伴なう。常人ならばありえないからだ。

【忌々しい。この身は何て化け物じみているのだろつか！汚らわしい呪われた血筋を、清められるのは一体なんだ！？】

腹立たしさから思わず唸り声を上げていた。長い鼻っ面にシワがより、自身の牙が己に深く喰い込む。

風を切つて跳躍を続ける彼の耳に届くのは、己の息使いと平原を渡る夜風のみ　の筈で。

遠く。そして、近く。吹きすさぶ風の咆哮ほうこうが耳をかすめて行つた。繰り返されるそれが、すすり泣くあの子を連想させる。

振り切ろうにも獣の身であるがために、どんな微細な音色でさえも拾い上げてしまう……。

獣は自在に動く耳をなるべく後方に倒して防ぐよう試みてはいるのだが、たいして効果は無いようだった。

やり場の無い想いを、これ以上あの娘にぶつけてしまいたくは無
い。それでも抱えた想いは抑え付けようもない。

だから彼は走る。ひたすらに、風と月明かりを連れ立って。

[illegible]

『銀の獣』は気がつく、あの橋のたもとにたどり着いていた。

幼い頃から通いなれた場所である。

いくら目的も無く無意識であつたとしても、今またこの場にいるのは少しいたたまれなかった。

橋の真正面に立ち、その闇に見えない向こう側を見据えた。

見えない闇に目を凝らしてみても、彼の目に映るのはおぼろげな橋の輪郭のみだ。

【・・・・・・ディーナ】

思わず呟きもらしたのは、彼女が霧の中を渡って来たあの日を思い返しての事だった。

あの日。霧のベールをまとって現われた少女は、彼の『生涯で唯一人』の『望む者』で間違いない。

迷いの無い確信に、根拠は無い。あるとすれば自分の血が教えてくれたから、とでもしておく。それしかないが充分だろう。

どれほどこの胸が歓喜に打ち震えたことか。高鳴る胸に手を当てて跪く。

それは古来からの作法による表現そのままに、フィルガはそれに倣っていた。

実際かつて無い動悸にそうせずにはいらなかったから、そうしたまでというのが真相だ。

きつと皆 ジャスリート家の先人達も、そうせずにはいられなかった事だろう。

痛むほどの鼓動を抑え感じつつ、跪いて迎える者は穢^{けが}れ無き無垢な者なのだから。

幼いままの心で一心に願ったものは、まだ形にならなかった。だからだ、きつと。

幼かった彼が望む者と与えられなかったのは、自分で自分が何を寄こせといっているのかが、あやふやだったせいだ。

幼い息子を捨て去ったとしか言い表しようの無い母親に、文句のひとつも言ってやりたいところだったせいもある。

しかし確信もあった。あの人は二度と橋を渡ってはこれない。契

・。・。・。・。・。・。・。・。・。

見上げた像の視線の先　闇の中から出でしものがあつた。凝らし見なければ見逃してしまいかねない。

それでいて己の存在を誇示する闇に、フィルガは馴染みがあつた。闇をまとい引き連れたその者も、橋をゆつくりと渡つて来たようだ。

しかし跪く気には到底なれないその者を確認すると、銀の獣は鼻を鳴らして出迎えた。

【こんな所で何用だ、ダグレス？】

ふん、と闇色の獣も鼻息を荒くして、言い返す。

” ”　　今すぐ戻れフィルガ。ディーナ嬢さまの元へ ”

【何だと？また、侵入者か？オマエのような】

” ”　　いいから、戻れ。嬢さまが泣き止まない ”

ダグレスの言葉に、フィルガはがっくりと首を下に落とした。

（またコイツは人の目を盗んで、ディーナの元に行ったのか。しかも封じを施したあの部屋に、易々と侵入したようだな）

ダグレス　この獣は、予てから『^{かね}シーラ』の加護を受けている。

彼女がいなくなった今でも、その祝福は有効らしくフィルガを悩ませる。いくら遠ざけようとしても、昔からこの調子なのだ。

シーラの力は純粋なまでに強く、絶大な影響力を発揮したままダグレスに祝福を与え続ける　。

それを断ち切つてやろうと何度試みた事か　は、もう忘れたが。また今回も敗れたのは、フィルガの方だというのだけはわかった。【・・・・・・・・断る。俺が行つてどうなるものでもない。それどころかむしろ、泣かせてしまうのがオチだろう】

ダグレスは胸を反らしながら、顔を背けたフィルガを見下す。何故こやつに頭を下げねばならんのか　。

そう言いたいのは山々だろうが、ディーナのためなら仕方なし・
・といった所だろうか。

” ” ディーナ嬢さまは御心を『銀の獣』に預けられておしまい
ようだからな” ”

ヴウヴ・・・と喉を鳴らして、ダグレスはつまらなそうに吐き捨
てた。

【・・・じゃあオマエが行って伝えてやれ。『銀の獣』の傷
は癒えた。そうすれば少しは 泣き止むだろうから】

” ” 忌々しいほど鈍いヤツだな！わからんのか？わからんのだな
？なら、教えてやるから悩めばいい、シーラの息子！ディーナ嬢
さまは『銀の獣』に夢中なのだから、オマエが行かねば意味が無い
でなければわざわざオマエに、頭を下げるものか” ”

【何だと？ディーナが・・・俺に？】

” ” 違うな。『銀の獣』にだ。貴様 フィルガ・ジャスリート
にはないわ。だからせいぜい悩め。でなければ我の気が済まぬわ
！なつかしの風を孕み持つ、その源からオマエが導き出した御方な
のだぞ？それをよもや忘れたわけではあるまいな？シーラの息子、
フィルガめ。オマエよりも獣の我の方が、ディーナ嬢さまのお心に
留まるのは至極当然のことだ！” ”

カツ、カツとダグレスは前脚をその場で蹴り上げた。相当苛立つ
ているのだろう。首も前後に打ち振る。一角の切っ先はフィルガへ
と的合わせしている。

ダグレスは自分が『魅力的』な事を熟知している。それすらも獣
の持つ、力の強さの現われ具合なのだ。

大方ディーナを魅せ付けて、あの日も連れ出す事に成功したのだ
ろう。そこに『銀の獣』が現われて、ディーナの関心を奪ってしま
ったのだ。

その事でよほど自尊心が傷ついたのだろう。シーラの術にはま
た敵わなかったが、ダグレスよりもあの娘の心を魅了できたようだ。

確かにフィルガではなく『銀の獣』の彼が、という所が何とも皮肉なものだが……。勝ち勝ちだ。

それを妬いているらしいダグレスに、フィルガは勝ち誇るように負けじと胸を張った。

” それを！！それを貴様は 。嬢さまを魅せつけておいて、何も言わずに立ち去るとは何事か！”

【言えるか阿呆】

” ふん。ここで一突きしてやりたい所だが、それくらいでは気が治まらんわ。”

【ここで勝負をつけるか？それもいいだろう】

” のぞむ所だ。この若造めが！！”

ダグレスの紅い眼が、闇の中で鋭い光を放った。^{まなこ}怒りのためか、爛々と輝かせながら唸る。

その咆哮にも似た叫びに呼応するかのように、橋の向こう側から遠吠えが上がった。

* 獣の血筋（後書き）

ダグレスが訳知りなのは、長く生きているからでしょうか。

ディーナの好みが『獣』なので・・・フィルガは（恋愛）対象外だった様子。

しかし『銀の彼』は彼女の心を掴んだようです。よかったね（？）
フィルガ。

（たらたら書いては消し）で、前回よりちょっと間が空いてしまいました。こんな調子で二人の距離はいつ、縮まるんでしょうか・・・
・・・。 自問自答）

第十一章 * 魂に刻む句（前書き）

泣きすぎると、何で泣いてるかわからなくなりませんか？

哀しいという感情だけがただ、胸にあるせいなのは確かなのに。
言葉にはならないので、厄介です。

第十一章 * 魂に刻む句

何でこんなに自分が泣いているのか わからない。

泣いて・・・どうなるものでもないから、いい加減にして
おきたい。

だから、泣き止みたいのだが。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

ダグレスもレドも優しい。

ひどく、ひどく優しい。その毛並から、眼差しから、しっぽの先
にいたるまで。・・・何から何まで。

存在自体がディーナの心を、慰めてくれる。

”ディーナ。もう、泣かないで、ディーナ。レドがいるよ。側
にいるよ。だから、一緒に遊ぼう”

レドの口調はどこか幼い子供のようだ。心もそれに準ずるものだ
からだろう。

純粹にディーナを慕って、その涙を晴らしたいと必死な様子だ。

その温かな心使いに包まれて、ますます涙が頬を伝う。

安心したのだ。彼ならば、ディーナに乱暴を働いたりしない。け
っして。。

ディーナはその存在に頼るべく、ぎゅうと抱きついたままレド
の胸元に顔を押し付ける。

”ディーナ。フィルガならもういないよ。あいつ、いつもイジ

ワル。来ても追い払ってあげるから、もう安心して？”

「……ありがと、ね。レド」

ディーナは顔を上げないまま、くぐもった声で小さく礼を呟いた。優しい獣が寄り添って、こんなにも自分に心を砕いてくれている。

（それに比べてフィルガ。アイツめ。あの男は一体何なんだ！人のこと、バカにしてっ！！）

それなのに……ディーナがただ一言『嫌い』と告げた、その途端。あんなにも無表情のまま、哀しそうな目で見るなんてどうかしている。

そう思わないのだろうか。大体からにして『好きに殴らせて貰う』とか言い出して、その行動がアレだ。

（私に嫌われたくて仕方ないの？フィルガのバカ！！それだけ私が憎い？……シーラの代わりに感情ぶつけないでよ！！）

蘇るのはあのフィルガの眼差し。いつも、いつもそう。ディーナが突き放そうとすると見せる、あの顔。

置いてきぼりにされた子供のようになさるかなのような。拒絶するディーナを責め立てるような。

悲しみを湛えながらも、鋭さを秘めた眼差しの意味するところは……つまるところ『恨み』なのじゃないかと思わせる。

（だから！私はディーナよ！　シーラとは、違うの！！）

その度に負けじと叫び続けてきた訴え。彼は無意識であろうとなかろうと、いつだってディーナを責めている。

（まるで罪人^{つみびと}を咎めるかのよう。私にそんなもの抱かせたくって仕方が無いんでしょう！だから！だから、だから。牢に案内しろって言ったのよ！フィルガのバカ！！）

いくら正当性を訴えてみても、ディーナの胸の締め付けは治まらない。しかも、だんだん呼吸さえ制限されてしまうかのようだった。瞳に湛えた涙は止まる様子はない。止め処も無く溢れ続けて、自分分は壊れたのかとふと思った。

なかなか言う事を聞いてくれない自分の瞳に、焦りという立ちすら感じ始める。

” ディーナ嬢。一体どうされましたか？このダグレスに出来る事はございませんか？”

今ままでただ静かに 側に寄り添っていただけのダグレスが、遠慮がちに声を掛けてきた。

「・・・ありがとう、ダグレス。何だろうね、私・・・色々あり過ぎて。もう、ワケがわからないよ。何でこんなに涙が止まらないんだろう・・・寒いからかなあ」

” 寒い？体調でも崩されましたか？フィルガめに言いつけて、暖炉に火を起こさせましょう”

「 ううん。ダグレスもこっちに来て、抱っこされて？そうしたら・・・大丈夫よ。きつと」

” おおせのままに”

べつたりとディーナに張り付いているレドを、目線だけで退ける様にと促す。

そんな紅い眼に脅しつけられて、レドは渋々ディーナの背後に回った。

レドが長いしっぽでディーナにまとわり着く。それすらも視線ひとつで諫めると、ダグレスはやっと擦り寄ってきた。

一角をディーナに向けてしまわぬようにと、首を傾けるとダグレスは前脚を折る。

次いでディーナがその首筋に両手を回すと、慎重に後ろの脚も追った。

急の無い動きは、すべてがディーナのためのもの。闇色の獣の所作は、それはそれは優雅な気品に満ちている。

フィルガが退室してからすぐ。ダグレスはいたって自然に傍らにいた。彼の特徴的な瞳が瞬くのは、合図と受け取れた。

ディーナは驚かなかった。彼は闇の一部、闇そのものなのだから。

闇の支配するところならば、いくらでも行き来可能に違いあるまい。

「ねえ、ダグレス？」

” ” 何でございましょう、デイナー嬢”

「あの『銀の彼』を見かけなかった？ケガをしたまま行ってしまったの・・・大丈夫かしら？」

” ” あの獣でしたら何の心配もございませんよ。この身は回復力が強いのです。見たところギルムードの剣も掠めた程度でしたから出血の割りに、傷は深手では無いでしょう。ご心配には及びませぬよ”

「そう良かったわ。ありがとうねダグレス。アンタはケガが無くて良かったわ。あの彼みたいにケガをして欲しくは無いのよ」

” ” デイナー嬢・・・”

自分の身を案じて囁かれる、優しさに溢れた気遣いの言葉・・・。ダグレスはうつとりと、目を細めて身をすり寄せる。

「ねえダグレス。もうひとつ訊いてもいいかしら？」

” ” 何なりと”

「あの『銀の彼』の名前は何ていうのか知っているかしら？彼ときたら、名乗ってもくれなかったの。どうしてかしら。もう、誰かの聖句に囚われてしまっているせい？・・・！！？もしかして、彼はフィルガ殿の獣なの？」

” ” いいえ。いいえデイナー嬢。いいえ。あの獣は今だ名を

持ちませぬ。そうだ、デイナー嬢。よい提案がございますよ。そうしたら、嬢様のお心も晴れますでしょう”

「え？なあに？」

” ” あの獣を嬢様の獣にしてしまえばいい。このダグレスめに良い策がございますゆえ・・・・・・お耳を”

。。。。：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。
：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。

『聖句』で魅了し、なおかつ嬢様の魅力で縛れば

あの獣はアナタ様の虜でございましょう。

。。。。：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。
：*：。。。。：*：。。。。：*：。。。。

（え。。。聖句？虜？私、の獣に？）

ダグレスの言い出した策とやらに、ディーナの理解が遅れる。

” あやつめの『属性』は『雷』と『闇』と『光』。普通は属性は単独なのですが、アイツは極めて珍しい属性なのです。それだけ力も強いし、複雑なのです。そう簡単に術者の聖句に屈しないでこられたのも、そのお蔭なのです”

（何を？何を言い出すのダグレス？そんな事が許されるわけが無いじゃない。。。）

ディーナは甘く痺れるような感覚に支配されて、ダグレスに異を唱える言葉が紡ぎ出せなかった。

物々しく重いものが胸いっぱいを占める。これは知ってる。罪の意識 罪悪感だ。

問題はそれを押しやろうとする、もうひとつの感情の方だ。あまりこちらはなじみが無い気がする。

それを何と人は呼ぶのか、見当のつけ様がないからだ。

ただわかるのはその感覚はディーナを痺れさせ、正常な判断を鈍

その切つ先の射ぬくは、彼の獣の魂の在り処。
闇のとばりにく
るまれた魂の在り処。

振り払え、輝ける雷光の矢刃よ。

射掛けられた雷光という名の下に、仕留めるは彼の者の魂の在り
処。

射かけよ、闇を切り裂く雷の光。

彼の者の魂を私の物とせんがために。

[illegible]

”
”
彼の者の魂を我が物とせんがために
”
”

「彼の者の魂を我が物とせんがために……」

ディーナは自分でもわけのわからぬままに、ダグレスに倣って聖句を口にしていた。

すでに意識はどこか遠くに飛び、瞳は彼方を見据えたかのように
虚ろでいて・・・強い光が宿る。

今ディーナの心を占めるのは聖句の文言そのまま。『彼の者の魂を我が物に』その想いだけだ。

一切の疑問も罪悪感も鳴りを潜めたまま、ダグレスに言われるがまま彼に従い術句を口にしていた。

はじめの方は罪の意識が咎めてくれていた。それなのに言葉のをせるたびにそんな想いは、どこへやら。

代わりに自分の心に素直に従う自分が主張する。刻め聖なる句を己の魂に、と。

ディーナは無言のまま、自分の深みから湧く声に頷いていた。
（聖なる句を刻む。この魂に。……彼の者の魂を我が物とするために）

書物による伝承かなわぬ聖なる句は、それを極めたものからの口伝えによって受け継がれていく。

ディーナはそうと理解できぬままに、詠唱を授けられていた。ダグレスという三の属性を見極める目を持つ、最高の師によって。

” ” さあ、これでいいディーナ嬢。 ……後は実際に『彼の者』を、嬢様の獣『聖句の徒』にするだけです。しばし、お待ちを。
『彼の者』をお連れ致しますゆえ ” ”

ダグレスの満足そうな言葉に、ディーナはただ頷いていた。

第十一章 * 魂に刻む句（後書き）

ダグレス！！ アンタ、本当に何てこと言い出すんだい！！

ますます二人の間に溝が。

凶暴で、賢い彼には振り回されてしまいます。

いや・でも。男女の対決は書くのは好きですね。
がんばります。お付き合いよろしくお願いします。

*** 魂への試み（前書き）**

シアラータにトゥーラ。一章と八章ぶりでございます。

＊魂への試み

彼の者の魂を・我が物に・我が物に・我が物に。

それ以外は考えられない。

けれども。我が物となつた魂をどうしろと言ふの……？

[illegible]

月明かり僅わずかばかりの闇の中。橋に立つ者の影が、飛翔するかの
ように立ち去った獣を見送っていた。

【・・・・・・君はまだ物足りなさそうだね、ダグレス？もつと彼と牙を交えたかったかい？】

” ” ふん。こんなものは遊びでしかない。だがこんな所でくすぶっているよりも、優先する事があるからな。それはあやつめと同じであるうさ ” ”

ダグレスはつまらなそうに言い捨てる。そうは言っても立ち去つた銀の獣の方角に向かつての、威嚇とも取れる動き　首を前後に打ち振りながら己の一角を構える　のを止めない。

トゥーラの目から見ても、彼が不完全燃焼なのは明らかだ。

それは彼がディーナの想う獣だから、本気を出せずにいるのだろ
う。ずいぶんといじらしい事だ。

【それは確かに。よくやってくれたね、ダグレス。礼を言うよ。君のお蔭だ。ディーナはちゃんと聖句を刻んだし、フィルガは獣身のまま 彼女の元に向かった】

別に。我は嬢様のために動いただけだ。全く！！若造が！！

つまでたつても子供で、世話の焼ける。だから、せつついてやっただけだ。それに・・・嬢様が『聖句』を必要とする時が、必ず来る”

神殿の輩が動き出したからな。

そうダグレスは付け足すと、ようやく首をもたげて胸を張った。

『名乗り』を上げ、『高見に立つ』と宣言から始まるのが聖句の特徴だ。ただし、それは人の子の操る聖句だからだ。

あくまで聖句を用いて獣を従えるのがその目的であり、築かれる関係は『主従』だ。

獣は調べに心を奪われるが、まだいくら自由がある。聖句は魂という深みに触れても、食い込むまでには及ばない。

心は本来ならば、軽やかで自由なものだ。何者であろうとも。そのせいか比較的、第三者からの介入という影響も受けやすいのだ。

だが、魂だけは違う。よほどの事が無ければ、誰もその輝きを鈍らせるまでには至らないのだ。

わずかばかりその光に触れることはできても、犯すことの出来ない領域だ。その源が何で出来上がってるのかまでは、今だ答えは無い。しかしこれだけは断言できる。

『魂』を傷つけることが出来るのは、その魂の『持ち主』のみがなせる行為だと。

何者であろうとも、他の魂にまで食い込むのは不可能。そう結論はつけた上で導き出し、なおも続けられる『研究』という名の実験（こうしん）。トウーラ・ファーガのいつ果てる事もない、好奇心の表れ。

そんな己の『研究』に、そろそろ終止符が打てるかもしれないと思いはじめていた。

やっと。やっと。だ。その兆しが見え始めた。それは収穫のある成果として、収めてやれるかもしれないと希望のあるもの。

トウーラは満足そうに笑う。それはあどけなさの残る少年のものでもあり、（よわい）年齢を重ねたものでもある。

それはトゥーラやダグレスも同じだ。

【さあ。どうなるかな。早いところ幕が上がって欲しいよ】

” 我也行くぞ ”

【ダグレス、待った！ それは野暮つてものだろう。ここで待つんだ】

” そうだが．．．．． ”

【ここでシアラータに倣うんだ。いいね？これは『あの二人』の対峙なんだから。さて．．．僕は孔雀の目を借りるとしよう。まあ全部は覗き見せず、制限を加えるから安心して？】

（（ ” なぜ、私に言うのだ？ ” ） ）

【．．．．．それが道理だろうからさ、保護者殿。 シアラー

タにダグレス。万が一暴走したら、対処を頼むよ】

” もちろんだ ”

頷く二頭の獣を確認すると、トゥーラも深く頷いた。そのまま瞳を閉じると、両方の腕を^{かいな}を広げる。

そうしてトゥーラ・ファアガ・ジャスリートは、意識を飛ばした。

．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．
．．．．．*．．．．．

実に通い慣れた部屋なのだが、こうして訪れてみると奇妙なものである。

ここは昔、彼の母親が居としていた自室だ。

別名『孔雀のための鳥かご』部屋。皮肉を込めてそう呼ばれていたし、彼もそう呼んでいた。

『白孔雀』こと シーラの持つ輝きに魅せられて、彼女を訪れる獣があまりに多かった。それが昼夜問わずとあっては、流石に彼

女に支障が出る。

だからその輝きを幾らかでも封じてやるために、細部に獣よけを施してあるのだ。それから改善を加えて、より強力な術が作用するにまで至った部屋。

獣に目くらましを与えるだけではなく、住まう者の力にも制限を与える。もう鳥かごところで済まない、立派な牢屋でもある。

そこまで持っていたのは、フィルガの意地だ。それが成した技の表れだった。

もちろん、その為に何度も足を運んだ部屋である。　　つい先ほども。

だが今・・・少しだけ気まずくて、つい遠慮がちに足音忍ばせてしまう。

それは訪れ方にも原因があるだろうが、何より　　今この部屋にいる娘を泣かせてしまったのが、自分だからだ。

”　泣き止まない”　そう告げられて、フィルガの胸が大きく軋んだのもまた確かだった。

（・・・俺に戻れとダグレスは言ったが、必要なのはフィルガではないとか言っていたな。アイツ）

その言葉に引っかかりを覚えたが・・・まずは様子を窺うために、耳をそばだてる。

そんな『銀の獣』の耳に届くのは、微かで規則正しい寝息だった。穏やかな息使いにどこか安堵しつつ、彼は意を決した。

窓からそつと入ったのだが、彼女に寄り添うようにと命じた獣には気付かれたいらしい。

細心の注意を払っても、そうそう獣の耳は欺けるものではないのだ。

” 何しに来た．．．．いじめる気．．． ”

『高見に立つ我が この獣の心を預かる』

ディーナに寄り添っていたレドに、間髪いれずに一句を見舞った。途端に白い獣は意志奪われて、大人しくなる。

『そうだ 。 我が行くまで控えている』

” ” ”

レドはすり抜けるように、寝台から降りた。そのまま扉の向こうへと歩み去る。

あたかもその意志の無い動きは、そのまま空気の移動を眼にしているかのようにだった。

それに倣うかのように、フィルガもまたディーナへと歩み寄った。ちようどレドと行き違う格好になる。

寝台に横たわるディーナに、もう涙のあとは見られなかった。ただ肌寒そうに身を丸めている。

ドレスのまま横になるのを、窮屈に思ったのだろう。彼女は薄い下着一枚の姿で、その裾に足をすくめていた。

その様子があまりにも無防備な幼子のように、侍女も付けずに放置した事を今更ながら後悔した。彼女はあんなにも寒がっていたのに。

フィルガは何か羽織り物を掛けてやろうと、室内を見渡した。その時。

「．．．．．ん、．．．レド．．．．．？」

ディーナは傍らに寄り添っていたレドが居なくなり、ますます寒さを覚えたのだろう。

手を伸ばして探る。だがそうしてみても、空を切ることに違和感を感じたようだ。

「ん．．．ん？．．．．ど．．．こ？．．．レ、ド．．．どこ？．．．

どこ？」

ディーナのそのあまりに切ない呼びかけに、フィルガは反射的に獣の身体をすり寄せようと近付いた。

躊躇ったのも一瞬で、すぐさま寝台に上がる。そのまま彼女のさ迷う腕の下に、身を滑り込ませてやった。

その途端ぬくもりに安心したのだろう。離すまいと抱きついてくると、ディーナはやわらかく微笑んだ。

瞳は閉じたまま。

何の憂いも感じさせない。いや。まだその憂い自体を知らないかのような、無垢なる者のあどけなさに眩暈がした。

そのあまりに満ち足りた笑みは、フィルガの胸をまたも違った意味でかき乱す。

こんな彼女の表情は、はじめて見た。いつも曇らせてばかりだったから。

その感動と・・・また、泣かせてしまいかねない己への罪悪感。それでいて獣に信頼を寄せる彼女を、裏切つてやりたいとも思う。ひとつの胸中にいっぺんに湧き上がった想いが、予想もつかない方向へと獣の我が身突き動かしかねない。

そんな可能性に焦りを覚えるフィルガに、ディーナは囁きかける。

「・・・つかまえ・・・たあ」

くすぐったそうに、くすぐすと笑いながら。やわらかな身体で必死にすがりながら。

捕まった。その瞬間、そう観念するしかなかった。

* 魂への試み（後書き）

しかも揃って悪だくみ（？）ですね。この御三方は。

ダグレスは役者ですね。

そしてディーナ。無邪気という魔性っぷりを発揮してます。

フィルガはもう、逃げられません。

* 紅孔雀の目（前書き）

獣の彼には素直なディーナ。

そんな彼女に素直に喜べない、銀の彼。

紅孔雀の目

アナタに名前を与えます。

それは『アナタに命を与えます』
と……そう言われたのと、
同等。

「賜ったものがいのちなのか、めいなのかで大きく意味は異なるけれど。」

[illegible]

ディーナはぬくもりに安心したのか、そのまま再びまどろみに引き戻されていった……。

瞳が開かれる事は無かった。だから、今この腕の中に大人しく抱かれています。獣は『レド』と信じているのだらう。

それでいい。ならばレドとして、お利口サンに振舞うまで。そう思う反面、何やら釈然としないのはなぜだろう。

（・・・・・・ディーナ。アンタは本当に無防備すぎて、腹が立つんだが）

わかってる。そんなものは自分の勝手だという事くらい、わかっている。

安心して信頼しきつてくれるからこそ、こうして見る事の出
来る表情があるのだ。そう己自身に言い聞かせる。

（それでも・・・やはりこの状況は、アレだ・・・。。
『お預け』をさせられている、よな）

そんな切ない状況だと思う。しかし獣はお利口サンだから、やせ我慢を通すのが道理だ。

『銀の獣』は諦めて、いくら緊張した筋肉を弛めた。すやすよと安らかな寝息が、獣の密集した毛並を撫でる。

獣の彼は鼻先で小突くように、そんな彼女の頬に触れてみた。とたんにくすぐったそうに身じろいで、微かに微笑みが返される。目覚めて自分を『銀の獣』と認識しなおした上で、抱きついてはくれないだろうか？ そんな想いもディーナが夢の中の住人のまななので、淡い期待のままで終わった。

フィルガは観念して、自身も瞳を閉じた。そうするうちに彼女の寝息に誘われる形で、獣は眠りに落ちていった。

そうして迎えた明けの空。

獣はわずかばかり射し込む朝日に、その時の訪れを知った。もう、立ち去っても構うまい。・・・そうした方が無難だろう。

ディーナは規則正しい寝息を繰り返している。その乱れの無い調子からも、彼女の夢が深いだろうと窺えた。

（ディーナ。アンタは目覚めたら、また　。すべてを忘れ去っているのかもしれないな）

ふと、そんな風に思った。それほどまでに彼女の寝顔には、何の憂いも見当たらない。

そうであって欲しいような。それはそれで、また悩まねばならないような。どちらにしろ『フィルガ』でディーナに向き合わねばなるまい。

話はそれからだろう。この伝わるあたたかさから立ち去るのは、正直・・・名残惜しいが支度をせねばなるまい。

そうとは気取られぬようにと祈りながら、四肢を起こした。

眠りに着く直前まで感じていた、しがみつく様であった必死さも

今は無い。ほんの少しだけ手を添えられているだけだ。

それでも細心の注意を払って、銀灰色の獣は身を引いた。しかし。

「ん・・・あ、・・・れ？」

ディーナの瞼が持ち上がった。寝ぼけているのか、焦点が定まっていない。

まだ眠そうに、そして眩しそうに。目を擦りながら、片手を寝台に付いて身をわずかに浮かせる。

ただでさえ鎖骨も露わな薄着の、肩紐がずり落ちた。そのせいで深く胸元が覗く。

そんな無防備極まりない様を見せ付けられて、獣は固まって動けなかった。

何と言っ危うさかと。それでいて、まるで猫がしなやかな身体を投げ出しているかのような。小さいながらも彼女も獣。そう思わせた。

そして それはそれは満面の笑みを、傍らの獣に向ける。それと同時に両の腕かいなを広げて、思わず見惚れていた獣を抱きしめた。

「捕まえたんだから。もう、行っちゃだめよ？どこにも」

甘さを含ませて響かせる、優しい声音はいつも通り。それなのにどこかしら色香を感じさせる囁きが、獣の耳朵をくすぐる。

熱に浮かされているかのような。そんな錯覚に囚われてしまいたくなる。

（ディーナ。寝ぼけているのか？それとも・・・誘っているのか？そんな声を出してくれるな・・・襲うぞ）

グウと押し殺そうとした殺意が、飲み込めきれずに牙の間からこぼれた。獣は『聖句』を操る術者に容赦が出来なくなる。

このまま『聖句』に躍らせられまいと抗う本能が、フィルガを凌ぎ切ってしまったら。その後に待つ結果は疑いようが無い。

獣はディーナの喉笛を狙う。その白い肌を、紅で染める。一番、最悪の事態に陥ってしまう。

『従うは雷光という名の放たれる槍。 つがえられる弓から 引き放たれる矢。 その切っ先の射抜くは 彼の獣の魂の在り処。 闇のとばりにくるまれた 魂の在り処。』

微笑みという仮面を貼り付けたまま、ディーナの唇は聖句を刻み続ける。

まろやかな笑みの形に引き結ばれたままの唇が、ただ、とうとうと。

何者かがディーナに介入している。術者の目を持つてしても、掴めるのはそこまでだった。術者に行き当たらないのだ。

正体が掴めない。だから対処の仕様が無い。このまま甘んじて彼女に受けて立つしか。

波が起こされたかのような。月に影響される潮の満ち欠けのように、血という潮がざわめく。

しかしそれは強制である。自然の理を無視したその行いに引き起こされたソレは、逆流に近い。このままでは、まずい。

（ 何だ！何者の筋書きだ？ディーナ！止せ、やめるんだ！でなければ、オマエの身が危ない！！ ）

不気味なほど静かな気配を保つ、赤い髪の少女が自分を見ている。獣からおさめ切れない殺意を向けられていても、その湖面は静けさ

を湛えている。ディーナのやり方からは程遠い方法で、獣に向かっていると思えなかった。

少なくとも今までの彼女の心の在り方からは、想像できないのは確かだ。

しかも。この、三の属性を見抜いた『聖句』だと？人の子の身では、不可能のはずの術句。

獣は『フィルガ』を完全に忘れてしまい掛けている。かろうじてその縁に、引っかかっているような状態だ。このままでは……。

次に獣が意識を取り戻した時に、彼女の獣となっているか。それとも、彼女の喉笛を仕留め鮮血の中にいるか。

そのどちらかだ。

『振り払え、輝ける雷光の矢刃よ。射掛けられた雷光という名の下に仕留めるは彼の者の魂の在り処。射かけよ、闇を切り裂く雷の光。彼の者の魂を我がものと……』

苦しいのに。もっと聖句を望む獣と、屈してはなるものかという己との一騎打ちは続く。

そんな薄れ行く自我の縁で聞いたのは、彼女の悲痛な叫び声だった。

「『……我がものとせんが……』できない！できない！私にはできない！！お願いだから『紅雷』早く逃げて」

（クライ？もしかしくなくても、俺の事か？　　紅い雷、だと？この雷は紅い孔雀のものだとも言い出す気か）

それはそれで、銀の獣をそこに縛り付ける威力がある。

られなかった。

【当然だろう？あの子は　ボクがこしらえ上げたようなものなのだから。ほんの少しばかり力添えをしたまでさ。そうでなければなかなか先に進めそうも無いしね。・・・・この身で年月を重ねるのにもいい加減、飽きてきた。そろそろ解放されたっていい筈だ。ボクは新たな転生を望む】

”　”　そう思うならさっさと昇天したらどうだ？トウーラよ。おまえは充分償ってきたではないか”　”

【まだまだ、だよ。もう少し・・・あと少し。この契約を完全に機能させて、あの子らが幸せになれるよう見届ける事ができたならば次に進もう】

トウーラは二頭に背を向けたまま、答えた。振り向かず橋を進む。渡りきった彼方、ジャスリート家の館を目指して。

橋を渡る風が、その背を押すように煽った。

* 紅孔雀の目（後書き）

はい、余計な世話焼きがいますよ。しかも3名（+）も。そつと見守るだけに、とどめようよ？

そんな、つつこみはさておき。

どうでもいいですが、最後まで悩みました。銀の彼の名前。

『雷狼』 ライロウ。そのまんま、ですね。

or

『紅雷』 クライ。紅い孔雀のものを主張させたかったので、こちらに。

というのに加えて、『暗い』『闇をちらつかせる』で、こちらに落ち着きました。

フィルガ考えがちょっと、暗いしね……。。
（いいのか。それで）

*** 与え合う命（前書き）**

トゥーラが立ち去り、やっと本当の意味で二人の『対決』です。

* 与え合う命

アンタが俺に新しい『命』を投げて寄こすのならば、受けるしかなかるう。

その代わりにアンタにも俺の『命』を受取ってもらう。

俺はただで・・・オマエのモノに成り下がる気は無い。

・。：*：。：*：。：*：。：*：。：*：。：*：。
・：*：。：*：。：*：。：*：。：*：。：*：。

朝日が煌く。それに伴なって彼女もまた、より一層眩まはさを増して行く。

豊かに波うつ赤毛が、生まれてからこの方日に晒された事のないような肌が、その頬を伝い零れる涙が。

寝台に身を半ば預けるように脱力し、ディーナは上半身だけを起こす。

両手について何とか身体をひねって、銀の獣を見つめる。哀しそうに。愛おしそうに。

夢見るような眼差しは、少女独特のようでもあり、慈愛を知る母親のようにも思えた。

『紅』を与えられた『銀』の獣は唸った。彼女は彼にとって、あまりに危険な存在と思い知ったからだ。

自分の属性を彼自身、よく心得ている。属性とは彼が何で成り立つのかをも意味している。すなわち、本性が何かと。

『闇』と『雷』と・・・僅かばかりの『光』。

それを見抜かれた。しかもそれだけでは飽き足らず、新たな『命』

までももこの身に植えつけてくれた。

『^{くれない}紅』という名の彼女の刻印。

属性を見抜き正体を暴かれるのは、獣がもつとも忌み嫌う能力のひとつだ。

見抜かれたこと、無かった事にしてやりたい……。。

そうしてやればいい。

そう囁く本能は危険だった。

それはすなわち、見抜いた者を亡き者にする事で可能とするのだから。

そんな獣の性に、我が花嫁を曝すこととなったのだ。これから先、一生。

生まれたての朝の日に二人、暴かれながら見詰め合った。探り合うようにではなく、かといって対峙しあうでもなく。

ディーナはゆったりと身を起こすと、寝台から滑り降りた。その足元がおぼつかない結果、そうだったのは見ていて明らかだった。

獣 『紅・雷』はほとんど反射的に、飛び出そうと身を構えていた。

それでもその場に思いとどまったのは、彼女が首を振って見せたからだ。弱弱しく、しかしはつきりとした拒絶の感じられる動き。

「お願い。紅雷。来ないで」

もう一度、今度は幾分しつかりと……。首を横に振ってみせるから、彼女の赤毛が軽やかに舞う。

ディーナは振り払ったのだ。立ち込めていた霧を振り払う朝の陽射しのように。

こうして日の光に、振り払われる闇の気配のように それは振り払われたのだ。

介入していた何者かの意味などに従うものかと、獣を聖句の徒に

してしまうのを拒んだ。

その訳は何なのか。『紅雷』はそういぶかしんでいた、その時に紅の孔雀はさえずり出した。

「お願いだから抗って。あらん限りの力を持って。私の聖句になど屈してしまわないでね。でなければ つまらないから。アナタが私のモノになってしまったら、つまらないの。貴方のその孤高さが素敵なのに……。私ごときの聖句で縛られてしまったら、はつきり言って興醒めだから」

何と勝手をぬかすのか。

ジャスリート家ゆかりの姫君の羽根は、なるほど孔雀に相違あるまい。

言われずとも。

言葉が発せたなら、そう告げていた事だろう。

言われずともそうする、と。

「お願い……。だから紅雷。力の限り抗い続けてちょうだいね。私のモノになど成り果ててはダメよ？」

『紅雷』は唸った。言葉発したくともそれは、己自身で封じているせいだ。だが訊きたかった。

紅孔雀よ。そう言いながらオマエは何故、その両の翼を差し向けるのかと。その胸に迎え入れたいという、願望の表れであろうに。違うとは言わせたくはない。

「お願いだから、早く。……早く逃げてちょうだいね。私がまた聖句を紡ぎだすよりも早く」

逃げろというその唇から、目が離せなかった。新たにまた頬を伝い始める透明な雫からも、柔らかく自分に広げられた腕からも、何もかも。ディーナの言葉にそぐわない矛盾した全ての所作から、紅雷は背を向けることなど出来やしなかった。

今すぐに、ディーナの側に寄り添ってやりたかった。だがそうできないのは、彼女の『紅の呪縛』を賜ったせいだ。

紅い、雷。その名を受け入れた己がいる。聖句なんかよりもほどタチが悪い、始末に終えない紅い縛めの鎖。

言うなれば彼女自身がこしらえ上げた、術句の一節。『術・紅』。そう名づけてやろうかと思う。

人に己の紅を^{くれない}くれてしまう、彼女自身が編み出した全く新しい呪法といえるから。

全く！！全く持つて喰るしかない。獣の立場からしてみても、ハイクラスの術者の立場からしてみても、そうするしかない。

してやられたと舌打つか、実に見事と手を叩くか。それが同じ胸中に湧き上がるものなので、始末に終えない。

だから紅雷は、ただただ四肢を突っ張らせて立ち尽くしている。

これだから厄介なのだ。『天才』型は！

「紅雷……早く……逃げて」

どこにどう逃げろというのだ。もうとつくに捕まって、縛めの鎖すらかけられているというのに。

だが紅い呪を受けた我が身。彼女の……術者の言う事は聞かねばならない。

それでも銀の獣は一瞬低く身構えると、次の瞬間にはディーナの腕の中に滑り込んでいた。

跳躍の勢いに乗せたままに、獣はディーナの涙を盛大に一舐めし
てやった。

急だったのと加減が無かったせいで、ディーナの身体が大きく傾いだ。寝台の縁とわが身とに挟み込むようにして、動きを封じる。

「5' < . . . ?」

素早くディーナの髪に鼻先を潜り込ませると、頤を探り当てる。彼女の戸惑いを無視してそのまま、紅雷は耳朶に牙を当てた。

「つ・！痛！？」

ごくごく慎重に加減はしたが、容赦はしなかった。小さくディーンの肌に牙をかけたのだ。

ぷつり、と肌の裂けた感触が牙に伝わる。そうして、紅雷が見守る中で小さな血溜りが出来上がっていく。

さながらそれは、彼女の白い肌に映える紅珊瑚の耳飾のようだ。

雫が大きくなり、滴り落ちる瞬間を捉える。紅雷はそれを逃さず、素早く舐め取った。

そのまま、ディーナの耳元に口を押し付ける。

[illegible]

その者の属性は「光」
栄光をたなびかせた「光」
全てを

包み輝かせる祝福された「光」

その『光』授けられた私の属性は『闇』暗き深遠に横たわる

全てを覆い沈ませる 祝福かなわぬ 闇

「闇」に「光」授けようと試みたこの者に
我もまた「光」に

『紅雷』が忠誠を誓い『命』を捧げたことを。そうして自分もまた『紅雷』のものとなったことを。

「くら、い………？」

ディーナが何か言いたいようだが、獣は柔らかくそれを遮った。獣らしく鼻先を押し付け、ぺろりと舐めて。

これ以上、彼女から『祝福』賜っては、この身が持ちはしないだろうから。

* 与え合う命（後書き）

またしても〱迷いましたが・・・『白・雷』で落ち着きました。

『銀』をくれたかったのですが、ちょっと響きが・・・なんとなく、しっくりこなくて。

『銀』〱『白い金』という意味もあるそうなので『白』で。

ディーナが知ったらまた怒りそうですけどね。私はシーラじゃないって、泣き出すのは確実ですが、フィルガはそんな気じゃないから許してやってちょうだいね。

* 黒衣の姫君（前書き）

いつのまにか日は昇り、つい先ほどの事なんて夢だったのかと思わず錯覚してしまいます。

それなのに、まだ夢は続いています。

トゥーラにとっては、まだ『夢』は終わりそうも無いようです。

* 黒衣の姫君

何だつて黙なんて庇うんだ あの人。．．．いや。それ以前の
問題だ。

あの人の武器になるものなんて、獣を呼びつけるくらいしかない。
それ以外は特に無く、真っ先に庇われるべき対象のくせに。

。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：
。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：
。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：。。．．．*：

自分は、あのか細い背に庇われた。それは今こうして思い返して
みても、驚愕でしかない。

『彼女』が『自分』を、『庇った』のだ。自分が彼女を、ならば何
の疑問も違和感すらも感じはしなかったろうに。

日も昇り、暖かな陽射しが部屋にまで入り込む。フィルガは灰色
の瞳を眇めた。

眩しさが彼の瞳の奥にまで届くようだった。

寝不足の瞳に日の光は、暴力ともいえる。フィルガは目の裏に小
さくも鋭い 突き刺されるかのような痛みを覚えた。

その痛みを堪えやり過ぎすかのように、両手で顔を覆った。

自室に戻ったのが実に久しぶりな気がしてしまう。フィルガは寝
台に腰を下ろした。

そのまま横になってしまいたかったが、そういう訳にも行かない。
朝食の席に出ないと色々と言明が面倒だ。

それに途中のまま放り置いた仕事がある。その期限も迫っている。一応立場は領主の跡取り。その自覚もあるだけに、疎かにする気など無い。

しかし自室に戻った途端に、この疲労なのだ。さすがのフィルガも疲れが隠せなかった。

それは　立て続けに緊迫状態にあったために、自覚できないまま重ねてしまっていたに違いない。

それがこうして落ち着きを取り戻す事で、気が抜けたのだろう。やっと疲労を自覚できたという訳だ。・・・良かったのか悪かったのか。

フィルガは腰下ろしたまま、体を前に倒し襲ってくる疲労に耐えた。頭を乱暴にかき回す。

ほんの一晚空けただけなのに、騒動のせいでこうやってくつろぐ間すらなかった。

全く。忌々しいのは　誰が原因だろう。

もちろんあの娘が一番に候補に上がるが、違った意味でだ。その対象ではない。

ダグレスにギルムード、そしてディーナに介入していた何者が。閉じた瞳の裏に浮かぶのはその面だ。

「・・・・・・・・」

フィルガは自分の頭皮に爪を立てたまま、それらの気配を今一度探ってみた。

（「」　今日は・・・いや。もう昨日か　は、災難だったな。フィルガよ」）

何の前触れもなく、頭に直接声が響く。フィルガは頭をかき回す手を止めた。だが、顔は上げなかった。

おまえらが。それでは獣らも刺激されて当然だろう。

「じゃあ、何用だ。ただ労いの言葉だけを、伝えに来ただけでもあるまい？」

・・・これを受け取れ。嫌だとは言わせん。

「何？」

【はい。これだよ】

いつの間に。それと入れ替わるようにして、シアラータの気配が遠のいていた。橋に下がったのだろう。

フィルガは声のした方に顔を向ける。光が遊ぶ窓辺に寄りかかるようにして、その声の主がいた。

「・・・トウーラ」

につこりと笑みを見せてから、そう呼ばれた少年はフィルガに歩み寄った。右手に何かを掴み持ち、前に差し出しながら。

【はい、ドウゾ。ボクにも手に余る代物だ。まあ、とんでもないものに見込まれちゃったねえ】

「これは・・・！！？」

少年の手のひらにはいささかもてあまし気味の、漆黒の剣の柄だけが収まっていた。

彼の手のひらに包まれていながらも、己の存在を主張しているかのように感じた。禍禍しい様な、混沌とした闇の気配。

【そう。アレだね。ギルムードの『姫君』とやらさ。彼女をあのまま橋に放置するわけにも行かないだろうから】

「だったら持ち主に返すのが筋だろう。なぜ俺に託すのだ？まさか返して来いとか言い出す気か」

【まっさかあ。それこそ始末に終えなくなるよ。これは本当に獣はひとたまりもないんだよ？危ない危ない。それこそ受けたのが、フィルガ・・・銀の獣だったから無事に済んだってハナシ。危な

かったね、**フィルガ**】

笑顔で物騒な事を言う。だが目は笑つちやいなかった。少年は早く受け取れとばかりに、ずいとフィルガに『姫君』とやらを差し出す。

腰かけたままのフィルガは、トゥーラと視線が同じに合わさった。

[illegible]

【今日だって、もう昨日か。危なかったね。二人とも】

フィルガはにこやかさを崩さない少年の言葉に、一連の動き全ての関連性を見た気がした。

「殺すところだったぞ！」

そうだ、本当に危なかったのだ。彼女を血の海に沈めていたならば、フィルガも多分……どこるか確実に。

その場で己にケリを付けていた事だろう。その自信がある。

それこそ少年に対して凶暴な想いを爆発させて、フィルガは怒鳴った。自分は取り返しのつかないことをしかしそうだった……。

今フィルガの体に恐怖を覚えさせて、脱力させている正体がこの事実なのだ。 やつと思ひ当たる。

【それは。ボクらがそれをさせやしないよ。間違つて
も】

ぐい、となおもトゥーラは『姫君』を押し出す。

いいから早く受け取れとばかりに。フィルガはそんな彼と姫とを交互に睨んだ。

【君が本能の部分で躊躇うのも無理はない。この剣は『聖句の』
威力秘めしもの。物騒な姫だね。フィルガ。君はディーナを
傷つける気なんて無いのだろう？それでも・・・獣の心に”囚わ
れきつたら””どうなるか。知っているよね？】

「言われるまでも無い。何が言いたいのだ、トゥーラよ」

【決まっている。そんな展開に備えての覚悟の程を問うている。】

「俺に自ら刃を立てると？」

【・・・・・・そういう手立ても一案としてあるよね、って提案してみているだけ】

「・・・・・・」

フィルガは無言で少年に手を差出した。それを満足そうに見下ろしながら、トゥーラもまた、握り持った『姫』を前に差し出す。

だが、少年の手は『姫』を握り締めたままだ。

なかなか解かれない手をいぶかしんで彼の顔を覗いたが、哀しげな眼差しに迎えられるだけだ。

フィルガは催促の意味も込めて、手のひらを押し出した。

「受け取れ、と言いつ出したのはそちらの方だろう。まさか今更、くれてやるのが惜しくなったとも言いつ出す気か？」

自嘲気味に吐き捨てる。そんなフィルガにかすれた声が答えた。

【ねえ、知ってる？どこぞの国のおとぎ話　・・・・種族の違う姫

が焦がれたのは、人間の若者。姫は決意する。彼と共に生きようと。でもねえ同じ時を生きようと思うと、色々と制約が掛かってしまふものなんだね。たとえおとぎ話の中であろうともさ。・・・・実に興味深いと思わないかい？】

「　トゥーラ。何が・・・・」

言いたい　そう続ける間を与えようとはせず、トゥーラは遮るように話を進める。

【彼と結ばねば姫は『夜露のごとく消えるがさだめ』。そうと知りながら、姫は・・・・彼のもとへやって来た。でもこの話しは、おとぎ話にしてはいささか容赦が無い。彼は別の姫を娶ってしまうのだから。そうなれば彼女は消えねばならない。　ただひとつ姫が助かる方法といえば、彼女の想い人を『この世から消し去ってしまう』というやり方だけ。消えねばならない己の代わりに。何て残酷

に一気に振って刀身を出す仕組みだ。

かなり細身の剣なのでこうしてたやすく、少年の細腕でも姫をお迎えられるようだ。

【 かのおとぎ話の姫のなれの果てという、いわくつきの剣さ。どうぞ、フィルガ？待たせたね】

姫本体をフィルガに向けてしまわぬように、柄の方を差し出す。それでも抜き身の刃。やいば

フィルガは慎重に受け取った。

【獣をいなすには最適の聖剣だから、時と場合によっちゃ便利なんだけどね。獣にしてみたら、ただの魔剣だから。取り扱いには気をつけてね】

言われるまでもない。

そんな思いを込めて、フィルガは『姫君』を見つめてから 少年を睨み付けた……。

だが そんなフィルガの眼差しは、行き場を失いさ迷う。目を離れたのは恐らく、瞬きの間ほど。それでも少年にしてみたら、たいした問題ではないらしい。

「トウーラ。相変わらずだな」

ため息混じりに独り呟き、フィルガは朝の光に再び目を細めた。

* 黒衣の姫君（後書き）

言いたい事だけ告げたら、さっさとバイバイ。

トゥーラの主義です。だいぶ、いい根性してますでしょう。

彼はおしゃべりなので、すっごく話します。
彼が出ると、一話が長くなっちゃいます。

そのくせ、一番大事な部分はなかなか明かさないという。・・・
・いい根性しています、ホントに。

第十二章 * 全ての始まり（前書き）

物語はここから、紡がれる事になったようです。

フィルガやディーナが存在しなかった、遙か昔からとつくのとうに、物語の幕は上がっていたようです。

られる感情のままにそう呼び名がつけられて行く。

聖なる神の使い。幻の存在。魔の化身。怪しい野獣。

彼らは個々で形態も、気性も違っている。全体で共通している事といえば、人智を遥かに超えた能力を持つ、という点だ。

飛翔する翼や疾駆するに長けた筋肉といった、肉体的な能力。

それに加えて、天候すら従えてしまう能力に、大地すら変動させてしまうものまでがいる。

それは彼ら自身がこの世界の現われだと言う事だ。少なくとも、トウーラ・ファーガの結論ではそうなる。

そう・・・世界の現われだからこそ、神と等しいと誰もが崇めた。そこに併せ持つ、敬虔と畏怖を抱いたのだ。

美しくしなやかな有様に憧れて。桁外れに未知なる能力持つ存在に、恐れを感じて。

それでも力ミサマの前に、躊躇など無意味だと信じた。

信心寄せられた『神』は、導いてくれた。世界との付き合い方を。

礼を欠いては成る物も成らないと、教えてくれたはずだった。

植物と対話する能力ある獣たちが、命にひそむ薬効を伝えてくれたからこそ、今日の薬草学がある。こんにち

月の満ち欠けに影響される種子の発芽の事も、その実りを豊かさへと導く術を教えてくれたのも。彼らだったという。

他にも医療から呪い、果ては紬つむぎに至るまで。彼らの力添えがあったからこそ、成立出来たのだ。

それなのに。

その手柄がいつのまにか全て、人間のものにされてしまった頃には、感謝の気持ちはおろか敬意も既に・・・どこにも見当たらなかった。

トウーラ自身も獣から直に聞かされなければ、知る由も無かつた

” 礼儀を知らぬ人の子よ。我等が人の子と、再び組む事はあるまいよ。どちらにせよそれが、互いの為でもあるだらうよ”

彼はそう告げると、『申し出』を^{しりぞ}斥けた。

呆れているようにも、悲しんでいる様にも取れる口調はまた、トウーラをも哀しくさせた。

申し出を断られたからではない。

両者の間に横たわるものの深さに、一度と接点など設けられそうにも無いと絶望したからだ。

•
○

•
:
:
*
:
:
○

•
:
:
*
:
:
○

•
:
:
*
:
:
○

•
:
:
*
:
:
○

•
:
:
*
:
:
○

トウーラは生まれつき、獣の声を聞く能力に恵まれていた。

ジャスリート家の血筋の者は、そうした能力者をよく授かる家柄として名を馳せており、代々神殿仕えをする者も多かった。

トゥーラも獣と交渉できる数少ない者として、その能力を買われて神殿に上がっていた。

そうはいつでも。もはや獣の声を理解できる者も、また理解しようとする者もほとんど皆無と言って良かつた。

血筋を誇るジャスリート家であつてさえ、そうした『血の現われ』すなわち『能力者』の存在は稀まれになつていた。

その頃からだ。

人間たちが獣たちの領域を犯し始めたがために、問題が起こる様になったのは。

ある地域では獣と境界線争いをした拳句に、討ち取ってしまったという。

そうして『邪魔者』のいなくなった森の豊かな恵みは、全て人間たちの手に入るはずだったのだが……。

問題はその後だった。

豊かであつたはずの森は、獣の死の道連れとなりあれから……十数年たった今でも、立ち枯れて朽ちた木が林立する『死の森』と化したまま、再生の兆しは無い。

それと似たような問題が神殿に報告される頃には、獣たちはすっかりただの『害獣』と見なされて、神の座から引き摺り下ろされていた。

そこで神殿は荒ぶるかつての神々を鎮めて、かつての豊かさを授ける『神獣』へと祭り上げ様と試み始めたのだ。

トゥーラのような能力者を募って。

排除などという手段を取った愚か者達のお蔭で、それはどうして
も避けるべきだ・・・と思い知った上で出された結論だ。

かつての尊敬や信頼はどこへやら。あるのは利得を目当てとした下心のみ。

トゥーラは獣がけっして肯くまいと、うなず分りきった上で引き受けた交渉役だった。

結果 獣の長からの答えは、やはり予想通り。

” トウーラ。いくらそなたの頼みでも無理だよ。悪く思わないでくれ”

トゥーラは子供の頃から、獣たちと親交を深めていた。大切に守りを互いに交し合う、大好きな仲間。

だからこそ、こうした風潮を何としても変えたい。そう願っていた、そんな時だった。

『真に獣たちと共存するために、荒ぶる彼らの心を宥めるものを完成させよう』

そう。それこそが『聖句』を、紡ぎ始めたそもその理由。初めにそう言い出したのは誰だったろう？

仲間の一人だったかもしれないし、トゥーラ自身だったかもしれない……。

今ではもう遠すぎて、どんなに目を細めてみても思い出せやしない。

そうした神殿の同志たちが集ったのだ。 シャグランス家。ロウニア家。そうして、ジャスリート家。

彼らと共に、トゥーラは研究を始めた。

獣の声を聞くことの出来る能力が、何より必要だと請われたのだ。確かに。獣の心を解らずに、聖なる句の魅力的な配列は成し得ない。嬉しかった。だからこそ、喜んで協力した。獣の声が聞こえなくても、理解したいと望む者達がいる。

そんな両者の架け橋となれるのだ。

聖句が完成した暁には、獣たちとかつての関係を取り戻せる。そう……信じて打ち込んだ。

しかし完成を目前にして、トゥーラは引退を宣言する事となる。

結局の所聖句は獣たちの慰めになるどころか、制限を与えてしまうモノでしかなかった！

何か……これ以上とんでもない事に荷担かたんしてしまう、その前にトゥーラは高齡を理由に神殿から、仲間から……逃げたのだ。

自分が手を引けば、聖句の完成はままならぬものになるだろう。そう、踏んでのことだった。

だが、それもどうだろう？

• ○
• •
• •
✱ ✱
• •
• ○
• •
• •
✱ ✱
• •
• ○
• •
✱ ✱
• •
• ○
• •

ディーナは大きく頷いてみせる。

そうそう、少年も頷く。

【うん、そう。逃げたの。神殿から、仲間から】

トウーラの講義は、その先祖が引退したところまで、一区切りだつた。

【・・・・・・・・今日はここまで。残りは次回にしないと、いけないみたいだよ。ほら】

「はい、どうぞ。こちらにお出でです。」

「何かしら？・・・じゃあ、私行くね。また、後で教えてください。」

ディーナも立ち上がる。まどろんでいたレドも、それに倣う。

【うん。この続きの復習と予習をしたいようなら、年表の一番古い物を見せてもらうといいよ。．．．今から七代前のご先祖の事だからさ。見ておくといいよ。うん】

「うん。わかりました、先生」

ディーナはそういたずらっぽく笑うと、ぺこりと頭を下げて見せた。トゥーラも笑いながら、手を振る。

【じゃあ、また後でね】

「じゃあね」

本を抱え直すと、ディーナは侍女の方へと小走りで急いだ。

第十二章 * 全ての始まり（後書き）

トウーラ・ファーガ・ジャスリートの成れの果て。

まだまだ彼の望む『終幕』まで、時間がかかりそうですが、もうじきです。

彼がさ迷ってきた時に比べたら、早いものかと思われませんが。

まあ、まだまだ掛かります・・・です。

*** 対決の予感（前書き）**

つかの間の平和も、急な来客でどうにも波乱の予感です。

好奇の目も中傷も

何の枷にもなりはしない。

なるとしたら・・・それは、己自身が抱く感情。

[illegible]

「ルゼ様がお呼びですね。お客様だそうですので、こちらに御召しかえ下さい」

「……お客さま？」

なぜ、自分が着替えてまでその客人に会わねばならないのか。そんな疑問いっぱいだったが、侍女のお姉さんたちの様子があわただしい。

察したデイナーはそれ以上は何も言わず、急かされるままに着替え始める。

それ一枚だけでは向こうが透けて見えてしまいそうな、薄淡いく
 リーム色の布地を重ねた作り。

裾の部分は細かなレースと刺繍とで装飾され、重なり合っても互い違いに見せる様に計算されている。

そんな洗練されたドレスに、ディーナは思わずため息を漏らした。感嘆の、ではない。これから身を包むであろう、その窮屈さ加減を予測してのものだ。

だが、ディーナに拒否権などはない。ごねてもルゼを困らせるだけだ。

ディーナがドレスを嫌がって、疎ましがっている事など彼女はとつくに知っている。

だから普段はなるたけ軽やかな物を　と、ルゼは配慮してくれている。

その彼女があえてこのような物を指定してくるのには、きっと訳がある。その訳は多分……。

これから会わねばならない客人が、それなりの身分とやらの持ち主だという事だろう。

ディーナはいくら表向き、ジャスリート家『縁の血筋の娘』とされていても……その出所は怪しいものと映っているようだった。当然といえば当然である。

ディーナに表立って告げられる事こそ無かったが、ルゼもフィルガも自分というあやふやな存在を上手く周りに知らしめてみたり。またはその逆で隠してみたり。と、やってくれているのは、ディーナだって知っている。

誰に説明されずとも、この館で一緒に生活していれば自然と耳に入ってくるものなのだ。

例えば、侍女の皆さんのナイシヨ話やら。ダグレスやレドや孔雀たちの『報告』やらからで。

二人にはそれこそ『ナイシヨ』だが。

あからさまに大人しくなったディーナに、リゼライが困ったように優しく微笑み掛けてくれる。ディーナが窮屈を嫌うのを、リゼライだって知っているのだ。だが、彼女の手は滞りなく『仕事』を遂行する。

「さ、ディーナ様。少うし、腕を浮かせて下さいね？」

ディーナの返事を待たずに、体の線に沿うコルセットで締め上げられた。服の下ではなく、見せる上着の役割を兼ねた物。

リボンは調節も兼ねた飾りだ。胸元に朱色の蝶々が止まる。

ディーナがそれを弄んでいると、小粒の真珠を連ねた首飾りが止

められた。髪も同じ真珠の留め飾りでまとめ上げられて、やつと完
成だ。

ディーナに最初の頃、逃げ出そうと決意させた出で立ちである。たまらなく窮屈なのだ。

「……はい、おしまい。出来ましたよ、ディーナ様。とっても素敵です……素敵ですから、もう少ししにこやかになさいませ」

「はい。ありがとうございます。リゼライさんの方が素敵です」

ディーナは真顔で告げる。少しばかり見下ろす彼女こそ、とても魅力的だ。その困ったようにはにかむ笑顔も。

[illegible]

そうして彼女に手を取られながら、案内されたのは客間だった。

ディーン自身、一番最初に通された部屋だと覚えがあった。

扉の前にフィルガも立っていた。見るからにして、いつもの格好とは違う。

公爵家跡取りとしてやらの、正装とかいうものだろうか。彼の髪の色と揃いの上着は丈が長く、とても重たそうだった。しかも、きつちりと首もとまでを飾りボタンが留め上げている。

彼はディーナを見ると、黙って右手を差し出した。

その手には広いカフスの付いた、なめし革の手袋まではめている。促がされるまま、リゼライの手からディーナは左手を預け変えた。手袋の感触は少し、慣れていないせいか余所余所しい気がした。

「ご苦労様、リゼライ。ディーナは君の手伝いなら、仕度が早くて助かる。今日はごねなかつたかい？いつもと違うから」

「そんな、恐れ多い。ディーナ様は立派なお嬢様ですよ？」

「フィルガ殿・・・私。リゼライさんには、ごねていないけど。フィルガ殿にはごねたい。この格好・窮屈！！早く脱ぎたい！！」

「……せっかく、リゼライが褒めてくれたのに。立派なお嬢様と

やらが台無しですよ。堪えてください。少しの間の辛抱ですからね。まさか公爵に恥をかかせたくなど、ないでしょう？大丈夫ですね、デイナー？」

「うん……。はい」

「はい。では、お互い正装ですからね。　　　　気合入れて参りましょうか。リゼライ、戻ってくれ」

「　　はい。では、デイナー様。また後ほど^{のち}」

リゼライが立ち去ったのを見届けた後も、フィルガはなかなか動こうとはしなかった。

「　　……。フィルガ殿？」

いぶかしんで名を呼び、見上げる。

「デイナー。いつぞやの『打ち合わせ』なるものの内容は覚えていますか？」

フィルガは幾らか心配そうに、デイナーの瞳を覗いて来る。彼の瞳から、今にも雪が舞い降りてくるんじゃないかと思う。

暗く重たく立ち込めているのは、不安という暗雲だろう。そんなものは振り払うべく、デイナーは己の晴天の空色の瞳を見開いた。

「！！　　うん。大丈夫、完璧です。フィルガ殿」

「アナタは落ち着いて、ただいつも通りで居てくれればいいですからね。俺と公とで上手く収めますから」

「もしかして……。『ついにきました』、かな？フィルガ殿？」

「ええ。忌々しい。大丈夫ですか？」

「私はいつでも大丈夫です。フィルガ殿は？」

思わずぎゅっと彼の手を握る。フィルガは一瞬驚いたのか力を弛めたが、すぐさま強く握り返してくれた。

「もちろん。では、いざ　　行きますか」

デイナーが決意漲^{みなぎ}らせて頷くのと同時に、フィルガは扉を二度、軽やかに打った。

しずしずと 『控えめで優秀な侍女』の代表のような顔を作り構えて、リゼライは持ち場に戻る途中だった。

物静かな佇まいは、一見何の問題も無いようだった。ただ頭にあるのは己に割り振られた仕事を、やり遂げようとするのみ。・・・で、いい筈だった。

「……………ね……………見た……………?……………うちのお嬢さま…………… 神殿に？」

じゃあ……………として?連行……………され……………のかしら?だとしたら……………恥なんじゃない?もしかしたら、破談……………とか?

どうかしら?リゼライに聞いてみたら? お嬢様のお気にいりなのだし。 ねえ、リゼライ……………?」

(うるさい)

ここもか!リゼライは呆れた。それと同時に怒りも沸きあがる。だんだん声が大きくなってきたこそこそ話を、ぴしゃりと撥ね付けろべく。

リゼライは声を張り上げた。

「私が『お気に入り』ですって?どこが?そんな事ないわよ。お嬢様はあなた達の働きの事も、褒めてくださっていたわよ?『実によく働いてくれるから、感心します』ってね。その褒め言葉賜^{たまわ}った侍女が、こんな所で無駄口叩いて……………油なんか売ってる訳ないわよねえ?」

我ながら凜と響く。それは、普段の詠唱で鍛えた賜物だろう。

「．．．．．」

ふん。そう鼻は鳴らさないまでも、心の中では舌を出してやった。決まり悪そうに黙り込んだ面々に睨みをきかせつつ、見渡す。

ねえ？とりゼライは念を押したが、返事は無い。長々と相手をして時間無駄だ。すぐさま背を向けた。立ち去るために。

遠ざかる背後から聞こえるこそ話の鉾先^{ほこさき}は、今度はリゼライに向けられたようだ。

だがリゼライは気にもとめない。やはりムキになって構った所で時間の無駄だと思い知っただけだったな、と再確認したくらいだ。

振り返ることなく、さつさと進む。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

すたすたと素早く、リゼライは回廊を抜けた。持ち場である今はデイナーの部屋へと戻る。

別名『孔雀のための牢』という、忌まわしい名が付けられている部屋。それは後から耳に入ってきた情報だ。

デイナー自身それを知っている。そうとも聞かされて、何とも複雑な心境に成らざるを得ないリゼライである。

この胸内に湧き上がるのは、一体何なのか。あのお嬢様が不憫でならないという、気持ちは同情というものの類だろう。

彼女自ら牢に案内して欲しいと言わしめた、そこに至るまでの経過は想像するに容易い。

（まったく。余計な情報はコレだから、もう！！必要ないでしょ、

私には。この感情ですら無意味よ)

むしろ、いらぬ足枷となりうる。リゼライはいつか・・・彼女と『対決』する予定なのだから。

だから睨む。今　主不在のこの部屋で、我が物顔でくつろぐ黒い獣を。しかもそこは、ディーナのための寝台だ！

”ご苦労だったな、リゼライ”

おまえに言われる筋合いは無い。そんな意思表示も込めて、唇を引き結んだ。無言を貫き通す構えだ。

リゼライは『お嬢様』の着替えた服を集める。

”我を無視するとは何事か、シャグランズの娘よ”

今その名で呼ぶとは、それこそ何事か！

先ほどの女の噂話に、腹立たしさが今だくすぶるリゼライである。せつかく鎮めた怒りの火種も、今の一言で再燃させられてしまった。

「ああ。私ただの侍女ですから。獣様が何を仰ってるかなんてわかりません」

”聞こえているではないか”

「アンタね。ここは神殿じゃないでしょう！人目つてものをちよつとは弁えなさいよ、全く。結界でも張ってるの？」

”張るまでも無いさ。人の気配はすぐさま解る。それに気を配ればいいだけの話だ”

「あらそお。で・・・何かしら？忙しいんですけど。」

”見ていたぞ。お前は嬢様に仕えるに相応しい。これから頼むぞ”

コイツもアレだ。ディーナ嬢様狂いだ。若様は若様で・・・あの扱いはいかなものだろうか。

先ほどのアレではただの兄と妹ではなからうか。全く持って、見ていてイライラするのはなぜだろう。

確かに彼女は『放っておけない気持ち』を抱かせる要素が、溢れかえっているが。認めるのも何だか癪に障る。

「~~~~~アレはね！〜ぐだぐだうるさいから、うつとおしかただけよ。別にお嬢様がどうかじゃないわよ」

ふうん。ならばそういう事においてやるうかな
リゼ

ライ。客に見当は付いているな？”

「知らないわ。皆目見当も付きません」

”
”
ぬかすか。
リゼライ・
・
・
・
”
”

「何よ。．．．大方神殿からのご使者殿でしょうよ」

” そうだ。ギルムードだ。神殿に嬢様を連れて行きたがつてい
るからな。阻止しろ”

「出来るか！！」

ふん。使えぬ奴。では、嬢様が神殿に出向かねばならぬ時は、

[illegible]

「あーもううるさいですよ。忙しいんだから、アンタとおしゃべりしてるヒマなんてないの！ハイハイ、散った散った！」

窓を開け放つと、クッションの形を整えるべくホコリを叩いた。

” まったく持って可愛げのない事だな、シャグランスの。オマ

”

工も嬢様を見習うがいいさ”

「ぬかしてらっしゃいよ。アンタこそ、この奥ゆかしい相棒を見習いなさいよ。堂々と人間に構ってなどいないで」

リゼライは言いながら、人見知り全開の『レド』の白いシッポの先を踏みつける。

ほんの毛先だけなので、痛みは無いと思う。

レドは隠れているつもりらしいが。寝台の下から尾の先が見えていては、バレバレである。

” ” 誰が ” ”

「百歩譲って、あんた達！！せめてお嬢様が着替える時は、席を外しなさい！！」

普段から・・・幼い弟妹や獣相手に渡り合っているだけに、声の響くりゼライである。

* 対決の予感（後書き）

館内2箇所では火花が！

すでに1箇所の方では、散っているようです。

長々お付き合いありがとうございます。

今まで4000文字（前後）を目安に一話区切りにしていましたが・・・それだと全100話以内に終わらないよ！！

と、気がつきました・・・。

今回ややコミカルです。ダグレスを『神獣』と、やや崇めていた頃が懐かしいリゼライです。

ある意味、仲良くなったのかもしれませんが。

*** 神殿の書状（前書き）**

仮タイトルは「今度こそ張り切るギルムード」でした。

神 殿 の 書 状

泣かないで……どうか。

我等が身を曝すのは、望まれたからではなく。

望んだからなのだから。

[illegible]

フィルガはディーナの手を離そうとはせず、また扉の前から一向に動こうとはしなかった。

そんなフィルガを窺いながら、ディーナはどうにか「貴婦人らしい」ご挨拶を試みせる。

ドレスの裾をつまみ上げて、優雅に膝を屈める。一瞬だけ。彼にはそれで充分だろう。形だけのものだ。

顔を上げると、にこやかな笑みを湛えるギルムードと目が合う。

「これは これは。ディーナ嬢……随分と愛らしい、紅の孔雀様でいらっしゃる……」

胸に当てていた両手を広げると、彼はさらに笑み浮べた。再び左手を胸に押し当てると、ギルムードは改めて敬礼する。

それは、明らかにディーナに向けてのものだろう。ギルムードが目線を上に運ぶと、一瞬にして様子が違ってくる。

ディーナは射る様に鋭い眼差しを、あの日橋で見たから知っている。彼が容赦の無い視線で威嚇する対象は、その先にいるから。

対象とされるのは、ディーナの傍らに寄り添うもの。
「……………」

「これはこれは。公爵殿の……」

鳶色の瞳が眇められたのは、愛想のカケラすらも見当たらぬ笑みのため。

髭に邪魔されてあまりよく判断できないが、ギルムードの唇はかなり薄い気がした。

意地悪く、片方だけを歪めて引き結ぶ……その様から見当つてしまう。

「ギルムード殿」

一向に動こうとしないフィルガを見かねたらしい、ルゼも立ち上がる。一旦、姿勢を正すと改まったところで、両手を腹部に重ね置いた。

「はい」

その凜と響く声に呼ばれて、ギルムードもそれに倣った。視線をルゼに向ける。

「神殿のご使者殿。こうして当の本人も挨拶を済ませた事ですし、早速ですがご説明願いますわ。神殿がわざわざ使者まで立てて、

当主である私を挟むのを許さずに、直接この娘に伝えねばならない用件とやらは……何だというのでしょうか？」

ルゼはギルムードから視線を外さないまま、切り出しながらディーナに歩み寄った。

促がす口調は品良く柔らかで、浮べる笑みもまた同じく穏やかなものだ。それなのに。

ルゼを取り巻く空気は、気のせいではなく威圧的だった。

彼女の得意とする威厳を醸し出す、公爵としての『顔』を前面に押し出しているのだろう。

ルゼもディーナの傍らに立つと、フィルガと同じように右手をすくわれた。

握り締めてきたその手は冷たく、微かだが震えていて一瞬ディーナは動揺する。それでもルゼを見習って表情には出さないように心

がけた。

神殿からの使者。

それだけではディーナには予測も付かない事も、ルゼには見当が付いているから・・・これだけ心配しているのだろう。

顔にはけっして出てはいないが、つないだ手からそれが伝わってくるようだった。

「そう身構えずとも」

ギルムードは苦笑しながら、テーブルに置かれた筒型の書状をまとめた紐を解く。

てつきりディーナに手渡されるかと思いきや、彼自ら仰々しくも読み上げ始めた。

書状の内容はだいたいこうだ。

ディーナの『異質なる能力』が故に、神殿の術域にあつた獣たちの『聖句による忠誠』が振り解かれて、『損害を被っている』との事。

一般領域ならまだしも『正当な聖句を用いて支配し、共存を図っている獣たち』を、横取りしてしまうディーナという存在自体が危険だという事。だからこそ、ディーナは神殿に隔離されて当然だという主張。

ここでギルムードはわざとらしく、右手首に巻かれた包帯を覗かせる。何の演出かと思わせるそれに、付け加える台詞がこれだ。^{セリフ}

「聖句を振り切った獣が、人を傷つけてしまう恐れが無いとは・・・言い切れますまい？現にこうして私めなどは、かつての聖句の徒に牙を向けられていますからね」

（・・・・・・獣が意味もなく、牙を向けたりなどするものですか！）

ディーナはギルムードの怪我は、彼の自業自得だと思ったが黙って言わせておいた。

多分、つけられるだけ文句をつけてやろうとしているのが、わかるから。

どう転んでも被害のうちの一件だとして、並べ立てているだけだろう。

ギルムードが物々しい調子で続けた伝達事項は　ディーナがその能力を私事ではなく、平等に振舞うようにと締めくくられていた。すなわち『民衆の為に用いるように』との進言のようだが、実際は警告だった。

要するに巫女として神殿に上がり、活かすのならば善し。だが拒めば、ディーナは世間を騒がせる危険人物とされるのだ。すなわち『魔女』と。

ルゼもフィルガもディーナも。誰も一言も発さず、ただ黙って立ったまま聞いていた。

ディーナは二人に手を握ってもらっていたお蔭で、思ったよりも動揺せずに聞いていられた。

途中何度か腹が立ったが、感情をむき出しにして・・・怒鳴るような真似はしないで済んだ。

何よりもこういった場数を踏んでいるであろう二人が、怖いくらいに落ち着き払っているのだから。

だったら、それに倣った方が上手くことが運ぶのだろう。ディーナはそう考えた。

静かに何の反応も示さずに、使者の声に耳を傾けていた三名を見渡すと、ギルムードは書状を丸めて再び紐で結んだ。

それを両手で恭しく、ディーナへと差し出した。受け取れ、という事だろう。

だが二人に手を掴まれたままでは、動く事もできない。どうしたものかと代わる代わる、二人を見た。

フィルガとは一瞬目が合った。すぐ外されたが、より一層握る手に力を込められる。

ルゼの方は淡い笑みを浮べて見せてから、すぐに厳しい表情をギルムードへと向けた。手を放すと、使者殿に向き合う。

「随分、一方的な物言いですこと！貴女方は一体、ディーナに何を期待しておいでですの？獣が聖句を振り切ったからといって、このコノせいにするなんて・・・神殿も落ちたものですわね。自分たちの無能ゆえの不始末を責任転嫁するなんて。そんな暇があるのなら、修行に励む方が道理でしょうに」

ルゼの紡ぐ言葉は嫌味どころか、痛烈な批判だった。微笑む表情と相変らず優しい口調からは、とても想像できない。

対するギルムードも顔色ひとつ変えずに、しらばつくれる。

「これはこれは・・・ルゼ殿。私目はただ神殿の審議会の決定事項を、お伝えするよう仰せ付かっただけですから。真意とやらまではとても」

「勝手に決めた事を一方的に押し付ける。そんな横暴を通してやるほど、神殿に義理立てする理由はこのジャスリート家には存在しませんよ？それをよもや、忘れたわけでは無いでしょうに」

「真意とやらはともかく。神殿が優先しているのは、民の平穏と豊かな保障された生活ですよ。審議もそれに重点が置かれた上で、決定が下されています。・・・その平穏を乱す獣の存在を

御する者がいてこそ、またその恩恵に浴するといふものでしょう」

「何が仰りたいのかしら？御使者殿」

「ディーナ嬢の稀有な能力を、ジャスリート家のみが独占しているとなれば。それこそ世論は何と言いますかな？」

いけしゃあしゃあとギルムードが言う脅しを、ルゼは迫力ある笑みを保ったままで言い返す。

「とんだ言いがかりなのではなくて？ギルムード殿。そもそも、何を証拠にディーナが獣を奪ったと言いつたのでしょうか」

「……………そうですね」

ギルムードはあごひげを撫でさすりながら、悠然と構えている。
ふいに例のあの　　眇めきつた眼差しが向けられた。

「……！」

デイナーは迷わず身を引いていた。　　ギルムードが動きを見せるよりも、数段に早く。

それを見逃さずにいたらしい、ギルムードが笑いをかみ殺しているのが解った。

（フィルガ殿、危ない……！）

デイナーはしっかりと掴まれた手を、引き抜く事は出来なかった。
だから……庇う。

己の体いっぱいを使って。

彼に背を向ける形は、ただフィルガにしがみつく格好になったとしてもだ。

……………
……………
……………

「デイナー……………」

名を呟く声音は、感嘆とも取れる。それでいて、悲しみを充分に
含んだ涙声でもあった。

「……………」

ごめんなさい、ルゼ様。そのような詫びは、心の中だけに今はとどめる。

「デイナー」

アナタって人は、まったく。あれほど……任せると言っただのに。

そう、お説教が続きそうだった。それも今は押し止められ、彼の指が氣遣わしげに髪を梳く。

デイナーはフィルガにすがり付きながら、神殿の使者を振り返って見る。

非礼にもギルムードは剣を構えていた。その切っ先が捕らえた先は、自分という獲物。

予測済みだったから、そんなに怯える事もうろたえる事も無かった。

まだこのような状況に慣れるにしても、二度しか場数を踏んでいないハズなのだと、自分自身を訝いぶかつてもいた。

我ながら、安心して任せ切ってしまったているからこのザマなのだ。

（ごめんなさい・・・私のお利口さん達。どのコであろうとも二度と、人の刃に曝さらさないと誓ったのに）

「 久しいな。ダグレスにレド。我が聖句の徒であつた獣たちよ？紅孔雀様のお膝元はそれほどまでか」

ダグレス 漆黒の獣。闇をまとう。闇の一部、そのものの。

レド 白い獣。まだらのすかし模様のある。

二頭に庇われながら、デイナーはフィルガの上着をぎゅっと掴んだ。

*** 神殿の書状（後書き）**

前回の仮タイトルが「張り切るギルムード」。

でしたが、リゼライに持っていかれたため今度こそギルに活躍の場を！！

つとになりましたが、別にそんなに張り切られると後々收拾が付かないかも・・・。

付けますが。

ええ。フィルガ兄さんが。

*** 手土産の焰（前書き）**

（仮）タイトルから、かけ離れた展開です。
案の定。

と、いうよりもそこまで話が続けられませなんだ
区切りが悪すぎて、長すぎて・・・

* 手土産の焰

．．．．．アツイ。クルシイ。

憎い．．．．．ニクイ、ニクイ、ニクイ．．．．．。

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

「 剣をおしまい下さい！！御使者殿．．．一体何を！？」

ルゼの叱責にギルムードは、わざとらしく首をすくめて見せた。
何も答えないまま、構えた両手をほどく。

そのまま流れよく、剣を鞘に戻した。それから、肩もすくめて見せた。

その上いたずらっぽく笑み浮べるものだから、ルゼの怒りをさらに買う。

「ギルムード殿！！いくら神殿の使いであろうとも、このジャスリート家でそのような狼藉！許されるものではありませんよ」

「．．．．．これは失礼を。無礼はお詫び致します故、どうぞご容赦を。何分『証拠』をご所望のようでしたので。揺るぎの無い、確たる証拠を」

そう自信満々に告げるギルムードに、二頭の獣は唸り声を高める。
頭を垂れ、頂く一角を向けるはダグレス。照準は、かつての『^{jack}聖句の主』。

身を低く構え、今にも飛び出さんばかりのレドも同じく。

「レドッ」

「ダーグ・レスッ」

その唸り声を諫めるように・・・宥めるかのように、優しい声音が名を呼ぶ。

警戒に満ちて、牙の間から零れ落ちていた威嚇音が鳴りを潜める。二頭は不承不承といった様子で、いくらかはうなり声を落着かせた。

だが、警戒は解いた訳ではないらしく、鼻ツラにシワを寄せて牙を覗かせ続けている。

「お利口さんたち。大丈夫だから、牙を終わってちょうだいね？ギルムード殿だってもう、剣を終わって下さったのよ・・・ね？」

”でも、デイナー。コイツは悪い奴。デイナーに剣を向けた、悪い奴！”

「レド、いい子だから・・・あのね・・・」

納得行かぬとこね続けるレドに、デイナーが根気良く言っただけ聞かせようとする。

そのやり取りは何の前触れも無く、遮られた。

『高見に立つ我が、この獣の心を預かる』

” ”

” ”

フィルガが聖句の一節を唱えた途端、レドの意識がこの場から感じられなくなった。ダグレスは意識残したままのようだが、大人しい。

ダグレスの方はフィルガの聖句には従わぬと、常々明言していた。取るに足らぬ、と。

レドは一度介入されてから、時折りこうして意識を奪われる。デイナーがいくら泣いて頼んでも、フィルガは聞かないのだ。

そんな二頭の眼に何が映っているのか。それすらも、ディーナにはわからない。

その事に焦りを覚えたディーナは悲鳴にも近い声で、彼を呼ぶ。

「フィルガ殿！何を？」

意志奪うそのやり方を、ディーナはけっして許すことは出来ない。非難の眼差しをフィルガへと向けたが、彼は一瞥もくれず取り合わなかった。

フィルガの見据える先にいるのは、かつての二頭の主だった者だ。

「この獣は私めの『聖句の徒』です。このモノ達にはディーナの護衛をせよ、と命じてありますからね。徒の正しい振る舞いの何が、確たる『証拠』と仰るのですか？神殿の使者殿」

「これは、これは、これは。さすがは、白孔雀の忘れ形見の若様だ！とでも、申し上げておきましようかね？」

皮肉った物言いにいくらかの棘トゲを響かせながら、ギルムードは居ずまいを正した。

彼の癖なのだろう。気に食わない相手と対峙するときは、剣の柄に手をかけて弄んでいる。

彼の属する集団の性さがなのか、元もとのものなのかは計りかねるが、とにかく感じのいいものではなかった。

むしろ不快感を煽るために、意図的にわざと行っているのかもしれない。

彼は誰とも馴れ合う気など無いのだ。敵陣に単体で踏み込んできたのだから、当然といえよう。

親しげな笑みは、ただの社交辞令というものだ。それくらい、ディーナにだってわかる。

その貼り付けた笑みを見ているだけで、胸の辺りが重苦しい。・・
不快でたまらない。

見ているだけのディーナでさえそうなのだから、向けられた者は

もつとだろっ。

ディーナは気遣いも込めて、フィルガを見上げた。

「私の聖句に囚われた獣を、ディーナの護りに付けた。ソレを証拠と仰られても、誰も領けますまい？」

「.....」

.....
.....
.....

もはや返す言葉も無く、ギルムードは押し黙ったかのように見えた。彼は顎を引いたまま、ねめつけるかのような底意地の悪い笑みを浮べる。

『クゼラ』

出でよ。そうは付け足さなかったが、心の中ではそう呟いた。名を呼ぶ。呼ぶことはすなわち、駆けつけると命じたと同じ。

そんな事を考えている僅かの間に、獣は身を現していた。どこからかと言ったらそれは・・・ギルムードの背後、足元の影の中から。

虚ろな瞳が見つめるのは、己と同じ色合いの少女の髪だろうか。それともかつて封じの間に押し込められた頃に芽生えた、不信という名の闇かもしれない。

赤と言つよりも朱紅色。獣の体毛を言葉にするならそうだ。炉にくべられた薪が、燃え盛るかのような色合いは揺らめいてくゆる。

ちょうど対照的にダグレスが闇の気配を巻き散らかして、攻撃の構えを取っているから余計に、その様が映える。

（さあて、と。闇の属性を相殺する火炎の
焰ほむらの属性の獣だぞ、

それは焰ほむの獣。

シャグランズの。そうだあの、獣筋の娘が体を張って『聖句の徒』
にしてきた獣。

それに今呼んだ響きを与えたのが他でもない。 ギルムードだ
った。

リゼライが持ちかけた契約に、自分は頷いたのだった。
命を預ける。 そのつもりで。

この燃え盛る炎をまとうかのような獣に、名を与える名誉を賜っ
たのだから笑える。

名あての儀式に及んだ際に、ギルムードはちよつとした『いたず
ら』を思いついた。

（いや・・・腹いせか？）

獣の名をこの小さくて、小生意気な少女の名からとってやるうぞ。
そう、考えても罰はちは当たるまい。そう考えた。

「じゃあ、コイツの名前は・・・クゼラ・・・イでつて・・・わかつ
た！悪かった！！悪かったから、そう睨むなよ。『クゼラ』にする。
それでいいだろ？」

やると思った。そう言いたげな少女に、眼差しでやり込められて
ギルムードは慌てて名を決めたのだ。

そうさせられた、と言つてもいいかもしれない。本当は『クゼラ
イ』としてやるうかと思つていたのだから。

ほんの一字違い。

それはすなわち、生意気な手下の代わりに獣を傳かせてやるうか
という 魂胆だった。

悪ふざけはせめてもの、上司としての自尊心の主張。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

（『クゼラ』・・・呼ばれたようね）

部屋を整える、リゼライの手が止まった。

この部屋でくつろいでいた獣二頭が、それはそれは勢い良く飛び出して行つてから、そう時間も経っていない。

それとたいした差も無く、自分が手綱を握る獣の気配がした。それが何を意味するのか。

説明されずとも、嫌でも状況が読める。

それに『クゼラ』の気配はたいそう派手だから、目立つのだ。火炎独特の何もかも飲み込もうとする、勢い。

それは焰という属性の性質のせいもあるうが、対峙した彼はたいそう厄介だった。

近付くもの全てを・・・燃やさんばかりの勢いに、流石のリゼライも手こずった。

あの獣は人を憎んでいたから、日々己自身の焰に身の内から焼かれ続けていた。

そうなると獣は、どういった事になるのか。獣は・・・『個』を失うのだ。ただの焰を巻き散らかすだけの存在と化す。

それを目の当たりにしたりゼライは、知ってしまったから。

こうして、全ての動きを止めて。・・・気配を窺わずにはおられないのだ。

* 手土産の焰（後書き）

・・・・仮タイトルは「殴ってもいいですよ、また」でした
（おおおおおい！！全年齢対象ですから・大丈夫です。ええ。）

それは次回！！（ 予告 ）

* 焰鎮める風（前書き）

焰を煽るのではなく、鎮める風。
。

焰鎮める風

そうよ、私も。

あの橋のむこう側から、渡ってくる風を引き連れて。

その風に背を押されて、
誘いざなわれて来た。

[illegible]

『クゼラ』
そう呼ばれた獣の気配が、この客間を支配します。

目には映らない。だが肌で感じる……。

ディーナは思わず顔をしかめた。

この胸を押しつぶさんばかりの勢いは、何なのだろうかと。内側から沸き起こる、己が胸を焦がすような。

激しさに隠れた静けさは、虚無という名の絶望を思わせる。

何もかも炎のうちに焼きくべてしまえばいい！！。

ディーナが感じ取れる獣の想いを、言葉にするのならそうなる。

(・・・むごい事をする)・・・

『神殿』という所は・・・どこの神が座するのかと、お聞きしたいところだ。

慈しみすら許せぬのか？ 相手が獣だという、そんな理由だけで？

彼らとて心があると言いつのに？

ディーナは自然、この焦点定まらぬ眼まなこ向ける獣に同調していた。自分と似た赤みの印象強い毛並の獣。

ア
ツ
イ
ク
ル
シ
イ
ニ
ク
イ

クルシイ ニクイ アツイ
ニクイ アツイ クルシイ

人の言葉持たぬ獣だけに、己の感情を人間に表現する術は皆無
だろう。そのせいだろうか。

『クゼラ』の抱いた『感情』の具合は、はち切れんばかりだ。

(・・・気が狂いそう)

『獣耳』のディーナだけに、嫌というほど直接的に感じ取ることが出来る。

ディーナはその想いに、絡め取られそうになった。身体を包みだ
す奇妙な浮遊感は警告だった。だが、そんなわけには行かない。

憎しみは熱く、彼を苦しめているのだろう・・・。そんな
彼を焰から救い上げるためにも、ディーナは踏み止まらねばなら
ない。

そんなクゼラのように、逃れられない焰に焼かれ続けるのならば、
いつその事。

誰だつて、終わりにしてしまいたくなるに決まっている。

呼び声に応えた獣はすでに、己の精神など焼ききってしまったの
だろうか。それこそ己が焰で。

かわいそうに。なんて・・・かわいそうな、かわいそうな『クゼ
ラ』。

ディーナは眼差しを細めながら、定めた。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*
。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

焰に圧されるのか、ダグレスは苦しそうなうなり声を上げる。

人間はいつだってズルイ。

ズルイだけならまだしも。とんでもない仕打ちで出迎えられる続けた頃には、焰操る獣はすっかり精神を傷めていた。

そんな時に会ったのは、確か人間の女だった。アレは『何者』だったろうか？

その頃の名はもう・・・意識のカケラにすら上らぬようになって久しいが、『クゼラ』では無かったのは確かだ。

『クゼラ』

何の意味すら見出せぬ、ちやちな所有者の『低脳^{バカ}の現われ』の名でしかない。

意識は奪われているが、表に出せぬだけだから思考は実のところ制限は無い。

それをこの低脳^{バカ}は気が付いてもいないだろうが。

『完全に意志を奪う』と息巻いていたのを、うかがい知っているからこそ、あざ笑ってやりたかった。

出来ぬ身が口惜しい。

こやつらに牙向けてやれぬ事も、組み敷いてやれぬ事もだ。

そう想いが膨れ上がるとまた、己が内の焰が勢いを増すのだ。

そうしてそれはなぜか他でもない『クゼラ』の身を、身の内を勢い良く焼き付ける。

勢い増すばかりの焰、向けてやりたい相手がいるのは確かなはずなのに。

どうして。どうして・・・だ？

『クゼラ』という名にすぎるしか、今は己という個に固執出来ない自分は何なのだ？

わからない。

わからない・・・わからない。

解^げせない事ばかりだ。

ただ苦しさにあえぎ続けながら、炎の気配を抑える事が出来なくなっている。その自覚だけがある。

ただ、ひたすらに。己が苦しみを周りにも押し付けることしか、出来なくなつてどれくらい経つ？

ただ。

今、少しだけ意識が己に戻った気がした。気のせいなどではない。自分を真つ直ぐに見つめ下ろしている、あの少女と瞳をかち合せてからだ。

何という目で自分を見つめるのだろう！

加えて自分に向けられた眼差しが物語るのは、同情などという見下したモノでもない。

それは喻えるのならば。優しく天から降りそそぐ、惜しみない雨の雫に似ていると思った。

ふ・・・と。『クゼラ』の胸が僅かに緩み、呼吸がたやすく感じられる。

清浄なる空の色をした瞳が、『クゼラ』なるものの焰を鎮めてくれるようだ。

自分と同じ毛並を持つあの少女は、姿こそ人間のものであるが、もしかしたら自分の同属なのかもしれない。

ああ・・・そうだ。

思い出した。

それを見守る人も、獣も。今胸に抱かれているのが、まるで自分かのような。そうで無いのが、悔やまれるような。

そんな気持ちで見守っていた。

『クゼラ』はあっさりと大人しく、ディーナの腕の中に納まっていた。

虚ろだった瞳にも、まだ曇りが見受けられるとはいえ、力強さと輝きが宿っている。

誰の目から見ても、獣が己を取り返したのは明らかだった。

彼女の優しい抱擁に保護された、獣の焰はすっかりキレイに鎮められている。

（何事だ　？術句も用いず、術具も用いず・・・いったい何をしたのだ？）

「ディーナ嬢　。貴女は『何を』されたのですか？お答え下さい『紅・孔雀』よ。我ら神殿の持ち物である獣を奪う、それは何と言う術なのですか！？　返答によつては問答無用で、」

「　ギルムード・・・殿。私何もしておりません。ただ、獣の心に寄り添っただけです。　ご覧になつていらしたじゃあ、ありませんか？」

ディーナは責めるような口ぶりの使者にさえ、笑みを浮べた。何を驚く必要があるのか。

そう逆に尋ね返すかのような、眼差しを向ける。

ゆつたりと獣の首筋に、頬をうずめながら優しく。

その様子に言葉を失っているギルムードに代わり、ただ固唾をのんで見守っていたルゼが声を上げた。

おそらくその場に居合わせた者たち全員が、確かめたかった言葉をかける。

「ディーナ・・・貴女は・・・ディーナなの？」

「・・・はい。ルゼ様。私はデイナーです」

「・・・シィーラでは、ないのね？」

「はい。残念ながら」

デイナーは哀しそうに、獣に抱きついたまま俯く。それでも唇をかみ締めると、面をあげた。

「ギルムード殿。神殿の御使者さま」

「何でございましたかな。デイナー嬢」

改まって呼ばれたギルムードが、緊張とわかるかしこまった声音で答えた。

「書状の内容を確かに受け取りました。私、神殿に上がります」

「！！？」

何を言い出すかと思ったら、本当に何を言い出だすんだ！貴女って人は　！

大方、そんな風に思っているであろう。そんなフィルガを挑むように、デイナーは見上げた。

唇を引き結んで、一瞬言葉を飲み込んで。それから・・・意を決したかのように、一気に告げた。

「それと・・・我が婚約者殿も一緒に」

「！！？」

「デイナー！？」

戸惑いを隠せず声を上げたルゼに、デイナーは視線を向けた。そのまま、言葉を遮って話を切り出す。

ギルムードを真つ直ぐに見上げて。・・・視線を見据え、合わせるべくゆつくりと立ち上がる。

「神殿の御使者殿・・・私の能力のあり方とやらを、裁きたいと仰るのでしょうか？なぜでしょうか？私の能力は獣たちを利用するために有るのではないのに。・・・ですから。神殿の方針に添うように、

獸を使って民の豊かさへと結び付けるなどとは、私には到底及ぶ事ではありませんの」

「ご謙遜をディーナ嬢。私め個人の意見はどうあれ、神殿の下した判断なのです。その恵まれた御力を放置するのは惜しいことだし、何より・・・あまりに危険だ」

「危険、ですか？」

「こうしてジャスリート家に貴女が身を寄せている事が、ですよ。貴女を手に入れば、不可能であつたはずの事も可能になる。稀有な孔雀の能力を独占していると取られれば、真実はどうであれ世間はそうは見えますまい」

「・・・現にこうして、難癖付けられていますけどね。別にたいした事じゃありませんよ。まあ、小虫にたかられるのと同じくらい鬱陶しいが・・・何。ふり払えばいいだけの話だ」

ついに黙っていらなくなつたらしいフィルガが、ギルムードに答えていた。

この神殿の使いが巧みに、ディーナが神殿に上がる事こそが『ジャスリート家の保身につながる』と、結論つけたがるのが我慢なら無いのだろう。

恐らくその辺りが、ディーナに世迷言を言わしめていると考えているのかもしれない。何にせよ、ひどくケンカ腰である。

「ギルムード殿！それこそ履き違えていらつしやいますわ。私はただの一度だって、力を強要された事などありません」

「ですから。真実はどうあれですよ、ディーナ嬢？この館に引き籠もつてらつしやる貴女様を、誰が正しい目で計れましょうか。力を手に入れば誰だって、己の便宜を図るように使うものだ・・・人の脆さがそう邪推させましようぞ？」

「そうですね。では 神殿の皆様方にも同じ事が言えると、解釈できますわよね？私・・・どうであれ神殿に異議申し立てに参ります。能力云々で私を裁きたいのでしたら、どうぞ。 巫女となる

当然だろう。

ちえつと名残惜しく感じながらも、ルゼは扉を閉める。

（婚約者ねえ？）

そんな風に言いだした割りに二人、まだまだ甘さが足りないような気がした。

* 焔鎮める風（後書き）

やたら間があきました・・・。

出来ていたのに、二転三転。

『婚約者？』って、感じですよ。誰がだ。

微妙な関係のまま、（またしても）次回！

第十三章 * 皆で交す約束（前書き）

お互いゆっくり歩み寄ってきたようです、な二人。

明らかに怯えを隠そうともせずに身構えるデイナーに、フィルガは長く無言だった。

かける言葉が見つからない。そんな様子だった。それが怒りのせいなのか、呆れているせいなのか。

フィルガは前髪をかき上げたままの体勢で、天井を見上げている。

「・・・デイナーさん・・・」

深い深いため息と共に名を呼ばれ、デイナーは膝上に置いた両手でドレスを握り締めた。姿勢も正す。

そんな目の前の彼はというと、組んだ両手で己の口元を覆うように、上体を倒していた。

デイナーと視線を合わせようとしているようだ。

「先ほどは肝が冷えました。・・・なぜ、あのような言動を・・・まったく」

今現在、私も冷えています。そんな事を口に出来るはずもなく、デイナーもまた言葉を探していた。

彼の聞かせると言う『あのような』とは、何をさすのか。

それはギルムードの持ってきた『神殿の書状を受け取った』ことをさすのか。あまつさえ『神殿に異議申し立てに行く』と告げたことか。それもそうだが『クゼラなる獣を呪縛から解き放った』ことか。

（全部かな）

どれにしろ、一度には答えられない。中には答えの無いものもある。

「フィルガ殿の言う『あのような』とは、何をさして言っているのか・・・わかりません」

はぐらかすつもりなどない。ただ 彼が一番聞きたがっていることから答えたいから、デイナーは尋ね返したのだ。

「ギルムードの挑発に乗ったことですよ。アレほど任せると言ったのに。なぜ俺を庇うような真似をしたのです？」

やはりフィルガは気が付き、汲み取っていたようだ。ギルムード

が抜き身の刃を向けたあの時。

例え傍目からはディーナがさも、フィルガにすがり付いたように見えたとしても。

そうなのだ。ディーナはあの時彼を身を挺して庇おうとした。

ディーナにとって意外な部分に、彼は引つ掛かりを感じている。

小さな苛立ちを言葉尻に引きずらせて、彼の声が響く。

それは無茶を重ねるディーナを責めているようだ。実際そうなのだろう。

「自分でもわかりません。ギルムード殿が剣を向けたのは『私』ではありませんでした。だから、です」

「だから。何故です？何故、俺を庇う必要がある？」

「……わかりません。無意識に身体が、勝手に。ちゃんと理由を言えと言われたら『ギルムード殿がフィルガ殿に害なす心に向けたから』としか、お答えできません」

ディーナは答えになっていない、と自分自身で思いながら伝えた。こんな理由を言われた所で、彼は納得するかどうか。

自分があんな行動を取った『はつきりした理由』なるものがあるのなら、ディーナ自身も聞かせたいところだ。

[illegible]

彼女の行動の理由ワケとやらは、ギルムードがフィルガに害意を向けたからだと言う。

だとしたらアレだ。ギルムードはあの場で見抜いていた事になる。

（まあ……橋でのやり取りを目にすれば、一目瞭然か）

彼女が己よりも「他者」を庇う気質だと。

そうしてそれは・・・彼女が『能力』を振るう動機となる。

實際こうして彼女の背に庇われたのは二度目だ。『紅雷』なる銀

灰の獣だった時にも、彼女の行動は理解し難いものだった。

他者に守られるを良しとしない。己の力量を凌ぐ者にも怯まず、身を投げ出すかのように晒す。

そうしてまでも彼女は守ろうとする。それをフィルガは由々しきことと思いつつも、心が浮き立つのを抑えられなかった。

（それは・・・すなわち）

たとえ選択権が二箇所しかなかったとしても。あの場合『ルゼ』か『フィルガ』かだとしても、ギルムードは自分に殺意を向けたのだ。

それが何を意味するのかなんて。たとえ深読みと言われようとも、少しは希望が持てた気がする。

「・・・『我が婚約者殿も一緒に』？」

俯きがちにこちらの様子を窺っていたディーナが、はじかれた様に勢い良く面を上げた。

フィルガを真正面から見据える。明らかに表情が固く、強張った。実にわかりやすい。白い頬にうつすらと赤みが差して行く。

その様子があまりに可愛らしいので頬が緩みかけたが、ここはハッキリさせたい。フィルガはその眼差しを覗き込んだ。

「う・・・打ち合わせ通りです、フィルガ殿」

「確かに」

こうなる事を予測したルゼ主催の『打ち合わせ』で、参謀の提案した策だ。

『ディーナ。貴女フィルガとは婚約者同士です、としておきなさいな。そうすれば神殿も中央政権も。おいそれとは貴女を、連れ去る事が出来なくなるから。ね？　そうしなさい？別にどうしても嫌なら、無理にそうしろとは言わないけど』

「え・えと・・・。」

あの時ディーナは何も言い返せずただ黙って、困ったように祖母を見返すだけだったのだ。当然だろう。

その場に居ながら何も声を掛けようもしない自分の方を、時折りおずおずと見上げてきた。

フィルガはただ黙って微笑んで見せたただけだ。　貴女のお好き
なように。そんな気持ちを込めて。

本来ならばフィルガから持ちかけようとしていた話だ。ルゼの『ほんの何かのついでだから』といった調子に、深刻めいた執着は気取られなかった・・・ハズだ。多分。

実際は執着心たつぷりの本音をひた隠し、ルゼのさりげない切り出し方は身内から見ても見事だったと思う。

祖母があくまで軽い調子で切り出したのは、彼女に負担をかけ過ぎない為にだろう。孫息子に任せたらそれこそまた、執着も露わに詰め寄るに違いあるまいと踏んでの事だろう。

なにせ相手は自由を愛する『紅孔雀』。

下手に出方を誤まれば・・・安全な鳥がごなどは興味が示されない所か、窮屈がって脱出を試みるかもしれない相手だ。

まったくもってお氣使い、どうも。

「・・・フィルガ殿、ごめんなさい。また、巻き込んでしまいましたよね・・・?」

巻き込んだも何も。最初から巻き込まれるつもりだったから、フィルガは驚く。

「今更です」

ですよねえ、とディーナは微かに小さく呟くと、また俯いてしまった。

「本当にいくら謝っても済まないと思っています。フィルガ殿も神殿に『一緒に』等と巻き込んだこと。申し訳なく思っています」

「構いませんよ。貴女を一人でやる方が気が休まりません。もとからそのつもりでしたから、貴女が気に病むことはない」

「そのつもり・・・って?」

「誰がディーナを神殿に渡すか、と。そんな気などありませんからね。側から離れる気は無いと言っているのです」

「フィルガ殿には不利かと思われませんが、それでも？」

「不利？俺が？何故ですか」

「聖句を用いました。レドと・・・ダグレスを従えて見せて。見せかけて。咎められるのは私一人で充分だと思います。それなのに」

「ああ。神殿の者は『白孔雀』の忘れ形見なら、それくらいやつてのけると思っていますから。大丈夫ですよ。それよりも、ディーナさん。俺からしてみれば貴女の方が遙かに不利に見えますけど？ レドとダグレスと言葉を交わし、あまつさえ『クゼラ』なる獣まで魅了してしまいましたからね」

「仰る通りでございます、フィルガ殿」

「それでも。それでも・・・行くと言つのですか？貴女が拒否すればジャスリート家の名に掛けてでも、退けられますよ」

「だからこそです、フィルガ殿。譲れません、どうしても。私……巫女として上がる気はありませんが、あのようなやり方で獣を縛る神殿に抗議しなければなりません。だから、行きます」

フィルガは予想通りのディーナの決意に内心、苛立ちもしたが表には出さなかった。

ただ静かに。決意漲らせる光宿した空のような青に、少しでも影なす曇がないか探るように見つめる。

「フィルガ殿……だって。きつと『クゼラ』みたいな子達
が待っているわ」

[illegible]

その懐かしの風を。

焰鎮めて、浄化の雨降らす雲を呼ぶ風を。

みんな、みんな、待っている。

しで睨みつけたが。その事にさえ、デイナーは気が付かない有様だった。

目の前にいるフィルガの存在など、霧散してしまったかのように。フィルガはその様子を、ここ最近頻繁に目にするようになった。その事に焦りを覚えずにはいられない。

それは彼の女性とどうしても重なってしまふ。いつも同じ空間に在りながら、いつ消えてもおかしくない風情だったあの人に。

重ねたくはない。あれほど、重ねずにはいられなかったはずなのに。彼女を、『デイナー』という存在を失いたくはない。

それは他者からの介入はもちろんの事。神殿からの横槍にも膝折る気はない。それより何より『懐かしの風の吹く』その源とやらから。

フィルガはおもむろに立ち上がると、指をひとつ鳴らした。

ぱちん！と乾いた音が響く。響いたと同時に我に返り、驚いたらしいデイナーが目を見張る。

「……………レド」

彼女が何事かと尋ねるよりも早く、フィルガは扉の方に呼びかけた。

かたん、とまた新たに小さく音がする。デイナーはそちらに注意を奪われ、立ち上がって振り返った。

「レド！！」

” デイナー！大丈夫だったか？ギルムードのヤツは、もう諦めて帰ったのか？”

気遣わしげに駆け寄ってきた白い獣の巨体を、デイナーはためらい無くその両腕を広げて迎える。

「だいじょうぶ……だいじょうぶよ、レド。ありがとうね、お利口さん……………」

” デイナー……無事。良かった。いじめられなかったか？”

んわりと押し付ける。彼女の心の砦とすべく、レドという第三者じやまも挟むという配慮つきで。

ディーナが助けを求めるように、ますますレドにしがみつく。だからフィルガも、やんわりと力を込める。

「レドはそんな二人を不思議そうに、代わる代わる見つめている。『デーナ？どうぞお願いですから誓って下さい。けっして己を、危険に晒すような真似はしないと』」

いつまでも答えない彼女を追いつめるように、フィルガはその耳元に囁き掛ける。

「つ・・・はい。『約束』します。だから、フィルが殿も・・・」

どうしても守りたいと願う者選ばれた 喜び。だがそれは気持ちだけで充分だ。誰もその身を挺してまで、守られたくは無い。誓います。デイナー……」

[illegible]

”
”
ツウオランも誓う！！ディーナ！！
”
”

” ヨウランもだ！！ディーナ！！ ”

” 嬢様、このダグレスめこそ！
よけ、フィルガ！嬢様をお
放ししろ”

”
”
·
·
·
·
·
·
我、
毛
”
”

我が婚約者殿。　　フィルガがそう、付け足そうと声を発するよりも早く。

孔雀が二羽に、闇色の一角、焰のたてがみ。

そんな雇の隙間から窺っていたらしい獣たちが、口々に言いたい事を言いながらなだれ込んできた。

レドを押し、のけ我も我もと、ディーナの胸に抱かれようとする始

末。

「あらあら、お利口さんたち。順番よ？」

フィルガは重みに耐え切れず、後ろに傾くディーナの身体を支える。

（……こいつらは全員、留守番だ。もちろん）

フィルガは『一緒に』神殿に召集される気満々の面子に、嫌でも疲労が増した気がした。

もつとも。

留守番させたところで『神殿』に上がれば、ディーナの言う『待っている子達』に同じように集^{たか}まれる気がするが。

第十三章 * 皆で交す約束（後書き）

仮タイトルは『少しは甘さの増した二人。』（目標）

でした。

出来上がりに『増したか？』と、相変らず自問自答。

フィルガの予想は大当たりです。

あゝじれったい〜と思いつつ。

そうそう簡単に、二人つきりにはさせませ〜ん。

・・・な、獣さんたち。

*** 闇に染む光（前書き）**

「つかの間の」

穏やかな朝の始まり。どうぞ満喫して下さい。

＊
闇に染む光

闇に。

まみれている訳でも無く、染まり切れている訳でも無い。

かと言って光で在れるはずも無く。

•
○

•
:
大
:
:
○

•
:
大
:
:
○

•
:
大
:
:
○

:
:
大
:
:
○

:
:
大
:
:
○

:
:
大
:
:
○

僅^{わず}かだが室内に射し込む光。それはフィルガの瞼を持ち上げさせる所か、ますます頑なに目元に力を込めさせる。

「昨晚も眠りに付くのが遅かったフィルガである。やつと寝台に横になってから、そう時も経っていない。」

からうじて日が昇るよりも前に、といった時分だったのだから当然眠り足りない。

眉根を寄せ、フィルガは光に背を向けるように身体を反転させる。少しでも光を遮るべく、上掛けも引き上げて被った。

もう少しばかり眠らねば、今日に差し支える。

そう思いながら再びまどろみに身を任せようとしたその時、フィ
ルガの耳に届いたのは『彼女』の笑い声。

それは何よりもフィルガを目覚めさせる。まだ身体に重みは残るものの、フィルガは起き上がっていた。

寢台から身を起こすと、迷うことなく窓辺に近寄る。朝のまだ弱々しい陽射しではあるものの、起き抜けのフィルガにとつては眩し過ぎるほどだ。まだ日に慣れぬ目を無理やりにこじ開け^あねば、開いているのもまま成らない。

（それならばもう少し横になっていればいいものを）
自分自身に苦笑する。

あまりに楽しそうな小鳥のさえずりを無視できなかったのだ。

もつとも彼女は小鳥よりも、孔雀に譬^{たと}えるのが相應しい。赤い髪が豊かに波うち、日の光を輝き返して豪奢^{ごうしゃ}に広がる様など目にしたら特にその表現に誤りは無いと確信できた。

孔雀。己の中の先入観も有るが、彼女の容姿は小鳥くらいでは収まりがきかぬ。その身の在り方はこの所、一際

優雅に広がりを見せるようになった。この館に来たばかりの頃の孔雀もそれはそれは優美だったが、あの頃広げられた羽根は彼女が身を隠したいがための物だった。

誰も彼も寄つてくれるなど広げられる、威嚇を込めた紅^{くれない}の扇。その紅が目の前の獣を余計に煽るとも知らずに。

もつとも華美な羽根を広げ魅せ付けるのは、オスの孔雀だけなのだが。

美しさを見せ付けるのもまた、強さの表れでもあると思う。その凛々しさはやはり孔雀でいいと頷ける。

……孔雀^{こうけう}は滅多にさえずらなくなつてきていた。こことフィルガヤルゼの前では特に。

微かにほほえむことは有るのだが、楽しそうな笑い声をフィルガは久しぶりに聞いた。

それを聞き逃す理由などあるまい。一体何が彼女の心をくすぐっているのかにも、興味が湧いた。

それこそ軽い嫉妬も含めて。確認するべく、フィルガは窓から身を乗り出した。窓枠に手を掛けて見渡し　見つけたと同時に苦笑する。

（ディーナ！まったく貴女は……また叱られますよ？）
見下ろすディーナは白と黒と赤それぞれの毛並の獣達と、井戸端

に座り込んでいた。見たところ身軽な寝間着のままで。

レドにダグレス。それとごく最近加わった『クゼラ』が、大人しく順番にディーナの差し出す手を待っている。

はい、どうぞ、レド。はい、ダグレス。はい、じゃあ、クゼラ。

井戸の手桶は皆が使う物。その配慮からなのか知らないが、ディーナはひとすくい、ひとすくい、獣たちに水を与えてやっているのだ。

当然 獣の口に入る前に水は、掌の間から盛大に滴り落ちてしまっている。ソレを獣がせいぜい二舐め。

だからまたすぐ汲んでやる。レド、ダグレス、クゼラへと順番に。獣の舌が彼女の掌を舐める度、はしゃいだ笑い声上がる。嬉しそうに水をまた汲んで差し出す。また笑う。

その繰り返し。

ディーナが笑うのはくすぐったいのと、己が掌では用足りぬ小ささを新鮮な驚きと捉えての事だろうか。

獣が水を飲み干す毎に、彼女の笑い声は高まる。また笑いながら、水を湛えた手桶に両手を浸しては差し出す。

(・・・・アイツら。何を甘えた事を！水くらい自分で飲め) 忌々しいながらも、その微笑ましい光景にフィルガは小さく吹き出した。その光景にと言うよりも、これから起こるであろう彼女の身を案じて。

おそらくと言うよりも確実に。彼女達からお小言を喰らうであろう、その光景に。

いい加減に学習して頂きたい所だが、そうできない訳ではなく懲りないだけだろう。あるいはちつとも堪えていないか。

(・・・・・・)

いい加減、止めに入るか。このまま放っておけば彼女は気の

済むまでずっとそうしているだろうから。

衣服が充分に水を含み、身体が冷えようと遊びに夢中のディーナが構うわけが無い。

そもそも誰も止めには入れまい。あのような獣に囲まれるディーナに、そう易々と近づける者はいないのだ。

せいぜい自分か祖母くらいだろう。取り巻きに囲まれた彼女に直に何か言えるのは。

今頃ディーナ付きの侍女が姿の見えぬ主に驚き、またかと探しているに違いない。そうなれば見つかるのも時間の問題だろうに。

見下ろす彼女は一向に気に留める様子は無い。そんな事はお構い無しで遊びに熱中している。

(……侍女達が騒ぎ出し、ディーナを止めてくれと懇願される前に止めに入るか。)

そう思い立ち、フィルガは身支度を始める。

部屋着を脱ぎ捨て寝台に放り、椅子に掛けたままの上着を身に着ける。湿らせた手ふき布で顔を乱暴に拭う。

髪もそのまま微かに湿った掌で撫で付けた。視界に入る髪先が疎ましい。肩に掛かる程の長さも有るのだから、当たり前なのだが。

未だ馴染めぬ髪の扱いに寝起きの不機嫌さも加わって、姿見に映る己の表情は険悪だった。

「……………」

申しわけ程度に髪を撫で付けまとめると、素早く紐で一纏めにする。これでフィルガの身支度は完成だ。

無言で自身を一睨みして、フィルガはさつさと姿見から離れた。それでも目の端に残る自分の残像に、視線を引き剥がしたというのに囚われている。

灰色の印象強い髪と瞳。よく言えば銀か鉛。どちらかと言うと鉛の、鈍く重たく冷えた印象を見る者に与えると思う。

それが朝の陽射しの元ではいくらか軽さも増して見せるが、それ

もまたフィルガにとっては不愉快の元だった。

くすぶった鉄の色合いは浅い侵食の証。母方の薄い金色の髪を受け継がなかった息子を見て、誰もが父親の事を思ったのも頷ける。

『 純白の羽根は闇に吞まれた』

フィルガを産んだシーラを一部の 主に神殿の 人々はそう揶揄したのは、フィルガの耳にも届いていた。

光をまとい、その化身であったはずのシーラ。それがあろう事か未婚のままで身籠ったのだ。

しかも巫女の身であったシーラは、当時大変な騒ぎの元だったことを想像するのは容易い。

実際神殿に召集された後も彼女を娶りたいとう申し込みは、後を絶たなかったそうだ。

ついでに付け足すなら、フィルガを産んだ後も絶える事は無かつたそうだから、その純白の羽根に惹かれるのは獣だけでは済まないといった所か。もつとも群がる輩は………獣と大差なかるうが。

そうしてシーラが巫女の立場から退き、ジャスリート家に戻ってから監視は続いていたのだ。公とおあやけそうでないものも含めて、彼女は常に見張られていた。それでも彼女の夫となった者の正体は分からなかったのだらう。

実の息子とて最近まで知らなかったのだから呆れる。あの人
の口の固さには。

彼から直接聞かされるまで、何ひとつ知らず育ったのだ。

その頃の幼いフィルガは父親の存在など知らなかったのだが、幼い自分にまで接触を試みる者も絶えなかったのだ。

それが好奇心からだけではないのも、また確かだったらう。要はシーラの忘れ形見というフィルガの扱いを、位置づけを成されようとしているのだけはわかった。

シーラと同じもしくはそれ以上の、能力をその身に秘めた子供。

このまま公爵家の孫として、放置しておいてもいいものか？

何もフィルガは、力の片鱗を誰彼構わず披露した覚えは無かったが。恐らくその頃からすでに、館に間者の存在があったのだらう。

シーラの側に憩う獣とのやり取りを、当たり前のようにこなすフィルガは確かに能力者だった。

『やはりシーラの息子は生まれながらに獣耳。』 ならば。

そうとでも判断したのか、中には聖句で縛った獣を送り込む輩までいたのだから！

そんな獣たちが、口にするのはいつも決まった台詞。^{セリフ}

『シーラの息子・フィルガよ。シーラは何処だ？^{いずこ}して、お前の父親は誰ぞ？』

そんな事！こっちが訊きたい！！
答えられない代わりに獣を送り込んだ奴等の願い通り、子供は片っ端から獣を従えてやった。

聖句かけた者をも上回る術者として振舞うに限る。それが幼いながらに導き出した答え。

それがシーラの息子フィルガとしての、相応しい振る舞いだっただかどうかは知らない。

だがある意味、期待に添ってやった手応えはあった。送り込まれる渡り合う獣の知性レベルがどんどん高度になって行っただから。そのうち、いちいち相手にするのも面倒臭くなった。だから結界を強めて締め出すほうに能力を磨いた。それでも締め出せぬ獣が何頭か。

ダグレスにレド。それに……シアラータ。

シーラに加護を一身に受けた獣の存在は、いつまでも子供の心を苛んだ。

煩わしいの一言だ、獣の存在など！いなくなったあの人を思い起こさせるだけで。

何も告げずに立ち去った者の心を計れるほど、フィルガとて成長していなかった。それは恐らく……今も。

そうやってますます締め出されて、しつこい者達の想像力を働かせてしまったのだらう。

はつきりしない白孔雀の心射止めた者の存在は、やはり人外の者と囁かれる様になるのにそう時間は掛からなかった。

邪推に命懸けの連中に期待以上の動きをして見せた、フィルガの働きの成果も大きかったらう。

大人の噂話だがそれは届く。例え幼い目と耳であっても、その心にも。

その噂話はシーラ失踪の後、一段と強くささやかれる様になつていた事も。

祖母は勿論知っていたらうが、直接触れてきたことは無かった。フィルガが食つて掛かるように質問をぶつけるまで。……祖母もまた『フィルガの父親が誰か知らない』のだ。

本当にどうかしている！シーラはもちろんだが、娘の事を何も知らない貴女もだ！

そう祖母をなじった事も有ったものだが、対する祖母が負けるわけも無く。

『そうよ。それがどうかしていて？息子である貴方だつて何も知らないじゃない！いいこと？よく、お聞きなさい！あの子はけつして口を割らなかつた。それはきつと私たちを思いやっての事だと私は確信しているわ。人外の者？言わせておきなさい。捨て置いていいわ、そんな陰口。取るに足らない実体の無いものよ。どのみちジャスリート家の生まれの者は皆、その血を引いているのよ』貴方も。そして私もね。そう怒鳴り疲れた祖母が脱力したように、呟いた言葉の方が耳に残った。

人外の者の血筋。それがジャスリート家の血筋と言うならば、俺は、貴方は何だと言うのか！！

答えは自分で見つけると言い渡された。その声は威厳に満ち溢れた領主としての物だつた宣告。

それは甘えは許さぬとの叱責でもあつた。

だが実に堂々と積極的にフィルガを、公の場に連れ出すようになっていた。その度に好奇の眼に晒されたものだが、祖母は取り合わなかった。彼女は どう在るべきかを態度で示し、フィルガに教えようとしたのだらう。

隠し立てする事など何も無い。何とでも、どうしても言えはいい逃げも隠れもしないから。

彼女もまたジャスリート家の生粋の孔雀。その紋章を背負うだけの女性。

「貴方はその血筋。行く行くはこの紋章背負つて立つ日が来るのよ。だから」

強く在れ。そして笑えと、祖母からは叩き込まれた。

見上げる横顔の唇はいつも笑みを形作っていた。例え扇で隠されていても、誰を相手にしていてもだ。

その面を上げていく姿勢は、光を浴びて生きる者に相應しい在り方だ。子供心にも祖母を眩しく思つたものだ。それは今も変わらない。子供もそれに倣つたが、残念ながら気が付いてもいた。

そうやって光に顔を向ければまた・・・それだけ、己の背後に落ちる影の濃さが際立つと言う事に。

[illegible]

『私はディーナ！ディーナよ！それ以外の何者でもない！』

いくら周りがシーラの身代わりと立てようと、は彼女を見ようと
もそれは撥ね付けられる。

どうかしている！

持てる記憶のすべてと言えば『橋を渡つて来た事』と『自分の名はディーナ』の、二点のみのくせに。

涙ながらに全力で訴え続ける娘に感心するよりも、半ば呆れたの

も今となつては懐かしい。

そんな闇に侵食された獣^{おのれ}の見る先は、陽だまりの中にいる彼女。
そのままそこで、いついつまでも微笑ませてやりたい自分と。

どうか一緒に闇を覗き見て欲しいと願う自分こそが、人外^{ケモノ}の血筋
のなせるワザなのか。

（それがジャスリートの血だというのなら、俺は　。）

俺は？

未だ答えの見出せぬままフィルガは誘われるように、陽だまりに
出向いていた。

* 闇に染む光（後書き）

「あけましておめでとunggざいます!」

・・・一年前の後書きで 同じように書いたのは、3章の闇の向こうの遠吠えの頃でした
確かに後から読んで下さった方にしてみたら「え?」でしょうが、折角の新年なので。

今年もよろしくお願いします。皆様のご多幸をお祈りする姿勢は変りません。

「フィルガのすさんでいた少年時代に入って行きます」 等とほざいたのは、8章の頃でggざます。

なぜ、直さない私よ。すみません、わざとです。その時の気持ちを忘れないためです。

・・・すつごく!長くなるのでこのようにはしより気味に行かせていただきます!あうう。

「更新遅いよ、続きどうした?」

身内に言われます。こんな調子ですが感想にて「ぶれっしゃあ」をお与えいただければ、

もう少し早まるかとオモイマス。・・・今年もよろしく願ひいたします!

*** 人の子の事情（前書き）**

長く生きているダグレスは、いつもいつも呆れてしまいます。

人間は何てもどかしい生き方ばかりを選ぶのだらうと。

幾月を過ごしても、さして変わらない光景を目の当たりにするものですから。

＊
人の子の事情

人の子の本心と言動の裏腹さにはいつも呆れる。

何ゆえ欲するものを遠ざけ、欲してもいないものを求めるふりをするのか。

・ ・ ・ ・ ・
そこが興味深くもあるが。

[illegible]

くすくすと忍び笑いを響かせていたのも、そうつとクゼラに鼻先を押し付けられた。

そんな風にやんわりと。たしなめられて、ディーナは自身の両手で口を押さえ込んだ。

それでも愉快な気持ちは抑えようが無くて、おかしくてたまらない。

ディーナはそんな笑いを隠そうと、獣の首筋に抱きついて顔をうずめる。

（””嬢様。そこで隠れていらつしやればおもしろいものが見られますよ？　リゼライめがこちらにまもなく参りますゆえ””）

それはいい。どうせ衣服を水浸しにした事で叱られるのだ。

今さら隠れて驚かせたとしても、怒られる事には変わらないのだから構うまい。

そういたずら心を起こして、ダグレスの入れ知恵に乗つたのだ。井戸端で獸たちに水を飲ませていた所を、二階の窓から見下ろすリゼライにすっかり見られてしまつた。

恐らく朝の仕度の為に部屋を訪れてくれたのだ。それなのに部屋にディーナの姿が無いとなれば、探して回っていたに違いない。

仕度くらい自分で出来る。ディーナはとつくに着替えを済ませていた。

流石に寝間着のままでうろついたとあつては、フィルガに説教されるだらうから。

それがリゼライにだったら、話は別だ。

彼女に世話を焼いてもらうのは嬉しい。こつやつて探してくれて
いるのも、嬉しかった。

[illegible]

しれつと地べたに腹ばいになって、日を浴びている闇色の獣。

井戸の影に隠れているつもりの、もちろん丸見えの純白にまだらの透かしのある獣。

その二頭と対峙して睨み下ろしているのは、

リゼライだ。

腕を組み、代わる代わる二頭を見つめている。

⌈
•
•
•
•
•
•
○
⌋

”

”

•

•

•

•

•

•

○

”

”

リゼライは獣を前にしても怯まない、数少ない侍女の一人だ。他の者は遠巻きにしている。

こんなにお利口さんで優しい獣たちを、そうする理由がディーナには理解できない。

それもあつて、リゼライの変らぬ態度には好感が持てるのだ。しかし。実際こうやって彼女が獣と面と向かつている様を見るのは、これが初めてだった。確かにダグレスの言う通り、興味深い。

「ディーナ嬢はどこ？」

”

”

存ぜぬな

”

”

「ど・こ！？あんた達と水遊びしてたでしょう。まったく、冷えるでしょう！止めなさい！それに衣服が透けたら……」

” ” だからフィルガが慌てて飛んできた。入れ違いだったな、リゼライ ” ”

リゼライは辺りを注意深く見渡した。最近では『気配を探られて
いる』のがわかるようになってきたディーナだ。

だからこそ、リゼライが自分の気配を掴み損なつたのもわかつた。そうでなければ、彼女がディーナの目の前で、獣と渡り合うことはしない。今、ディーナはダグレスの力で気配をクゼラの元へと隠している。

それがダグレスの言う『おもしろいこと』なのだ。確かに、今まで見たことの無いリゼライの表情と態度が見れた。

「知ってるんじゃないの。だったら早くそう言いなさい！」

” 我は高貴な古神獣ゆえ。人の子が何を言っているのかなぞ、
”
わからん”

「聞こえているじゃないのよ。何？それとも、その耳は飾りか何か？」

”
”
い
ん
”
”

「その口のきき方は、いづぞやのやり取りの応酬のつもり？根に持ってるのかしらね。気位の高い獣サマときたら！」

口のきき方になっておらぬようだな、小娘！

ダグレスがおもむろに一角を向ける。対するリゼライは腕を組み直し、睨みすえる。

そんな不穏なやり取りも、たいした緊迫感が無いように思えるのは……春の日差しと風のせいなのか。

[illegible]

「ああもう本当にこんな事で！ 私が生なくなつた後、あんた達ちゃんと面倒見るのよ？何でも気の済むようにさせればあの子のためになるかと言つたら、大間違いだからね。わかつているわよね？ダグレス！」

” 人は脆弱な造りのこと肝に銘じる ”

「やけに素直ね。気持ちの悪いこと！」

「リゼライさん、行つちやうの？」

「……ディーナ」

さま、という敬称は飲み込まれた。

「知つていたけれど。やつぱり、行つちやうの？神殿に」

堪えきれず茂みから姿を現したディーナに背を向けていたりゼライだつたが、ひとつ諦めたように息をつく。

それから勢い良く振り返ると、腰に両手を当てる格好で向きあつた。

ディーナはその琥珀色の瞳に、何か見出せないものかと祈るような気持ちで見つめる。

はああ、と見るからに解りやすいため息を盛大に付くと、リゼライは髪をまとめ上げていたピンを引き抜いた。

途端に金の髪がまるで、滝のように流れ落ちる。二、三回頭を振ると、リゼライは忌々しそうに前髪を掻き揚げた。

それからやっと、口を開く。

「誰から……って、ま、あんた等か。やれやれ。油断したものね、私も。何？コレはダグレス、またアンタの筋書き？ディーナ嬢が懐いている奴の、本性を晒させて呆れさせようっていう？」

” そうだ。そうだが それだけではない事くらい、オマエとて心得ているだろう？シャグランズの ”

「リゼライさん……？」

ディーナが眼差しですぐると、彼女はそっぽを向いて吐き捨てた。「そうよ。元々ここへは仕事にきていただけだからね。引き上げる

の

「行かないで」

「ええ！？」

「行かないで。行っちゃ、嫌。ここにいて」

「無茶言うな」

「あの方にも行かないでっ
てお願いしたのに」

「あの、方？」

「側に居てくれないの」

「一緒にするな」

「行かないで」

「しつこいな」

「私も行く」

[illegible]

「私毛」

「何？」

「私も行くから。待っていて」

「望むところだわ」

そう呟いた彼女から、ねめつけられる。

リゼライの方が小柄なのだが、あまりそれを感じさせないのはその存在感の強さだと思った。

彼女の向ける鋭い眼差しの、強い光に込められたものは明らかに
デイナーに向けられたものだ。

『紅孔雀』すなわち『獣を魅了してしまう』術者に対する、挑むような眼差し。

唇を笑みの形に持ち上げてこそいるが、その眼は全く笑ってなどいない。

当たり前だが、改めて彼女の今までの微笑みは、全て演じていた

ものなのだと思います知らされる表情かおだった。

それでいて、やっと彼女の素顔に触れることが出来た気がした。何故か胸に溢れかえるのは、安堵感だった。

ディーナはリゼライが好きだ。とても感謝しているし、頼りにしている。

たえそれが全て誰かから命じられたもので成り立っていたとしてもだ。感謝している。

「うん。待っていて、リゼライ」

お互い初めて素のまま出会えた気がした。それは潔くて晴れやかな寂しさをも覚える。

今日のこの陽射しとも相まって、ディーナは目を細めた。そうせずにはいられなかった。こんなにも穏やかな春の日のもとに頼らずとも、暴かれるべき彼女の正体など。ずっと前からディーナは知らされていた。

でも・・・構わないと本気で思っていたのも事実なのだ。そう告げたら彼女はきつと怒るだろうが。

「アンタ。前々から思ってたけど、本当にバカなのね。もっとしっかりしなさいよ。無邪気なのも結構だけれど、そのせいで寂しい思いさせてる人間だっているんじゃないの？私に懐いてる場合じゃないでしょ！まったくもう、最後まで世話の焼けるったらないんだから！」

何で私がこんな事言わずにいられないのかすら腹立だしいわ、といい終わるや否やリゼライは踵を返してしまう。金の髪が翻り後に続く。

その通りだ。そんな事とくに自分自身で気が付いている！改めて言われるまでもない。

しかしそう言う彼女こそ、ひどく矛盾しているのもまた確かだ。何やかやとディーナを気使うような数々の振る舞いが、その答えだ。ディーナは敏感にその心に気が付いていた。だから『懐くな』と言う方がどうかしていると思う。

「リゼ　・・・っ！」

その後姿に取りすがってでも、泣きつこうとしたディーナだったがそれは叶わなかった。

やんわりと。それでいて強い有無を言わせぬ力に引き戻されたのだ。

驚いて振り返り見上げれば　。そこには見慣れた、深い銀の眼差しに見下ろされている自分を確認する。

両肩を圧するかのような重みに、ディーナは顔をしかめた。

彼との身長差が与える圧迫感はどうしても身構えさせるのだ。

「ディーナさん・・・。。追ってはなりません。行かせなさい。それが一番いい。わかりましたか？」

短く言葉少なにフィルガは言い含める。

「・・・。。。」

「本当はわかっていますよね？　返事は？」

返事は・・・しない。ディーナはどうしてもフィルガに対しては、反抗してしまう。

ルゼやリゼライ、他の館の者達には抱かない感情が、小さくも鎌首をもたげるのはなぜなのかはわからない。

（きつと、最初の頃の印象の悪さや『聖句』を使ったりするから・・・フィルガ殿。・・・。。ちよつと嫌い）

むっとして黙り込んだディーナに、言って聞かせようとする優しい口調は変わらずだ。

それでも命じるように言う彼は珍しく無くなってきたように思う。

最近ディーナは彼の出方を学んだのだ。彼は『絶対に許可しない』と判断した事には、ディーナの意見など丸ごと封じ込めてしまう。

最初っから意見すら求めようもしない。それどころか、口を開くことすら良しとしない。

その事でまた新たな悔しさを感じる。やるせない思いに涙をにじませつつも堪えながら、ディーナは訴えを口にした。

「……だつて。寂しい……行かないでつてお願いしたけど、リゼライも私のこと置いて行っちゃうの」

紅雷も。

そう呟きかけたがディーナは黙り込んだ。フィルガに告げてはならない、彼は獣を従える『聖句』の使い手なのだから。

そう警告音が自心の中で鳴り響いたからだ。

それともうひとつ。彼はきつとまた会いに来てくれる。そう信じてディーナは日々を過ごしているのだ。

置いて行かれたなどと泣き言を言つては、彼は二度と現われてくれなくなるかもしれない。

「行かせませんよ、ディーナ」

「っ、やだ！」

未練がましく立ち去り行く背中から目が離せないでいたものだから、ディーナはフィルガの取った動きに気がつけなかった。完全に意識ごと丸ごと。リゼライに向けていたのだ。

それをフィルガが良しとするわけが無い事も、ディーナは学んだつもりでただに『してやられた』とばかりに悔しさが先立つ。

？

じたばたと暴れもがいたつもりだったが、それもどうだろう？ 身動きとろうにもこうも完全に背後から抱きすくめられていては、ただ首を横に振るくらいしか出来ない。

気がつけば、様子を見守つてくれていた獣たちも見当たらない。

「やだ！やだ！離して、いや！」

「嫌です、離しません。行かせませんよ、まだ。ましてや、貴女一人ではね」

「……………」

「彼女は母親と弟妹達を人質にとられています」

「！？」

「そして彼女もまた一流の能力者の家柄。『シャグランス家』の誇るべき『聖句の使い手』でもあります」

シャグランスの。確かにダグレスもリゼライをそう呼んだ。

ディーナも聞き覚えのある家名は確か、トゥーラの授業にも出てきたものだった。

ジャスリート家・ロウニア家に並び、聖句を練り上げた一族の名「フィルガ殿……」知っていながら、ジャスリート家に？

「そうです。彼女が『間者』と知りながら貴女の側に置きました。もちろん祖母も知っています」

「なぜ？」

「排除しなかったのかつて、ディーナ？前にも言ったと思いますが、あまり締め出しても要らぬ画策をめぐらせる輩がいるものなので。それもあります、彼女をこちら側に引き込めないかと思い　貴女の側に置いたのです」

「私……の側に置く？どうして？」

「あなたの魅力に賭けました。そしてリゼライの性格とに。結果はお見事としか言いようがありません、ディーナ。彼女は見事にもう……こちら側でしょう。例え現状は、神殿に属さねばならない身の上だとしても」

「こちら側？」

ディーナは良く飲み込めないままに、ぼんやりと繰り返した。そんな事を言われても、彼女は行ってしまったではないか。

「彼女はもう、あなたの味方です。貴女が神殿に上がっても何らかの助けになるでしょう」

「そんな言い方って……何だか、利用するみたいじゃない！」

「そうですよ。そのつもりで貴女の側に置いたのです。　味方は一人でも多い方がいい。貴女が赴くと決めた場所はそういう所です。知らなかったでは済まされませんよ。だから、俺も祖母も容赦しませんから」

「う……ハイ」

「よろしい。では着替えて朝食を済ませたら、早速授業を開始しますから」

覚悟していて下さいね、と告げる彼もそう言えば　。

『置いていかれた』子供だったな、とディーナは思い出していた。子供はもうずいぶん立派な青年になっていて、とてもじゃないが同情する気にはなれなかった。

それでもこの心細さを味わった者は、いい同志だと思える。

ディーナは抱きすくめられた格好のまま見上げた。

「私・・・フィルガ殿を置いて行ったりなんてしないわよ？それに何にせよ、フィルガ殿も一緒に行くのでしょうか？」

見下ろす彼は柔らかく微笑む。

「そうですよ」

そう呟いた言葉は、ディーナの額に押し付けられた。

* 人の子の事情（後書き）

『お久しぶりでございます！』

春は別れと出会いの季節なのであります。

しばしのお別れも、また新たな出会いにつながって行くものなので
ほんの少しの辛抱ですよ！ディーナさん！

矛盾いっぱい自分に苛立ちながら、立場を優先させるリゼライが
どこぞの獣様には何やら眩しいようですよ？

つづきはもう少しお待ちください……

* 風に乗る歌声（前書き）

風に乗る歌声

術は机上で学ぶものではない。

ましてや頭だけに覚えこませるのは効率が悪い。

真に身に付けたいのなら、その魂にまで記憶させるに限るよ。

[illegible]

「アナタは。基礎をここまで固めて置けと一週間前に言い渡したはずですよね、ディーナ？」

「申し訳ありません、フィルガ殿」

「謝る暇があるのなら、この展開を説明する術を頭に叩き込んでください。いいですか？ではもう一度説明をしますよ」

「よろしくお願い致します、センセイ」

『経験不足を補うのは知識』をモットーに掲げた彼は宣告通り、実に容赦が無い。

一日中術の展開と解説とやらを、色々な角度からディーナに見れるようになれと教えてくれる。

事細かに根気強く 徹底く。

ねえ、
フィルガ殿？

フィルガ殿？

あのねえ

こういうのは実践を伴って初めて生きてくるものじゃない？

その実践に至るまでの道のりはこんなものです、とにべも無い。

この調子で行くと実践は『ぶつつけ本番』になる気がするが。それもまた申し立てたところで却下され、大人しく教師に従うデイナーである。

それにあまり日が無いのだ。ディーナが神殿に『召集』される日が。

その日が近付くにつれ、正直気が滅入ってくる。

フィルガも一緒に行くと言って譲らないが、多分ソレは公には叶うまい。

よくてなにかしら胡散臭い手を使う事になるだろう。

事実上は敵陣に単身で乗り込む事になるのだ。

ディーナは心して掛かろうと思っているから、こつやって根性を振り絞って必死に勉強に励んでいる。

秀才の彼に手ほどきを受けているのだ。

かつて『フィルガ殿を超える術者になるから！』等と、本気で言っていた自分が恥ずかしい。

遥かに自分を凌ぐ相手の実力も測れやしない、身の程知らずとはそういうことだ。

ばか正直に認めるのならば、未だに彼に物事を頼むのは癪に障るのもまた事実だった。

だからと言って学ぶ事を放棄する気にもならない。

彼には無条件で反抗したくなる。それは多分、彼がディーナを甘やかすからだ。

何だかんだと言っても、フィルガはディーナに対しては過ぎるほどに甘いのだ。

ディーナが神殿に行くと言ってしまったから、それなら精一杯応援してやろうというのが彼のやり方らしい。

そのやり方の現われがこの一日中の猛勉強と言っ訳だ。

だがそれどこかしら面白くないであろう彼は、ちくちく嫌味つたらしい物言いでは始終ディーナをやり込めるようになったが、それでもディーナは黙っている。

それだけフィルガは納得行かないのに、付き合ってくれているらしいとディーナとて解る。

文句を言うつもりは無い。むしろありがたいと思っている。何て根に持つ性格なんだろうかと実際は呆れるを通り越して、彼らしいと妙に納得するディーナである。

彼の執着心を舐めては行けないとすら思った。

それは『シーラに』であってディーナにはないと踏んでいたのだが、それはとんだ間違いのようだと認めるほかは無い。

どれほど待ち侘びたと思っているのですか？

ディーナの認識の甘さに物凄い笑顔で、その実ちつとも笑っちゃいない恐ろしい社交辞令の笑みで迫られ逃げられなかった。逃すかと物語るかのような笑みで見下ろされると、固まるほか無いのだ。物事を上手く運ぶためにと提案されたかりそめの婚約者に、うっかりと乗ってしまったのはディーナである。

いつでも取り下げる気まんまんのディーナだったなどは、よもや口が裂けても言えない。

その前に『口封じ』されてしまうのがオチだ。もちろん、命を奪うというやり方以外をさす。

もうかりそめだろうと何であろうと、婚約にこぎつけた事は彼の安心材料でもあるらしい。

神殿側に対する、無言の圧力である。

しょせん流れ身のディーナだ。フィルガに与えられる事はたくさんあっても、彼に与えてやれる物は持っていない。

地位も財産も術者としての類まれな才能も、既にそれらは彼のものだ。

与えるものが無いと訴えるディーナに彼は提案してきた。では代わりに不動のものを下さい、と言われてまた頭を抱えた。

それが何かなどと深く考えたくは無かった。今は、まだ。

（それは恐らく。この身と心を両方・・・魂ごと）

そんなやり取りのまま授業に入る彼が信じられなかった。

おかげであの日は集中できなかった。今でも思い返してしまうたび、必死で頭の隅に追いやるしかない。

(逃げたい)

相変らずの結果しか出てこないディーナである。

全てが済んだらお暇乞いいとまごをする気は未だに失せていない。

婚約を破棄してくれ等と申し立てて、ジャスリート家の若君に恥をかかせた女と広く知られるのも避けたい展開ではある。

その逆なら一向に構わないが。

そうかその手があったか！と思いだったのは、ディーナにとつての安心材料だ。とはもちろん伏せている。

「ディナー」

ぱん、とフィルガが両手を叩いていた。

は、
と我に返る。

「も、もうしわけありませんでした、センセイ」

慌てて謝る。

「いっままでにしますよ」

「滅相もございません」

そんなやり取りをずっと繰り返して、はや一週間である。

[illegible]

根を詰めすぎて、頭が痛くなってきた。無意識に頭に拳を当て込んだ。

はふ、とひとつ息を吐いてからディーナは切り出す。

「ねえ、フィルガ殿。私、術者対決もあるけれども。それだけですまない気がする。この国の裁判と審議会、かつてのシーラの時の記録も見ておいたほうがいいと思うの？　どうかしら？」

「うん。それは避けられないと思うよ。でも、私なりに下準備く
らいはしておいた方がいいと思うの。呼び出されて縛られたままの
獣たちのためにも」

「よろしくお願いします」

「もちろんです。ご面倒お掛けします」

では資料を取ってきましょう、とフィルガは早速取り掛かってくれるようだった。

「では、ここからここまで『暗唱』できるように覚えて下さい。出来ねば進みませんよ?」

「う……も、もちろんです！」

指定箇所は優に二十項目はある。

フィルガは薄く微笑むと席を立った。

[illegible]

【やあ・・・ディーナ。お勉強は進んでいるかな？】

カーテンが風に優しくさらわれてふうわりと持ち上がった。

風が引くとカーテンも一緒に引いてゆく。

それと同時に幼い容姿の彼が現れた。

くすくすと忍び笑いを漏らしながら、窓枠にもたれかかっている少年にディーナは目を細める。

いつの間に、とか。

いつから等とは、彼には愚問でしかないハズだった。

だからディナは何も訊かない。

当たり前のように彼の存在を受け入れる。ただそれだけ、だった。

どうしてだろう。彼を目の前にしているとその何もかもどうしても良くなってしまうのだ。

その儚い風情にほだされるのだろうか。

「トウーラ。見ていたのならあえて訊かずともわかるでしょうに」
ため息交じりでデイナーは答えた。

すぐに視線を手元に戻し、覚えこむために書き取りを再開する。術をかわすに必用な配列を敷き詰めるとは、についての術句に、術を惑わし相手に返すための配列との違いとは。

気が遠くなりそうだ。だが、やり遂げねばと思うから向き合っている。

【必要ないよ。だってディーナは全て知っているから。改めてお勉強などする必要なんてないのに。僕がついているのだから、ディーナ。僕らの愛し子。君は神殿に上がる前に決着を付けたい相手がいるはずだ。そうだろう？】

「知るわけじゃないじゃない！それに、だ……誰と」

否とは言わせない。そんな無言の脅迫にも似た彼の見透かすような眼差しに、すべてが晒されてしまう。

ディーンは首を横に振ることは出来なかった。もちろん、縦にも。

【決まっている】

逃げねば！

彼の眼差しに捕らえられる前に、という本能からの警告も空しく身体は動いちゃくれなかった。

せめて目を閉じてしまわねばとも思ったが、何もかも遅かった。すぐ目の前に、少年のまろやかな手の平がかざされている。

[illegible]

• ○
•
• : •
• * •
• : • ○
•
• : •
• * •
• : • ○
•
• : •
• * •
• : • ○
•

部屋に戻ってみればディーナの姿が見当たらない。

教科書は開きっぱなしだ。窓から入る風がページをめくって遊んでいる。

どこへ？と不審に思う間もなく同じ風に乗れ、歌声が届いた。

窓から見下ろした中庭に紅い髪。

フィルガは急いで階段を下りた。

「ディーナ！また勝手に抜けだして！」

木々に指先を添わせながら進む彼女の背に声を掛ける。

十分に咎とがを含ませた叱責に、歌声がぴたりと止んだ。その歩みも、ディーナはゆっくりと振り返ると、フィルガを見上げた。

「フィルガ殿。実践をお願いしたいわ」

自信に満ち溢れた笑顔に寒気がした。

フィルガはそれが放つ歪みに、彼女が『ディーナでは在らざる者』だと知る。

* 風に乗る歌声（後書き）

おひさしぶりでございます。

ずっと書いては消しゝの日々。

あっという間に・・・こんなに月日が経ってました！

お付き合いありがとうございました！

*** 久方の再会（前書き）**

『おひさしぶりでゴザイマス』

ディーンはどうしちゃったのでしょうか？

いつも儚げな微笑を絶やす事のなかった母。

て
い
な
い。
。

出来れば眠らせたまま、目覚めさせたくは無記憶の断片。

[illegible]

笑みは誰に向けられたものだったのか。

わせた。

ぎ止めたいと必死になつたわけが、ようやく。

フィルガはその紅い髪を見下ろしながら、目を細めた。

こちらに視線を寄こしながらも、その焦点は曖昧で揺れている。

ちも。

見ていたのだから。

の方だった。

それがどれだけ周りの人間に痛みを与えたかなど、あの人はわか

だからだ。フィルガはやっと思当たる。

ひどい。あまりに酷い事を、フィルガはディーナに要求していたのだ。

もちろん、面と向ってではない。

だからこそタチが悪い。勘のいいディーナのことだ。

はつきりと言葉に出来ないままに、感じ取っていたに違いない。だからいつまでたっても彼女は不安げにしていたのだ。

いつまでもフィルガに心許しきる事は無く、獣たちとばかり戯れたわむる彼女にひどく苛立っていた。

（それこそ……俺も母と同じではないか）

（ディーナ。すまない）

フィルガは目の前の少女に詫びたかった。直接。

[illegible]

傍らの木に手を沿わせながら、その周りをゆつたりと回りながら

ディーナの唇は歌うように呟いた。

フィルガを捕らえる眼差しもどこかここにあらずといった風情で、嫌になるくらい平素のディーナの成りからは遠い。

フィルガは舌打つ。そうだ。自分は何故ディーナを彼の女性ひとと似ているなどと本気で言っただのだろう。

どうかしている。とても、正気だったとは思えない。それはきつとディーナを苦しめたに違いない。

もう二度とするかとフィルガは固く誓った。例え口に出さずとも、心の中であつてすらもけつしてだ！

決意のまま、強く強く名を呼ぶ。声を張り上げる。

「ディーナ。戻って下さい。どうか、ディーナ！聞こえたならば返事を」

フィルガは必死に彼女の気配を追いながら、ディーナを呼び戻そうとした。

その急速に失われていく気配は、この間の脱走劇および介入の比ではない。

ディーナという意識がまるごと、闇に沈められて行くのだけは何としても阻止せねばならない。

目の前にいる紅い髪の少女は紛れも無く『ディーナ』ではある。フィルガが橋のたもとで引き寄せた花嫁。

しかし、その身の内を支配する気配が違えば見逃すわけにいかない。

しかも、その馴染み深い強烈な存在感にフィルガは怒りを覚える。それすらも通り越し、今は嫌悪感すらつのり始めていた。

「聞こえているわよ、フィルガ殿？」

くすくすと笑いながら、目の前の少女は答えたが、フィルガは良しとはしない。

「何のつもりですか！？今さら、アナタは橋の向こうに在るはずでしょう！」

「 あら。なぜ？私はディーナよ」

小首を傾げて少女の体を借りた者が、ころころと笑いながら言い切った。

明らかにからかいを含む声音は、フィルガを高みから見下ろしている。

「違います！アナタはシーラだ！」

「 なぜそう思うのかしら？紅い髪に空色の瞳のワタシなのに？」

「間違えるわけが無い！俺がディーナとシーラを間違えたりなどするものか！見くびらないで頂きたい」

木漏れ日を追いかけて、踏み歩くのを楽しんでいた爪先から、視線をようやくとフィルガに向けた眼差しを捕らえた。

対する彼女も逸らすことなくそれに答える。

「 ふん？」

「 何です！？」

「 当たり前」

にこりと彼女は笑みを見せた。それが『よくできました。』と言われているようで、フィルガは癢に障った。

「 当然です」

「 えー？だってこんなにわたくし、馴染んでるのに！ね・ね！そう思わない事？気配を上手に隠していたのよ。」

驚かせようと思つて！それが、確かに目は利くけど、気の利かない息子のせいで台無しだわ。

ゆっくり、ゆっくり、徐々に、徐々に、慎重に・・・ディーナちゃんに介入してきたのにー」

確かにとフィルガは認めるしかない。

しかし完璧にシーラは気配を消しきれていないし、ディーナを押し込んでもいないのだ。

明らかに『手加減』が見て取れる。そうした術者としては命取りである、わずかなほころびを見せてくれている。

「アナタが息子を見くびりすぎているだけの話でしょう。何が不満

「なんですか！いいかげんにして下さい！」

「そうみたいね。もうちょっと、ディーナかシーラか迷ってく
れてもいいと思うて。つまらないわ。フィルガが困った顔が見たか
ったのに」

「何しに來たんですか！？アナタと遊んでる暇は無いのです。

「ディーナには覚えこませねばならない事が山とある。さっさとお引取り願いたい」

「そうね。だから来たの。ディーナちゃんにはまだ・・・無理があると思うわ。神殿の能力者たちと渡り合うには」

吹き抜けてゆく風に目を細め、なびく髪を押さえながら弦きをする少女。

そこには憂いが見えるものの、凜とした立ち姿のように見える。

こんなにも真つ直ぐな瞳を、かつてこの人から向けられた事があつたろうか？

そう思わず記憶をたづぬ。

ディーナであつて在らずものの姿であるはずなのに、フィルガは不覚にも目を奪われていた。

[illegible]

「改めて！お久しぶりね、フィルガ」

「ディーナから除けて下さい。彼女の精神に傷が付く。まさか無理やり封じ込めていないでしょうね？」

「ディーナ！聞こえますか、ディーナ！」

「い・や・！まだ用は済んでないもの。お断りよ！」

必死で呼びかけるフィルガに、シーラはつんと澄まして答えた。その様子はとてもじゃないが、こんなに大きくなった子供にとる態度ではないと思う。

フィルガは呆れながらも根気強く訴えた。

「嫌じゃありません。ディーナはどこです？返してください」

「知らないわ。」

「白々しい。・・・ならば力づくで」

「いいの？」

「望むところです。アナタとは決着をつけねばならないと思っていたから、ちょうどいい」

まあ！と少女は目を大きく見開く。さも、今気がつきましたと言わんばかりの口調で告げる。

「ずいぶん背が伸びたわ、フィルガ！大きくなったわね。口の聞き方も態度も！」

「・・・どこくらい前と比べているのですか、アナタは無邪気に言い放つ、ディーナの身体を借りている存在に腹が立つのを止められない。」

何を今さら言い出すのやと、無然とフィルガは突っぱねた。

「提案しに来たのよ。さすがにディーナちゃん一人を神殿にやるなんて心配だから」

「アナタには関係ないでしょう」

警戒しながら冷たく答えるフィルガに怯むことなく、シィーラも根気強く訴えるのを止めなかった。

「あら。聞く気は無いの？だって・・・この子は『ディーナ』なんですもの。かわいくて無邪気な幼い子。計算高い『白孔雀』ではないの。だから反対。この子を一人で行かせてはダメ！みすみす神殿にくれてやりたくは無いから、来たの」

シィーラは胸に両手を重ねて、フィルガを見上げる。

その眼差しは真剣でフィルガに聞く気が無くとも、せめて話くらいさせると訴えていた。

フィルガは諦めたように、肩の力を抜くと腕を組んで母親を見下

ろす。

「何ですか、提案とは？」

「あのね！」

許可を得たものとシーラの表情が一気に晴れやかなものとなる。

（誰が幼い子で、誰が計算高いと？）

その屈託の無く意気込んで話し出す様子に、フィルガは苦笑するしかなかった。

* 久方の再会（後書き）

『何だかなあ、この人も』

はい、シーラ様です。

このお方も天然な上強情なお方です。

けっして、自分の調子を崩さない辺りがなんともはや。

でもお母さんですからね、優しいのです。

そこら辺は伝わってないかもしれませんが、それでいいと思っています。シーラさんです。

第十四章 * 囀る白孔雀（前書き）

『シーラは』

何をしにきたのでしょうか？

第十四章 * 轉る白孔雀

見つめあうは愛しの少女に身を借りた、かつての最愛の存在。

それは何とも皮肉だと思つた。

幼かつた頃の自分ならまだしも、自分はもうその存在には煩わしさを感じないからだ。

いくばくかの懐かしさは認めるが。

かつてその存在を神聖なものと崇めた少年は、一人の少女を愛する青年になつたのを忘れてはならない。

しかしいくら身勝手であろうとも母親は母親らしい。良くも悪くもフィルガは彼女の息子なのだ。

今、彼女の目に映っている青年はどういう形なりで映っているのかなんて、改めて問わずとも解る気がした。

だからこそ余計に、どこまでもたちが悪い。

「フィルガも一緒に神殿に行くのでしょうか？ だったら

・・・

！」

「お断りします」

「いやあねえ！ まだ何も言っていないわ」

ふんだ、とその見てくれのまま頬を膨らます様子は、実年齢を無視している。

解つてはいるが思わず微笑ましさを覚えてしまった自身にこそ、怒りを感じずにはいられないフィルガである。

なまじ可愛らしい分凶悪だと思う。誰彼構わず魅了して歩く白孔雀。

そこを肝に銘じて、いい様にされぬよう警戒を怠つてはならない。「却下します。ご心配頂かずともディーナは俺が守ります。あなたもさっさとあの方の元に戻るといい」

「 ” あの方の許可は得ているもの。それにあの方もいい考えだった褒めてくださったのよ？ ” 」

「 だから何です？ 」

誇らしげに言う姿に腹が立った。まるで彼の誉れは自分の誉れと言わんばかりの態度に、いちいち腹が立つのは嫉妬に他ならない。そのディーナの口から、他の存在を崇める言葉など聞かされたくはない。

「 フィルガが何と言おうと・・・考えようとあの方はアナタの、

” ”

「 だから！何だというのです！？」

シーラの言葉を遮って、フィルガは声を荒げていた。母親でさえがこの調子で、父親もそう大差のない存在。だとしたら自分は何者なのだろうかとも思う。

「 そうね。だったら・・・抗ってみるといいのだわ 紅雷。 ” 」

ク
ライ

紅き雷と名づけられた

フィルガの魂の名

その名を知るのは、名づけた少女と名づけられた獣だけのはずだ。

フィルガの中の血が逆流し、一気に心臓に集まったかのような激しい鼓動に瞳孔が開く。

それに屈するわけにはいかないとばかりに、胸をかきむしりながら呻いた。

どうしたって芽生える殺意に流されてなるものか、と齒を食いし
ばりながら叫ぶ。

「 何故それをアナタが知っているのです！ 」

その切つ先の射ぬくは、彼の獸の魂の在り処。
闇のとばりにく
るまれた魂の在り処。

振り払え、輝ける雷光の矢刃よ。

射掛けられた雷光という名の下に、仕留めるは彼の者の魂の在り
処。

射かけよ、闇を切り裂く雷の光。

彼の者の魂を私の物とせんがために。

[illegible]

「彼の者の魂を我が物とせんがために」

彼女の唇から紡ぎだされる詠唱の美しさに聞き惚れながらも、込みあがってくる嫌悪感は獣としての本能だ。

屈してなるものか。

何故、人の子ごときの聖句で縛られねばならない？

今すぐその忌々しい詠唱を止めてやらねば気が済まない。

それは術者の命を奪うことを意味する。

冗談じゃない！！

そんな事をしでかしてしまう位なら、大人しく聖句の徒になる方がいいに決まっている。

だがそれに素直に従ってくれる本性ではないから苦しんでいる。

それは、この愛しき紅い髪の少女のために他ならない。

その強情さを満足げに見下ろしながら、シーラは無情にも詠唱

を続けた。

「射かけよ、闇を切り裂く雷の光！」

それは挑発以外の何でもなく、どうしたって獣の本性を引きずり出される。

フィルガは己のなかで軋む筋肉の変化に必死で抗った。

せめて、という想いのためか完璧な獣身に落ちることは無かったが、今にも暴れだしそうだった。

自身の腕の浮き出た血管や、隆とした筋肉、鋭さを増した爪を見ないようにと瞳を閉じる。

『白き雷』に永久の忠誠を誓う。

オレを紅き雷と呼ぶのなら、ディーナ、アナタはオレの白き雷とする。

そう宣言した自分にすぎる。

【白雷！どこにいる、白雷！返事をしろ】

返事は無かった。

【どこだ？どこにいる・？白雷】

（紅雷・・・）

微かに届いた呼び声は幻聴かもしれないが、紅雷は素早く反応していた。

呼ばれたことに対する誇らしさと忌まわしさを同時に抱えたまま、その身に飛び掛かり押し倒す。

相変らずの跳躍力の高さが、この時ばかりは忌々しかった。

ほんの一蹴りで距離を縮め、気が付けば少女の身を地面に押さえつけていた。

背を強かに打ち付けたとあって、呼吸すらままならなかったらし

フィルガとて心得ている。

己が成りこそは人ではあるが、存在自体は『獣』ということくらいイヤと言うほど知っている。

知っているが見たくない事実だ。

力一杯押し倒してしまった身体を抱き起こし、頭についた葉っぱを払ってやる。

「フィルガ！アナタもわたくし達と同じなのよ。それを認めたアナタでいて欲しい。」

恥じることもなく、ましてや嫌悪を抱きながらなどではなく。そうでなければ思うまま力を発揮できないわ。

その迷いが枷となり、つくべき隙とあの人たちには映るだろうか
「」

「俺は何者なのですか？」

「」自分では何とと思っているの？」

「量りかねるから実の母親に尋ねているのです」

「」決まっているじゃない！そんなの。ふふふ」

「何です？」

「」言われないとわからないの？嫌ね。ディーナにでも聞いてみる
といいわ。彼女ならちゃんと答えてくれるでしょうから」

困った子ね、と笑われてフィルガは何とも居心地が悪かった。

「そう思うのなら早い所お引取り下さい。いい加減、ディーナを戻して・・・何がそんなにおかしいのですか？」

シーラはくすくすと笑いながら、そんなフィルガを見つめていた。

ふてくされたように、ぶっきらぼうな口調で尋ねられても気にも止まらないらしい。

「」だってね！危険だと思って心配もしているけどね、少し懐かしいなと思ってね！」

「懐かしい？何をのん気な」

無邪気に続ける母親に、フィルガはゲンナリしていた。そもそもこの人に場の空気を読み、などと要求する方がおかしいのだ。

彼女はいつだって、自身の良い様に空気を変えてしまう。おかげで周りを見渡して見れば、いようにされてしまった者達が今もシーラを待ち侘びている。

その魅了したままの手綱、橋渡る前に手放してやればいいものを。獣たちに加えて神殿仕えのあの男が浮かんだ。

ヒゲ面のギルムードとかいう男は、子供の一人や二人いてもおかしくない年だ。

それでも未だ独り身でシーラの影を追い続けている。

おそらくフィルガの目に入らないだけで、まだまだ被害者がいるに違いない。

「あら。わたくしだって神殿に呼ばれて、不安は無かったわけじゃないのよ」

「ああ。そうですか。」

「もう！本当だったら！可愛くないわね　フィルガ。不安がるわたくしにあの方はずっと寄り添っていてくれたのよ」

「お惚気ですか。息子相手に」

「いいからお聞きなさいな。あの頃のわたくしは『契約に従って』まだ記憶が曖昧だったの。

自分の存在に自信が持てなかったから、危うかったと思う。だから言い切れる。ディーナを一人で神殿にやってはダメ！

揺らぎの無い自分自身を確立できないまま、あそこに赴くのは危険だわ。

色々な思惑が渦巻くあそこはね、自分というものがなければ他者の思いに染め上げられてしまう。

正義と言う名の下にね。それがさも、己自信で導き出したかのような答えだと錯覚してしまうほどに、巧妙なのよ」

「謝らなくともいいですよ」

「だって、フィルガ殿の様子が尋常じゃないのですもの」

ディーナはその唇に手を伸ばしていた。気がつけば触れている。

「アナタは戻ってきてくれた。だから大丈夫ですよ」

戻る？自分はどこに意識を飛ばしていたのだろう。その間に何があつたのだろうか。

フィルガの縋るような、安堵に満ちた瞳の光が柔らかい。それが、嬉しくて苦しくなった。

「うん。はい。ただいま」

内心の苦しさを押しやって、ディーナは精一杯微笑んで見せた。

第十四章 * 轉る白孔雀（後書き）

『ただノロケに来たのか』

フィルガにしてみたらそんなところでしよう。

何て事は無い。ちよっかい出しにきただけです。

しょうもない。

そんな事は無く、フィルガに課題を突きつけに来ました。

シーラさんはこれから出しゃばってくるでしょう。

*** 身代りの器（前書き）**

自分の想いを処理しきれないままで、前に進めるものか。

いや？それすらも抱えて進むのがいいと思いますが。

* 身代りの器

この身の在り方を

誰に割り振られたのかなどと

何故、気に病まなければならないの？

・：・＊：・：・。・：・：・。・：・＊：・：・。・：・＊：・：・。・：・＊：・：・。
＊：・：・。・：・＊：・：・。＊：・：・。・：・＊：・：・。・：・＊：・：・。・

ディーナは一人庭園に佇んでいた。

ジャスリート家には小さな池がある。そこに腰下ろし、覗き込む。背に春の日差しを受けながらのぼんやりは、何とも言えず心地よい。

それでもこの深い部分だけは、なかなか暖まってはくれない気がした。

それでもどうにか幾らかは、心を占める空しさを埋めてくれなからうかと願う。

水辺に指先を浸した。

ディーナは水が好きだ。触れていると何とも言えず、楽しい気分になる。

そんなディーナにフィルガは最初のうちこそ、躍起になって止めに入っていた。必ず衣服を水浸しにするからだ。

最近は諦めたのか、ディーナが遊びを堪能した後でやんわりと止めに来るようになった。

指先に伝わる水の感触の冷たさが、どうにかディーナを今ここに居るのだと教えてくれている。

ここ最近の意識の飛びようは何なのだろう。

神殿の書状を受け取ってから、徐々にその頻度も多くなった気がする。

最初は緊張の余り意識を呆けさせてしまったのかと思っていたが、どうやら違つと見た方がいいのだろう。

逸らせない真実に気が付き始めている自分に叫びだしたくなる。

先ほどのフィルガの様子を見ると何かがあつたと推測して当然だろうに。

それなのにフィルガと来たら相変らず、言葉を濁してあいまいな事を言うばかりなのだ。

何だつていうのだろう。

自分を見る、あの瞳。

あれは憐れみだと思う。

なんなのだ、一体。

これから神殿に上がる無力な小娘の行く末を案じてのものなのだろうか？

それとも……？

釈然としない。

フィルガは何かを隠している。それを思うと胸が軋む。

そう。フィルガはいつだって肝心な事は何ひとつ、言っではくれない。

自分の胸一つで収めようとする。

やめて欲しい。確かに自分は頼りないかもしれないが、ディーナだつて当事者なのだから知る必要がある。

権利があると主張する。

ルゼやフィルガの言い回しを真似るなら、そうなる。

でも聞くのが怖くて、黙ってしまうディーナ自身にも問題があるのだ。

そのことに気が付いている。

じゃあ訊いてみたら良い。ただそれだけの話だ。自分は何をためらっているのだろう。

このままこうして水遊びをしても、本当に心が晴れることは無いのに気が付いているのならそうすれば良い。

（フィルガ殿は何をわたしに隠しているの？）

隠し立てする彼を責めているようでその言い方は少し違う気がした。

彼が言い淀むときは、彼にとっての不都合ではない事に薄々ディーナも勘付いている。

聞いたら確実にディーナが取り乱すだろうから、濁すのだ。

それを思うと胸が騒ぐのは何故だろう。

その事にもディーナは戸惑いを隠せなかった。

深く身を乗り出して水面を覗き込むと、波紋が広がった。

雨。

にわか雨だと思う。

ぽつ、と一滴天から降り注いだ。

あの遙か彼方からディーナの元へと届いたのかと、天を仰いだ。

よくぞここまで。素直にそう思う。

よくよく目を凝らして天を見つめ上げる。

それでも澄み切った空には、雨雲らしきものは見当たらなかった。

ひとつ、瞬くとまた雫が頬を伝った。

ああ。何てことは無い。雨雲がよぎったのは他でもない自分の空色の瞳だったのかと思い苦笑する。

確かめるように自身の指先を水面から引き上げて、触れてみた。

確かに濡れているが、自分の指先が濡らしたのかかもしれないと往

生際悪く考えてみる。

目蓋を閉じて、熱いものを押し留めようと思う。それなのに。
ディーナは眉根を寄せた。

対するフィルガの、曇天を思わせる瞳を思う自分がいたからだ。
彼の瞳はいつだってディーナの青空に影を落とすのだから、と恨み言すら浮かんでくる。

それでいて、あの眼差しに光射すといいとも願っている。願っている！

ディーナはこれ以上瞳を閉じているのもままならなく、もどかしい想いを抱いたまま再び光を見た。

願いを胸に秘めたまま、覗き込む水面に映るのは誰だろう。
ふとそんな気がした。

自分はただの器でしかないのだろうか。

それは予感と言うよりも、確信に変わりつつあった。

情けない虚ろな表情は、自身のあり方に確証が持てず不安そうだ。
そのはずだ。

だが、水面の中の自分はうつすらと微笑んでいる。

それこそ驚いて身を乗り出して覗き込んだ。

揺れる水面が見せた幻惑なのだろうか。

それとも？

ディーナは弾かれたように浸していた指先を引き上げた。

このまま指先を水中に引きずり込まれてしまいそうな恐怖感に慄く。

そうして入れ替わったが最後、自分はきつと意識の深くに沈み込められてしまうかもしれない。

そう思ったら涙が溢れた。

（シーラ。あなたはどこにいるの？今、ここにいるのではないの？）

こことは、ディーナ自身の内面を指す。

この胸の内。ディーナは濡れた手のまま、構わずに胸元を押さえ込んだ。

痛い。

それが答えなのかと思うと、また痛みが増す。

自分はこちら側に何らかの理由で留まれなくなったシーラという存在の器になるために呼ばれたんではなからうか。

身代わりですらなく。

それはそうだとしたら、何とも言えず残酷な事実だ。

ディーナは浅く忙しく呼吸を繰り返しながら、瞳を閉じた。

（もう、たくさんだ）

こうやってただ佇んでいるのも、何も訊けずに何も答えてもらえないまま、存在をあやふやにしたままにいるなんて。

（もう、たくさんだ！）

唇を強く噛み締める。

「ダグレス」

低く小さくわななく唇が、獣の名を呼ぶ。

” お呼びでしょうか、嬢様 ”

「ええ。ダグレス、お願い。私をまた連れて行って欲しいの。あの橋へと」

” 御安い御用でございます、嬢様 ”

獣はうやうやしく、前脚を折ると頭を垂れた。

・ ・ ・ ・ ・
* ・ ・ ・ ・ * ・ ・ ・ ・ * ・ ・ ・ ・ * ・ ・ ・ ・ *
・ ・ ・ ・ ・

この橋を渡る。

向ってくる、時には背を押してくれる風と共に渡る。

霧と共にだったら、やはりもつと容易く思い出せそうな気がする。

瞳を伏せがちにして、自身の爪先を見た。

この爪先すら見えぬほどの深い霧を望むが叶わない。
ならば仕方が無い。

ディーナは再び橋へと一步を踏み出していた。
後ろからはダグレスが、注意深く付き添ってくれているから安心できる。

日の光を浴びながら、ディーナ自身がまとった霧をふり払いたま
えと願いを込めつつ進んだ。

迷いという名の霧を晴らして、自分はどこへ向おうとしているの
だろうか。

霧のようなつかみどころの無い、不安の正体は何か見極めたい。
そう思ったが、少々違うようだ。

まずはソレをしかと見据える勇気が欲しい。
事実をありのまま受け止める自分でありたい。

そうでなければ自分が何故橋を渡ってきたのか、思い出してもき
つと意味が無い。

そう思える。今なら。

思い出さずとも、ディーナはディーナだという訴えを取り下げる
気は無い。

そもそも、フィルガが悪いのだ。

何も教えずに済まそうとする、取り澄ました態度を崩さない彼が
悪い。

本当は一番、一番！取り乱しているくせに、と怒鳴ってやればよ
かった。

こんな所に着てまで、八つ当たりだ。

（紅雷。どこ？会いたいよ）

自分が領域を侵して、危険を犯せば必ず彼は着てくれる。
そう踏んでいる。

これは賭けだ。
着てくれなければ、ディーナ自身このまま神殿に向ってやろうと
すら考えている。

もうたくさんだから。何もかもが！

橋を渡れば結界とやらの領域に触れる。それはフィルガをも刺激
するだろう。

彼は今度はどう出るだろうか。底意地悪い気持ちで、ディーナは
見ものだと思った。

それもある。だが、それ以外にも気になる点があった。

あの時、橋を渡るうとしたとき。
行くな、と強く呼びかける声があったからディーナは振り返った
のだった。

あの時の意志の現れの主は、どう考えたって銀の彼でしかない。
ディーナに名乗らずに、でも必死で呼び止めてくれたあの方。
一目見てその場で彼を特別だと思った。

なのに。名乗らず答えず、彼はディーナのもとから立ち去ってし
まった。

紅雷。クライ、クライ、クライ。

私の紅い雷はどこかしら？

さきほどだってそうだ。

微かに彼の気配がした。だから、ディーナは戻ってこれたと確証
している。

それなのに、目覚めてみれば彼の姿はどこにもない。
代わりには何だが、心配そうに覗き込むフィルガの眼差しがあった。

（ひどいよ、ずるいよ。自ら呼んでおいて、自分は返事もしてくれない、なんて）

ディーナは、まずはそこら辺をはっきりさせたいと思っている。

紅雷。返事をしてちょうだいよ。

そのためにもまずは、彼を引っ張り出さねばなるまい。
話はそれからだ。

彼もきつと懐かしの風を孕み持つ者、縁の者だ。

・：*：・：・：・：・：*：・：・：*：・：・：・：・：*：・：・：・：・：
：・：・：：・：・：*：・：・：*：・：・：*：・：・：・：・：・

そんな意気込みに胸を震わせながら進む。

橋の作りは弧を描く形のため、中央に来るまでそのむこうがわは見えにくい。

まるで空に向かって歩いているかのような、そんな錯覚にすら足元を取られそうになる。

ただ、ただ進んだ。

妙なこの胸の高鳴りは、期待感から来るものなのか。

それとも、よからぬ予感から来るものなのかは図れない。

一步一步、進むたび鼓動もまた早まるのを止められない。

橋の中央まで勢い任せでたどり着いて、それからディーナの足はぴたりと止まった。

その背中を見せる人物に、息を飲んで見守る。

【やあ、ディーナ。どこへ行くとうとうんだい？ボクは言ったはずだけど、もしかして忘れたの？】

ディーナが声をかけるよりも早く、彼は振り返った。

「トウーラ」

トウーラ・ファーガ・ジャスリート。

かつてそう名乗った少年が、そこには居た。

右肩に孔雀を止まらせて、孔雀共々咎めるような視線を送ってくる。

* 身代りの器（後書き）

『前向きなんだか・後ろ向き何だか』

ディーナの不完全燃焼をどうにかしてあげたい。

それから本当の意味で立ち向かえたらいいな、と思います。

何にだ。まずはそこを見極めない事にはね、の章です。

仲違いしてる場合じゃないですから、最終章は。

と、いつでもまだまだ先ですが。

お付き合いありがとうございます！

*** 種明しの時（前書き）**

月日というのは、おかしいくらいに早いものですね。

おかしい。こんなに間あけてましたか！？

すみません。

種明しの時

いよいよ、種明かしの時がきた。

ただ、それだけだよ

[illegible]

【そうだよ。勝手してもらっては困るな。いくら記憶を差し出し
ているとはいえ、ね？】

差し伸べた左腕に誘った、孔雀を肩に導く。孔雀がこちらを見つめる。ツウオランだ。

しかし様子がおかしいのは明らかだった。

おしゃべりで人懐っこいゾウオランが、ただの置物と代わりが無いほど大人しい。

意識は丸ごと奪われ、トウーラの目としての機能を働かさせられているようだ。

（ツウオラン、大丈夫？返事をして！）

声には出さず呼び、今はガラス玉のような眼を見た。

返事は無い。

その瞳が映すのは虚無だ。

ディーナはその眇められた眼差しに畏怖を感じ取った。しかも少年と孔雀、両方の。

トゥーラは自身の瞳だけではなく、孔雀の眼差しを介してもディナを責めているようだ。

それは直接、自分に害なすものではなかったが、底知れぬものを感じずにはいられない。

トゥーラが一步踏み込んだ。

彼のまとうローブの裾の刺繍、波に似せた模様が打ち寄せるかのように見せる。

ディナは後退しそうになる足をその場に踏み留めた。

これ以上、下がってはならない。フィルガ流に言うのなら、己が領域とやらを守るために。

しかし、微々たる小波さざなみでも、ディナを侵食しようとする気迫に満ちている。

正直、自分の無力さに逃げ出したい。

それでも踏み止まれているのは、ディナを庇って前に一步踏み出した、ダグレスの存在を心強く思ったおかげだ。

そんな自分はやはり卑怯だ。苦笑するというより苦々しさで口元が歪んだ。

「勝手？何を言っているのか解らないわ。私はディナ。ただそれだけ。その存在の価値など意図など、他人に決められたくなど無いわ！」

【言うね。ただの僕の・・・クセに】
「な、何？」

不覚にもその底冷えしたかのような眼差しに竦む。

ほんの一瞥いちへつ、くれられただけだったというのに。

時間で計るまでもない、ほんの数瞬またたく間だった。

トゥーラはすぐさま孔雀へと眼差しを向けている。

その幼く、か弱いともとれる表情の中で、眼差しだけが以上に鋭い。

いや。それだけではない。

彼の異質さが際立つのはそのまとう雰囲気も上げられる。

彼の周りだけひどく・・・ひどく静かなのだ。

静まり返っている。

何一つさざめかない湖面に臨んだかのような畏怖を覚えた。

そこに潜むはずの、命の気配がまるで感じられないから。

今さらながら、トゥーラの視線によく耐えられていたものだと思
い当たる。

彼自身も気取られぬようにとの配慮もあつたお陰かもしれないが、
こつもひたすらに己の在り様をつぶさに見逃すまいとする視線など
他に例えようも無いではないか。

慈しみ、哀愁を込めて見つめるルゼとも、何らかの期待に満ち満
ちた視線寄こすフィルガとも違う。

それこそ、天と地ほどに！

（フィルガ殿、ごめんなさい）

心の中でひっそりと祈るように、詫びる。

瞳を一瞬だけ伏せると目の裏に浮かぶのは、冬空の曇天の色彩だ
った。

それはディーナを包み込んで鈍く深く輝く。

（でも、もう引けはしない。確かめたいから。真実を知って確実な
ものにしたいから、フィルガ殿）

” トウーラよ。何のつもりだ。そこを避ける。嬢様が橋の向こうへと渡りをご希望だ”

【いいの、ダグレス？また君は手綱を・・・こちら側に留まるためのいかりを失って、さ迷うはめになってもさ】

” 我はそうはならない”

ダグレスは凜と言い放った。

顎をそびやかす少年に、対する黒い獣は顎を引いた。しかし脚は引かない。

一角の先が少年へと向けられる。

【何を根拠に言いきるのさ！僕は反対だ、デイナー。君は一生ジャスリート家の領域から出るべきではない。一歩たりともね。だから、行かせやしないよ】

「何故？一生ってそんな」

【決まっている。むざむざ僕の最高作品を人に 神殿の術者^{バカ}共にいい様にされるなんてガマンがならない！僕の血を受け継ぐ者にならまだしも】

（最高作品？）

先程、聞き取れなかった部分はきつとそこだ。

トウーラは何を言っているのだろう？

耳を疑うというよりも、その身勝手極まりない発言にその性根を、正気を疑う。

「そこをどいてちょうだい、トウーラ！私は自由よ。どこへだって好きなように行くわ」

【なぜ？】

ふいに可愛らしく小首を傾げて、少年は問うた。

「何故って！」

訊きたいのはこちらの方だ、とばかりにディーナはトゥーラを睨んだ。

【君の行きたい場所はフィルガの側だったはずだ】

きつぱりと少年は言い切った。

【それすらも記憶に無いのは解るけど、深いところでは覚えてはいるだろう？ねえ、ディ・ルーマ？】

「ディ・？何？私はディーナでしょう」

【ああ。そうだ。君は自分の名を忘れかけて、それでも必死でしがみ付いたんだ。だから、歪んでしまった。混乱して少しばかり名を取りこぼしたとしても責められない。しかし、君が真に大事にした名はどちらであつたかな？君が彼から唯一授けられた大切な名は？】

また、だ。

のがれたいと願うのに、身体が動かない。

まばたきすら封じられたディーナの眼前に、トゥーラの手が迫った。

嬢様？やめろ、トゥーラ！もう、嬢様の好きにさせてやれぬのか

そんなダグレスの叫び声が遠くで鳴り響く。

橋を吹き抜ける風が今日は凪いでいる。

掛け付けた時は既に遅く、フィルガは最悪の結果を覚悟したと言ってもいい。

薄淡い空色の瞳に、色素の薄い金の髪の未だ幼さの抜け切らない少年。

左肩には孔雀を止まらせ、右手には闇色の獣をはべらせ、彼は微笑んだ。

ただし、彼女の焦がれるはずの銀の獣を前にしても何の反応も示さないが。

それはディーナであって、ディーナではない。

また意識を追いやられたのは目に見えて明らかだった。

日を置かずにこうも意思を奪われては、ディーナの精神に傷が付く。

術者としてそう冷静に見立てる。

そんな自分が厭いとわしかった。

その思考を振り切るためにも、声を張り上げる。

恐怖に囚われてはならない。

【ディーナ!!返事を、どうか!白雷っ!ダグレス、貴様が付いて

いながら】

” オマエに言われる筋合いはない”

静かに黒い獣は答える。

その紅い眼がたぎる様に輝く。

彼とて怒っている。トゥーラのやり方に。

（では、何故？）

大人しく控えて、トゥーラの邪魔をしないのだろう。

その真意を量るために真向かうべきは、獣ではなく少年の方だろう。

フィルガは視線を移し、睨み据えた。

少年は満足そうに顎をそびやかして、目を細めて見下ろしている。

【よく来たね。紅の名を持つ、銀の君。もっと遅いかと思ったのに。その跳躍力は誰かさん譲りだものね。感謝する事だ】

トゥーラのからかうような口調で皮肉を言われても、それに反応する余裕など無かった。

【さあ、術者対決と行こうじゃないか。準備はいいかい、フィルガ？】

答えを待たずして、一步踏み出したのは少女のつま先だった。

* 種明しの時（後書き）

『いいかげんにさあ・・・しなよ?』

トウーラ風。

おおおおお久しぶりでございます。

清しいほどアクセス数はござっぱりとしたものですが、何気に書く気は投げてません。

そんなこんなの「あの橋」にお付き合いありがとうございます！

そろそろ種明しです。

なんのこっちゃ?でしょうが。

実はそのキャラに「なりきって」かけるのは「トウーラ」と「ダグレス」と「ルゼ」であります。

他キャラとは対話しつつ話を進める感覚に近いです。

この三名の共通するものはなんだろうかと自問自答。

早く、橋（物語）のむこうに行きたいです。

*** 混濁する記憶（前書き）**

それぞれの時と想いが交錯するのは、橋特有の現象です。

何せ『むこう側』と『こちら側』との架け橋ですから。

＊ 混濁する記憶

風が橋を渡ってくる。

それと共に渡つてきた幼い子がいた。

それこそ、幼い精神で抱えきれない想いと共に。

[illegible]

笑みとも苦痛とも取れる形に歪む唇に、虚ろな眼差しの少女が二歩踏み込んだ。

すらと右手を頭上高くに持ち上げた後、銀の獣へと指し伸ばされる。

美しく優雅な舞にも似た一振り。

(来る！)

フィルガは構えた。

これは術者特有の型。詠唱に入る前に獲物を定めた合図なのだ。

左手は少年の右手に繋ぎめられたままだった。

あの右手をふり払う気力も意思も殺がれたディーナは、間違いないくトウーラの木偶人形だった。

右手から彼の蓄えた獣を従える知識すべてを授けられる事だろう。
(こつも短い期間で二度も己を追い遣られたら、彼女の魂はどうなる！？)

【誰と誰の対決と言った、トゥーラー！】

思わず半歩下がり、フィルガは叫ぶ。
焦燥と拭いきれない最悪の可能性に胸が押しやられないためにも、
全力で吠えた。

獣の彼の魂の叫びは、人語では無かった。
そんな風に普段は囚われている嫌悪感すらも、今は忘れた。

【決まっている。これは僕の作品だ。だから、当然だろう？】

好きに扱ってもと、恐らくは続けられようとした術者らしい意見を封じる。

みなまで言わせてなるものか！

【ふふふ】

【何がおかしい！】

【だって。滑稽だからさ。君だってかつてこの子を同じようにしたじゃないか】

しばらく笑いを収めることなく、トゥーラは笑い続けた。
無邪気な仕草がかえって彼の残虐さを暗に示しているようなものだ。

フィルガは叫び返す。

【まさか！】

頭を振る銀の獣の前に、笑いはぴたりと止まった。底冷えした眼差しが、まっすぐにフィルガを射抜く。

【覚えていないんだね。いいや？ 思い当たらないだけか。覚えが無
いとは言わせない】

[illegible]

言っ
た
ら
う
？
僕
は
術
者
だ。

自分の作品には最大限の敬意を払う。この子には復讐させてあげているのだ。

かつて無残にも使い捨てにした術者に、おしおきの機会をと僕は待っていた。

[illegible]

【契約の花嫁としてその身を作り変えれば、間違ひなく彼の側にいられるようになる】

そう囁いてやったのさ。そうしたら、後はご覧の通り。

おどけたように言いながら、トゥーラは両手を大きく開いた。

それでも右手はしっかりとディーナの手を掴んだまま、放そうとしない。

【純粹なこの子は何ひとつ疑わなかった。その頃の知性はとても・・
・幼かったからね。今は見違えるようだよ！見てきたらう？この子

の学習能力の高さを！】

相変らずの舞台役者さながらの魅せ付ける演説に、フィルガは耳を傾けるより他は無い。

つぶさに逃さず、そこに散りばめているであろう『真実』にこそ彼の真意がある。

見逃してはならない。

これは対決だ。

まちがい無く。

だがそれは己が自身に向き合うといった点においてだ。

フィルガとて気がついていて。

トウーラが終焉を望んでいることくらい、もっともっと幼い頃から知っている。

（それでも終われない役目を演じ続けるのは何か理由があるのだろうか）

トウーラは幕引きを望んでいながらも、自分の望む終焉にならない限り、幾度も幕を上げて来たに違いない。

それは気の遠くなるような歳月であり、孤独に他ならない。

獣を側にはべらせるまでに至った、ジャスリート家屈指の術者。

彼に人であった時の記憶や想いは残っているのだろうか。

それとも、それしか残っていないのかもしれない。

ジャスリート家から術者として神殿に上がったかつての日々を、

彼は悔やんでいるからさ迷っている。

歴代の年表に彼の命日が刻まれてから、百年を優に超えた今も。

【それでも。幼いながらも一途に駆けて来た気持ちがあったのは確かだ。人はそれを何と呼ぶのだろう？】

ねえ？と小首を傾げると、ディーナも同じようにしてフィルガに見せる。

少年の言葉はもはや独白に近い気がした。

そうする事で彼自身の記憶を整理しつつ、縋っているのかもしれない。

フィルガにはトゥーラの質問には答えられなかった。

何の事を言っているのか、よく掴めない。

【ダグレス。最悪の場合、オマエが俺を止める】

これから間もなく。

ディーナの口から紡ぎ出されるであろう甘美なる調べは、自分からフィルガという人格を奪うだろう。

そうなった場合ケモノはどう出るのか、予測も付かないのだ。だから託した。

ダグレスならば完全に銀の獣に対抗しうる。

ダグレスは静かに紅い眼を煌かせ、答える代わりに大きく己の一角を振り上げた。

それが合図となる。

ディーナの唇がつつすらと開き、真っ白い歯が覗いた。

『我、ディ・ルーマ・ジャスリートが、眼前に伏す銀の獣こと紅雷よりも高みに立つ』

僕はそこに付け込んだ一術者に過ぎない。

シーラモディーナも何もかも！

多分、その想いは僕のいとし子へと変貌を遂げた対象たちと同じ感情だろうな？

•
•
•
✱
•
○
•
✱
•
•
○
•
✱
•
○

•
•
✱
•
•
○
•
✱
•
○

•
•
✱
•
•
○
•
✱
•
○

•
•
✱
•
•
○

彼は恐れているのかもしれない。

わかつている、とはいくら口にしてはいても実際そう恨み言を耳にするのが怖いのだ。

嫌われたくは無いからだろうか。

彼こそ、苦しんでいると思う。

愛しい守るべき対象としながらも、その研究への熱意として傾けるべき情熱を注ぎ、そのあり方を変貌させた己を罪と捉えているのかも知れない。

トウーラ。

わたし、怒ってなんていない。

恨んでもいない。

ただ、感謝しているわ。

そう心の中で呟いたのは、隠しようも無い本心だった。

全くもってこれだから、君たちはタチが悪いんだよ！

（全くもってこれだから、主らはタチが悪いのお）

人にあらずのくせに、お人好しと表現する以外ないってどういう事だよ！

（人にはあらずのくせに、人よりわしの心に寄りそうなかれや・・・頼むからの？）

トウーラ・ファীগ・ジャスリート！

おじいさま！

少年の声と老人の声が被って聞こえた事で、ディーナはようやく覚醒した。

いくつもの小鈴をまとめて震わせたかのような声が、老人の輪郭に語り掛けていた。

叱責にも取れるが、その響きは優しい。

「ほ、ほ！わしはそうか！とうに、とうに滅んでおったのか？そんな事はどうでもよい。なあ、シーラや？」

。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。
。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。
。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。　。

（シーラ？）

今、確かにトゥーラはそう呼びかけた。
ディーナだけではなく。

（いるのね？）

何故か答えたのはディーナの鼓動の方だった。

* 混濁する記憶（後書き）

『僕はもういい加減に終わらせたい。』

トゥーラ談。

はい！ワタシもです！

お付き合いありがとうございます。

そんなワケでしょうか。トゥーラが話してくれる感じです。やっと。

ここが（小）山場だから、乗り越えたらちよつとはディーナ『楽』になるはず。

その後、ちよつと遊びに来てくれる子達がいるから！

そんな時間軸です。

*** 仇為す信念（前書き）**

申し訳ございません
！

仇為す信念

ボクは夢見た。

それが現実のものとなると強く、強く確信していたよ。

疑いもしないで、目を明けたまま夢を見続けていたんだ。

[illegible]

シーラが尻尾をふさふさと左右に振っているらしい。

視界を豊かな毛並がよぎった。

トウーラとシーラはジャスリート家の書庫で、何やら話し込んでいる最中のようだ。

二人ともディーナの覚えある姿ではないが、むしろこの今見ている姿こそが本来なのだろうと思えた。

尻尾をふる純白の毛並は、何の汚れもないように見える。

耳の先を飾りのように縁取る長い毛も、一緒に揺れている。

狼のようなしなやかな筋肉がその優美な毛並の下に潜んでいるに違いないが、そんな事は微塵も感じさせない。

(……紅雷に形かたが似ている)

そう思い当たって、より一層の賛美をシーラであろう獣に送った。

視線だけなら存在を許されているのか。

介入は許されているのか、いないのか。ディーナには解らなかった。

今この状況に説明などつかない。

ただ自分よりも遥かに高みから見下ろすような、大いなる意思もつものに委ねる他はない。

シーラは、トゥーラは、ディーナという意味持つ者の存在に気がつきもしないだろう。

だが覚えた素直な感情を、賞賛という形にして送らずにはいられない。

たとえそ思いが報われる事が無かるうとも構わない。

届かないからといってその想いを無碍にするなど、自分の胸が痛むだけだとディーナはいつの間にか学んでたようだ。

いつ何時であろうとも、己の心に素直に従えたら心は傷んだりしない。

何故かしら、あの深く沈みかけた銀の瞳に見られている気がした。ずくりと大げさではなく、刃物で抉られた気がした。

宥めようがないが、どうにか収めようとは思ったので声にならな
いまま訴えた。

ならば私と共に在ればいい。

そうして私と同じものを見て、感ずればいい。

訴えに納得したのか、胸の疼きは止んでくれた。

ディーナは改めて視線をあちこちに廻らせて、それから語り合う二名をしっかりと見据えた。

[illegible]

この綺麗な綺麗な獣の姿が、紛れもなくシーラの姿だ。
ディーナは心から感心していた。

獸は美しく、優美で、人の心の機微に添う。

人と何一つ変わる所などない、稀有な存在なのだと思わせてくれる白い獣に魅せられずにいられるわけが無い。

そして。

しわしわの手を難儀そうに動かしながら、しわがれた声で説明するのがトウーラだ。

手だけではない。

その首筋も、その着衣から覗く腕も、何もかも。

その余すところ無く見せている肌はたわみ、幾重にもしわ寄せている。

それだけではない。

所々に老人特有のシミが大きく浮き出て、その美觀を損なっている。

人の見てくれなどに留めたことなど無かったが、なまじ彼を若き頃から知るだけにその衰えように畏怖なるものすら禁じえない。

人とは老いる生き物なのだ。

眉間に深く刻まれたシワが彼の苦悩の日々の証であり、口唇を引

き下げるほどのシワも同じくそれを訴えてくる。

眼窩におちくぼんだ瞳だけが爛々と輝き、彼の志だけが未だに生き長らえているのだと物語っていた。

ディーナは意識の中だけで、賞賛といくばくかの哀しみを混ぜて息を吐いた。

『だからどうかな？ シーラにしてみたら、ほんの短い間じゃろ。その少しの間だけ人として生きてみるのも悪くはないと思うよ』

トウーラは獣たちの間でも有名で、長とも親交があったから一目置かれていたのだ。

それなのに結局はトウーラは獣たちを裏切るような真似をしてしまった。

それを悔やみ、とうに肉体が減びた今もこうしてさ迷っているらしかった。

シーラはそれを心配してこうして迎えに来たのだ。

もう済んだ事だから一緒にあちら側で過ごしましうよ、と。

それなのにシーラの思いを他所に、トウーラときたら未だに諦める様子が無いのは明らかだった。

『シーラも見ていてくれ。きつと人間と獣たち、お互いを思いやりながら共存できるようにしてみせる。だからボクは神殿に上がるよ』

かつて希望に満ちた目で、シーラに優しく語りかけた青年の成れの果て。

肉体がとうに滅びた今、その晩年の姿に固執する事も無いのに彼はそのまま留まっている。

それは己自身を罰しているからのように、ディーナには見えた。

シーラも同じ気持ちなのだろう。

同調したせいか、目線はシーラと同じになったようだ。

椅子に腰掛けた彼を見上げる。

トウーラは今なお諦めてはおらず、希望も捨ててはいなかった。
夢見るように語る彼は、あの日の彼のままであるとシーラは嬉しくも悲しくも思っていた。

『きっと、お互いの素晴らしさを解り合える日が来るからね』

彼はそんな夢みたいな事を本気で信じていた。

疑う余地なぞ持たず、他者の思惑ですら彼の信念を犯すことは無かった。

彼は夢見るように生きていたのだと思う。

いつも子供のように無邪気で、素直だった。

だからこそ、獣たちも心をたやすく許し預けたのだ。

生まれ付いての獣使い。

そんな呼び名もあったが、彼にしてみたら侮辱にも等しかった。

獣を使うなどという考えが、彼にはそもそも存在しなかったのだから当然だった。

だが、人は彼をそう見なかったのだ。

神殿に上がった彼は、抜け殻のようになって帰ってきた。
そのまま、間をおかず一生を終える。

虚ろな気持ちを抱えたままの彼は、その空白の想いを埋めるべく研究を続けてしまう。

もう彼に昼も夜もない。

食事も睡眠もいらない。

何も必要としないのだ。

あるのは想いという信念だけ。

彼が欲するのは自身の目指した世界の実現と、そうすることによって償いたいという願い。

誰がこの状況を見ても、きつと同じ判断を下すに違いない。

願いが深くその御魂にまで食い込んだために、想いが成就されるまで解放は無いようだ　と。

このままではトゥーラの存在自体が壊れる。

壊れるだけならまだしも、人も獣も構わず深く仇を為す存在に成り果てるやもしれない。

これ以上、彼を貶めてなるものか。

考えをそう導き出したのは、シーラだけではないはずだ。

シーラは頷いていた。

ディーナだってそうしていただろう。

透明な存在のまま、一緒に頷いていた。

『いいわ。わたくしも素敵だと思う。人とわたくし達が上手く生きて行けるって事を、トゥーラにも見せてあげられると思うの』

最初は同情しての言葉だったが、実際そう言葉にしてみるとそれはひどく尊い試みだとシーラにも思えてきた。

きつと、彼の熱意に心が動かされたからではなかるうかと思う。

トウーラは満面の笑みを浮べていた。

感激のあまり、両手を広げて敬愛して止まない獣を腕かいなに導く。

その笑顔は、あの希望に満ちた若き日と何の変わりも無かった。

* 仇為す信念（後書き）

『おおよそ三千文字数なのに』

なんでこれこんなに時間が掛かるのか。

書けば書くほど深みにはまって霧の中。

くっそう。罨か？ 罨なのか？

それでもお付き合い ありがとうございます~~~~~!!

連続投稿行きますよ！

（最初から、やれって？ 不思議と寝かせないと動かないのは何故ですか。）

「私の赤ちゃんよ」

ひっそりとしめやかに かつ巖かに、巫女として上がったか
つての少女が告げた。

少女はもうじき母になる。

今その表情は満ち足りた優しいもので、それが何かと表現する術
は持たなかったが、尋ねた子の胸も満ちたものがあるのは確かだ。

” ” あかちゃん？ あの、ちいさくてふにゃふにゃしてる、で
も大きな声で泣くあの生き物？” ”

ちよっぴり苦手そうに耳を伏せた幼獣に、シーラは笑った。

すでに慈愛に満ちた母のような微笑に言いようも無い温かさを感じて、
たちまち獣は機嫌を直した。

「そうよ。この中でまだ眠っているのよ」

” ” いつ、起きるの？” ”

「そうね。あと三ヶ月もすれば会えるわよ」

三ヶ月。

獣の子には時間の感覚がうまくつかめない。

何回日が昇り、何回夜が訪れたらなのか、説明してくれなければ
分らない。

” ” 赤ちゃん、どこから来たの？” ”

「さあ、どこかしら？」

” わからない所から来たの！？”

そんな得体の知れないモノを身の内に潜ませているのかと、耳を伏せて幼子は怯えだした。

くすくすと笑うシーラの声が宥めるように優しくかった。

「赤ちゃんは来てくれたのよ。誰でもなく他でもない、わたくしとあの方との間にね」

” シーラと、あの方の間？ どうして来てくれたの？ どうやって？”

「そうよ。あの方の愛情をいただいたから、赤ちゃんは来てくれたのよ」

ステキでしょう？

そう言って微笑むシーラはあまりにも眩しくて、羨ましいほどだった。

” ねえ。わたしもシーラもどこからきたのかな？”

「そうねえ。どこかしらねえ？ 赤ちゃんがきたらきいてみましょう」

あの、夏の日。

木陰にくつろいで毛並を撫でて貰いながら、思いつくままの質問を投げ掛けたっけ……。

シーラは言った通りに三ヵ月後に赤ちゃんを産んだ。

” 赤ちゃん、いつ生まれたの？ 朝方くらい？ ”

「そうよ」

” 見せて ”

「どうぞ」

” 赤ちゃん、かわいい！ ”

赤ちゃん。

赤ちゃん！

それは命の塊りともいえる。

ぴよんぴよん跳ねてはしゃぐ獣に見せるように、シーラは床に直に腰下ろす。

「ふふふ。ありがとう。この子はね、フィルガって言う名前に決まったのよ。ステキでしょう」

” 赤ちゃんはフィ、フィルガ ”

赤毛の獣はおっかなびっくり産まれたての赤ん坊に鼻を寄せた。ふんふん、すんすん、とその独特の香りを確かめる。

わあ。

こんな香りは今までかいだ事がなかったから、不思議な気持ちでした。

洗い立ての衣に包まれた、産まれたての身体。

全部ちいさい。でもちゃんと指先には爪の形までしっかりしている。

赤ん坊は濡れて輝くような銀色の髪をしていた。眉も同じ。睫毛も同じ。

赤ん坊は良く眠っている。

その閉じた目蓋の裏の瞳は何色だろうか？

赤毛の獣はシーラに尋ねようと口を開き掛けて止めた。

そ、つと舌先でその頬を突いてみた。

赤ん坊が起きてくれる事を期待して。

赤ん坊は少し目蓋を振るわけただけだった。

” 赤ちゃん……の名前は、フィルガ。ねえフィルガ、起きて、遊ぼうよ ”

今度はもう少し大胆に頬を舐めてみた。

赤ん坊の首が傾ぐほどだったため、シーラに苦笑されてしまう。でも止められはしなかった。

ふ…… っと赤ん坊が小さく息を吸い込んだ。

ふにゃあ、ふにゃあと赤ん坊が泣き出した。

獣の子はこの大きな泣き声が苦手だ。

耳を伏せて後ずさる。

” 赤ちゃん、泣かないで ”

「いいのよ。赤ちゃんはまだおしゃべり出来ないから、こうやって泣くのよ。まだ遊べないけどごめんね、もう少し大きくなったら一緒に遊ぼうね」

人のまとうドレスとやらの裾が、足運びと共に風に踊る。

小さく、小さく、歌を口ずさみながら、シーラはゆっくりと橋を渡ってきた。

渡り終えた頃には自分と同じような、けれども対照的な純白の毛並の姿があつた。

” シーラ。赤ちゃんは……？ フィルガはどうしたの？
”

” わたくし一人で渡ってきたの。あの子はあちら側で生きねばならないから、置いてきたわ ”

” だつて、シーラ。フィルガ、泣いてるよ？ ”

微かに、でも確かに届く泣き声に耳を澄ます。
まだ風は吹きつけてくる。

その向かい風に向う形で、獣の子は橋の前に立った。
耳をぴいんと立てて、風に乗ってやってくるあの子の泣き声を聞き漏らすまいと必死で拾った。

” 泣いてるよ ”

” ええ。そうかもしれない ”

” 慰めてあげなくちゃ！ ”

” ええ、そうしてあげたいわ。でも……わたくしはもうしばらくは、戻れないのよ ”

だ
っ
て
！
泣
い
て
る
の
に

いつだってシーラはそうしていたではないか。

獣の子は理解できなくて、その場で地団駄を踏む。

いくらでも駆け抜けられる足を持つているのに、行動に移そうとはしないシーラにやきもきして、獣の子は訴えながら盛んに跳ねた。

わたくしの代わりに、あなたが一緒にいてあげてくれる？

” ” 分かった。わたしが行って慰めてあげる！ 一緒に遊んであげるわ ” ”

獣の子は駆け出した。

その背を風が押してくれている。

先程までは向かい風だったはずなのに、風向きが変わったのだ。追い風に乗って獣の子は橋を駆け抜ける。

[illegible]

微かな泣き声を頼りに、獣の子はいつかのよう^にに駆けつけていた。もう泣き声はしなかったが、すぐさま見つけたと思った。シーラとよく過ごした部屋の窓枠を鼻先で押し上げる。

「おまえはシーラのお気に入りだった赤毛だな。何の用だ」

赤ちゃんの瞳は曇り空の色。

その髪とお揃いの、それより幾らか深みある色合いだった。

” 赤ちゃんの名前は、フィルガ？ ”

「もう赤ん坊ではない」

確かにそうだ。

あの眠ってばかりいた小さな生き物は、こうやって自分を見下ろすまでに成長している。

泣き声で自分の要求を訴える事も無く、言葉で態度で示せるほどになっている。

獣の子は、その成長の早さに内心驚いていた。

” ” じゃあ、遊べるね ” ”

「何？」

” ” シーラ言ってたよ。もうちょっとしたら、赤ちゃんと遊べるよ、また遊びに来てねって！ ” ”

「シーラはもういない」

だから来たのだと言っているのに、伝わっていない事に気が付いた。すっかり通じたものと思って、伝えそびれていたようだ。

改めて伝えることにする。

その灰銀色の瞳を見上げた。

” ” だって、泣いてるから行ってあげてってシーラ言ってたよ ” ”

「何!？」

” ”
” ”
？ だから来たの。慰めてあげてっ。だから、一緒に遊ぼう

獣の子は小首を傾げて無邪気に誘った。

その瞳に映る怒りの影にすら気がつきもしないまま。

第十五章 * 生まれた子（後書き）

『ここまで来れました』

赤ちゃんを見ていると、みんなこんなだったんだよねーと思います。

いまはたとえどんなにえらぶっていても。

霧が晴れて行く様な気がします。

*** 霧を抜けて（前書き）**

霧を抜けて 橋を渡る。

＊霧を抜けて

わたしは幾度だって駆けつける。

呼ばれる限り、応えつづける。

○

● ● ○

●
:
★
:
:
○

●
:
★
:
:
○

●
:
★
:
:
○

:
★
:
:
○

●
:
★
:
:

●
:
★
:
:
●

「いいよ。遊んでやる」

少年のフィルガは凶暴な想いを押し殺すようにして、シーラの使いで来たと言う獣の子を見下ろす。

”
”
何して遊ぼうか、
フィルガ？
”
”

長い尻尾をふさふさと左右に振りながら、赤毛の獣はその場で跳ね上がった。

その無邪気な様子がまた、癩に障るようだった。

デイナーはその強い愛憎入り混じる、フィルガの意識に巻かれざるを得なかった。

[illegible]

自分を置いて出て行った母親の事を、今更持ち出してきた。

あれから何年経ったと思っているのだ。

八年。

八年だ！

霧の向こうに呼びかけても還らない後姿ばかりが浮かぶ。

「オマエはどこから来たんだ、赤毛の？」

” 橋の、霧の向こう ”

何のためらいも無い、その答えにフィルガは一瞬、言葉を失う。
それでも務めて平静を装いながら、なおも尋ねた。

「そこにシーラもいるのか？」

” ” うん、そう。シーラとね、橋のたもとで会ったの。だから訊いたの。シーラ、赤ちゃん置いてきちゃったのって。泣いているのに、置いてきちゃたのって ”

それは今から何年前の話をしているのだろうか。

しかし目の前の獣の子は、まるでつい先程の出来事のように語っている。

実際、この生き物にしてみたらそのような感覚なのだろう。

改めて、獣と人との間に流れる時というものの差を思い知らされる。

それはシーラにとっても同じで、自分はいつまでも泣いている子供のままだという事か。

「もう、泣いてなどいない」

” え？ なあに？”

感情を押し殺したまま、思わずもらした呟きは獣の耳であっても聞き取りにくいほど、か細かったようだ。

「オマエの名前は何ていうのだ？」

” 何だろう？”

獣の子は小首を傾げて尋ね返してきた。

「じゃあ、オマエはディ・ルーマだ」

時にも縛られず、名にも縛られない獣の子に制限を与えてやりたいと願った。

だから名付けた。

ディ・ルーマと。

” ディ・ルーマ？ それがわたしの名前なの！”

「そうだ。ディ・ルーマ。俺が名を呼べばオマエはどこにいたって、俺の声が届くんだ」

” ふふふ！ 私の名前はディ・ルーマ！”

嬉しげに跳ね回る獣の子は、その場でフィルガの配下に置かれた事にも気が付かなかった。

誰かが、自分に仇なすなんて、最初から思いもしないのだから当然といえば当然だった。

「じゃあ、ディ・ルーマ。神殿に行って宝物殿にある、宝玉を盗っ

「ておいで」

”
”
宝玉つて何？
”
”

「綺麗に光る珠の事だよ。それは透明でいて、淡く光を放っている
 そうだから、きつと迷わない」

”
”
それ、
どうするの？
”
”

「それでディ・ルーマを造り変えてみようと思う」

”
”
造り返る？
”
”

「俺と同じように二つ足で立つて、俺と同じような目線であるようにするのさ。いい考えだろう?」

” ” そうだね。面白そう！ 私もフィルガみたいになれたら、もっと一緒にいられるね ” ”

[illegible]

それから蘇るのは血にまみれた記憶だけ。

神殿に侵入した獣は聖句を浴びせられ、逃げようともがいた。

聖句になかなか屈しない獣に、神殿の者の太刀が振り下ろされた所までは思い出せる。

右脚を酷く痛めつけられて、逃げ出せなくなつて。

それから、どうなったのだろう？

ただ、冷たい石造りの床に身を横たえて、人々の靴先だけが瞳に

映っていた。

フィルガ。

最期にディ・ルーマはそう呼んだのは間違いが無い。だって、フィルガは言っていた。

俺が名を呼べばオマエはどこにいたって、俺の声が届くんだ。

じゃあ、わたしがかしら？

耳を澄ます。

やがて聞こえるのは自分のか細くなつて行く、呼吸音だけ。それもやがては途絶えて、辺りを静寂がつつむ。

彼はそれきり、二度とディ・ルーマの名前を呼ぶことは無かったのだと思う。

[illegible]

『愛しい子。ボクに身を任せてみるかい？』

「だあれ？ また、フィルガに会えるようにしてくれるの？」

『そうだよ。彼と一緒にいられるように創り変えてあげよう』

うん。

そう。

瞬いた瞬間、涙が零れた。

ああ、私は戻ってこれたと思って安堵した瞬間でもある。

ディーナはディーナとして、涙を溢れさす事が出来たのだ。

焦点が合う。

彼の愛しの銀の彼が、眼前で血まみれで伏していた。

いや、獣ではなく、青年の方のフィルガなのだが、ディーナの瞳にはその影が重なって見えるのだ。

何事かと思う。

「紅雷！」

くらい、くらい、くらい！

私の紅き雷。

また私が傷つけた！？

気が付けば絶叫していた。

耳を劈く悲鳴が、己のものだ何て滑稽な事か。

苦しい。狂おしい呼吸を整えて、彼を見上げた。

そこに在ったのは曇天を映す眼差し。

本当に嫌になる。

銀の彼はまた再び、彼の中で眠りに付いたようだ。

嬉しいような、悲しいような。

銀の彼は私を待ち侘びているのだけは、確信としてあった。

曇天の瞳をひたと見据えて微笑んだ。

彼の首筋に回した手を自分の方へと引くように力を込める。

それだけで充分伝わったのだろう。

初めて素直に彼の口付けを受け入れられたと思った。

*** 霧を抜けて（後書き）**

『相変わらず』

お久しぶりでございます。

これ、書きかけのまま三ヶ月とありえないよ、私！

一行も浮かばないよ、おおおい！！！！

そんな毎日ですが、なかなかこの話は謎が多くて、書けば書くほど

深みにはまります。

ディーナが素直になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9886c/>

あの橋のむこうがわ

2011年10月4日12時27分発行